高知市文化財調査報告書第29集

土佐神社西遺跡・土佐神社

― 宅地開発及び神社施設の移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2006. 3

高知市教育委員会

土佐神社西遺跡・土佐神社

── 宅地開発及び神社施設の移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書──

2006. 3

高知市教育委員会

SB14－P１　遺物出土状況

白磁、青白磁、青磁
（150・245・242・154・508・11・467・236・292・240・507・469）

379

325

291

479

169

251

429（外側）

429（内面）

須恵器・瓦器・陶器（常滑焼）・瓦

序

高知市一宮地区は、北山南麓の扇状地上にあり、鉄道や幹線道路が近くを通る交通の非常に便利な地勢にあります。近年、高知自動車道・高知インターや高知北部環状線の開通等に伴い、宅地開発がさらに進行し、周辺は大きな環境の変化を遂げました。こうした都市化の一方で、当地には、古代からの貴重な文化遺産が数多く残っております。その一つが、『日本書紀』にも「土左大神」の名で現れ、今でも「しなね様」として人々から親しまれる土佐の一宮・土佐神社です。現在でも、森厳な佇まいの中に中世の息吹を伝える社殿が並び立ち、時代を超えて、訪れる人々を幽玄の世界へと誘ってくれます。

土佐神社西遺跡は、その名の通り志名祢川を隔てた神社の近傍に位置し、南へなだらかに傾斜する立地環境にあります。この度、宅地造成に伴い初めて発掘調査が実施されました。その結果、古代末期から中・近世に至る土器をはじめ、中世の建物跡やそれを囲む溝跡などが出土し、文献史料からは窺えない土佐の歴史の一端を知る材料を得ることができました。

この報告書が、高知市の歴史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます

平成18年３月

高知市教育委員会

例　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成15年度に実施した民間の宅地開発に伴う土佐神社西遺跡発掘調査、平成13年度に実施した土佐神社西遺跡・土佐神社での試掘確認調査・立会調査の報告書である。
2. 調査対象地は、土佐神社西遺跡（平成15年度調査）が高知市一宮しなね一丁目字岡の堂2257－1他、同（平成13年度調査）が高知市一宮しなね一丁目字岡の堂2145－1、土佐神社が高知市一宮しなね二丁目2499に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理・報告書作成は平成16年度から17年度にかけて行った。

   平成15年度土佐神社西遺跡

   試掘調査……平成15年9月16日～19日、調査面積85㎡

   本調査……平成15年12月15日～平成16年1月23日、490㎡

   平成13年度土佐神社西遺跡試掘調査……平成13年6月4日～7日、40㎡

   〃　土佐神社立会調査……平成13年6月22日、11㎡
4. 調査体制は以下の通りである。

   [平成15年度試掘調査・本調査]

   調査主体　高知市教育委員会

   調査事務　同　生涯学習課主査　門田麻香

   調査担当　同　生涯学習課指導主事　田上浩・梶原瑞司

   測量補助　松田重治（大旺建設株式会社遺跡調査室）

   [平成13年度試掘・立会調査]

   調査事務　同　生涯学習課主事　岡﨑由桂

   調査担当　同　生涯学習課指導主事　田上浩
5. 平成15年度発掘調査にあたっては有限会社開成開発の協力を得ることができた。また重機掘削については開成開発、遺構等の実測については大旺建設株式会社の協力を得た。平成13年度土佐神社立会調査にあたっては土佐神社の協力を得た。
6. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

   [発掘作業] 岡上　優　岡林福三郎　樫尾洋子　亀井清恵　川野孝典　坂本洋子　嶋津忠利　田村　明　田村美賛子　森尾　導　大賀幸子

   [整理作業] 井澤久未　大賀幸子　樫尾洋子　宮地佐枝
7. 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を梶原瑞司、その他を浜田恵子（生涯学習課指導主事）が行った。現場写真は田上浩、遺物写真は梶原が撮影した。編集は浜田が行った。
8. 本報告書を作成するにあたっては、土器・陶磁器の整理について稲垣正宏（国際航業）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、荻野繁春（福井工業高等専門学校）、鋤柄俊夫（同志社大学）、吉成承三・徳平涼子（高知県埋蔵文化財センター）、池澤俊幸（高知県教育委員会）、出土銭貨に

ついて泉幸代（須崎市立横浪小学校）、はじめ諸氏のご教示を賜った。（敬称略）また、現地での調査指導と報告書作成においては高知県埋蔵文化財センター諸氏の助言・協力を得た。記して謝意を表したい。

9. 遺構の略号は、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、P（柱穴、ピット）、SX（性格不明遺構）、SR（自然流路）とした。また、掲載している遺構平面図の方位は真北である。
なお、巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。

10. 出土遺物は高知市教育委員会が保管している。注記の略号はH15年度土佐神社西遺跡本調査及び試掘調査が「TSW－03」、H13年度土佐神社西遺跡試掘調査が「TSW－01」、H13年度土佐神社立会調査が「TS－01」である。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境
1. 地理的環境 …… 2
2. 歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　土佐神社西遺跡
第1節　調査の方法 …… 7
第2節　試掘調査 …… 9
第3節　調査の成果
1. 基本層序 …… 11
2. 遺構と遺物 …… 17
(1) 中世の遺構と遺物
① 掘立柱建物跡 …… 17
② 土坑 …… 29
③ 溝・流路 …… 33
④ ピット …… 56
⑤ 包含層出土の遺物 …… 62
(2) 中世末から近世の遺構と遺物
① 土坑・性格不明遺構 …… 65
② ピット …… 67

第Ⅳ章　土佐神社・土佐神社西遺跡確認調査
1. 土佐神社西遺跡
(1) 平成13年度試掘調査 …… 88
2. 土佐神社
(1) 平成13年度立会調査 …… 88
(2) 境内表採資料 …… 88

第Ⅴ章　考察
第1節　土佐神社西遺跡、検出遺構の性格と変遷 …… 93
第2節　土佐神社西遺跡出土遺物の様相 …… 104

挿図目次

Fig. 1　土佐神社西遺跡・土佐神社調査区位置図 …… 1
Fig. 2　土佐神社西遺跡・土佐神社及び周辺の遺跡 …… 6
Fig. 3　作業風景 …… 7
Fig. 4　調査区・グリッド設定図及び試掘調査トレンチ位置図 …… 8
Fig. 5　試掘調査平面図・出土遺物実測図 …… 10
Fig. 6　Ⅰ～Ⅲ区北壁セクション図 …… 13
Fig. 7　TP1～7セクション図 …… 14
Fig. 8　検出遺構全体図 …… 15～16
Fig. 9　SB1～3 …… 18
Fig. 10　SB4・5 …… 20
Fig. 11　SB6～8 …… 22
Fig. 12　SB1・4～8出土遺物実測図 …… 23
Fig. 13　SB9・SB9出土遺物実測図 …… 24
Fig. 14　SB10～13 …… 26
Fig. 15　SB14～17 …… 28
Fig. 16　SB10・12～14・16・17出土遺物実測図 …… 29
Fig. 17　SK102～109 …… 30
Fig. 18　SK201・202・206・401・402 …… 31
Fig. 19　SK102～106・201・202・206出土遺物実測図 …… 32
Fig. 20　SD201 …… 33
Fig. 21　SD201出土遺物実測図（1） …… 35
Fig. 22　SD201出土遺物実測図（2） …… 36
Fig. 23　SD201出土遺物実測図（3） …… 38
Fig. 24　SD201出土遺物実測図（4） …… 39
Fig. 25　SD401 …… 40
Fig. 26　SD401出土遺物実測図（1） …… 42
Fig. 27　SD401出土遺物実測図（2） …… 43
Fig. 28　SD401出土遺物実測図（3） …… 44
Fig. 29　SD401出土遺物実測図（4） …… 45
Fig. 30　SR201・SD201 …… 56
Fig. 31　SR201出土遺物実測図（上層） …… 48
Fig. 32　SR201出土遺物実測図（中層・下層） …… 50
Fig. 33　SR201出土遺物実測図（中層・下層） …… 51
Fig. 34　SR201　出土遺物実測図（集石下） …… 52
Fig. 35　SR201－土器集中1出土状況図・出土遺物実測図 …… 53
Fig. 36　SR201－土器集中2出土状況図・出土遺物実測図 …… 54
Fig. 37　SR501セクション図・出土遺物実測図 …… 55
Fig. 38　P110・123・125・143・216・239・248・257・260・310 …… 57
Fig. 39　Ⅰ～Ⅲ区ピット出土遺物実測図 …… 58
Fig. 40　P401・402・411・417・427・437・441・448～451・456・464・466・519 …… 59
Fig. 41　Ⅳ・Ⅴ区ピット出土遺物実測図 …… 60
Fig. 42　P459出土状況図・出土遺物実測図 …… 61

Fig. 43　包含層出土遺物（1）…… 63
Fig. 44　包含層出土遺物（2）…… 64
Fig. 45　SK101・203・204・205・P226 …… 66
Fig. 46　SK101・203・204・SX1・包含層出土遺物実測図 …… 67
Fig. 47　土佐神社西遺跡平成13年度試掘調査　トレンチ位置図・土層概略図 …… 89
Fig. 48　土佐神社西遺跡平成13年度試掘調査　出土遺物実測図 …… 89
Fig. 49　土佐神社平成13年度立会調査　出土遺物実測図 …… 90
Fig. 50　土佐神社表採資料　遺物実測図 …… 90
Fig. 51　土佐神社西遺跡遺構変遷図 …… 97
Fig. 52　一宮・布師田小字図 …… 101
Fig. 53　土佐神社西遺跡周辺小字図 …… 102
Fig. 54　青磁・白磁（碗・皿）分類図 …… 116
史料1.　『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』 …… 100
グラフ1.　土佐神社西遺跡出土遺物 種類別組成 …… 110
グラフ2.　土佐神社西遺跡出土遺物 用途別組成 …… 110

写真図版目次

巻頭図版1　SB14－P1遺物出土状況、貿易陶磁器
巻頭図版2　須恵器・瓦器・国産陶器・瓦
PL. 1　土佐神社境内（南より）、調査前全景（西より）…… 119
PL. 2　調査区全景（西より）、Ⅰ区完掘状況（東より）…… 120
PL. 3　Ⅱ区完掘状況（西より）、Ⅲ区完掘状況（東より）…… 121
PL. 4　Ⅳ区完掘状況（北より）、Ⅴ区完掘状況（北より）…… 122
PL. 5　Ⅳ区西壁（東より）、SK203・204・202完掘状況（南東より）…… 123
PL. 6　SB9－P3半截、P220半截 …… 124
PL. 7　SD401完掘状況（北より）、SD401西壁セクション …… 125
PL. 8　SD201北壁セクション、SR501完掘状況（北より）…… 126
PL. 9　SR201（東より）、SR201集石及び遺物出土状況（308、南より）…… 127
PL. 10　SR201－土器集中1出土状況、SR201－土器集中2出土状況 …… 128
PL. 11　SB9－P1遺物出土状況（27～30・32・33・37）、P459遺物出土状況（418・422・424・425・427）・ 129
PL. 12　P421半截・SB14－P1遺物出土状況（51・53）、SB14－P1遺物出土状況（42・43・52・57）…… 130
PL. 13　SK104遺物出土状況（61～63・76）、P459遺物出土状況（419）、P441遺物出土状況（413）、
SD401遺物出土状況（182）、同上（184）、同上（186）、同上（185・203）、同上（187・227）…… 131
PL. 14　SD401遺物出土状況（197）、同上（229・228）、同上（254）、SR501遺物出土状況（379）、
SR201遺物出土状況（308）、同上（329）、同上（344・340）、Ⅳ区包含層遺物出土状況（454）… 132
PL. 15　瓦器・瓦質土器 …… 133
PL. 16　常滑焼・白磁・青磁 …… 134
PL. 17　土師質土器・須恵器・備前焼・白磁・青磁 …… 135
PL. 18　土師質土器 …… 136
PL. 19　瓦器・白磁・青白磁・天目碗 …… 137
PL. 20　天目碗・備前焼・陶器・瓦質土器・土師質土器 …… 138

PL. 21　土師質土器・白磁・青磁 …… 139
PL. 22　須恵器・土師質土器・瓦質土器・白磁 …… 140
PL. 23　常滑焼・須恵器・瓦質土器・瓦器・白磁・青磁 …… 141
PL. 24　土錘・土師質土器・須恵器 …… 142
PL. 25　備前焼・須恵器・土師質土器 …… 143
PL. 26　土師質土器・青磁・白磁・須恵器 …… 144
PL. 27　常滑焼・備前焼・近世陶磁器・青磁・白磁・青花 …… 145
PL. 28　白磁・青磁・青白磁・青花・土師質土器・須恵器片・古銭 …… 146
PL. 29　丸瓦・平瓦 …… 147

表目次

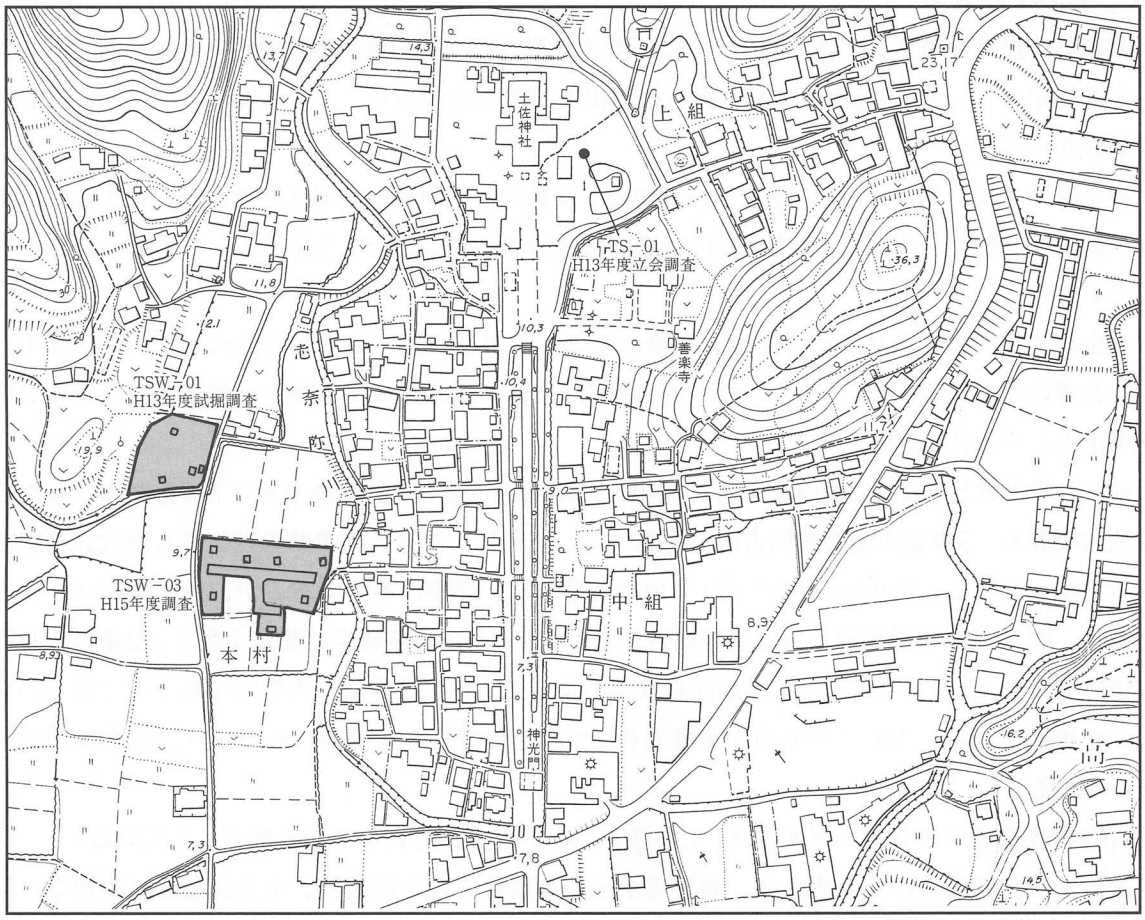
Tab. 1　SBピット計測表 …… 68
Tab. 2～19　遺物観察表 …… 69～86
Tab. 20　遺物観察表（瓦） …… 86
Tab. 21　遺物観察表（古銭） …… 86
Tab. 22　遺物観察表（H13年度土佐神社西遺跡試掘調査） …… 91
Tab. 23　遺物観察表（H13年度土佐神社立会調査） …… 91
Tab. 24　遺物観察表（土佐神社表採資料） …… 92
Tab. 25　掘立柱建物跡計測表 …… 95
Tab. 26　土佐神社西遺跡周辺の小字と『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』の記載 …… 102
Tab. 27　遺構別遺物出土点数 …… 105
Tab. 28　瓦器椀の属性対応表 …… 107
Tab. 29　中世遺跡と貿易陶磁器・国産陶器出土表 …… 115

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

土佐神社西遺跡は高知市一宮（いっく）地区字岡の堂に所在する中世から近世に到る遺跡で、周辺の畑には土師質土器の細片が散布しており、従前の試掘調査においても同様の土器片が出土した。

2003（平成15）年8月、遺跡の推定区域内において民間業者による宅地開発が計画され、それに伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対して提出された。これを受けて市教育委員会では9月16日～19日にかけて試掘調査を行った。その結果、設定した7箇所の試掘坑全てにおいて土器をはじめとする遺物が出土するとともに、多数の遺構も確認された。

試掘調査の結果を受けて県教育委員会の指導の下、事業者・市教育委員会の間で協議が行われた。協議の結果、当該地の道路予定部分についての緊急発掘調査を行うことで意見の一致をみ、高知市教育委員会が発掘調査を実施することになった。



（S＝1/4000）

Fig.1　土佐神社西遺跡・土佐神社調査区位置図

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

土佐神社西遺跡の立地する高知市は、太平洋に南面する高知県のほぼ中央部に位置し、北部を高度300～400mの東西に連なる小起伏山系、南部は300m級の帯状の山脈、西方はなだらかな丘陵部と三方を囲まれた地溝状盆地にあり、南東方向から入り込んだ浦戸湾に面している。現在の中心市街地は、市内を東流する鏡川流域にできた三角州上に広がっているが、低湿地であり開発の進んだのは主に近世以降である。これに対し土佐神社西遺跡の所在する一宮地区は、市中心部より、東北方向へ約5km離れた地にあり、ベッドタウンとして拡大しているが、開発は古代以前に遡り、むしろより古い歴史を有している。当地は秩父累帯中帯と北帯の境界部に位置しており、北部は断層崖、東部は蛇紋岩層の多い山地帯である。北部山地から流れ落ちた久安川・支那祢川・大谷川は扇状地を形成し、その南の国分川に合流し、太平洋へと繋がる浦戸湾へと注いでいる。この国分川流域は東の南国市にかけて県内最大の高知平野へと連なり、豊かな穀倉地帯となっている。

2. 歴史的環境

旧石器時代のものとしては、約3km東に、ナイフ型石器や細石核、細石刃等を大量に出土した奥谷南遺跡があり、約3.8km南東にも、細石核の出た高天原山があり、土佐の歴史の萌芽期に遡る遺跡が存在する。

縄文時代では、北西約3kmの山腹に、高知市では数少ない中期の土器片や礫石錘の出土した正蓮寺不動堂前遺跡がある。また前期初頭の土器が地表下5mから出土した長浜チドノ遺跡は南方約12kmにある。

弥生時代から古墳時代にかけては、大量の土器や木器、石器、破砕した内行花文鏡等が出土した介良遺跡が南東約4.5kmにある。なお南方約7kmには、高知県内では最古の部類となる中広型銅矛を出土した池長崎遺跡がある。

前・中期古墳としては、約3km東方の尾根上に県内最古級の4世紀後半から7世紀初めにわたる長畝古墳群や、5世紀中頃の狭間古墳が立地する。後期に入ると、当遺跡の近傍にも横穴式石室をもつ古墳が現れる。約0.2km東の一宮1号墳は破壊され、詳細は不明であるが、約0.3km南の一宮2号墳は、明治29年の破壊前に石室が計測されており、奥行きが5間半に及ぶ土佐では2番目の規模の横穴式古墳（円墳）であったことが知られる。よって当地にはかなりの勢力を有する首長のいたことが推測される。なおこの石室の天井石の1つは土佐神社の社格標に転用され、現在楼門前に立っている。

『和名類聚鈔』によると一宮地区は「土佐郡」に属し「土佐郷」にあたると推定されている。

古代から中世にかけての当地は、浦戸湾が渚線を望めるほどに迫り、水上交通には至便な、現在とは全く異なる景観を呈していたものと思われる。『土左日記』によると、承平四（934）年、土

佐守の任期を終え、都への帰途についた紀貫之は、大津（一宮より約3.5km南東方向）より船出し、湾口である浦戸に向かっている。当地は、その様子を遠望できる地勢にあったと思われる。また当地は、国分川を遡ると約8kmで土佐国府に到る地でもあった。さらに『釈日本紀』所引『土左国風土記』逸文によると「土左の郡。郡家の西に去ること四里に土左の高賀茂の大社あり。」とあり、土佐神社を指す高賀茂大社の東方約2kmには、土左郡の郡衙も存在していたらしく、交通至便の要地であったことが知られる。当遺跡はその名の通り、北東約130mに土佐国一宮でもある土佐神社が隣接し、何らかの関係が想定される。

土佐神社関係の所伝は古代にまで遡り、『日本書紀』には「土左大神」と表され、地方社には稀な「大神」の称号が付されている。さらに先の『土左国風土記』逸文には、「其の神のみ名を一言主尊と為す。其のみ祖は詳かならず。一説に曰へらく、大穴道尊のみ子、味鉏高彦根尊なりといえり」と述べている。つまり、『土左国風土記』のできた奈良時代においては、漠然とした在地神「土左大神」ではなく、一言主あるいは味鉏高彦根が祭神として意識されていたことがわかる。

これに関して『続日本紀』天平宝字八（764）年十一月庚子七日条には、当時、孝謙上皇に重んじられ権勢を誇った弓削道鏡の腹心・円興が、その後だてにより、一族（賀茂氏）の祖先神・高鴨神を、雄略天皇の怒りにふれ流されていた土左から迎え入れ、再び大和に祀らせた記事がみえる。当時、中央の賀茂氏がかような認識を有していたことは注目される。それ以降の史料をみていくと、『新抄格勅符抄』第十巻神事諸家封戸、大同元（806）年牒に「高鴨神　五十三戸　大和二戸　伊与卅戸　天平神護二年符　土佐廿戸　天平神護元年符」とある。天平神護元（765）年大和・葛城の高鴨神への封戸に、遥か離れた土佐廿戸が与えられた事実は、先にあげた前年の高賀茂神の土佐から大和への帰還に伴うものと考えられ、賀茂氏の請願の実現が確かめられる。

『延喜式』神名帳には「都佐坐神社大」とあり、大社に位置付けられる。『三代実録』貞観元（859）年正月二七日条には「土佐国従五位下都佐坐神」の昇位記事がある。藤原純友ら海賊が西日本一帯に出没した天慶三（940）年の『石清水八幡宮記録』の「伊弉冉尊与熊野神各別事」によると承平五（935）年の海賊平定祈願の功によって、備中国吉備津彦命や紀伊国速玉神など著名な神々と共に土佐高鴨神が正一位を授けられた旨がのべられている。

中世には『百錬抄』第十三の元仁元（1224）年十月六日条に「或人云、土佐國一宮、去十八日以後至廿二日大風、大木等転顚倒也、此日神殿已下不残一宇顚倒云々」の記事があり、大きな被害を受け、その後再建がなされている〔神社では嘉暦元（1326）年と伝承〕。南北朝期の建武三（1336）年には、高岡館に集結した北朝方の堅田・三宮・津野氏らが、一宮で南朝方と合戦後、大高坂城に攻め込んだことが知られる（『土佐國蠹簡集拾遺一』所収　「佐伯経貞軍忠状」）。この後暫く、文献で社歴を窺えるものは無く、神職が武士化したとみられる執行氏が、その伝統的な宗教権力を背景に在地領主となっていたようである。『土佐物語』によると天文年間に、神職で布師田金山城主でもあった石谷民部少輔の命により、永吉飛騨守を始め七十五人の神職が長宗我部国親に降伏したとある。これを事実とすれば以後は土佐統一にむけ宗教的に長宗我部氏を援護する勢力になったものと考えられる。この関係から、永正六（1509）年五月、対抗する本山氏・吉良氏らによる岡豊城の長宗我部攻めの際、一宮は在家への放火を被り社殿の大半を焼失する。

長宗我部元親は、この一宮の再建に大いに力を入れ、永禄十（1567）年に着手。翌年からは『永禄・元亀年間一宮再興関係文書』（土佐神社蔵）によると、上級家臣から下臣にいたるまで高知平野一帯在住の家臣団・衆組織に夫役を課すとともに、材木や諸材を大規模に調達し、約3年後の元亀二（1571）年頃には復興を遂げたものとみられる。この時の建築が現在重要文化財に指定されている本殿・拝殿・幣殿であり、質素な中にも豪放さのある造りで中世様の風格を伝えている。当社関係の中世以前の資料では、天文廿一（1552）年銘のある鰐口、「天文十八（1549）年」及び「土州一宮高賀茂大神宮」の墨書銘のある銅造阿弥陀如来懸仏（善楽寺蔵）の他、室町時代様式の銅鏡や能面、中世の祭器とみられる鯰尾矛が伝来している。

なお一宮周辺がかつて荘園であったらしいことは、天正十六（1588）年成立の『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』）の表題に「土佐国土佐郡一宮庄」とあることから察せられるが、さらに個人蔵の湖州鏡及び久礼野村阿弥陀堂鰐口銘には共に「文安元（1444）年」の年号と「一宮荘」の文字が刻まれている。よって領主は不明ながら中世には荘園化されていたことが窺い知られる。一宮庄については、「参考源平盛衰記」を引いたらしい『土佐国編年記事略巻二』に治承年中（1177～1181）として「頃年頼朝土佐国高賀茂郷ヲ首トシテ十三郷ノ地ヲ以テ神護寺ノ庄田トス　僧文学（覚）ノ請ニ依テナリ」の記事がみえる。これは全国平定後には源頼朝が高賀茂郷らの地を神護寺に寄進する約束をしたことを述べており、もし史実を伝えたものとすれば、一宮庄は中世初頭に京都・神護寺の荘園になった可能性があるといえよう。

今回の調査地については『地検帳』の「一宮村」に現在の字名「岡ノ堂」がある。以下に関連した部分を抽出して記す。

（刊本『長宗我部地検帳』高知県立図書館による）

岡ノ前　本一反卅代ト有	同（一宮）村　　久武内蔵助給
一　丶壱反十四代四分　中	一和尚分
岡ノ堂　本四十代ト有	同村　ゐ土居
一　丶卅二代二分　中ヤシキ	同　し　給
同しノ北	同村
一　丶四十代　　出八代	
中ヤシキ	吉　松
同しノ北	同村
一　丶廿代　出一代	西執当居
中ヤシキ	
同しノ東　本廿代ト有	同村
一　丶十九代　　中畠	久武内蔵助給
同しノ東	同村
一　丶四代　　中畠	窪添与十郎給
同しノ北土ゐ	同村
一　丶十六代四分　上ヤシキ	一和尚分

このように土佐神社縁りの社寺関係者や長宗我部氏有力家臣の屋敷地や畠があり、土居も所在した一等地であったことが知られる。字名「岡ノ堂」は隣接地に成福寺があり、土佐神社の西にも諸堂の存在が認められる（『南路志』）ことから、ついたものと思われる。

神社の南方には土佐街道が通り、藩政期には参勤交代の藩主一行が往来した。ここから道を北にとり、険しい四国山地に分け入ると、北山越えで瀬戸内海方面に到る陸路も通じる地の利にあった。つまり、水陸共に交通の要衝であると同時に政治・経済的にも恵まれた環境にあったといえる。

このように当遺跡は、中央の正史に記録され、土佐の歴史の中でも重要な役割を果たした土佐神社に隣接するのみならず、一宮庄の荘園関係の人々も居住した土地であろうことが推測される。中世土佐においては、文献史料は稀少であり、今回の調査はその空白期に新たな材料を提供し、当時の人々の暮らしへの新たな知見が開かれることにおいて期待されている。

〔参考文献〕

『高知県の地名』（日本歴史地名大系40　平凡社　1983年）
『高知市史　上巻』（高知市史編纂委員会編　1958年）
『高知県史　考古編』（高知県編　1968年）
『高知県史　古代中世編』（高知県編　1971年）
『高知県の歴史』（荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興　山川出版　2001年）
『土佐神社の文化財・古文書篇』（高知市文化財調査報告書第15集　1994年）
『高知市の文化財』（高知市教育委員会　1994年）
『長畝古墳群』（高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996年）
特別展図録『土佐2000年～21世紀へ伝える文化遺産』（高知県立歴史民俗資料館　2001年）

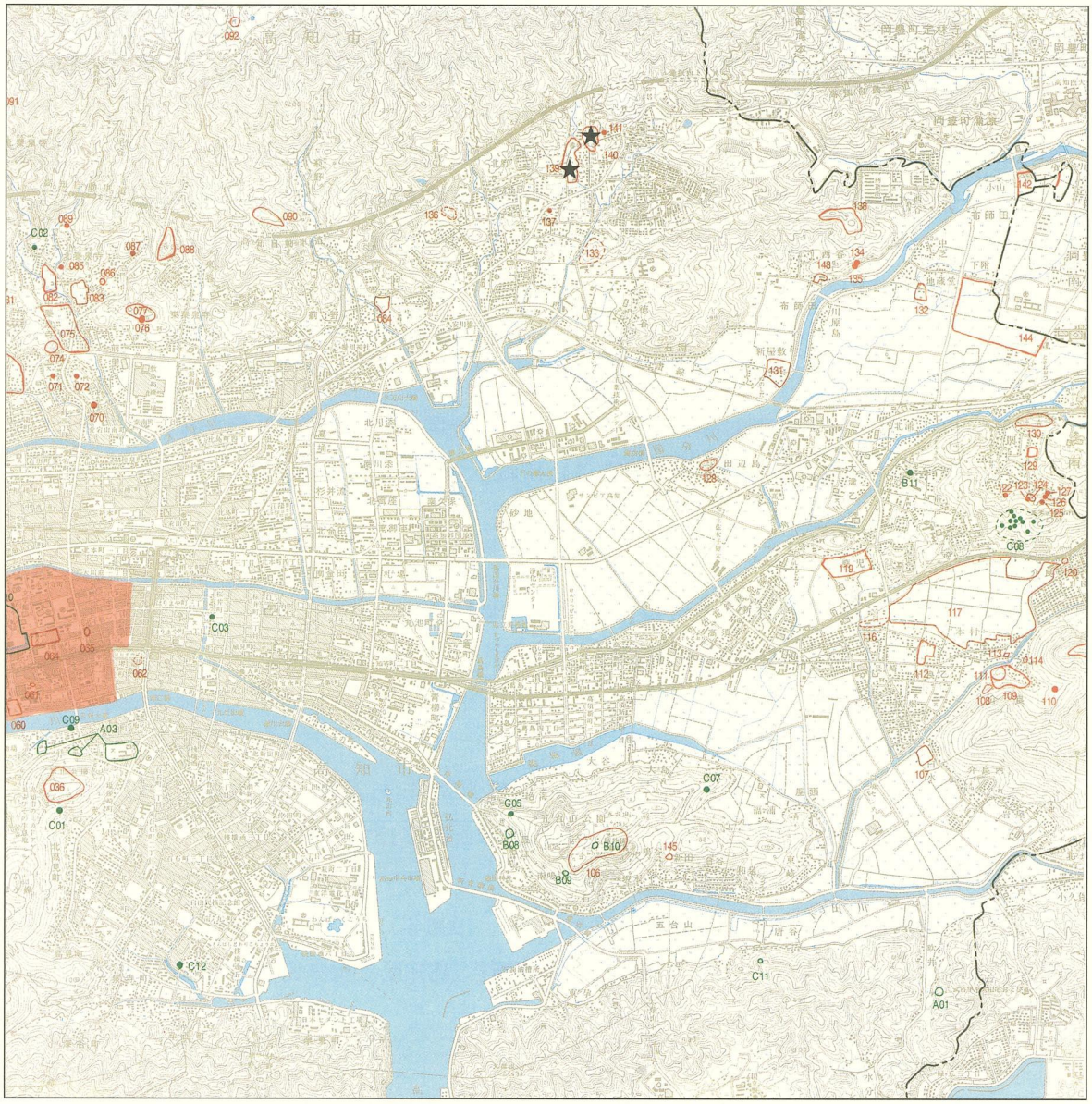


Fig.2　土佐神社西遺跡・土佐神社及び周辺の遺跡（S＝1/50,000）

NO.	遺跡名	時代	NO.	遺跡名	時代	NO.	遺跡名	時代
A02	高知城跡	古墳～近世	83	松葉谷遺跡	古代～中世	123	小奈呂古墳	古墳
B08	吸江庵跡	中世～	84	薊野遺跡	古代	124	高天原弥生遺跡	弥生
C02	吉弘古墳	古墳	85	日の岡古墳	古墳	125	三ツ塚上古墳	古墳
C08	高天原古墳群	古墳	86	北秦泉寺遺跡	弥生	126	三ツ塚中古墳	古墳
36	潮江城跡	中世	87	淋谷古墳	古墳	127	三ツ塚下古墳	古墳
60	南御屋敷跡	近世	88	秦泉寺城跡	中世	128	田辺島城跡	中世
61	中島町遺跡	古墳	89	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳	129	大津金子遺跡	古代
62	国沢城跡	中世	90	薊野城跡	中世	130	大津城跡	中世
64	弘人屋敷跡	近世	92	正蓮寺不動堂前遺跡	縄文	131	布師田新屋敷遺跡	古代～
65	帯屋町遺跡	古墳	106	竹林寺	古代～	132	布師田八頭城跡	中世
66	尾戸遺跡	弥生	107	介良白水遺跡	古代～中世	133	一宮城跡	中世
67	尾戸窯跡	近世	108	西養寺跡	中世～近世	134	布師田1号墳	古墳
68	安楽寺山城跡	中世	109	宮の谷遺跡	古代	135	布師田2号墳	古墳
69	東久万池田遺跡	古代～中世	110	宮の谷古墳	古墳	136	一宮別城跡	中世
70	愛宕不動堂前古墳	古墳	111	花熊城跡	中世	137	一宮2号墳	古墳
71	秦小学校校庭古墳	古墳	112	介良下組遺跡	古代～中世	138	布師田金山城跡	中世
72	愛宕神社裏古墳	古墳	113	朝峯橋北西遺跡	古代	139	土佐神社西遺跡	古代～中世
73	西秦泉寺遺跡	古墳～中世	114	朝峯神社前遺跡	古墳	140	土佐神社	古代～
74	秦泉寺別城跡	中世	115	介良城跡	中世	141	一宮1号墳	古墳
75	秦泉寺廃寺跡	古墳～中世	117	介良遺跡	縄文～中世	142	黒領遺跡	弥生
76	土居の前古墳	古墳	119	鹿児遺跡	古代	144	ミトロ遺跡	弥生～中世
77	前里城跡	中世	120	若宮窯跡	古代	145	五台山鳴谷貝塚	古墳
82	吉弘遺跡	古代	122	六郎山古墳	古墳	148	布師田御殿跡	近世

第Ⅲ章　土佐神社西遺跡

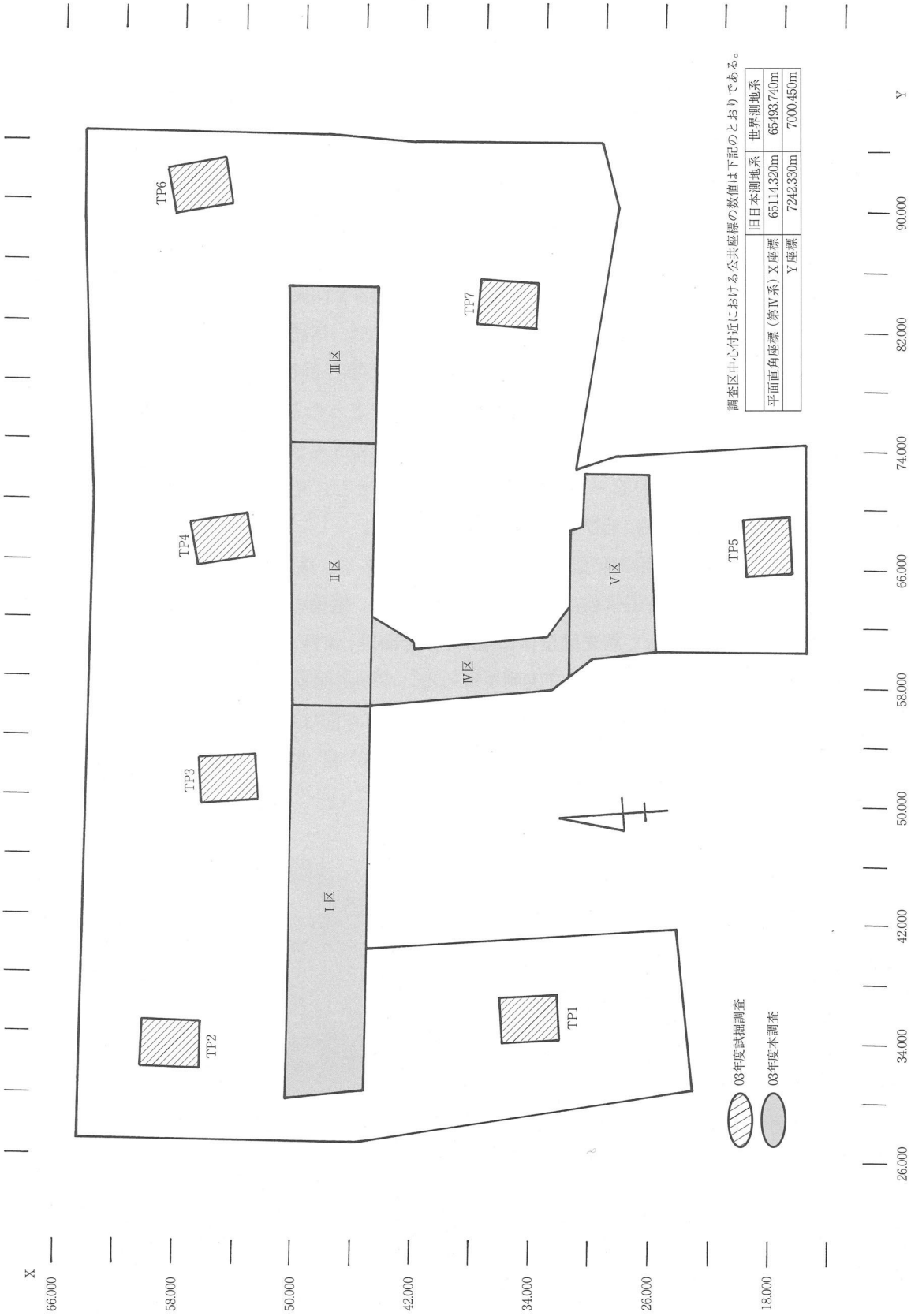
第1節　調査の方法

試掘調査は平成15年9月16日から19日まで実施した。調査にあたっては対象地内に7箇所の試掘トレンチを任意に設定し、表土下0.4～1.2mの深度まで遺構検出と堆積状況の確認を行った。掘削には主に重機を用い、遺構の検出作業と遺構掘削には人力を用いた。また遺構の密度が薄い試掘坑においては、サブトレンチを設定して遺構検出面より下層の状況を確認した。試掘トレンチの位置は光波及び平板で測量し、層序についてはセクション図を作成した。

本調査は平成15年12月15日から翌年1月23日まで行った。本調査では、宅地造成予定地の道路部分が調査対象地となったため、宅地予定部分への盛土工事と併行して調査が進められた。また、道路部分についても調査が終わり次第引き渡すという形をとったため、全体を5つの調査区に分割して調査区番号順に調査を行った。調査区番号は北側部分のうちB－7・C－7グリッドを境に西側をⅠ区、東側をⅡ区、B－12・C－12グリッド以東をⅢ区とし、そこから南に延びる南北方向の調査区をⅣ区、南端部分から東に延びる調査区をⅤ区とした。

各調査区ともに遺構検出面の深度は浅く耕作土直下である。調査にあたっては重機を用いて表土を除去した後、人力による遺構検出と遺構掘削を行った。遺構の実測については、調査区の形状に合わせた任意座標を設定して調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向に数字、南北方向にアルファベットのNo.を付して、地点の記録及び実測を行った。平面実測及び地層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。また遺構平面図の方位は真北（N）で記した。なお、土佐神社西遺跡H15年度調査区付近での真北は磁北に対し東へ6° 44′ 振っており、任意座標の軸は真北より東へ6° 16′ 振っている。

Fig.3　作業風景



調査区中心付近における公共座標の数値は下記のとおりである。

		旧日本測地系	世界測地系
平面直角座標（第Ⅳ系）	X座標	65114.320m	65493.740m
	Y座標	7242.330m	7000.450m

Fig.4　調査区・グリッド設定図及び試掘調査トレンチ位置図（S＝1/400）

第2節　試掘調査

試掘調査では、調査対象地内に7箇所のトレンチTP1～7を任意に設定し調査を行った。TP3・5では、現耕作土直下で検出される2層（灰褐色シルト層）が中世前期以降の遺物包含層となっており、中世の遺構はこの2層下面と3層上面の間で検出されている。TP1・2では2層は後世の削平を受けて残存しないため、現耕作土直下にある3層（黒褐色シルト層）の上面で中世の遺構が検出された。またTP4・5・6・7では本調査にて確認された中世のSR201・501の一部とみられる流路跡の堆積層が検出されている。中世の遺物は2層と3層から出土し、また中世の流路に伴う堆積層内からは多くの遺物が得られた。(Fig.5・7)

各トレンチでの遺構検出状況と遺物出土状況は次の通りである。

TP1：対象地の南西端（本調査Ⅰ区西端部の南側）に設定した試掘坑TP1では耕作土直下の3層上面にて、ピット1基を検出している。遺物は、3層から中世の土師質土器細片が出土している。

TP2：対象地の北西端（Ⅰ区西端部の北側）に設定したTP2では耕作土直下の3層上面でピット3基を検出した。遺物は、3層より中世の土師質土器細片が出土している。

TP3：対象地の北部中央（Ⅰ区東端部の北側）に位置するTP3では、3層上面にて多くの遺構を検出した。遺物は2～3層より中世の土師質土器片が出土している。

TP4：対象地の東部付近（Ⅱ区東部の北側）に位置するTP4は、本調査で検出された流路SR201の北側にあたり、同一流路の一部とみられる洪水堆積層が確認された。洪水堆積層内では殆どの土層において中世の遺物が多量に出土した。

TP5：対象地の南東部（Ⅴ区の北側）に位置するTP5でも、東側で流路の一部が検出され、洪水堆積による砂礫層が確認された。ピットは残された西側部分において少数検出された。

TP6：対象地の北東部（Ⅲ区の北東側）に位置するTP6では、流路SR201の一部を検出した。また包含層から中世土師質土器細片が出土した。

TP7：対象地の東部（Ⅲ区の南側）に位置するTP7では流路SR201の下面で多くの遺構を検出した。SR201埋土中からは中世の遺物が多く出土した。

図示したものは、TP1のSX1から出土した製塩土器（1）、TP4包含層2層から出土した土師質土器杯（2・6）、小皿（3）、椀（5）、高杯（7）、瓦器椀（8）、白磁皿（10）、備前焼擂鉢（12）、TP4の流路堆積層にあたる6層出土の土師質土器小皿（4）と鉢（9）、TP7から出土した龍泉窯系青磁碗（11）である。このうち製塩土器（1）については古代遺物の混入の可能性をもつ。また、包含層2層については13世紀から14世紀までの遺物が主体を占めるものの、中に白磁皿（10）、備前焼擂鉢（12）等の中世後期の遺物が少量含まれることからからみて、中世後期以降まで下限を求めることができよう。

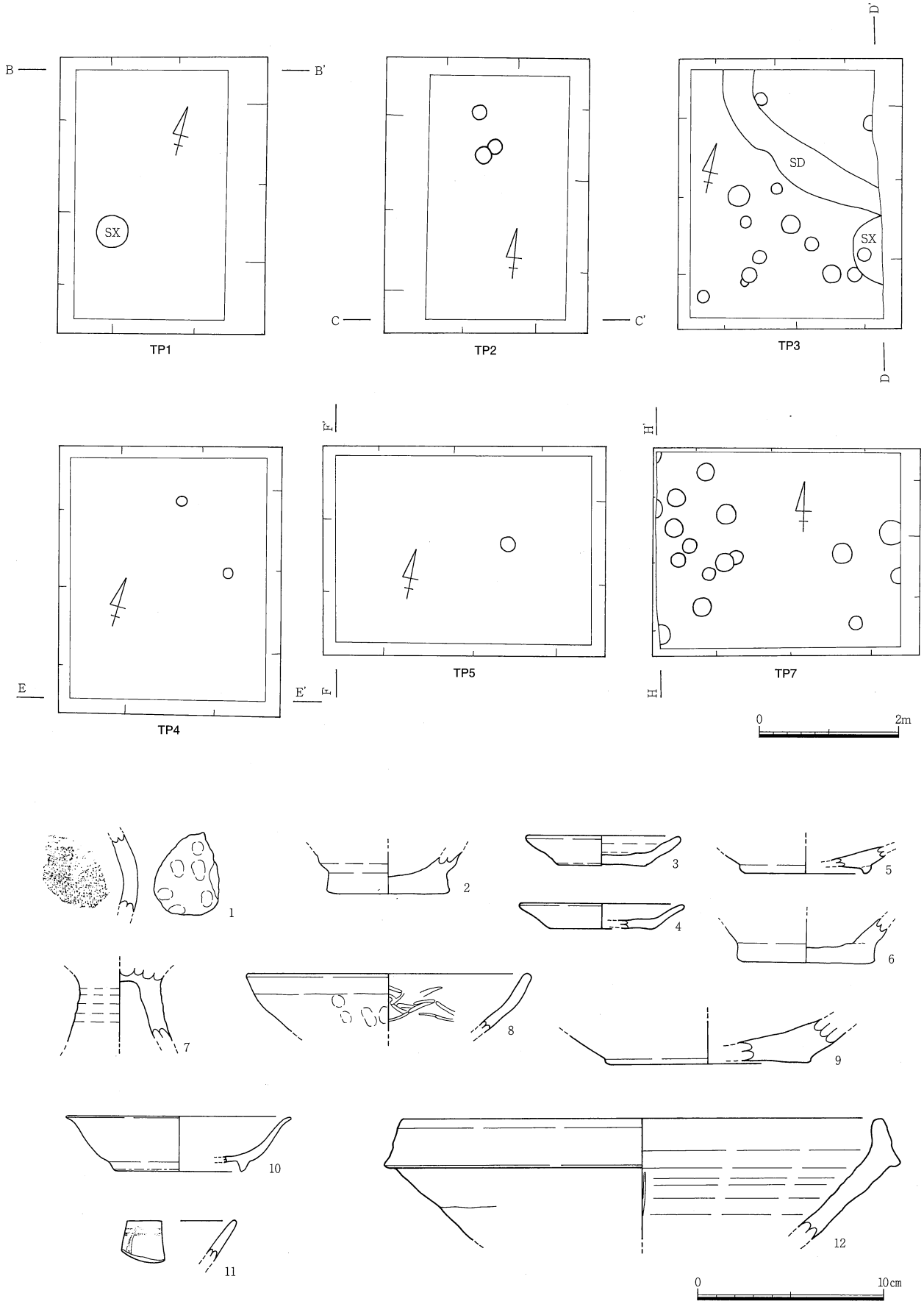


Fig.5　試掘調査平面図・出土遺物実測図（TP1：1、TP4：2～10・12、TP7：11）

第3節　調査の成果

1. 基本層序

調査Ⅰ～Ⅲ区の北壁で基本層序を観察した。各調査区とも現耕作土直下が遺構検出面となっており、遺物包含層は強く削平を受ける。またⅠ～Ⅲ区では現況の地形が東に向かって緩やかに落ち込み、Ⅲ区以東は現耕作地が深く掘削されているため、各調査区の遺構検出面は東側が低くなっている。各区の遺構検出面の標高はⅠ区で8.9m、Ⅱ区で8.7m、Ⅲ区で8.2～8.3m、Ⅳ区で8.7m、Ⅴ区で8.6m前後である。なお、Ⅰ～Ⅲ区北壁では掘削深度が浅く下層の堆積状況が確認できていないため、下層部分については、試掘調査TP1～7で確認された層序を対照させ補うこととした。

① Ⅰ～Ⅲ区北壁セクション（Fig.6）

Ⅰ～Ⅲ区北壁で確認された層序は次の通りである。

1層：現耕作土。最下層に1'層：にぶい赤褐色砂質シルト（床土）を伴う。

2層：10YR4/2灰褐色シルト。1～4cm大の礫を多量に含む。土器片を多く含む。

3－1層：10YR3/1黒褐色シルト。1～4cm大の礫を多量に含み、粗砂と粘土が混じる。土器片を少量含む。

3－2層：10YR3/1黒褐色シルト。1cm大以下の礫を少量含み、粘土が混じる。土器片を少量含む。

3－3層：10YR3/2黒褐色シルト。砂を少量含む。

4層：10YR4/2灰褐色シルト。粘土が混じる。

5層：10YR3/2黒褐色粘質シルト。1～5cm大以上の礫と砂を少量含む。

6層：10YR4/3にぶい黄褐色砂礫。

7層：10YR3/4暗褐色シルト。1～5cm大以上の礫と砂を多く含む。

8層：10YR3/2黒褐色砂質シルト。1～5cm大以上の礫と砂を少量含む。

このうち2層（灰褐色シルト層）が遺物包含層であり、中世の遺物片を含んでいる。また、試掘調査TP3では中世の遺構が2層下面で検出されており、今次調査での検出遺構の多くが中世前期に帰属することから、同層は中世前期以降の遺物包含層と考えられる。この2層はⅠ区西部にて検出されるが、他の区間では後世の削平を受け残存しない。

2層下面に堆積する3層は、先述の中世遺構群によって切られており、中世前期以前の堆積層である。3層は調査区東部を除く一帯に安定的に水平堆積し、中世の遺物を少量含んでいる。ただし、3層は調査区東部から西部に移るに従って砂礫の含有量に変化がみられ、Ⅰ区西部に3－1層、Ⅰ区東部からⅡ区西部に3－2層、Ⅱ区東部以東に3－3層が堆積する。今次調査ではこの3層上位が遺構検出面となっている。

4層は3層の下面に堆積するシルト層で、Ⅰ区西部で確認されている。

5～8層は調査区東部にて検出された自然流路SR201の下面に堆積するもので、砂礫を多く含むことから、流路によって形成された洪水堆積層とみられる。同層は中世のピットによって切られており、中世以前の堆積層である。Ⅱ区東部からⅢ区にかけての一帯は砂礫層、砂質シルト層、シルト層からなる流路跡SR201が検出されるが、その下層においても同様の堆積層が観察されたこと

から、本調査区の東部側が河川氾濫を頻繁に受ける立地環境にあったことが窺われる。

② TP1～7セクション（Fig.7）

試掘調査TP1～7で確認された層序は次の通りである。

TP1：調査Ⅰ区西端部の南側地点にあたるTP1では、遺物包含層2層は後世の削平を受け残存せず、現耕作土直下より3層（黒褐色シルト層）の堆積が確認される。下位の4～7層は砂礫を多く含み、洪水堆積層である。

TP2：調査Ⅰ区西端部の北側地点にあたるTP2においても、遺物包含層2層は残存せず、現耕作土直下が3層となる。中世の遺構は3層を切って検出されている。4～7層は洪水堆積層である。

TP3：調査Ⅰ区東部の北側地点にあたるTP3では、遺物包含層2層（灰褐色シルト層）と3層が水平堆積し、2層の下面で中世の遺構が検出される。下位に堆積する4～6層はシルト質砂層及びシルト層からなる。

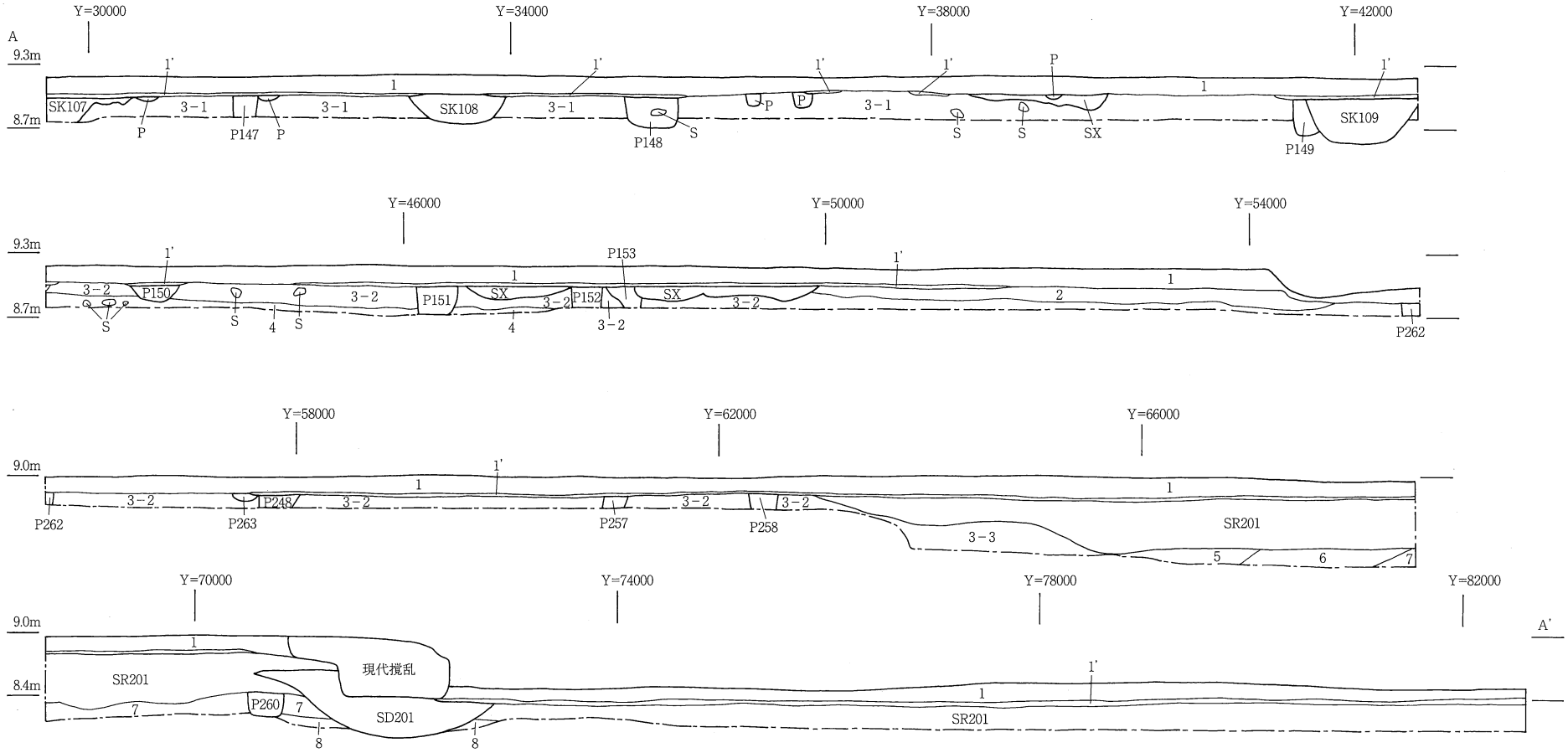
TP4：調査Ⅱ区東部の北側地点にあたるTP4では、2層、3層とも中世のSR201によって削平され、残存しない。最下位の4～5層については、本調査でのⅡ区北壁セクションとの照合により、SR201以前の洪水堆積層であった可能性がある。

TP6・7：調査Ⅲ区の北側にあたるTP6と南側のTP7でも、包含層2層、3層は中世のSR201によって削平され残存しない。最下位の4～5層についてはSR201以前の洪水堆積層であった可能性があり、TP7では中世のピットが4層を切る様子が検出されている。

TP5：調査Ⅴ区の南側地点にあたるTP5では、遺物包含層2層、3層がともに残存するが、東側では中世のSR501が両者を切っている。下位の4～7層は砂礫を多く含み、中世以前の洪水堆積層とみられる。なお、TP5では6層上面にて下層からの砂質シルトの吹き上がりが確認されており、中世以前の地震に伴う噴砂痕であった可能性がある。

各地点での堆積状況をみると、まずTP3を除く全ての試掘坑において、3層以下に洪水堆積層を確認した。こうしたことから、本調査区は3層堆積以前には、東方を蛇行して流れる流路（現在の志那弥川）の氾濫が繰り返される環境下にあったものとみられる。

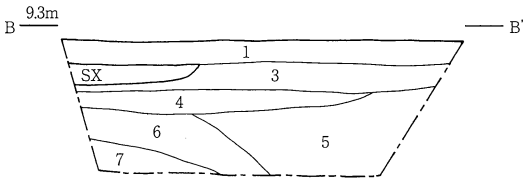
続いて、3層堆積後の中世には、本調査区付近は比較的安定した立地環境になったとみられ、建物群が出現する。ただし、遺構検出面にあたる3層上面の標高をもとに、中世当時の生活面の標高を推定すると、後世の削平を受けるⅠ区西端部では標高9.0m以上、Ⅰ区東部では標高9.0m、Ⅴ区北側では8.42mと、北西から南東に向かい緩やかに下がっている。このため標高の低い東部側については、依然SR201にみられるような河川氾濫の危険にさらされていたものと推察される。一方、本調査区内で最も遺構密度が高かった調査Ⅰ区東端部周辺（TP3）では、3層下位にもシルト層の堆積が認められ、流路西岸の微高地上でも早くから安定した立地にあったことを示している。



1層　10YR4/1　褐灰色砂質シルト…現耕作土
1'層　5YR4/4　にぶい赤褐色砂質シルト…床土
2層　10YR4/2　灰褐色シルト(1～4cm大の礫を多量に含む。遺物を多く含む)
3-1層　2.5Y3/1　黒褐色シルト(1～4cm大の礫を多量に、3～5cm大の礫を少量含む。細砂粘土が混じる。遺物を少量含む)
3-2層　5YR3/1　黒褐色シルト(1cm大以下の礫を少量含む。粘土が混じる)
3-3層　10YR3/2　黒褐色シルト(砂を少量含む)
4層　10YR4/2　灰褐色シルト(粘土が混じる)
5層　10YR3/2　黒褐色粘質シルト(1～5cm大以上の礫、砂を少量含む)
6層　10YR4/3　にぶい黄褐色砂礫(シルトが少量混じる)
7層　10YR3/4　暗褐色シルト(1～5cm大以上の礫、砂を多く含む)
8層　10YR3/2　黒褐色砂質シルト(1～5cm大の礫を少量含む)

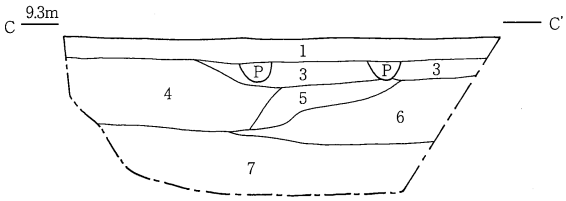
0　2m

Fig.6　Ⅰ～Ⅲ区北壁セクション図



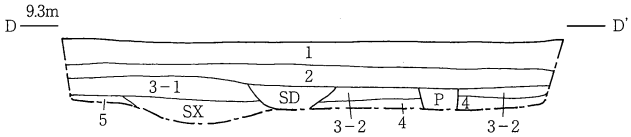
TP1北壁

1層　表土及び床土
3層　黒褐色シルト(1cm前後の礫を含む。遺物を多く含む)
4層　暗褐色粘質シルト(砂礫を多く含む)
5層　暗褐色粘質シルト(礫を多く含む)
6層　暗褐色砂質シルト(礫を多く含む)
7層　灰色粗砂
SX1　灰色粘質土



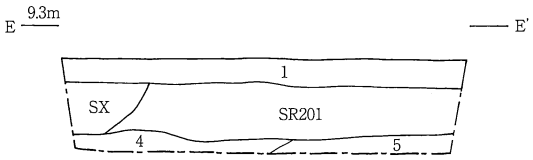
TP2南壁

1層　表土及び床土
3層　黒褐色シルト(砂礫を多く含む)
4層　暗褐色砂礫(礫を多く含む)
5層　暗褐色砂礫(礫を含む)
6層　暗褐色砂礫
7層　暗褐色砂(シルトが混じる)
P　灰褐色シルト(遺物を含む)



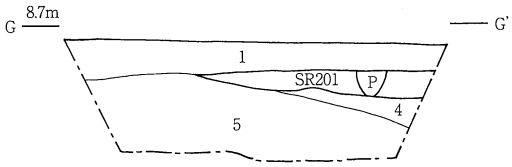
TP3東壁

1層　表土及び床土
2層　灰褐色シルト(遺物を含む)
3-1層 黒褐色シルト(遺物を含む)
3-2層 黒褐色砂質シルト(礫を少量含む。遺物を含む)
4層　灰褐色シルト質砂
5層　暗褐色シルト(炭化物を少量含む)
SX　黒褐色シルト(1～2cm大の礫を含む。遺物を含む)
P·SD　暗褐色シルト(1～4cm大の礫を含む。遺物を含む)



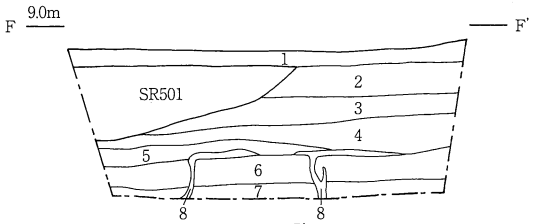
TP4南壁

1層　表土及び床土
4層　暗褐色シルト(2～3cm大の礫を含む。炭化物を少量含む)
5層　暗褐色砂礫
SX　暗褐色砂質シルト(礫を多く含む。遺物を多く含む)
SR201　暗褐色シルト·砂質シルト(礫を多く含む。遺物を多く含む)



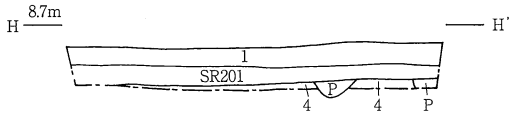
TP6南壁

1層　表土及び床土
4層　灰褐色シルト質砂(礫を含む)
5層　灰色砂礫
P　黒褐色シルト質細砂(1～4cm大の礫を含む。遺物を含む)
SR201　灰褐色砂質シルト(1～4cm大の礫を含む。遺物を含む)



TP5西壁

1層　表土及び床土
2層　灰褐色砂質シルト(1～2cm大の礫を含む)
3層　黒褐色シルト(礫を少量含む。遺物を少量含む)
4層　暗褐色粘質シルト(礫を多く含む)
5層　暗褐色粘質シルト(1～2cm大の礫を多く含む)
6層　黒褐色砂質シルト
7層　明褐色シルト質細砂
8層　暗灰褐色砂質シルト(噴砂痕か)
SR501　灰褐色砂礫



TP7西壁

1層　表土及び床土
4層　灰褐色シルト質砂(礫を多く含む)
P　灰褐色シルト質細砂
SR201　灰褐色砂質シルト(1～2cm大の礫を含む。遺物を多く含む)

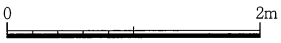


Fig.7　TP1～7セクション図

Fig.8　検出遺構全体図

2. 遺構と遺物

(1) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は調査区全体で、掘立柱建物跡17棟、土坑12基、ピットは柱穴を含めて237基、溝と溝状土坑2条、自然流路1条を検出している。中でもⅠ区東部からⅡ区西部・Ⅳ区にかけての区間は、掘立柱建物跡12棟が重複して検出されるなど遺構密度が最も高い。一方、Ⅱ区東部以東では、砂質シルトと砂礫層を埋土とする自然流路SR201が検出されている。SR201床面は西岸から東に向かって緩やかに落ち込んでおり、西岸のテラス部では土器と円礫の集中廃棄が確認される。またⅢ区では、SR201に伴う砂礫層の下面にて中世のピット13基を検出している。Ⅳ区南端部には大型の溝状土坑SD401が東西方向に延びており、このSD401以南では遺構の検出密度も弱まっている。Ⅴ区では中世とみられる掘立柱建物跡1棟、ピット30基、自然流路の西岸を検出している。

古代の遺構は検出できなかったが、流路SR201やSD401等中世の遺構内から古代の遺物が少量出土している。

① 掘立柱建物跡

SB1 (Fig.9・12)

Ⅰ区の東部で検出された1間×2間の東西棟建物跡である。中世のSB3とは重複して検出されるが柱穴の直接的な切り合いはないが、周辺建物との関係からみてSB1が後続するとみられる。棟方向はN－84°－Wであり、東に近接するSB2とは同じ軸と規模をもつ。規模は梁間1.76m桁行3.88m、桁行の柱間寸法は1.94mを測る。柱穴は5基を検出しており、P6が未検出である。柱穴規模は径26～40cm、深さはP1・4・5が14cm、P2・3が18～24cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。

遺物はP2・3・4より土師質土器杯・小皿が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯3点、小皿1点、底部点数は土器杯2点、小皿2点である。図示したものはP3出土の土師質土器杯 (13) である。

SB2 (Fig.9)

Ⅰ区の東部で検出された1間×2間の東西棟建物跡である。P2・3・5が中世のSB6と重複して検出されており、P2がSB6－P3を切っている。また中世のSB4・SB5とも重なり合うが、前後関係は明らかでない。その他の切り合い関係ではP3が中世のSK201を切り、P5が中世のSK105を切っている。棟方向はN－84°－Wであり、西に近接するSB1とは同じ軸をもつ。規模は梁間1.90m桁行3.56m、桁行の柱間寸法は1.66～1.86mを測る。柱穴は5基を検出しており、P1が未検出である。柱穴規模は径20～46cm、深さはP2・4・5・6が15～22cm、P3が46cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。

遺物はP2・3・5より土師質土器片が出土しているが、重複するSB6からの混入の可能性をもつ。その他、P4・P6からの出土遺物は確認できていない。

SB3 (Fig.9)

Ⅰ区の東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。中世のSB1とは重複して検出され、SB3が先行する。棟方向はN－88°－Wであり、東に近接するSB4とは同じ軸と規模をもつ。規模

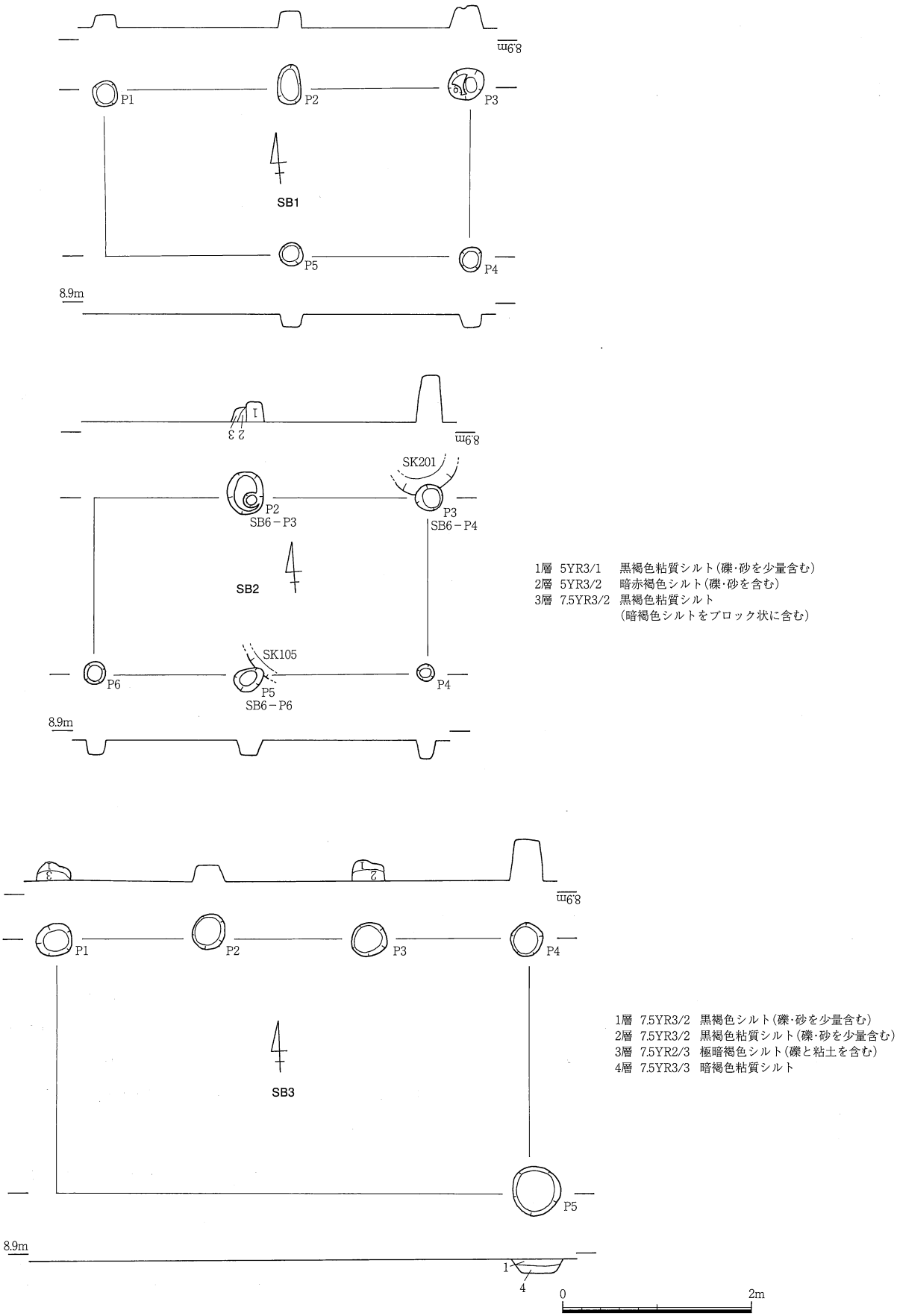

8.9m
P1
P2
P3
SB1
P5
P4
8.9m
1
2 3
8.9m
SK201
P2
SB6－P3
P3
SB6－P4
SB2
SK105
P6
P5
SB6－P6
P4
8.9m
1層 5YR3/1 黒褐色粘質シルト(礫・砂を少量含む)
2層 5YR3/2 暗赤褐色シルト(礫・砂を含む)
3層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト
(暗褐色シルトをブロック状に含む)
3
1
2
8.9m
P1
P2
P3
P4
SB3
P5
8.9m
1
4
0
2m
1層 7.5YR3/2 黒褐色シルト(礫・砂を少量含む)
2層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト(礫・砂を少量含む)
3層 7.5YR2/3 極暗褐色シルト(礫と粘土を含む)
4層 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト

Fig.9 SB1～3

は梁間2.70m桁行5.04m、桁行の柱間寸法は1.60～1.70mを測る。柱穴は5基を検出しており、P6・7・8が未検出である。柱穴規模は径36～52cm、深さはP1・2・3・5が16～22cm、P4が43cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1～5より土師質土器杯・小皿、瓦器椀が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯3点、小皿2点、瓦器椀1点、底部点数は土器杯1点、小皿1点である。その他、土師質土器、瓦器椀の体部2点が出土している。図示したものはない。

SB4（Fig.10・12）

Ⅰ区の東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。切り合い関係では中世のSK104を切っており、重複して検出された中世のSB6・7とは直接的な遺構の切り合いがないため前後関係は不明である。棟方向はN－88°－Wであり、西に近接するSB3とは共通した軸と規模をもつ。規模は梁間2.64m桁行5.68m、桁行の柱間寸法は1.80mを測る。柱穴は6基を検出しており、P5・6が未検出である。柱穴規模は径28～54cm、深さはP7・8が16～18cm、P1～4が45～48cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。またP1・P2では径25cmの柱痕を検出している。

遺物はP1～4・7・8より土師質土器杯・小皿、須恵器鉢、青磁碗が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿3点、須恵器鉢1点、青磁碗1点、底部点数は土器杯2点、小皿7点、青磁碗1点である。

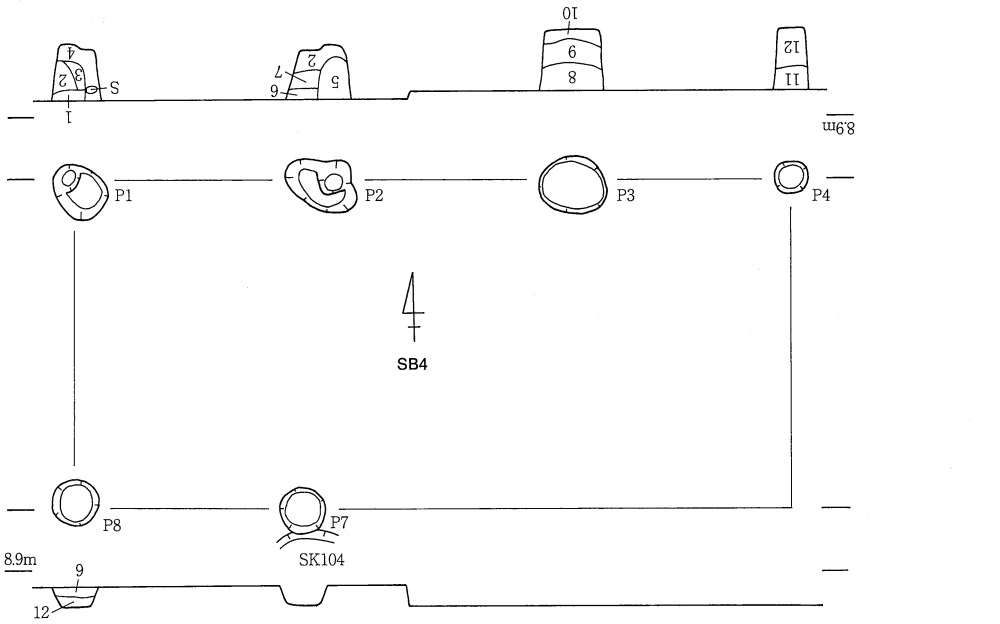
図示したものは、P8出土の土師質土器小皿（18）、P2出土の青磁碗（25）、須恵器鉢（22）である。18は器高の低いもので、内外面回転ナデ調整。25は龍泉窯系青磁碗で、内底に片彫りによる花文を描く。高台端部を欠損するが高台断面は四角形とみられ、畳付まで施釉し高台内は無釉となる。釉は灰オリーブ色に発色する。22は東播系鉢で、口縁部内外面に回転ナデ、体部内面はヨコナデを施す。器面は青灰色に発色し、口縁部外面に自然釉が掛かる。

SB5（Fig.10・12）

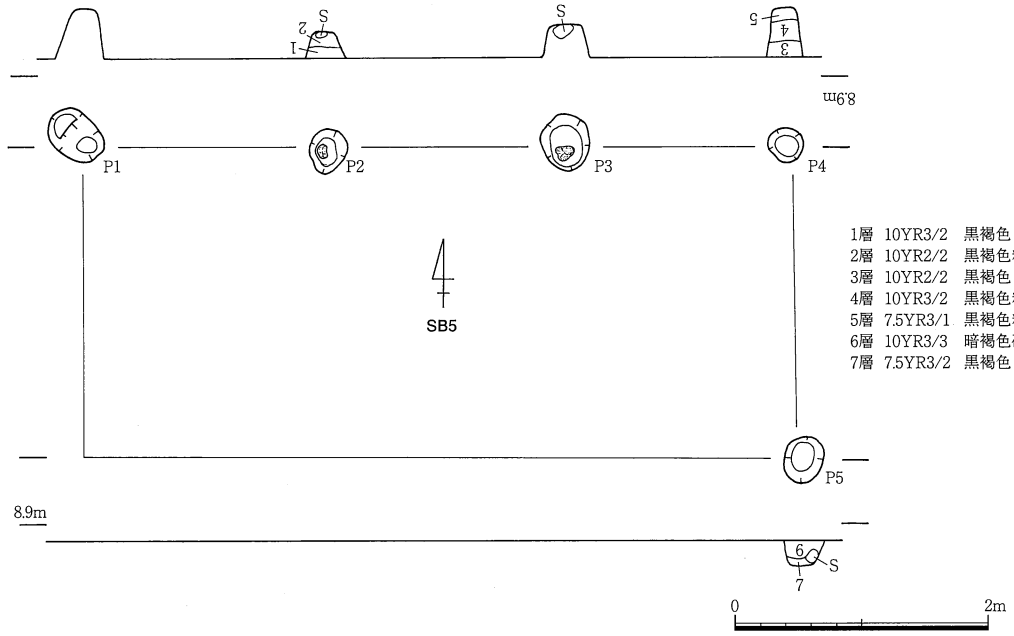
Ⅰ区の東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。重複して検出された中世のSB6・9・17とは、直接的な遺構の切り合いがないため前後関係は明らかでない。棟方向はN－90°－Wであり、近接するSB3・4とはほぼ共通した軸と規模をもつ。規模は梁間2.46m桁行5.62m、桁行の柱間寸法は1.80～1.90mを測る。柱穴は5基を検出するが、P6・7・8は調査区外に出るため未検出である。柱穴規模は径28～50cm、深さはP2・3・5が22～26cm、P1・4が40cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。またP2・P3では床面に根石、P5では床面壁側に礫を伴う。

遺物はP1～5より土師質土器杯・小皿、瓦器椀、須恵器甕が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿18点、瓦器椀2点、底部点数は土器杯8点、小皿6点である。

図示したものは、P5出土の小皿（15）、P4出土の土師質土器小皿（16）、P1出土の瓦器椀（20）、須恵器甕（23）である。瓦器椀（20）は体部の器壁が厚く、内面のミガキは観察されない。炭素は剥離し、外面はにぶい褐色、内面はにぶい橙色に発色する。胎土中には石英・長石・チャートの粗砂を多量に含む。23は須恵器甕の体部で、内外面にイタナデを施す。焼成は硬質で内外面は灰色に発色する。



1層 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト
2層 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト
3層 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト(砂を少量含む)
4層 2.5YR3/1 暗赤灰色粘質シルト(砂を少量含む)
5層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト(炭化物を含む)※柱痕
6層 7.5YR3/3 暗褐色シルト(砂・礫を含む)
7層 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト(砂・礫を含む)
8層 10YR3/4 暗褐色シルト(砂・礫を含む)
9層 5YR3/1 黒褐色粘質シルト(砂・礫を少量含む)
10層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト(砂を多量に含む)
11層 5YR3/2 暗赤褐色粘質シルト(砂・礫を多量に含む)
12層 5YR3/1 黒褐色粘質シルト(暗褐色シルトをブロック状に含む)



1層 10YR3/2 黒褐色シルト(礫・砂を含む)
2層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト(炭化物を含む)
3層 10YR2/2 黒褐色シルト(礫・砂を多量に含む)
4層 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(礫・砂を少量含む)
5層 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト(砂を少量含む)
6層 10YR3/3 暗褐色砂質シルト(礫を含む)
7層 7.5YR3/2 黒褐色シルト(礫・砂を少量含む)

Fig.10 SB4・5

SB6（Fig.11・12）

1区の東部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。中世のSB2とはP3・4・6が重複して検出されており、P3がSB2－P2に切られている。また重なりあった中世のSB4・5とは直接的な遺構の切り合いがないため前後関係は明らかでない。その他の切り合い関係では、P8が中世のSK103に切られる。またP4とSK201との前後関係は不明である。棟方向はN－85°－Wであり、東に近接するSB7とはほぼ共通した軸と規模をもつ。規模は梁間2.10m桁行5.26m、桁行の柱間寸法は1.60～1.90mを測る。柱穴は6基を検出し、P1・2が未検出である。柱穴規模は径24～46cm、深さはP3・5・6・7が12～28cm、P4・8が46～58cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。またP5では径15cmの柱痕を検出している。

遺物はP3～6より土師質土器杯・小皿、瓦器椀、陶器甕、混入とみられる古代の須恵器杯と土師器甕が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯8点、小皿7点、瓦器椀1点、底部点数は土器杯3点、小皿5点である。またこの他、瓦器椀の体部細片4点等が出土している。

図示したものは、P6出土の土師質土器小皿（17）、P5出土の瓦器椀（21）、P3出土の陶器甕（24）である。瓦器椀（21）は器面の炭素が剥離し、外面はにぶい黄橙色、内面は褐灰色に発色する。

SB7（Fig.11・12）

Ⅱ区の西部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。中世のSB4・SB8とは重複して検出されているが、遺構の直接的な切り合いがないため前後関係は不明である。その他の切り合い関係では、P3が中世のSK202・P212・P264に切られる。またP6は近世のSK204に切られている。棟方向はN－87°－Wであり、西に近接するSB6と同じ軸をもつ。規模は梁間1.84m桁行5.50m、桁行の柱間寸法は1.80～1.90mを測る。柱穴は7基を検出しており、P5が未検出である。柱穴規模は径30～44cm、深さはP3・4・6が18～34cm、P1・2・7・8が38～40cmを測る。埋土はP8が灰褐色シルト、その他は黒褐色シルトを基調とする。

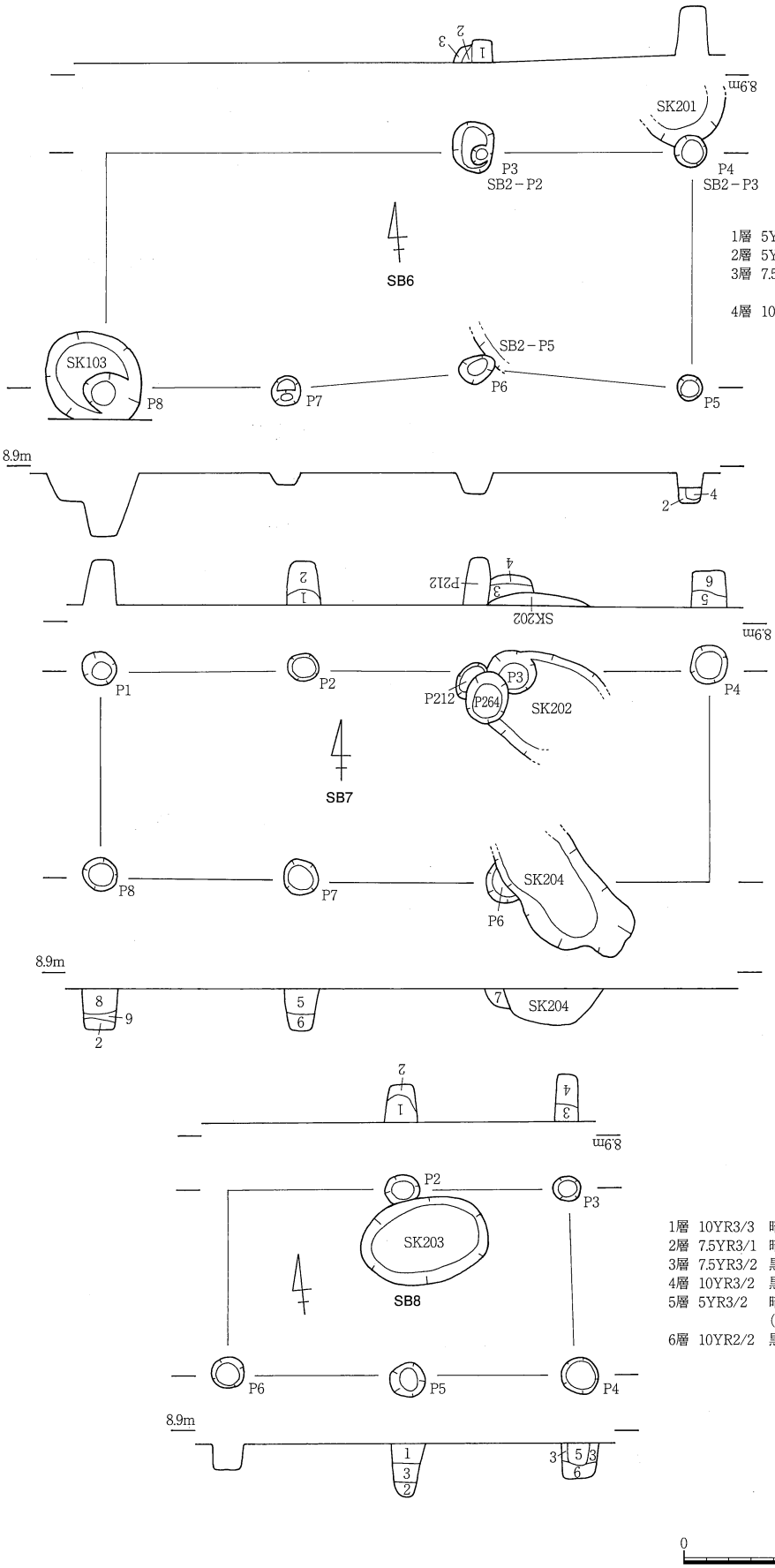
遺物はP1～4・7・8より土師質土器杯・小皿が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿12点、底部点数は土器杯2点、小皿7点である。

図示したものは、P4出土の土師質土器小皿（19）である。

SB8（Fig.11・12）

Ⅱ区の西部で検出された1間×2間の東西棟建物跡である。中世のSB7と重複して検出されるが、柱穴の切り合いはなく前後関係は不明である。その他の切り合い関係では、P2が近世のSK203に切られている。棟方向はN－84°－Wである。規模は梁間1.66m桁行3.08m、桁行の柱間寸法は1.50～1.60mを測る。柱穴は5基を検出しており、P1が未検出である。柱穴規模は径24～34cm、深さはP2・4・6が24～34cm、P3・5が42～48cmを測る。埋土は暗褐色シルトと黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP2～6から、土師質土器小皿の口縁部4点と底部2点、土師質土器細片が出土している。図示したものはP5出土の土師質土器杯（14）である。



1層 5YR3/1 黒褐色粘質シルト(礫・砂を少量含む)
2層 5YR3/2 暗赤褐色シルト(礫・砂を含む)
3層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト
(暗褐色シルトをブロック状に含む)
4層 10YR3/3 暗褐色シルト
(礫・砂を多く含む。炭化物を含む)※柱痕

1層 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(礫を少量含む)
2層 10YR2/3 黒褐色粘質シルト(砂を含む)
3層 7.5YR3/2 黒褐色シルト(礫・砂を含む)
4層 7.5YR3/2 黒褐色シルト(礫を含む)
5層 10YR3/2 黒褐色シルト(礫・砂を少量含む)
6層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト
7層 7.5YR2/2 黒褐色シルト(礫・砂を含む)
8層 7.5YR4/2 灰褐色シルト(礫・砂を含む)
9層 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト(礫・砂を含む)

1層 10YR3/3 暗褐色シルト(礫・砂を含む)
2層 7.5YR3/1 暗褐色粘質シルト
3層 7.5YR3/2 黒褐色シルト(礫・砂を少量含む)
4層 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(礫を少量含む)
5層 5YR3/2 暗赤褐色砂質シルト
(褐色砂をブロック状に含む)
6層 10YR2/2 黒褐色粘質シルト(礫・砂を少量含む)

0 2m

Fig.11 SB6～8

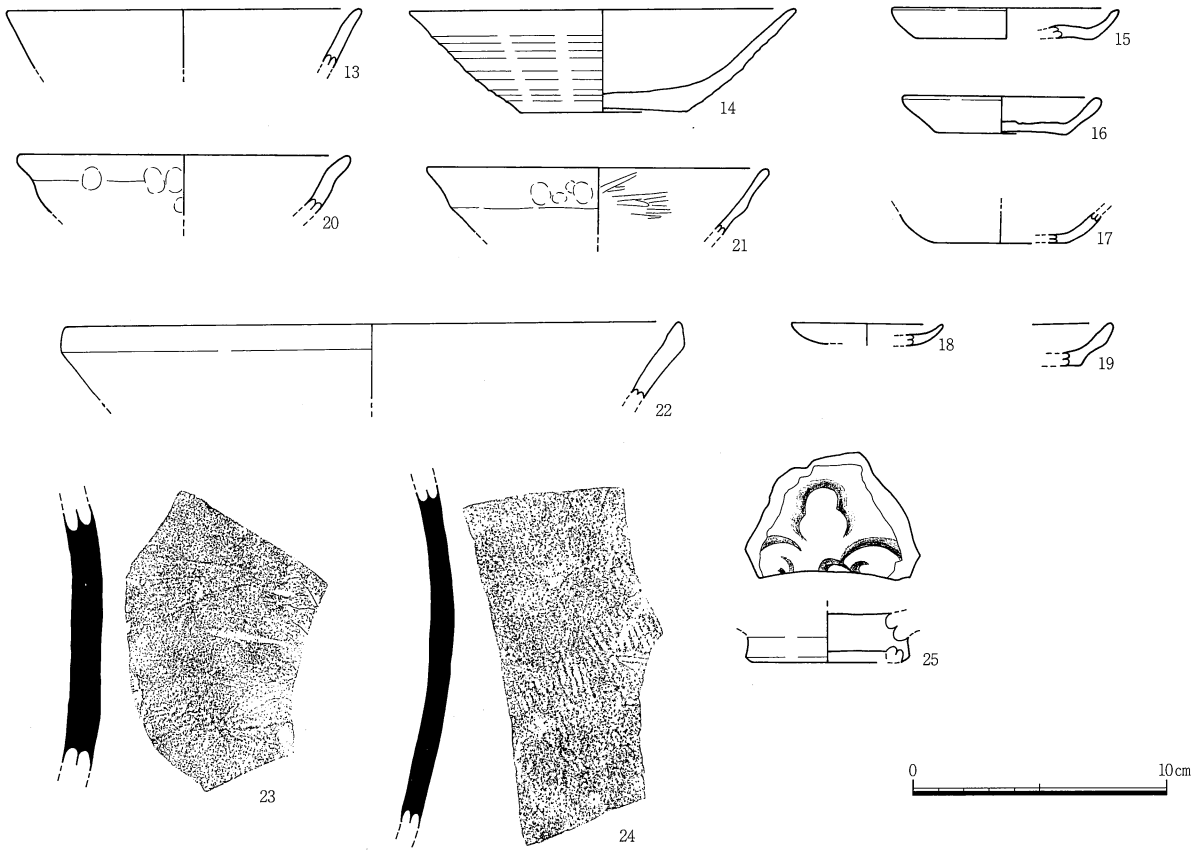


Fig.12　SB1・4～8出土遺物実測図
(SB1：13、SB4：18・22・25、SB5：15・16・20・23、SB6：17・21・24、SB7：19、SB8：14)

SB9 (Fig.13)

Ⅱ区西部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。重なり合って検出されたSB5、SB10とは、P2がSB10－P1を切り、P6がSB10－P7を切っている。SB5とは柱穴の直接的な切り合いがないため前後関係は明らかでない。その他の切り合い関係では、P1が中世のP207に切られている。棟方向はN－88°－Wである。規模は梁間2.10m桁行4.66m、桁行の柱間寸法は1.50～1.60mを測る。柱穴は7基を検出し、P7が未検出である。柱穴規模は径30～48cm、深さはP1・5・6・8が12～36cm、P2・3・4が40～60cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1～4・7・8より土師質土器杯・小皿、瓦器椀が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯29点、小皿72点、瓦器椀1点、底部点数は土器杯19点、小皿27点である。このうち建物の北西端にあたるP1では下層より多量の遺物がまとまって出土している。P1からの出土点数は、口縁部数で杯22点、小皿57点、瓦器椀1点、底部数で杯14点、小皿22点であり、このうちには完形の土師質土器杯1点と小皿3点が含まれている。

図示したものは土師質土器杯 (26～30)、小皿 (31～40) である。このうち26～33・36～38・40がP1、34・39がP4、35がP6からの出土である。

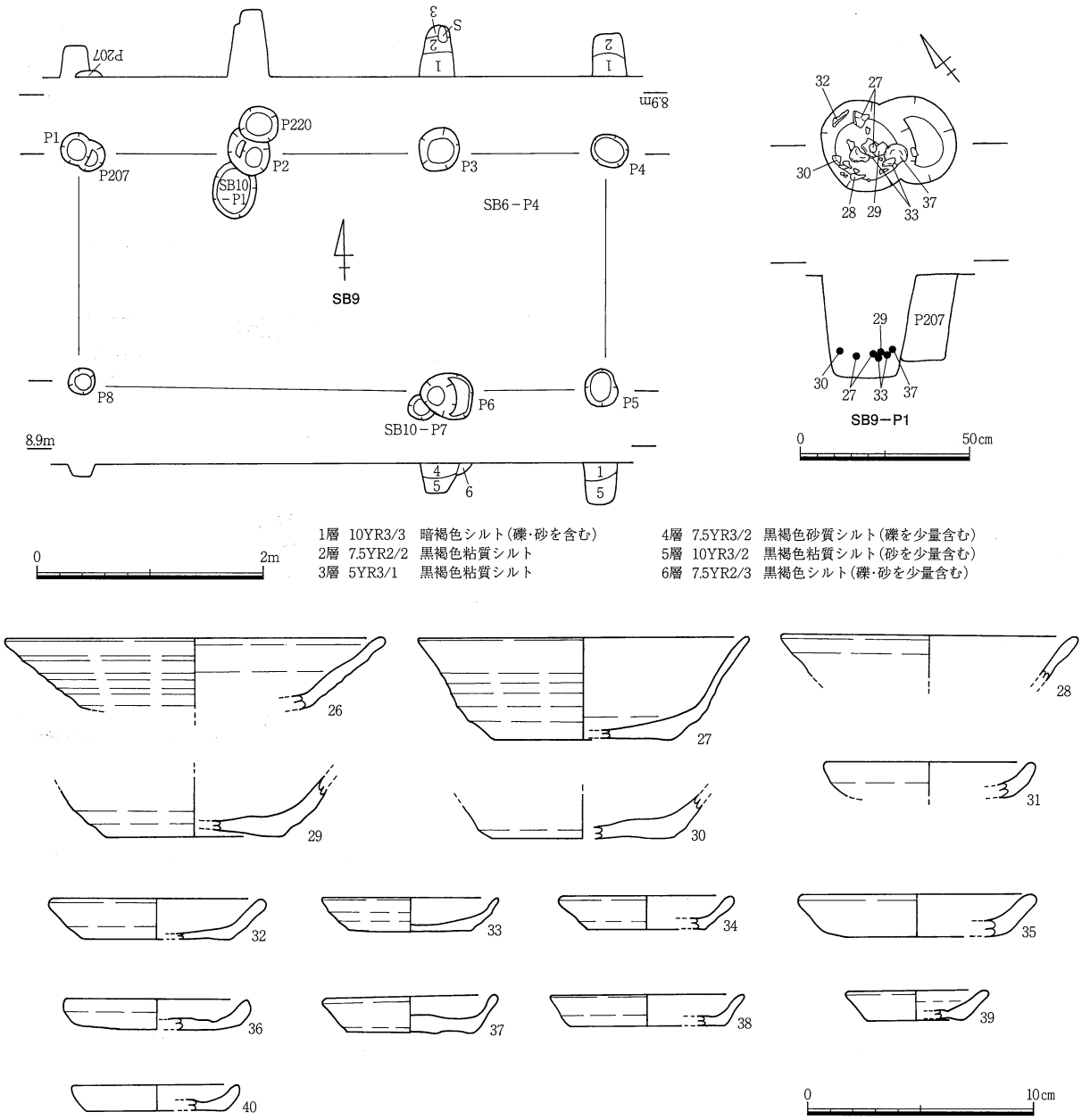


Fig.13　SB9・SB9出土遺物実測図

SB10 (Fig.14・16)

Ⅱ区西部で検出された1間×3間の東西棟建物跡で、建物の南東端は調査区外に出ている。重複して検出された中世のSB9とは、P1がSB9－P2を切りP7がSB9－P6を切ることからSB10が後続する。棟方向はN－90°－Wである。規模は梁間1.90m桁行4.24m、桁行の柱間寸法は1.36～1.56mである。柱穴は5基を検出しており、P2・3・5が未検出である。柱穴規模は径25～40cm、深さはP6・7・8が14～18cm、P1・4が40～46cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1・4・6・7・8より土師質土器杯・小皿、須恵器鉢、常滑焼甕が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿16点、須恵器鉢1点、底部点数は土器杯3点、小皿3点である。その他、P6より常滑焼甕の体部1点が出土している。

図示したものはP1出土の土師質土器杯（41・44・56）、須恵器鉢（58）である。58は口縁部内外面と端部回転ナデで、口縁端部は面取る。器面は灰白色に発色する。

SB11（Fig.14）

Ⅳ区にて検出された東西棟建物跡である。重複して検出された中世のSB12とは、P1がSB12－P1を切り、P2がSB12－P2に、P7がSB9－P6に切られている。棟方向はN－90°－Wである。建物の東部が調査区外に出るため全体の規模は不明であるが、梁間1.90m桁行の確認長2.20m、桁行の柱間寸法はP1・P2間で2.06mを測る。柱穴は3基を検出している。柱穴規模は径30～40㎝、深さはP1が24㎝、P2が44㎝、P3が18㎝を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1～3より土師質土器小皿と、混入とみられる古代の甕細片が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器小皿7点であるが、いずれも小片であり図示できるものはない。

SB12（Fig.14・16）

Ⅳ区にて検出された東西棟建物跡である。重複して検出された中世のSB11とは先述の切り合い関係からみて、SB12がSB11に先行している。棟方向はN－87°－Wである。建物の東部が調査区外に出るため全体の規模は不明であるが梁間2.00m桁行の確認長1.80m、桁行の柱間寸法はP1・P2間で1.80mを測る。柱穴は3基を検出しており、柱穴規模は径34～50㎝、深さ12～32㎝を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1～3より土師質土器杯・小皿、須恵器甕が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器小皿1点、底部点数は杯1点、小皿1点である。その他、須恵器甕の体部2点が出土している。図示したものはP1出土の土師質土器小皿（48）である。

SB13（Fig.14・16）

調査Ⅳ区にて検出された東西棟建物跡である。切り合い関係では、P1が中世のP468を切り、P2が中世のP411を切る。棟方向はN－89°－Wである。建物の西部が調査区外となるため全体の規模は不明であるが梁間1.90m桁行の確認長2.04m、桁行の柱間寸法はP1・P2間で1.50mを測る。柱穴は3基を検出しており、P4は未検出である。柱穴規模は径32～40㎝、深さ20～46㎝を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1・2より土師質土器杯・小皿、須恵器鉢、青磁碗が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯1点、小皿4点、須恵器鉢1点である。その他、龍泉窯系青磁碗の体部1点が出土している。図示したものはP2出土の東播系須恵器鉢（59）である。

SB14（Fig.15・16）

調査Ⅳ区にて検出された東西棟建物跡である。切り合い関係では、P1が中世のP456に切られ、P5が中世のP439を切りP441に切られる。棟方向はN－84°－Wである。建物の東部が調査区外となるため全体の規模は不明であるが梁間2.34m桁行の確認長は2.40mを測る。桁行の柱間寸法はP1・P2間で1.10m、P3・P4間で0.85m、P4・P5間で1.00mである。ただし、P1・P3・P5で構成される建物であった可能性も考えられ、その場合、柱間寸法はP3・P5間で1.80mとなる。柱穴は5基を検出し、柱穴規模はP1・3～5が径30～38㎝、P2が径48㎝、深さは19～31㎝を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1～5より土師質土器杯・小皿、須恵器片が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯8点、小皿18点、底部は杯8点、小皿6点である。中でも建物の北西端に位置するP1では遺物量が多く、口縁部点数は杯6点、小皿10点、底部は杯8点、小皿6点となる。出土状況をみると、P1の中層より完形の小皿（53）が斜めに伏せた状態で出土しており、その下側からは、完形の杯と小皿（43・52）が重ねられ横倒しになって出土している。またその横からは円盤状の須恵器片（57）が出土している。

図示したものはP1出土の土師質土器杯（42・43・46・47）、小皿（49～53）、須恵器片（57）である。57は須恵器の底部片を円盤状に削り出したもので、形態と出土状況からみて模倣銭として使用された可能性がある。法量は径3.2cm厚さ0.6mm。周縁部に擦痕、片面にナデ、片面には回転糸切り痕が観察される。胎土は灰色で焼成は軟質である。

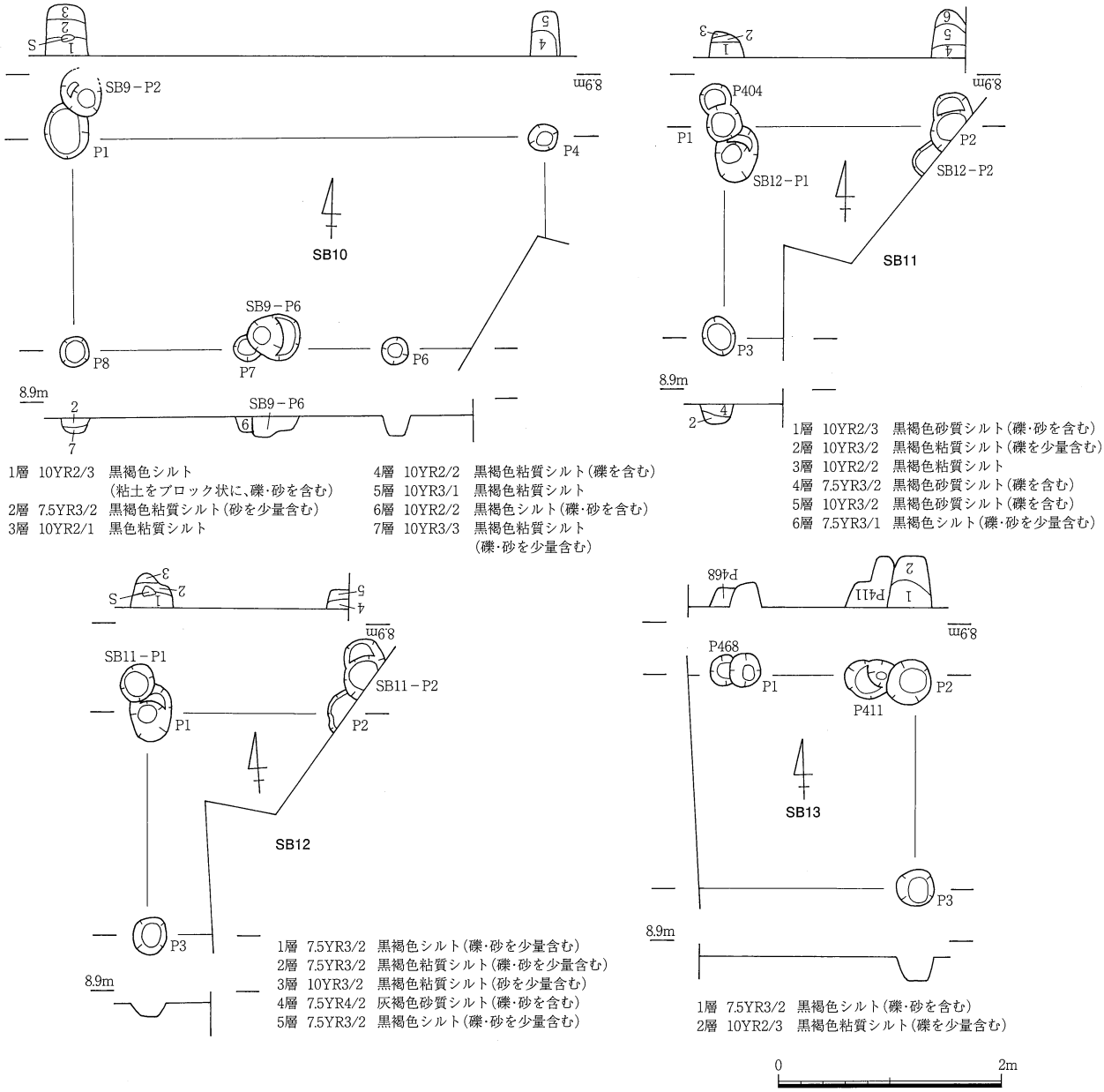


Fig.14 SB10～13

SB15（Fig.15）

Ⅴ区で検出された1間×2間の東西棟建物跡である。重複して検出された中世のSB16とは直接的な柱穴の切り合いがなく、前後関係は明らかでない。棟方向はN－84°－Wである。検出規模は梁間1.74m桁行3.34m、桁行の柱間寸法は1.56～1.76mを測る。柱穴は4基を検出しており、P4・5が未検出である。柱穴規模は径25～32cm、深さ12～22cmを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物はP1より土師質土器杯底部1点、小皿口縁部1点、その他P1・2・6から土師質土器細片が出土するが、何れも小片であり図示できるものはない。

SB16（Fig.15・16）

Ⅴ区西部で検出された1間×3間の東西棟建物跡である。重複して検出された中世のSB15とは直接的な柱穴の切り合いがなく、前後関係は明らかでない。その他の切り合い関係ではP1が中世のSD401に切られ、P3が中世のP525に切られている。棟方向はN－87°－Wである。検出規模は梁間1.90m桁行4.30m、桁行の柱間寸法は1.30～1.40mを測る。柱穴は5基を検出しており、P5・6・8が未検出である。柱穴規模は径18～40cm、深さ32～51cmを測る。P7では径16cmの柱痕を検出している。埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物はP1～4・7より土師質土器杯・小皿、瓦器碗が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯2点、小皿10点、底部は杯7点、小皿5点である。この他P1より瓦器椀の体部細片が1点出土している。図示したものはP4出土の土師質土器杯（45）である。

SB17（Fig.15・16）

Ⅰ区南東部からⅡ区南西部にかけて検出された小型の東西棟建物跡である。南部側の殆どが調査区外となるため、規模については不明な点が多いが、N－84°－Wの軸方向をもって並ぶP1～P4とP4南に対面するP5を検出している。桁行の柱間寸法はP1・P2間で0.8m、P2・P3・P4間では1.1～1.14mと不均一であるが、P1～P4を柱穴と捉えた場合、梁間1.60m桁行3.00mの1間×3間の建物になるとみられる。柱穴の検出規模は径24～36cm、深さ20～32cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

遺物はP1～4より土師質土器杯・小皿、瓦器碗、青磁碗が出土している。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯3点、小皿6点、青磁碗1点、底部は杯1点、小皿5点である。この他P3より瓦器椀の体部細片が1点出土している。

図示したものはP2出土の青磁碗（60）、P4出土の土師質土器小皿（54・55）である。60は龍泉窯系青磁碗（小野分類碗D類）で14世紀～15世紀前半頃のものとみられる。半口縁部は緩やかに外反し、釉はオリーブ灰色に発色する。

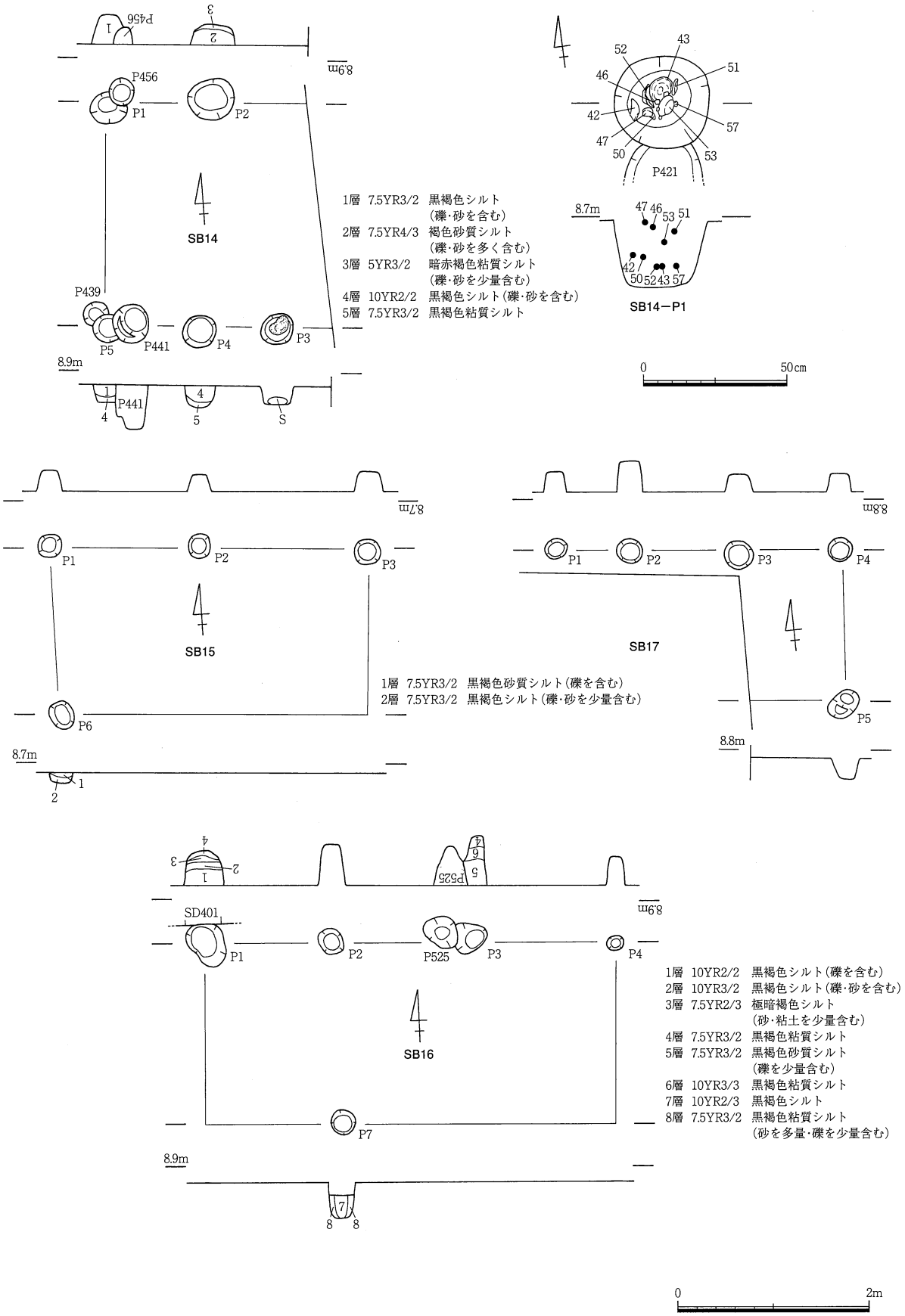


Fig.15 SB14～17

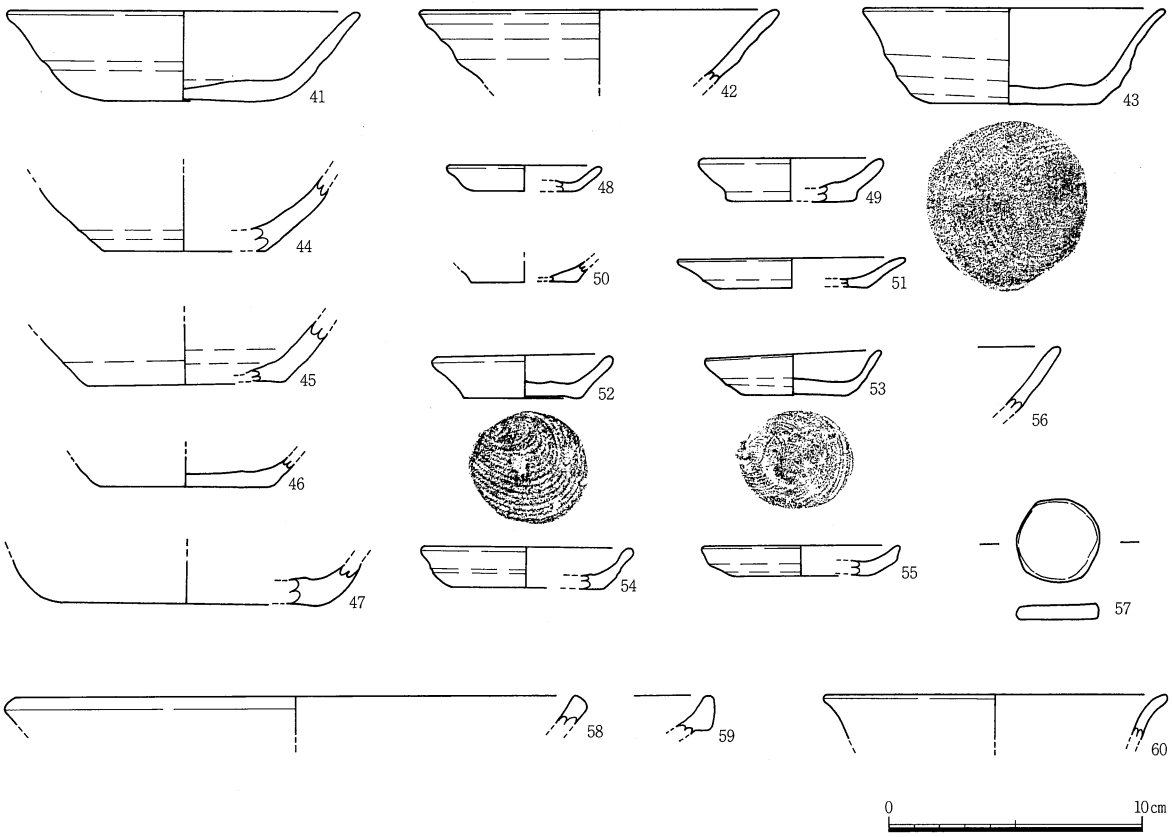


Fig.16　SB10・12～14・16・17出土遺物実測図
(SB10：41・44・56・58、SB12：48、SB13：59、SB14：42・43・46・47・49・50～53・57、SB16：45、SB17：54・55・60)

② 土坑

SK102 (Fig.17・19)

Ⅰ区の東部に位置する。平面形は円形を呈し、径80cm深さ24cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。遺物は埋土中より土師質土器杯の口縁部6点、底部6点、及び土師質土器細片が出土している。図示したものは土師質土器杯又は椀 (68)、小皿 (74) である。

SK103 (Fig.17・19)

Ⅰ区の東部に位置する土坑で、SB6－P8を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸90cm短軸80cm、深さ26cmを測る。埋土は1層が暗赤褐色粘質シルト、2層が黒褐色粘質シルトである。遺物は埋土中より土師質土器杯の口縁部2点、小皿口縁部1点、杯底部12点、土師質土器細片、常滑焼甕の体部片が出土している。図示したものは土師質土器杯 (67) である。

SK104 (Fig.17・19)

Ⅰ区の東部に位置する土坑で、SB4－P7に切られている。平面形は不整円形を呈し、長軸83cm短軸74cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀、須恵器甕、白磁皿であり、口縁部点数にして杯10点、小皿5点、白磁皿1点、底部点数にして杯8点、小皿5点、瓦器椀1点が出土している。図示したものは土師質土器杯 (61～64)、小皿 (72・73・75・76)、瓦器椀 (77)、白磁皿 (78) である。このうち61～64・76・78が上層よりまとまって出土したものであり、中でも62・64・76はほぼ完形の状態を

保って出土している。

SK105（Fig.17・19）

Ⅰ区の東部に位置する土坑で、中世のP154を切り、SB2－P5に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸100cm短軸80cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。出土遺物は土師質土器のみであるが、切り合い関係より中世に位置付けられる。図示したものは杯（65・70）である。

SK106（Fig.17・19）

Ⅰ区の西部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸74cm短軸58cm、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。出土遺物は土師質土器杯の口縁部1点と土師質土器細片である。図示したものは杯（66）である。

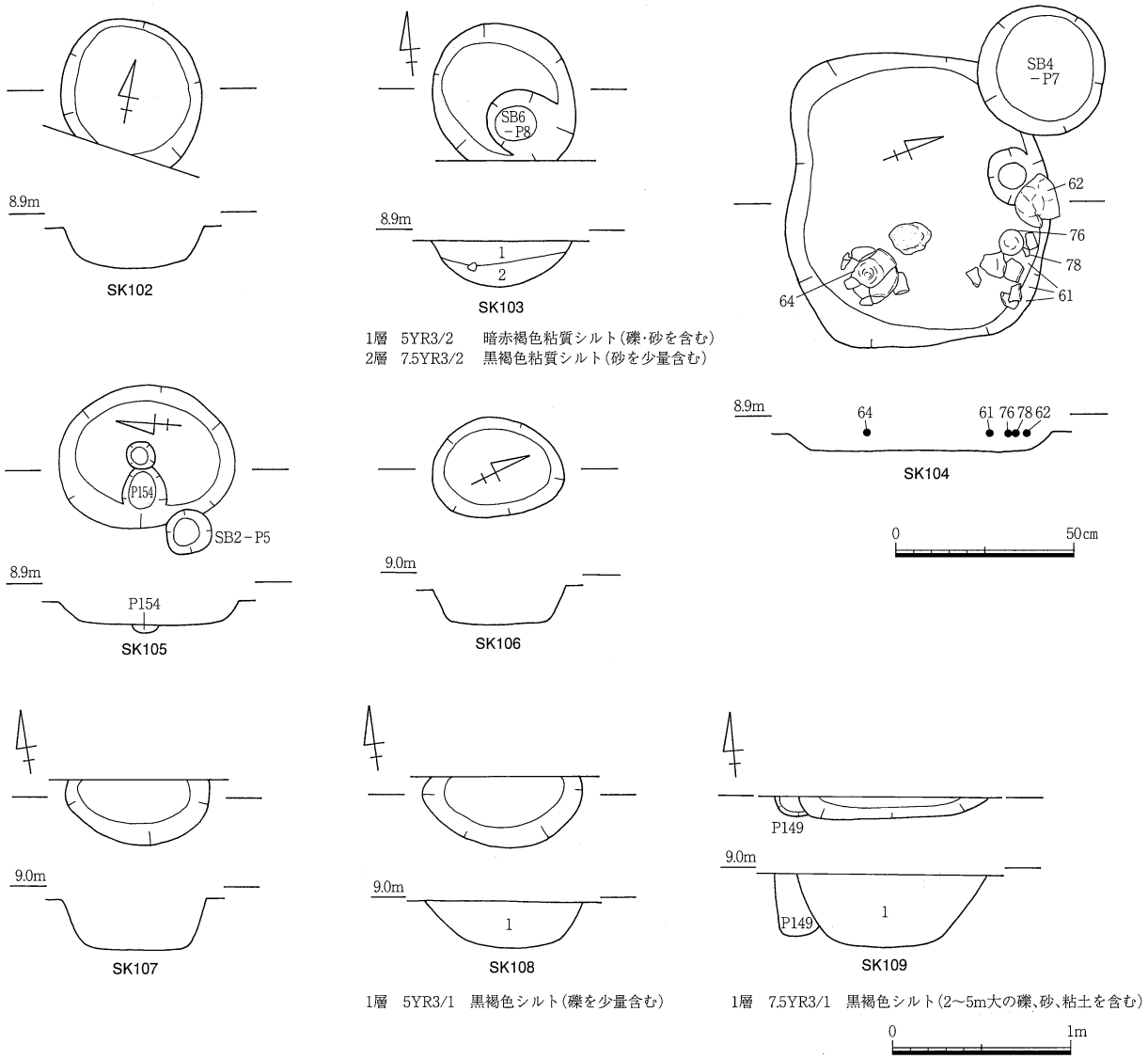


Fig.17　SK102～109

SK107（Fig.17）

Ⅰ区の北西端に位置する。北半分は調査区外に出ているため全体の形状は不明であるが、検出規模は径80cm、深さ28cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。出土遺物はない。

SK108（Fig.17）

Ⅰ区の北西部に位置する。北半分は調査区外に出ているが、長軸90cm、深さ26cmの楕円形土坑であったとみられる。埋土は黒褐色シルトである。遺物は埋土中より土師質土器細片4点が出土している。

SK109（Fig.17）

Ⅰ区の北端に位置する。北側の大部分が調査区外となるため全体の形状は不明であるが、検出規模は径108cm、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は埋土中より土師質土器細片10点が出土している。

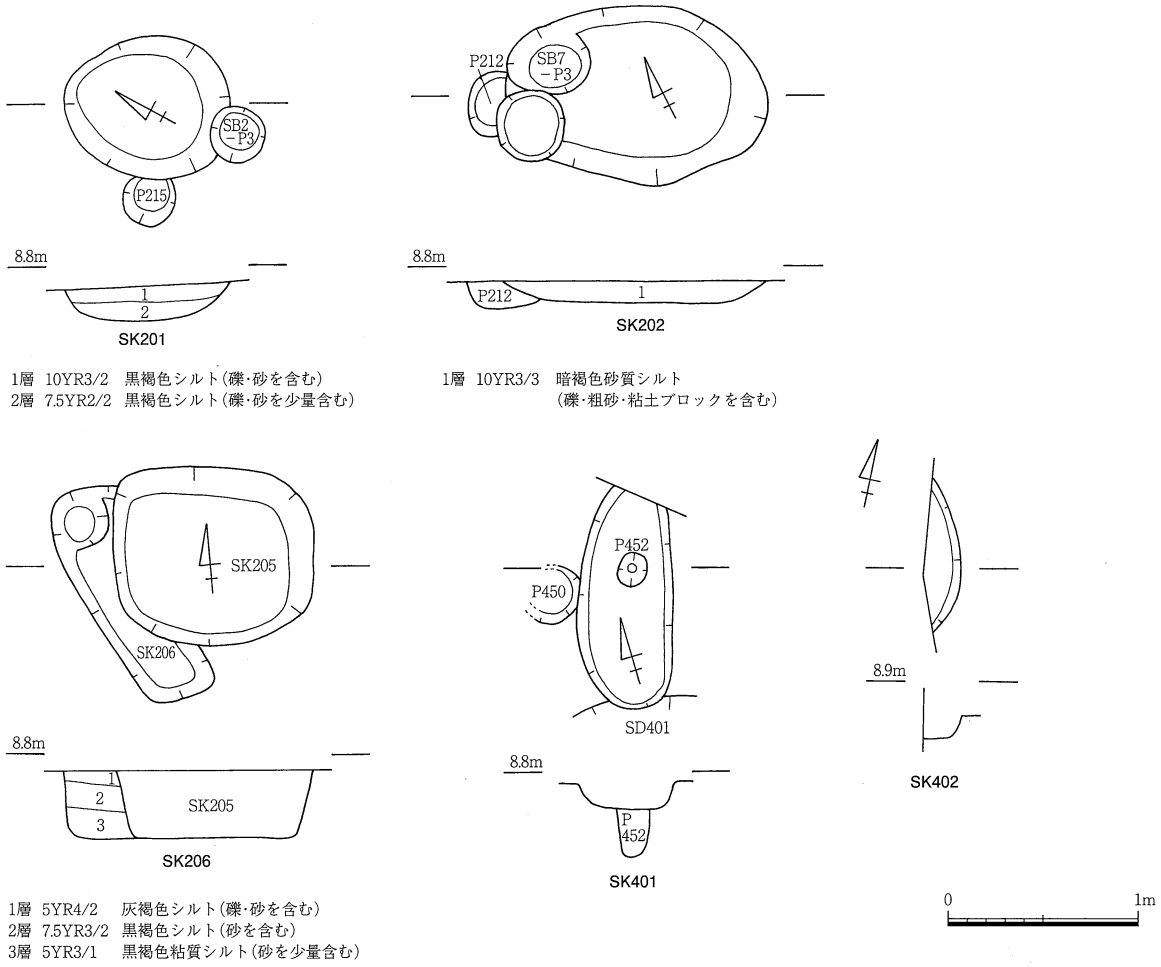


Fig.18 SK201・202・206・401・402

SK201（Fig.18・19）

Ⅱ区の西端に位置する土坑で、切り合い関係では、中世のP215を切り、中世のSB2－P3に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸82cm短軸66cm、深さ68cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

遺物は埋土中より土師質土器杯の口縁部6点と底部6点、小皿口縁部1点と底部2点、瓦器椀の体部1点が出土している。図示したものは、土師器杯または皿の底部（69）である。

SK202（Fig.18・19）

Ⅱ区の西端に位置する土坑で、中世のP212、SB7－P3を切り、P264に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸140cm短軸96cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトである。

遺物は埋土中より土師器杯の底部5点と杯又は皿の口縁部、瓦質土器羽釜が出土している。図示したものは、瓦質土器羽釜（80）である。80は貼付による断面三角形の鍔部をもつもので、13世紀後半～14世紀に比定される。体部内面ナデ、鍔部上下にはユビオサエとヨコナデを施す。

SK206（Fig.18・19）

Ⅱ区に位置する土坑で、SK205に切られる。平面形は長楕円形を呈し、長軸124cm短軸40cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色シルト、黒褐色粘質シルトで、埋土中に礫、砂を少量含む。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀、青磁碗であり、口縁部点数にして杯6点、青磁碗1点、底部点数は杯24点、小皿2点が出土している。図示したものは土師質土器小皿（71）、青磁碗（79）である。79は龍泉窯系青磁碗（森田分類碗Ⅰ－2b類）で12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内面には片彫りによる草花文を描く。

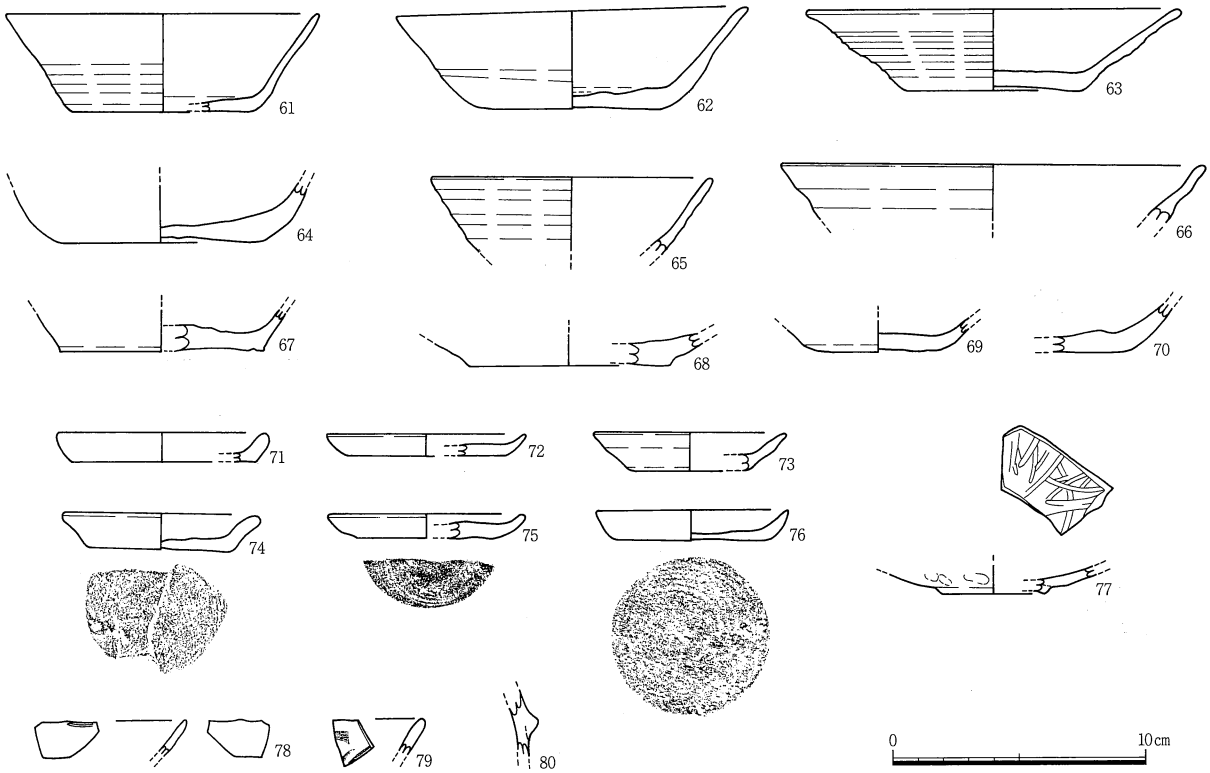


Fig.19　SK102～106・201・202・206出土遺物実測図
(SK102：68・74、SK103：67、SK104：61～64・72・73・75～78、SK105：65・70、SK106：66、SK201：69、SK202：80、SK206：71・79)

SK401 (Fig.18)

調査Ⅳ区に位置する土坑で、P450に切られ、SD401・P452を切っている。平面形は長楕円形を呈し、長軸の残存長110cm短軸50cm、深さ14cmを測る。埋土は上層が黒褐色シルト、黒褐色粘質シルトで、埋土中に礫と砂を少量含む。遺物は埋土中より土師質土器杯の底部4点口縁部1点が出土しているが何れも小片で、図示したものはない。

SK402 (Fig.18)

調査Ⅳ区の西端に位置する土坑である。西側部分が調査区外に出るため、全体の形状は不明であるが、南北の確認長80cm東西確認長20cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。遺物は土師質土器細片が出土しているが何れも小片であり、図示したものはない。

③ 溝・流路

SD201 (Fig.20・21～24・30)

Ⅱ区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－10°－Wであり、SR201の西岸に沿っている。本SDはSR201内にて検出されたもので、上面の一部を近世のSX1に切られている。東側部分の上面が大きく削平されているため、全体の規模は不明であるが、検出規模は幅2.3m、検出面からの深さは60cmを測る。検出長は5.5m。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色砂質シルトで、1～10cm大の礫を含む。また、埋土中には多量の土器片を含んでいる。

堆積状況をみると、SD201がSR201の最下層3層を切って掘り込まれており、SD201の上面にはSR201の1層・2層が堆積している。このためSD201は、P260他の中世ピット群が洪水堆積層であるSR201－3層によって埋没した後、それに後続して掘削されたものとみることができる。

出土遺物は土師質土器杯・小杯・椀・小皿・鉢、瓦器椀・皿、須恵器鉢・甕、瓦質土器鍋、陶器碗・甕、備前焼擂鉢、白磁碗、青磁碗、瓦である。出土点数は口縁部数にして杯又は椀406点、椀5点、小皿151点、瓦器椀18点、瓦器皿2点、古瀬戸天目碗3点、須恵器鉢1点、常滑焼甕3点、瓦質土器鍋1点、白磁碗1点、青磁碗1点。底部点数では、杯654点、輪高台椀7点、小皿191点、小杯1点、鉢2点、瓦器椀3点、瓦器皿1点、備前焼擂鉢3点、陶器甕1点、白磁碗2点である。

図示したものは土師質土器杯(81～101・103～105・110・112～114)、杯又は椀(102・106・107・109)、椀(108)小杯(111)、小皿(115～135)、鉢(136・137)、瓦器椀(138～147)、瓦器皿(148・149)、白磁碗(150・151)、青磁碗(152・153)、青白磁皿(154)、天目碗(155～158)、器種不明(159)、須恵器鉢(160・161)、陶器擂鉢(162～163)、陶器甕(165～169)、鍋(171～174)、土錘(175～177)、瓦(178・179・181)、及び古代遺物の混入とみられる土師質土器甕(170)、瓦(180)である。これらのうち、土師質土器甕(170)、備前擂鉢(162)は近世の攪乱を受けるSD201東部上面の掘込み内からの出土であり、混入の可能性をもつ。

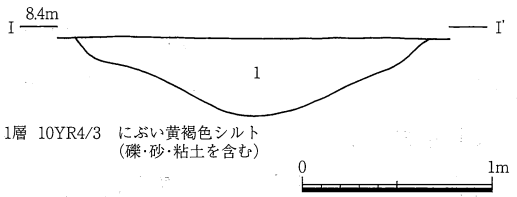


Fig.20 SD201

81～101・103～105・110・112～114は土師質土器杯である。83・85・86・88・89・92・95は体部が外上方へ短く伸びるもの、82・87・90・96は体部が外上方へ長く伸びるものである。81・84は底部から体部が直高気味に立ち上がった後口縁部に向かい外反するもので体部外面には多段の強いロクロ目が残る。113・114は大型のもので厚手の器壁をもつ。99・100・103～105・110・112は杯の底部である。103は外底回転糸切り、内底には細かい渦状のロクロ目が残る。体部外面に多段の強いロクロ目が残る。105は内底に細かい渦状のロクロ目が残る。110は柱状の底部をもつもの、112は外方に張り出す柱状の高台をもつものとみられる。

102・106・107・109は杯又は椀の底部である。107は薄い円盤状の底部から体部が外方へ開く。内底周縁は溝状、外底は回転糸切りである。109は回転糸切りの小さい底部から体部が外方へ開く。106は外底回転糸切り、内底中央にユビオサエとユビナデ、体部外面に多段の強いロクロ目が残る。108は椀の底部で外方へ張り出す円盤状の底部から体部が外方へ開く。外底は回転糸切りである。

115～135は土師質土器小皿である。何れも底部回転糸切りで、体部が外上方へ開く。119は小型の作りで、体部が外方へ強く開く。

136・137は土師質土器鉢で、外底に回転糸切り痕が残る。

138～147は瓦器椀で、いずれも13世紀頃に比定される。139・141・142は外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエとナデ、内面ナデ。器面への炭素吸着は良好である。胎土中には石英・長石・雲母を含む。147は口縁部外面ヨコナデ、体部外面ユビオサエとナデ、内面ナデ。内面の炭素は部分的に剥離するが外面への炭素吸着は良好である。胎土中には石英・長石・赤色系鉱物の粗砂を含む。144は外面ユビオサエとナデ、内底に連結輪状とみられる暗文が残る。高台の両側面には回転方向のナデを施す。内外面への炭素吸着は良好である。138は口縁部外面ヨコナデ、体部ユビオサエとナデ、内面上位に横方向のミガキ、下位に平行線状の暗文を施す。内外面の炭素は剥離している。胎土中には石英・長石・灰色系砂を含む。140は炭素の剥離が著しく、内面へのミガキは観察されない。胎土中に石英・長石・雲母・チャートを含む。143も炭素が著しく剥離している。外面のユビオサエは口縁部まで及び、内面へのミガキは観察されない。色調は灰色で胎土中には石英・長石・雲母・赤色風化粒を含む。145は外底ユビオサエ、内底へのミガキは観察されない。高台は断面逆台形を呈し、両側面にはユビオサエとナデを施す。酸化焼成気味でにぶい黄橙色を呈し、胎土中には石英・長石・チャートの粗砂を含む。器面の炭素は剥離する。146も器面の炭素が著しく剥離し、内底へのミガキは観察されない。

148・149は瓦器皿である。148は口縁部外面ヨコナデ、外底ユビオサエとナデ、内面にはナデとミガキを施す。炭素は著しく剥離する。149は口縁部外面横方向の強いユビナデ、外底にユビオサエとナデ、内面にはナデを施す。炭素吸着は良好である。

150・151は白磁碗である。150は口縁部を丸くおさめるもので、釉は灰白色を帯びる。151は白磁碗（森田分類碗Ⅴ類）で、12世紀に比定される。高台無釉で、釉は灰白色を帯びる。152・153は青磁碗である。153は龍泉窯系の青磁碗で、高台は断面逆台形を呈し、高台外面には粗いケズリ痕が残る。内底周縁には段をもうける。胎土は灰白色。外面下半は無釉で、釉は灰オリーブ色に発色する。152は同安窯系の青磁碗で、12世紀後半～13世紀前半に比定される。内面には櫛目、内底

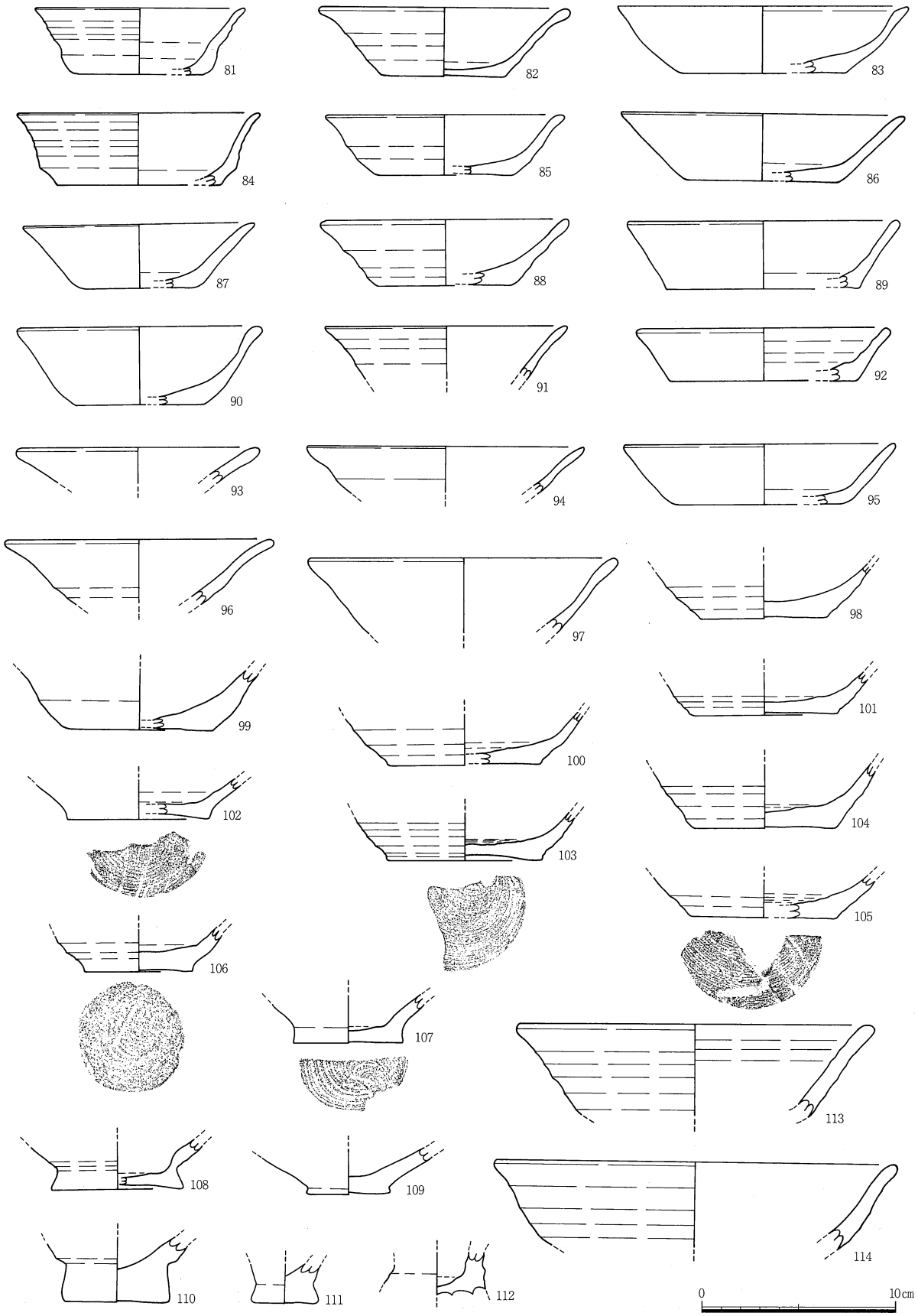


Fig.21　SD201出土遺物実測図（1）

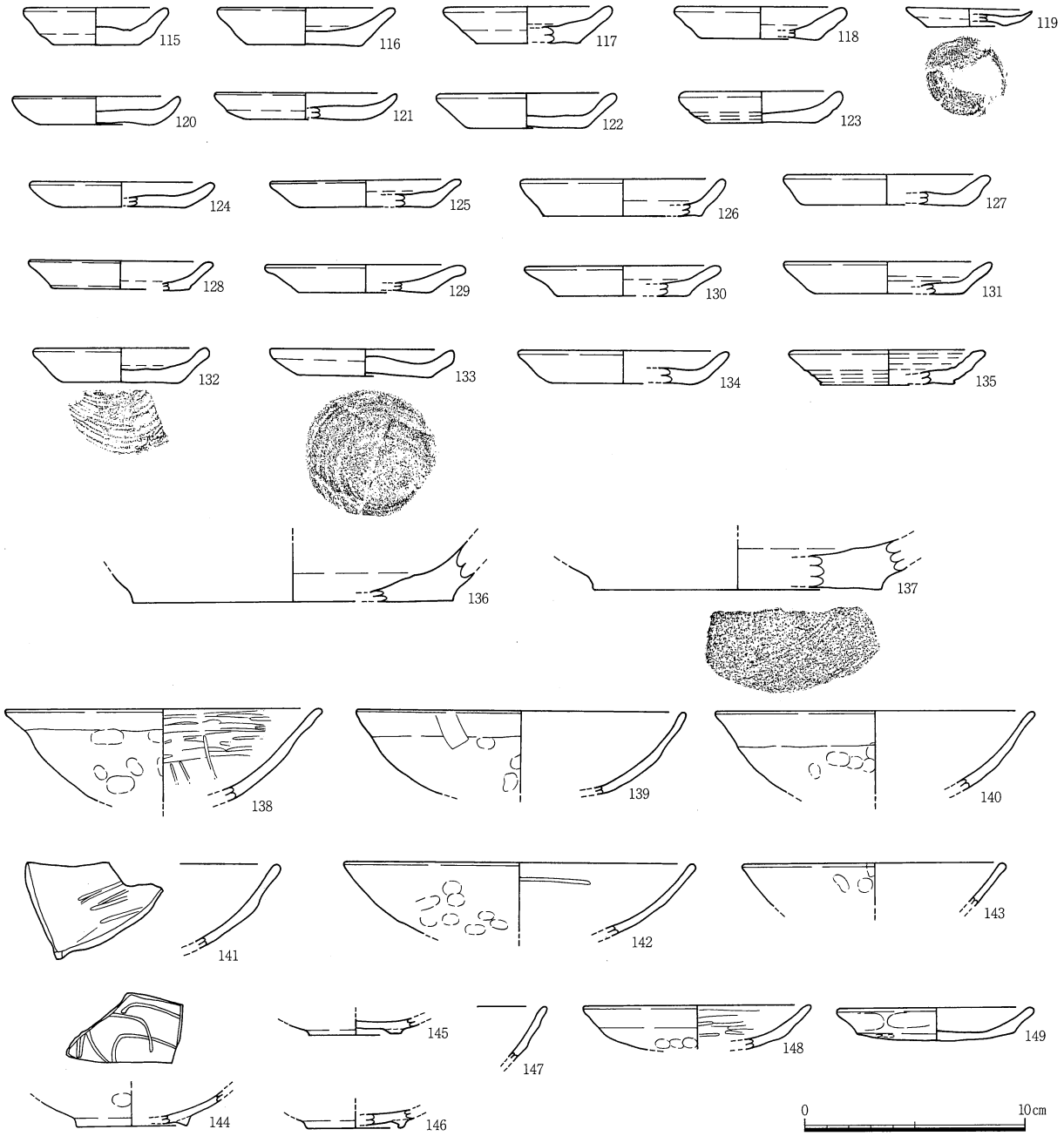


Fig.22　SD201出土遺物実測図（2）

には櫛状原体による文様を施す。胎土は灰白色で、釉は灰オリーブ色を帯びる。154は青白磁小皿で、中国産11世紀のもの。内面に細い櫛描き文様を描く。胎土は白色で、明青灰色を帯びる透明の釉を施釉する。155は中国産の天目碗で、建窯系13世紀後半～14世紀に比定される。ガラス質で黒色の天目釉を施釉し、外面下位の露体部には鉄錆を施す。胎土は黄灰色で黒色粒を含む。

156～158は瀬戸の天目碗である。156・158は釉が黒褐色に発色する。胎土は灰白色で円孔を多数認める。157は釉がにぶい褐色を呈し、露体部には鉄錆を施す。

159は器種不明。内外面回転ナデ、口縁端部は面取り強い回転ナデで凹状となる。内外面には黄灰色を帯びる透明の灰釉が刷毛塗りされる。胎土は灰白色で、石英・長石の細砂と黒色粒を含む。

160・161は須恵器鉢である。160は内外面回転ナデ、口縁端部は面取る。外面は灰白色を呈する。底部（161）は外面下半ヨコナデ、内面ナデ。高台は断面逆台形を呈し、両側に回転ナデを施す。外面は灰白色に発色し、焼成は堅致である。

162～164は擂鉢である。163・164は備前焼（間壁編年Ⅲ期・乗岡編年中世2期）で、13世紀末～14世紀前半に比定される。163は外面ヨコナデ、内面ナデと摺目。還元焼成で、外面が黄灰色、内面が灰色に発色する。164は体部外面にユビオサエとヨコナデ、底部付近には斜方向のナデ、内面には強いロクロ目と摺目が残る。還元焼成で、外面が灰褐色、内面が灰色に発色する。162は酸化焼成で、内外面がにぶい赤褐色に発色する。14世紀後半以降のものとみられる。

165～169は陶器甕である。165は常滑焼（赤羽・中野編年3～4型式）12世紀第4四半期から13世紀第1四半期に比定される。口縁端部は内面に稜をなして上方にはね上げる。外面には灰オリーブ色の自然釉がかかり、内面はにぶい赤褐色に発色する。断面は灰色で、胎土中に石英・長石・黒色の鉱物粒を含む。166は165と同一個体の可能性をもつ。外面底部付近にはユビオサエとタテハケ、内面は横方向のイタナデ、外底には粗砂が多量に付着する。外面は赤褐色で、部分的に自然釉がかかりオリーブ灰色に発色する。内底にも淡緑色の自然釉が流れる。167～169も常滑焼で165と同時期頃のものとみられる。168は内面に稜をなして口縁端部を上方にはね上げる。169は体部片で、168と同一個体になるとみられる。外面には格子状のタタキ目が配される。内面は横方向のイタナデ。内面に粘土帯接合痕が明瞭に残り、接合部には横方向の強いユビナデが施される。167は器壁が幾分薄い。内外面にぶい赤褐色で、口縁部内面に灰オリーブ色の自然釉が掛かる。

170は古代の土師質土器甕である。口縁部外面ヨコハケ、内面ナデ、端部は強いナデにより凹状となる。

171～174は瓦質土器羽釜である。171は上位に断面三角形の鍔を貼付する。脚部（174）は端部を丸くおさめ先端は外方に折り曲げる。外面にユビオサエとナデを施す。外面は灰色に発色し、胎土中には石英・長石・雲母・チャートの粗砂を多量に含む。173は比熱しにぶい橙色に発色する。172は断面が灰色、外面は黒色を呈する。

175～177は土錘である。175は全長4.8cm、全幅2.2cmの大型品、176・177は全幅1.0cm前後の小型品である。何れも外面ナデ調整、胎土中には石英・長石・チャート・灰色系鉱物の粗砂を含む。

178～181は瓦である。平瓦（181）は外面ナデ、内面には布目を残す。胎土は灰色で、石英・長石・チャートの粗砂を含む。178は外面ナデ、内面布目、外面には自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、焼成は堅致である。179は丸瓦で、外面イタナデ、内面布目、内外面は灰色に発色する。焼成は良好である。180は平瓦で古代の混入品の可能性をもつ。外面に格子状のタタキ目、内面に布目を残す。内外面は灰色を呈し、胎土中に石英・長石の粗砂と長石角礫を含む。

搬入遺物の年代等からみて、SD201は13世紀～14世紀を主な機能時期とし、14世紀には遺構廃絶したとみられる。

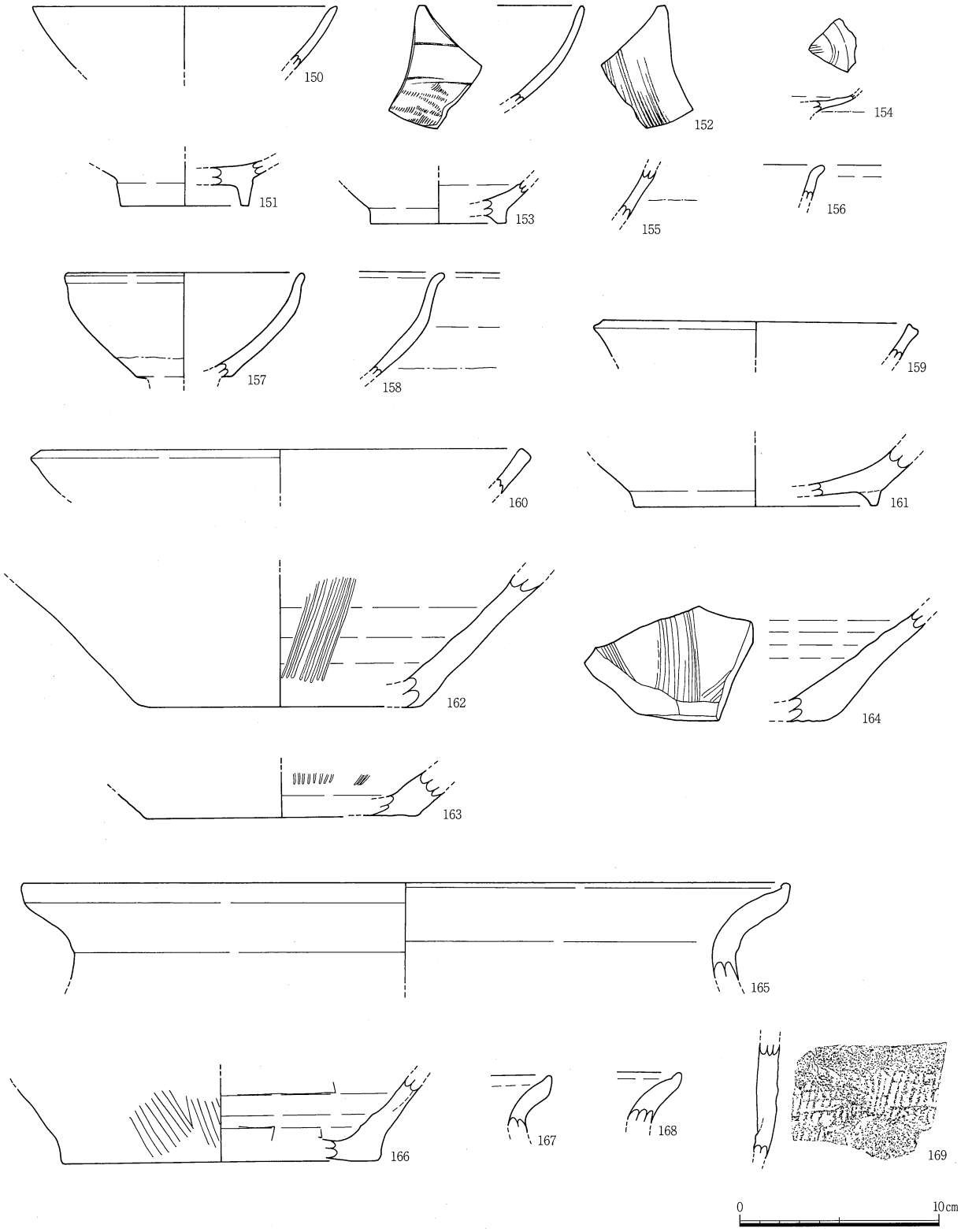


Fig.23　SD201出土遺物実測図 (3)

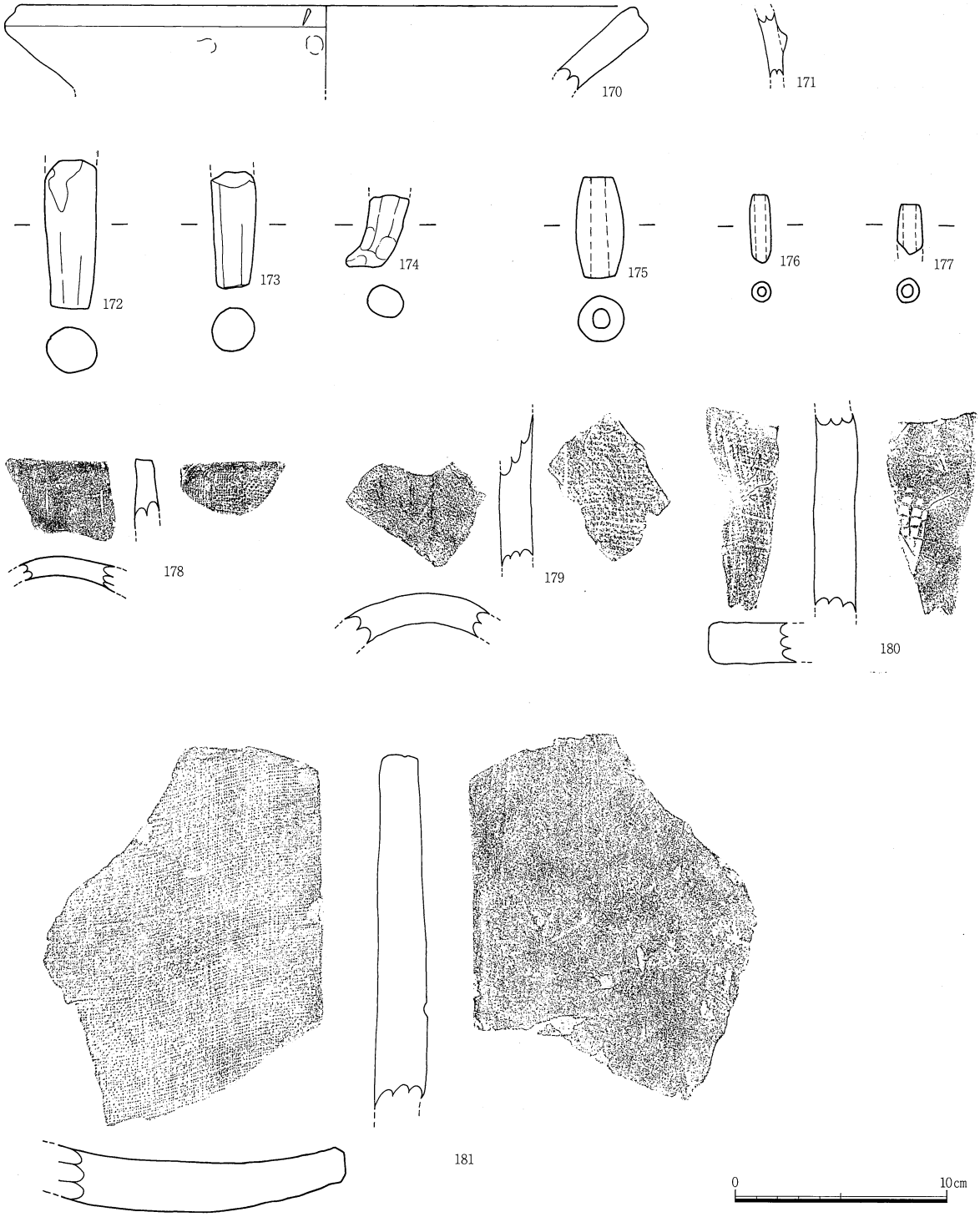


Fig.24　SD201 出土遺物実測図 (4)

SD401（Fig.25・26～29）

Ⅳ区の北端部を東西方向に延びる溝で、軸方向はN－90°－Wである。切り合い関係では中世のSK401、P510に切られ、SB16のP1を切っている。西側部分が調査区外に出ているため、全体の規模は不明であるが、検出長は6m、幅1.66～2.00m、検出面からの深さは58～60cmを測る。断面形態はU字状を呈する。埋土は1・2層が黒褐色シルト、3～6層が黒褐色粘質シルトであり、埋土中には礫と砂を少量含む。

出土遺物は土師質土器杯・小杯・碗・小皿・鉢、瓦器椀、須恵器鉢・甕、土師質土器羽釜、瓦質土器羽釜、白磁碗、青磁碗、陶器甕、瓦である。出土点数は口縁部数にして、土師質土器杯209点、小皿173点、瓦器椀3点、須恵器鉢3点、瓦質土器羽釜3点、青磁碗2点、青磁皿1点、白磁碗5点、底部点数は土師質土器杯511点、小杯1点、小皿161点、椀2、鉢1点、瓦器椀2点、白磁碗2点、青磁碗1点である。また、古代遺物の混入とみられる須恵器杯・蓋・壷、土師器杯・皿・甕、土師質土器羽釜、製塩土器も出土している。これらの遺物は上層から下層にかけて出土するが、特に最上層にあたる1層からの出土量が多い。

図示したものは土師質土器杯（182～208・210）、杯又は椀（211・212）、小杯（213）、椀（209・214）、小皿（215～231）、瓦器椀（232～234）、青磁碗（235～240）、青磁皿（241）、白磁碗（242～247）、須恵器鉢（248～250）、須恵器甕（251）、瓦質土器羽釜（254～260）、土錘（253）、瓦（252）、古代遺物の混入とみられる261～270である。これらのうち、下層出土の遺物は183・184・187・190・191・194・203・205・211・212・214・218・219・227・228・230・232・233・237・238・254・258・

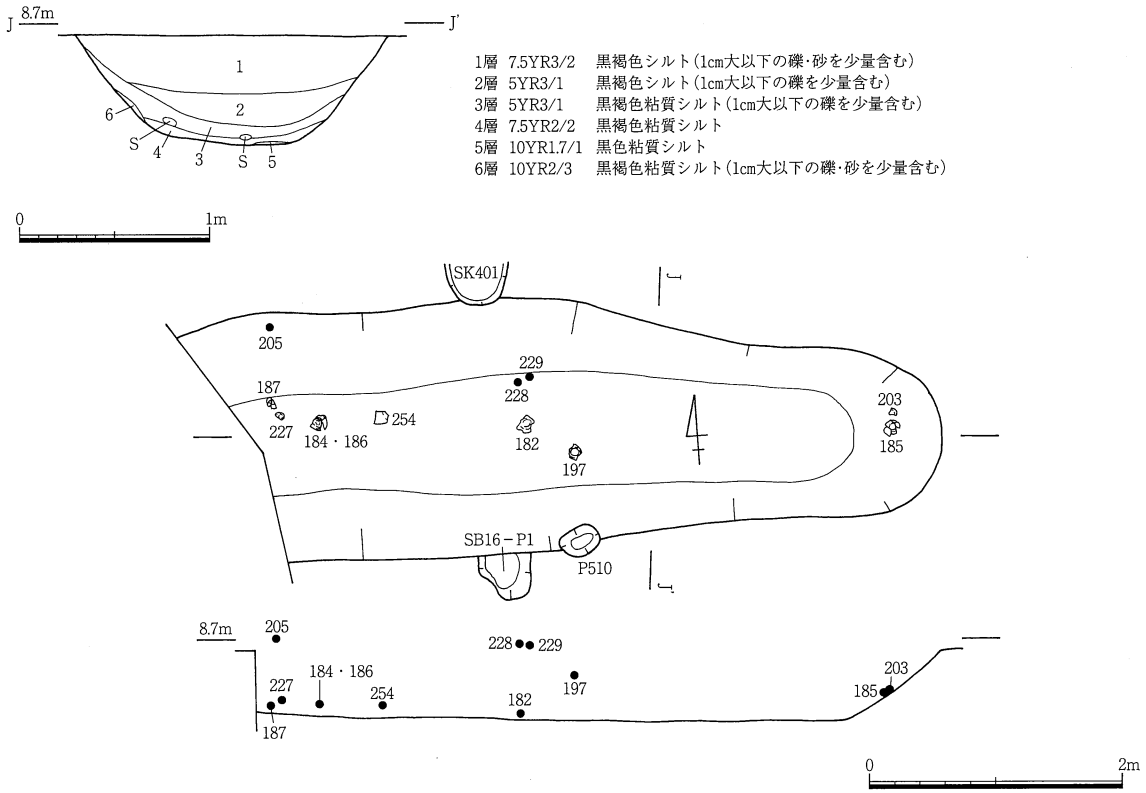


Fig.25　SD401

259である。また床面からは完形に近い形状を保って杯（182・185・186・197）、小皿（229）が出土している。

182～208・210は杯である。183・184・189・190は体部が外上方へ短く伸びるものである。185・187・188は体部が外上方へ長く伸びるものである。182・186・202・205・207・208は底部から体部が内湾あるいは直高気味に立ち上がった後外上方へ伸びるもので、体部外面には多段の強いロクロ目が残る。また205は内底隅の四方に強いユビナデが残る。206・210は外方に張り出す円盤状の底部をもつものである。213は柱状高台をもつ小杯の底部とみられるもので、焼成は軟質である。

211・212は杯又は椀の底部で、212は外方に張り出す円盤状の底部をもつ。

209・214は土師質土器椀である。214は平坦な高台をもつもので、底部は外方に僅かに張り出す。209は円盤状の底部から体部が外方へ開くもので、外底は回転糸切りである。

215～231は小皿である。何れも体部が外上方へ開くもので、228～231では内底回転ナデの後、中央にユビオサエまたは強いユビナデを施す。

232～234は瓦器椀である。233は内底にミガキ、内外面は灰色に発色し炭素吸着は良好である。232は口縁部外面に不定方向のナデ、体部外面にユビオサエとナデ、内面にはヨコナデを施しミガキは観察されない。器壁は厚手で、内外面灰白色に発色し、炭素は剥離している。234もミガキは認められず、内外面灰白色で、炭素は剥離している。232・233は胎土中に石英・長石・灰色系鉱物の粗砂を含む。

235～240は青磁碗である。235は龍泉窯系青磁碗（森田分類碗Ⅰ－4a類）で、12世紀後半～13世紀前葉に比定される。内底に片彫りによる草花文を描き、釉はオリーブ色に発色する。高台施釉で、高台内には部分的に砂が付着する。238は龍泉窯系青磁碗（森田分類碗Ⅰ－5b類）で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面は鎬蓮弁文、釉は焼成不良気味でオリーブ褐色に発色する。237は龍泉窯系青磁碗（森田分類碗Ⅰ類か）の体部片で、内面に片彫りと櫛描きによる文様を描く。釉は灰オリーブ色に発色する。240は龍泉窯系青磁碗（森田分類碗Ⅲ－2類）の体部片で、13世紀後半～14世紀前半に比定される。外面は鎬蓮弁文、釉は淡青色に発色する。236は同安窯系青磁碗（森田分類碗Ⅰ－1b類）で12世紀後半～13世紀前半に比定される。外面に櫛目、内面上位に沈線、下位に櫛描きによる文様を描く。緑色を帯びる半透明の釉を施釉する。239も同安窯系青磁碗（森田分類碗Ⅰ－1b類）の体部片で、外面下位は無釉である。241は龍泉窯系の青磁皿で、底部付近を欠損するが、内底に劃花文を描くもの（森田分類皿Ⅰ類、12世紀後半～13世紀前半）とみられる。

242～247は白磁碗である。242～244・247は白磁碗（森田分類碗Ⅳ類）で、12世紀に比定される。242・244はともに口縁部外面に幅広で厚みのある玉縁を設ける。242は灰白色を帯びる半透明の釉、244はオリーブ灰色を帯びる透明の釉を施釉する。243は玉縁がやや薄く、釉は灰白色を帯びる。247は白磁碗の底部で、断面逆台形の低い高台をもつ。高台無釉で、胎土は荒く灰白色を帯びる。内底に沈線状の段をもつ。245は白磁碗（森田分類碗Ⅴ類）で12世紀に比定される。口縁端部は外反し、釉は灰白色を帯びる。246は白磁碗（森田分類碗Ⅷ類）で12世紀～13世紀初頭に比定される。内底の釉は蛇の目釉剥ぎし、外面下位は無釉である。

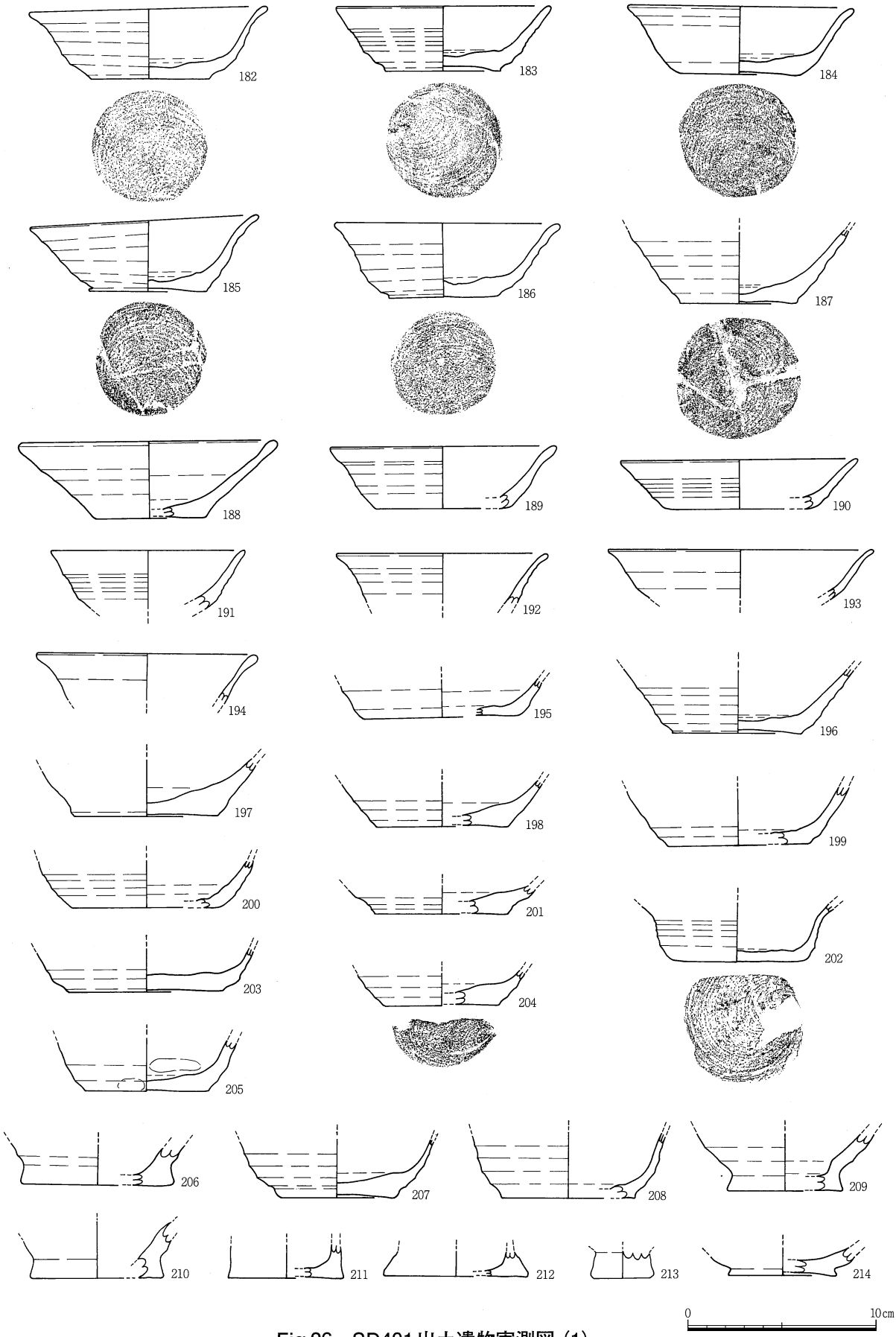


Fig.26　SD401出土遺物実測図（1）

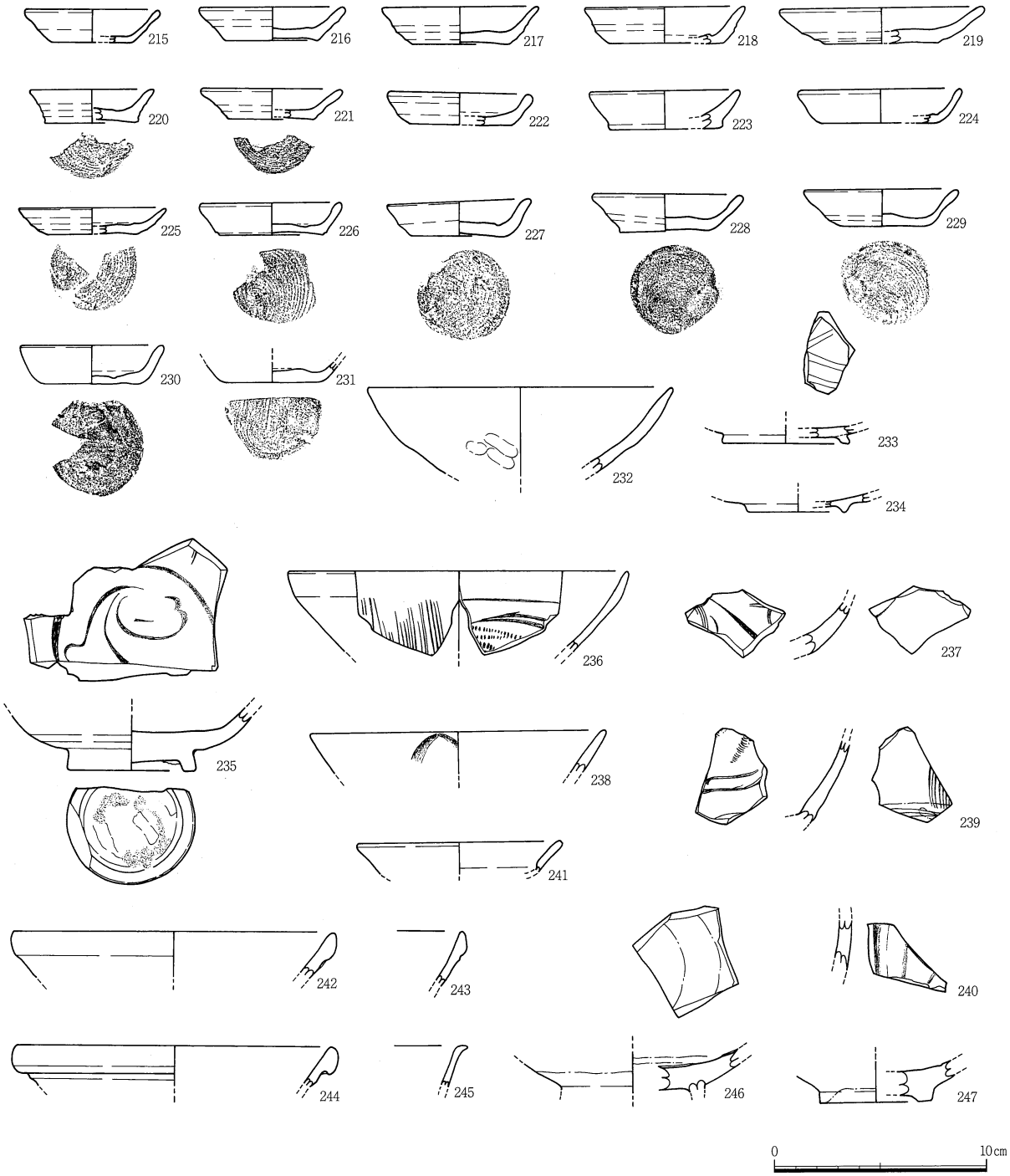


Fig.27　SD401 出土遺物実測図 (2)

248～250は須恵器鉢である。248は東播系捏鉢で13世紀に比定される。内外面回転ナデ。外面は褐色、内面は灰白色を呈する。249も東播系捏鉢で、体部外面ヨコナデ、内面は回転ナデでロクロ目が顕著に残る。250は内外面回転ナデで体部外面に緩やかなロクロ目が残る。口縁端部は回転ナデにより凹状を呈する。色調は灰白色で、胎土中には石英・長石の粗砂と黒色粒を多く含む。

251は須恵器甕である。外面には平行状のタタキを施した後、円形のタタキ目を配する。内面は横方向のイタナデを施す。胎土は灰白色で、胎土中に石英・長石の粗砂・細砂を含む。焼成は堅致であるが、器面は酸化焼成気味で褐灰色に発色する。

254～257・259・260は瓦質土器羽釜である。254は鍔部直下に脚が貼付されるもので、13世紀後半に比定される。口縁部内外面回転ナデ、体部外面はユビオサエとナデ、内面はヨコナデを施す。257は鍔部が接合部で剥離する。口縁部内外面回転ナデ、体部内面斜方向のナデで、口縁端部は回

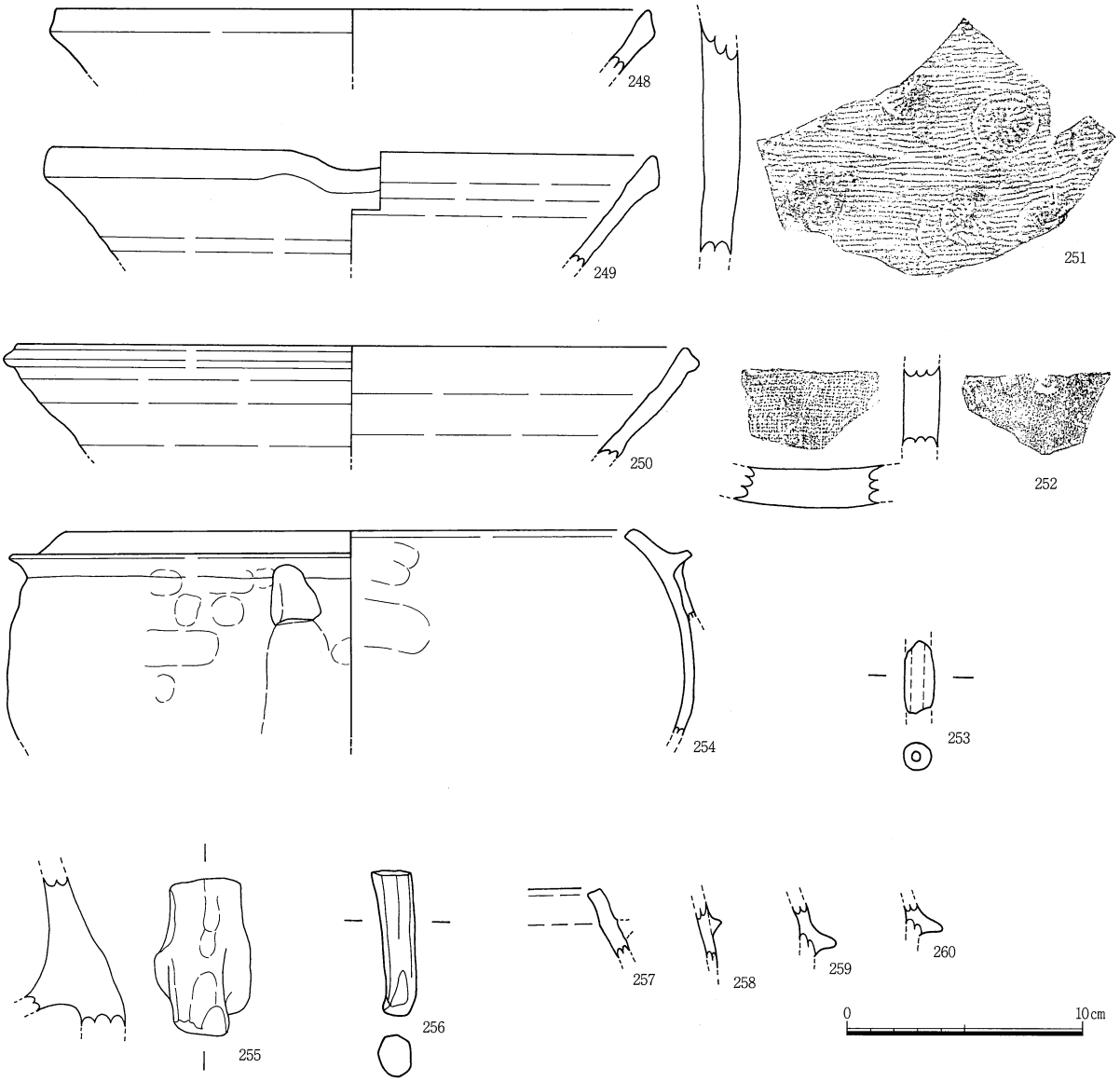


Fig.28　SD401出土遺物実測図（3）

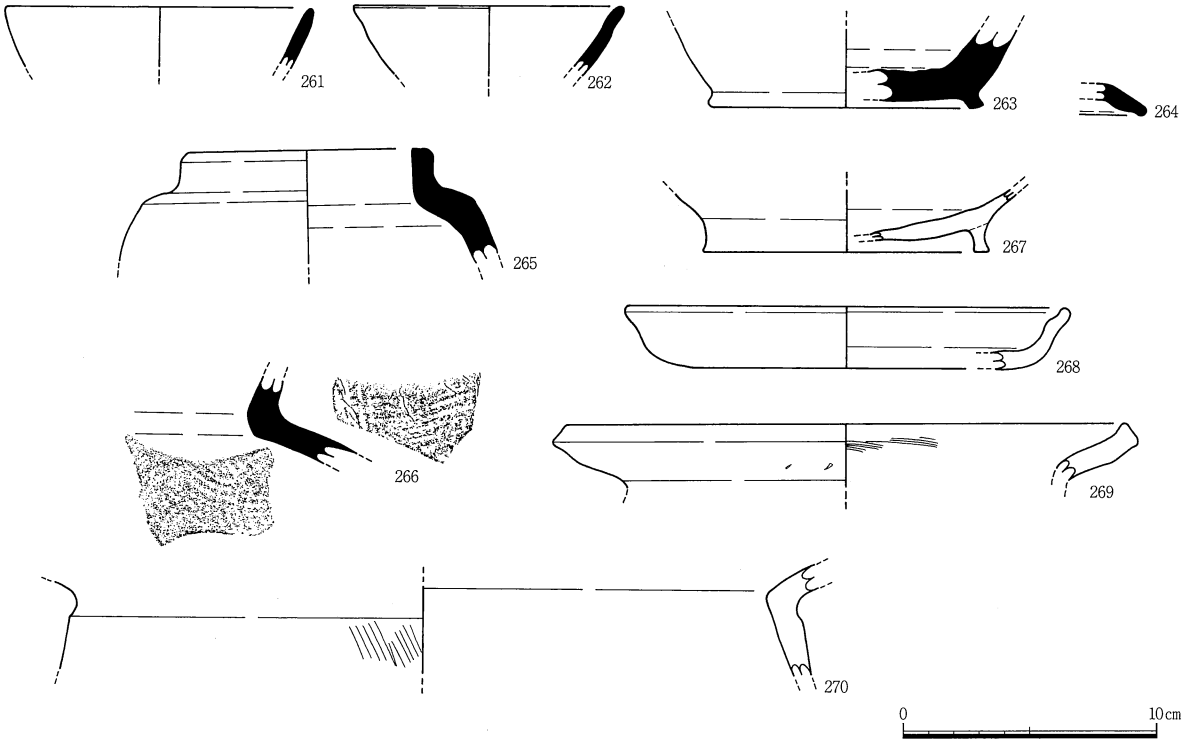


Fig.29　SD401出土遺物実測図（4）

転ナデにより面取る。259・260は断面三角形の鍔を貼付するもので13世紀後半～14世紀のものである。255・256は脚部で、外面にユビオサエとナデを施す。何れも胎土中に石英・長石と灰色系鉱物の粗砂を多量に含んでいる。258は土師質土器羽釜で、内外面ナデ。胎土中に灰色系鉱物の粗砂を多量に含み、外面は橙色に発色する。

253は土錘である。瓦（252）は外面にイタナデ、内面には布目痕を残す。内外面は灰色を呈し、焼成は硬質である。

この他、古代遺物の混入とみられる土師質土器杯（267）・皿（268）、須恵器杯（261～263）・蓋（264）・壷（265・266）、土師質土器甕（269・270）を図示している。

出土遺物の内容からみて、SD401の主たる機能時期は13世紀代で、13世紀後半～14世紀頃には廃絶に至ったものとみられる。

SR201（Fig.30・31～36）

Ⅱ区の東部を北西から南東方向に延びる流路跡で、東西幅20m、南北長6mを検出している。南方向では調査Ⅴ区の東部で同様の流路跡を検出しており同一流路の一部と考えられる。また西岸から約7mの地点では溝SD201が検出されており、SR201と同じ軸方向をもって北西から南東方向に延びている。切り合い関係をみると、SR201が中世のP260・P301～312の上面を切っている。また、SR201埋土3－1・3－2層をSD201が切り、SD201の上面をSR201埋土1・2層が覆っている。

SR201は西岸にテラス状の段をもちながら東へ緩やかに落ち込んでおり、流路西岸には約5m前後の幅をもつ平坦なテラス状の高まりが広がる。西岸テラスの東端はSD201によって切られており、流路床面はこれより東に向かってさらに緩やかに落ち込んでいる。各検出面の標高は、西岸検

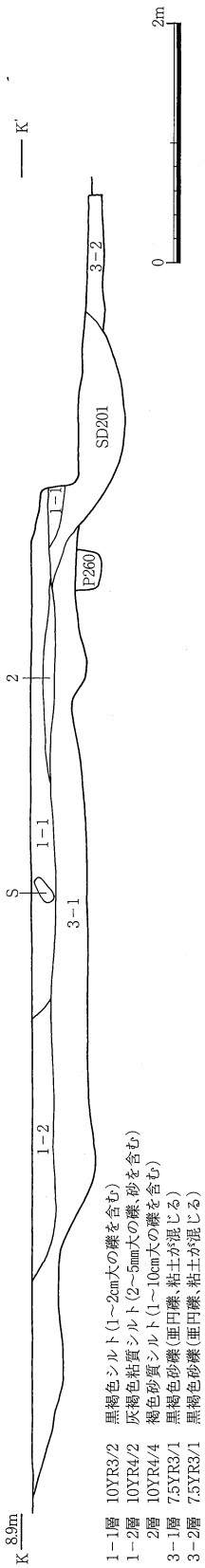


Fig.30　SR201・SD201

出面で標高8.85m、西岸テラス床面で標高8.32mである。またSD201以東の地点ではSR201に先行する中世ピット群（P301～312）が標高8.16～8.20mの間で検出されているため、東部の床面標高は8.2m前後であったとみられる。

埋土は1層が2mm～2cm大の礫と砂を含む黒褐色シルトと灰褐色粘質シルト、2層が1～10cm大の礫を含む褐色砂質シルト、3－1層が拳大から人頭大の円礫を多量に含む黒褐色砂礫、3－2層が黒褐色砂礫であり、このうち3－1・3－2層が洪水堆積層とみられる。また、後述する集石と廃棄遺物はこの3－1層内から検出されている。

各地点での検出状況をみると、西岸テラス上面では拳大から人頭大の円礫がまとまって出土しており、テラスに沿って集石が北西から南東方向に帯状に広がっている。また、集石間や集石下からは多くの遺物が出土しており、中には積み重ねて廃棄された状態のもの（土器集中1）や、完形の形状を保って出土するものもある。こうしたことから、SR201西岸テラス部へは人為的な土器・円礫の一括廃棄が行われていた可能性が考えられる。また遺物・円礫の出土状況、堆積状況、及び周辺遺構との切り合い関係からみて、SR201は東方の流路本流の氾濫等によって形成されたものであり、その氾濫の際P260・P301～312等の中世遺構が洪水堆積層3－1・3－2層によって埋没したものとみられる。SR201形成後は、西岸テラス部上面への遺物廃棄や大型円礫の集中廃棄、SD201の掘削が行われ、その後、埋土1・2層によってSD201とSR201は最終的に埋没したものとみられる。

出土遺物は土師質土器杯・椀・小皿・鉢、瓦器椀、須恵器鉢、青磁皿、白磁碗、白磁水注、須恵器壷・甕、陶器甕・擂鉢、瓦質土器鍋、土師質土器鍋、土錘、瓦、及び混入とみられる古代の須恵器杯・壷、製塩土器である。これらの遺物は各層より出土しているが、特に西岸テラス上面の1・2層と3－1層内からの出土量が多い。出土点数は口縁部数にして杯又は椀344点、小皿350点、鉢4点、瓦器椀14点、須恵器鉢3点、瓦質土器鍋・羽釜6点、土師質土器羽釜1点、陶器甕1点、青磁碗1点、青磁皿1点、白磁碗2点、白磁水注1点。底部点数では杯460点、椀4点、小皿135点、鉢3点、瓦器椀5点、備前焼甕1点で、このうち杯には円盤状の底部を有するもの11点が含まれている。

図示したものは土師質土器杯（271～273・294～297・342）、杯又は椀（299）、小杯（278・304・305・345）、椀（300～302・347）、小皿（274～279・306～318・343・344）、鉢（319～324）、瓦器椀（325～332・349・350）、須恵器鉢（280・281・346）、青磁皿（293）、白磁碗（333・348）、

白磁水注（292）、須恵器甕（334）、陶器甕（290・291）、瓦質土器鍋（285・286）、瓦質土器羽釜（287・288・335・336）、土師質土器羽釜（284・289）、土錘（282・283・339）、瓦（351・340・341）である。

このうち、上層（西岸端に堆積する3－1層上位、及び1・2層）より出土したものは271～293である。これらは流路西岸部にあたるB10グリッド地点から出土したもので、完形の土師質土器小皿（279）等、その多くが南北に広がる集石に沿ってその上面の堆積土中（3－1層）から出土している。ただし、上層として取り上げた遺物中には1・2層の出土遺物が含まれ、中世後期の遺物が一部混在している。

一方、中層（西岸テラス上の3－1層中位）より出土したものは298・300・303・305・306・308・309・312・313・320・325・327・330・331・334・335・339～341、下層（西岸テラス上の3－1層下位）より出土したものは294～297・299・301・302・304・307・310・311・314～319・321～324・326・328・329・332・333・336・342～351、及び古代遺物の混入とみられる337・338である。これらの遺物は西岸テラス上面の集石、土器集中とともに検出されたもので、中でも完形の土師器小皿（308）と須恵器甕の口縁部（334）、瓦器椀（329）は土器集中2に近接し集石側から、土師質土器杯（298）・小皿（312・318）、は土器集中1に近接し集石の上位から出土している。この他342～351は西岸テラス床直上の集石下側から出土したものである。なお、特に一括性の高い出土状況を示した土器集中1・2出土遺物については、後に別項を設け詳細を述べることとした。

271～273・294～298・303・342は土師質土器杯である。273・294・295・297は体部が外上方へ長く伸びるもの、303は円盤状の底部をもつものである。271・272・298は体部が直高あるいは内湾気味に立ち上がった後外上方へ伸びるもので、体部外面には多段の強いロクロ目が残る。272は内底周縁に段をもち、外底中央には棒状原体による底部をもつもの直線方向の圧痕が残る。杯又は椀の底部（299）は薄い円盤状の底部から体部が外方へ強く開く。焼成は軟質、内底には強い渦状のロクロ目が残る。

278・304・305・345は小杯で、304・305・345は円盤状の高台をもつ。何れも焼成は軟質である。

301・302・347は椀で、302・347は輪高台を貼付する。

274～277・279・306～318・343・344は小皿である。274・275・306は体部が直高気味に立ち上がるもの、231・276・277・279・307～318・343・344は体部が外方へ開くものである。277・306・312・314は内底回転ナデの後中央に直線方向の強いナデを施す。313・316は外底回転糸切りの後中央に板状原体による直線方向の圧痕が残る。

319～324は土師質土器鉢である。322は外底回転糸切り、内底には渦状のロクロ目と直線方向の強いナデを残す。319・323は外面が強く煤ける。

325～332・349・350は瓦器椀である。いずれも13世紀代に比定されるものであるが、ミガキや炭素吸着の状態には個体差がみられる。329は体部内面に回転方向のヘラミガキ、内底には平行状の暗文を残す。内外面とも炭素吸着は良好で、器面色調は暗灰色を呈する。349も口縁部外面にヨコナデ、体部外面はユビオサエとナデ、内面にはヘラミガキ、内外面の炭素吸着は良好である。一方、325～328は内外面の炭素は剥離し、器面は黄灰色～にぶい黄橙色を呈する。330は外底ユビオサエとナデ、内底ヘラナデで、内底へのミガキは観察されない。内外面の炭素は剥離している。331は

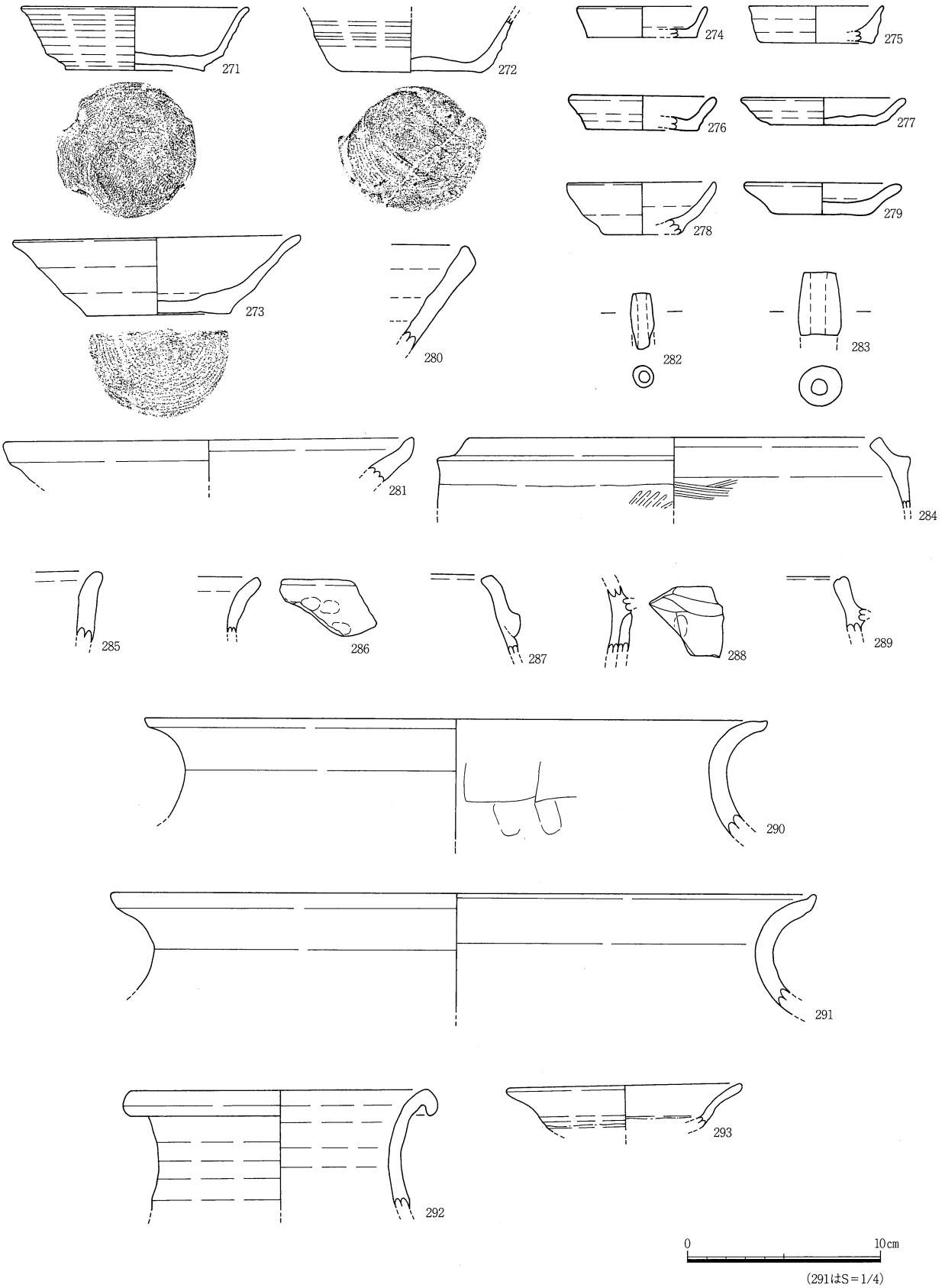


Fig.31　SR201 出土遺物実測図（上層）

外底ユビオサエとナデ、内底ナデとヘラミガキ。内外面の炭素は殆ど剥離している332・350は内底に平行状の暗文を残す。内面の炭素吸着は良好であるが、外面は剥離する。これらのうち、329・349では胎土中に石英・長石の粗砂を多量に含んでいる。一方、326・328・330・331は胎土中に石英・長石・チャートと赤色風化粒の粗砂、325・350は石英・長石・チャートの粗砂、327・332は石英・長石と灰色系鉱物の粗砂を少量含む。

280・281・346は須恵器鉢である。281は東播系の捏鉢で13世紀に比定される。内外面回転ナデ。色調は灰白色で、胎土中に石英・長石の粗砂と黒色粒を含む。346は体部外面回転ナデ、内面ヨコナデ、口縁端部には回転ナデを施す。内外面は灰白色に発色する。280は内外面回転ナデで、内面には強いロクロ目が残る。

293は龍泉窯系の青磁端反皿で15世紀に比定される。胎土は灰色、釉は明オリーブ灰色に発色し、内底と外面下位が無釉となる。内底付近を欠損するため文様の有無は不明である333・348は中国産の白磁碗（森田分類白磁碗Ⅳ類）で12世紀。348は断面四角形の高台をもち、高台と外面下半は無釉である。292は中国産の白磁水注で12～13世紀に比定される。胎土は灰白色で、釉は半透明で明緑灰色を帯びる。

290・291は陶器甕で、常滑産（赤羽・中野編年3～4型式）12世紀第4四半期から13世紀第1四半期に比定される。口径50cmで口縁端部は上方に跳ね上げる。胎土は灰色で、胎土中に石英・長石の粗砂を多く、黒色粒と長石礫を少量含む。外面には緑色～暗オリーブ色の自然釉が掛かる。334は須恵器甕で、口径60cm、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面ヨコナデ、体部は外面タタキ内面ヨコナデ、頸部内面に粘土帯接合痕が顕著に残る。口縁から肩部にかけて自然釉が掛かる。

287・288・335・336は瓦質土器の羽釜である。288は鍔部直下に脚が貼付されるもので13世紀後半に比定される。鍔部の先端を欠損するが、鍔部上下にユビオサエとヨコナデが施される。287・335は脚部の剥離痕跡をもち脚付羽釜とみられるもので、13世紀後半～14世紀に比定される。335は鍔部の上下にヨコナデ、体部外面はユビオサエとナデ、内面にはヨコハケを施す。胎土は灰色で、石英・長石・チャートの粗砂、灰色系円礫を含む。287は胎土灰色で、胎土中に石英・長石と灰色系鉱物の粗砂を含む。336は脚を伴わないもので、14世紀に比定される。口縁部外面ヨコナデ、体部外面はユビオサエとナデ、内面はヨコナデを施す。285・286は瓦質土器鍋である。外面にユビオサエとヨコナデ、内面にヨコナデを施す。284・289は播磨型の土師質土器羽釜で、15世紀に比定される。284は口縁部外面と鍔部の上下に回転ナデ、口縁部内面にヨコナデ、体部外面には斜方向の平行タタキ目、内面はヨコハケを施す。

282・283・339は土錘である。

340・341・351は瓦である。いずれも外面ナデ、内面布目で、焼成は硬質である。351は焼成が非常に堅致で内面と外面の一部に自然釉が掛かる。内外面は黄灰色に発色し、胎土中には石英・長石の粗砂と黒色粒を含む。340は灰色に発色し、胎土中に石英と灰色系鉱物の粗砂を含む。

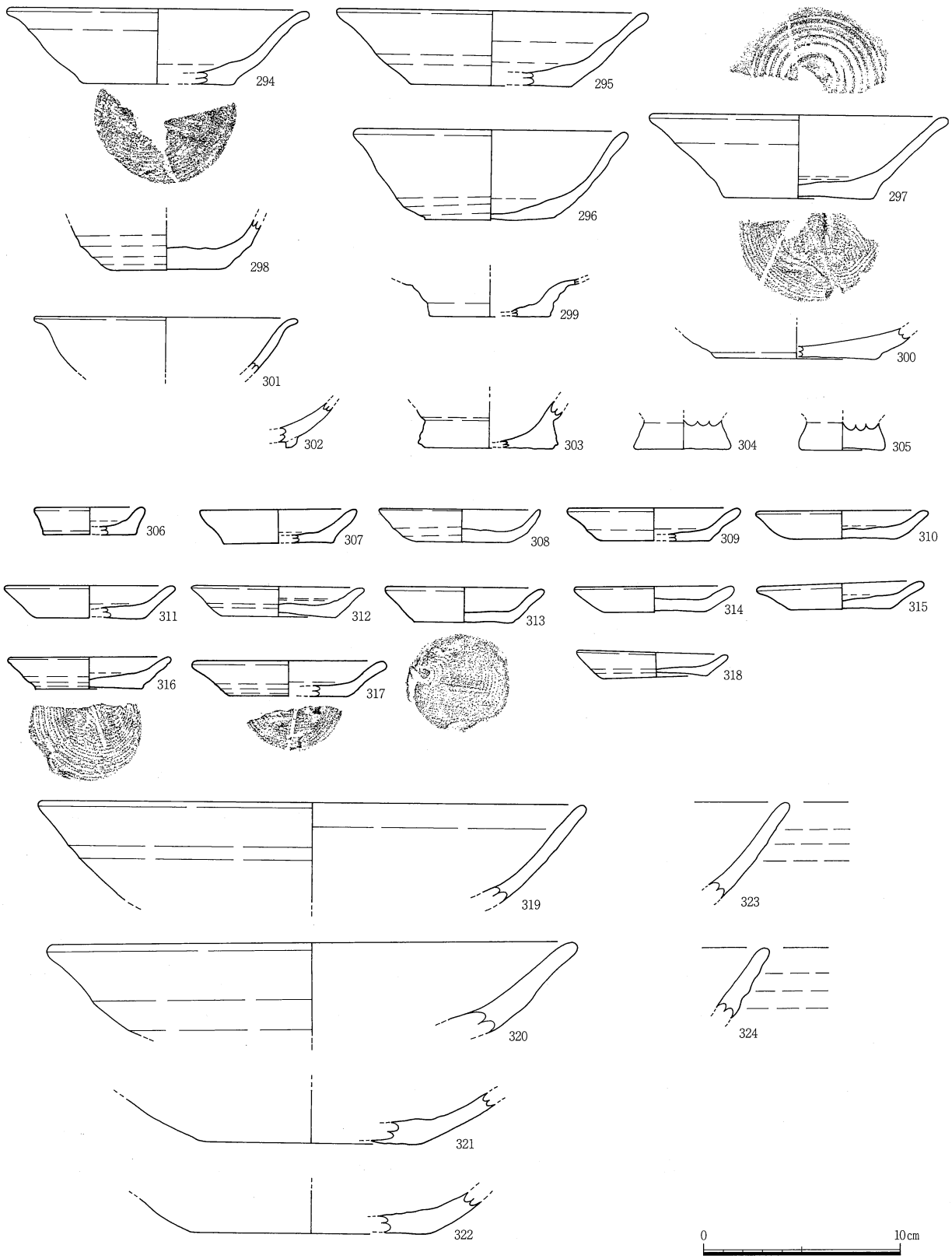


Fig.32　SR201 出土遺物実測図（中層・下層）

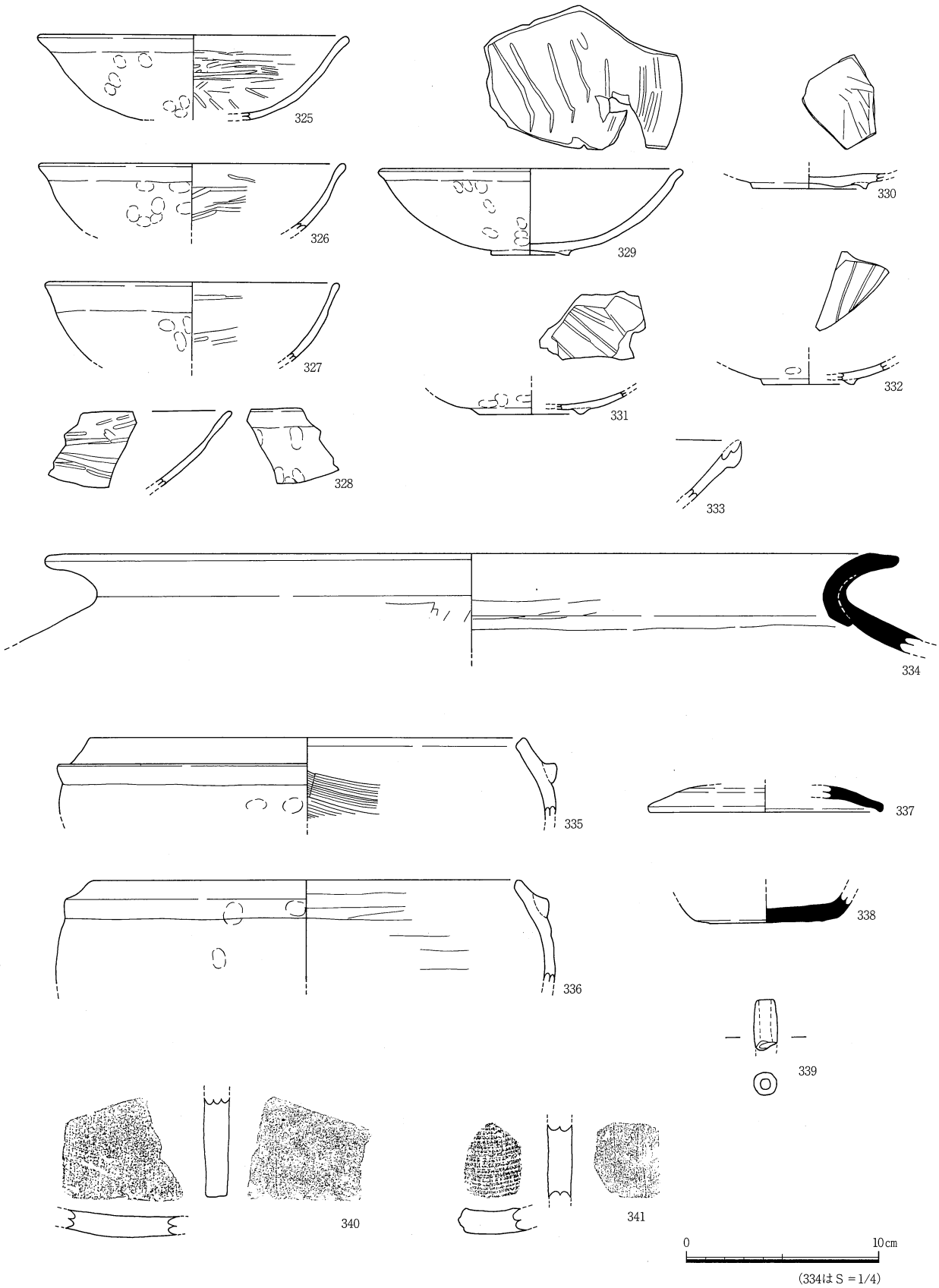


Fig.33　SR201出土遺物実測図（中層・下層）

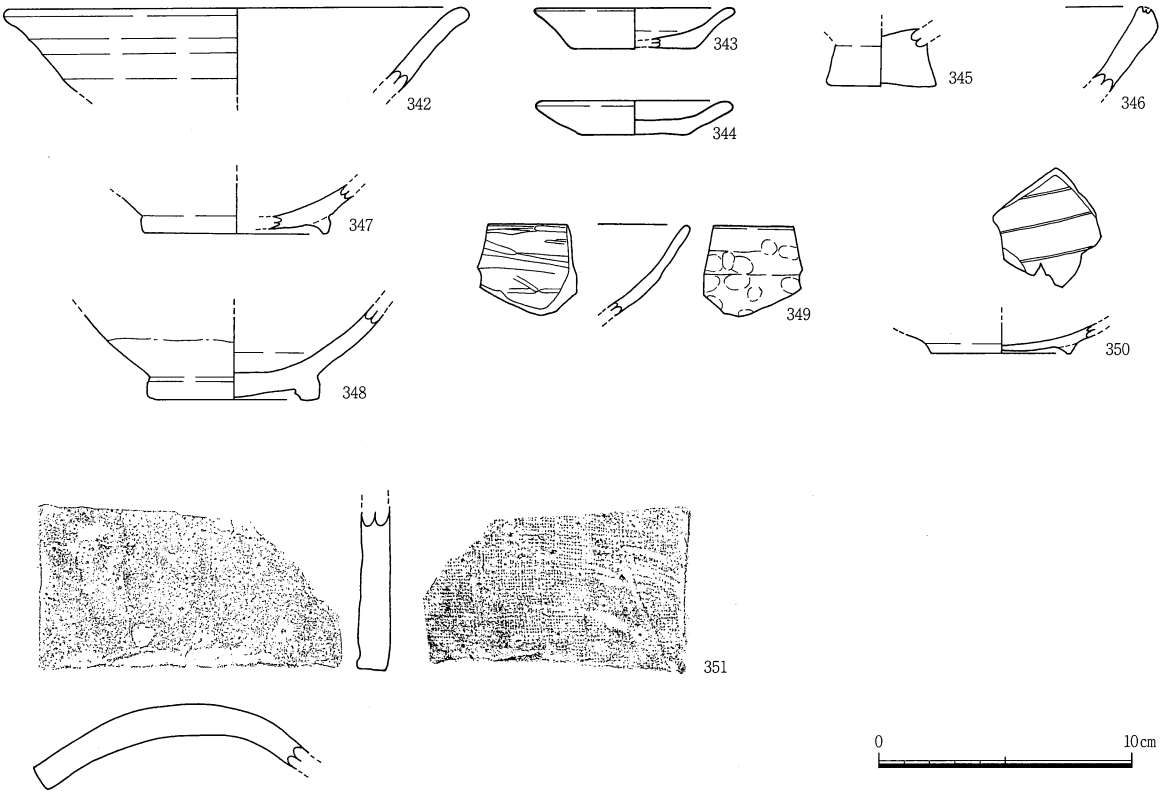


Fig.34　SR201　出土遺物実測図（集石下）

SR201では最上層埋土中に15世紀代の遺物が一部含まれるものの、13世紀から14世紀にかけての遺物が主体を占める。こうしたことからその時期は13世紀～14世紀代におくことができ、最終的な埋没年代は15世紀頃と捉えられよう。

SR201－土器集中1（Fig.35）

SR201の西岸テラス上面にて検出された土器集中である。検出レベルは標高8.35mで、SR201埋土3－1層の最下層、テラス床面の直上にあたる。このテラス上面には大型礫が南北へ帯状に廃棄された集石があり、土器集中1は集石の東側に近接して検出されたものである。土器集中1では、完形の土師質土器杯3点が重ねられた状態を保って出土しており、やや大型の杯357の上に中型の355とやや小型の353が重ねられている。またその脇からは小皿（358～360）、杯（352・354・356）が出土している。こうした出土状況からみて、テラス床面への意図的な土器廃棄が行われた可能性がある。

352～357は杯である。355は底部回転糸切りで、外面に緩やかなロクロ目、内底に細かな渦状のロクロ目を残す。外面の一部には煤が付着している。357は口径18.4cmとやや大振りで、厚手の器壁をもつ。外面全体に煤が強く付着している。356は外底回転糸切り、内底には乱れの強いナデが施される。352は内底に乱れの強いロクロ目、外底には回転糸切りの後中央に細い板状原体による直線方向の圧痕が残る。体部内面と口縁端部内面の一部に強い煤が付着する。358～360は小皿である。359・360は内底回転ナデ、358は内底中央に直線方向の強いナデを施す。

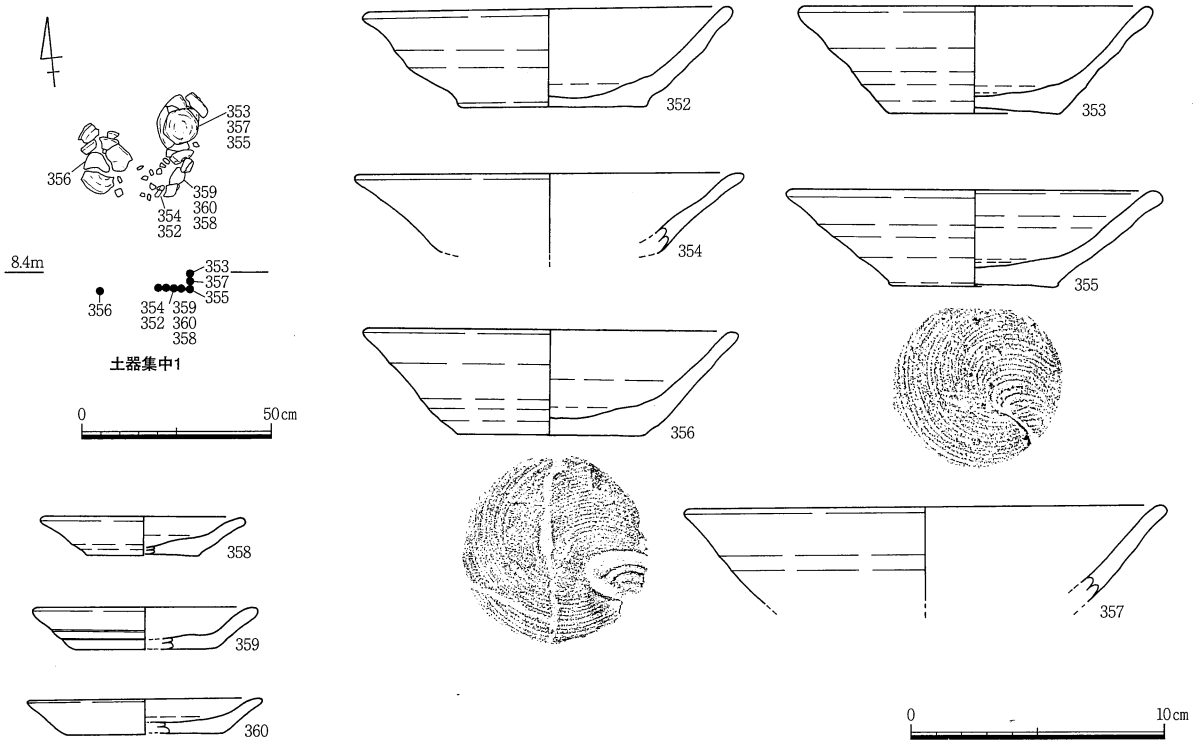


Fig.35　SR201－土器集中1出土状況図・出土遺物実測図

SR201－土器集中2 (Fig.36)

SR201の西岸テラス上面、3－1層の上～中層にて検出された土器集中であり、テラス上で検出される集石内から土器片がまとまって出土したものである。検出レベルは標高8.5～8.7mと高低差があり、テラス床面からは15～35cm程上方になる。土器集中2では、大型礫とともに土師質土器杯(361～371)、小皿(372)、瓦器椀(373)、鉢(375・376)、高杯(374)がまとまって出土しているが、先述の土器集中1の様に完形に近い土器を意図的に配置した様子はなく、土器片が礫とともに一括して投げ込まれた様相を呈している。

361～371は杯である。361は底部が不整円形を呈し、底部回転糸切りである。体部内外面にはヨコナデ、内底回転方向のナデを施す。365は内外面回転ナデ、外面に多段のロクロ目、内底中央に直線方向のナデを施す。362は内底周縁部に段をもつ。371は円盤状の底部を有するもので、外底回転糸切り、外面に強いロクロ目を残す。370も円盤状の底部を有するものである。

小皿372は厚手の器壁をもつもので、焼成は非常に軟質である。瓦器椀373は器面の炭素が著しく剥離し外面は灰白色を呈する。376は須恵器片口鉢で、内外面回転ナデ、口縁端部は回転ナデにより面取る。片口周辺にはユビオサエ痕が残る。胎土は灰黄色を呈し、胎土中に石英・長石の細砂と黒色粒を含む。土師質土器鉢375は大振りで、内底に緩やかな渦状のロクロ目を残す。高杯374は脚部外面に強いロクロ目を施す。

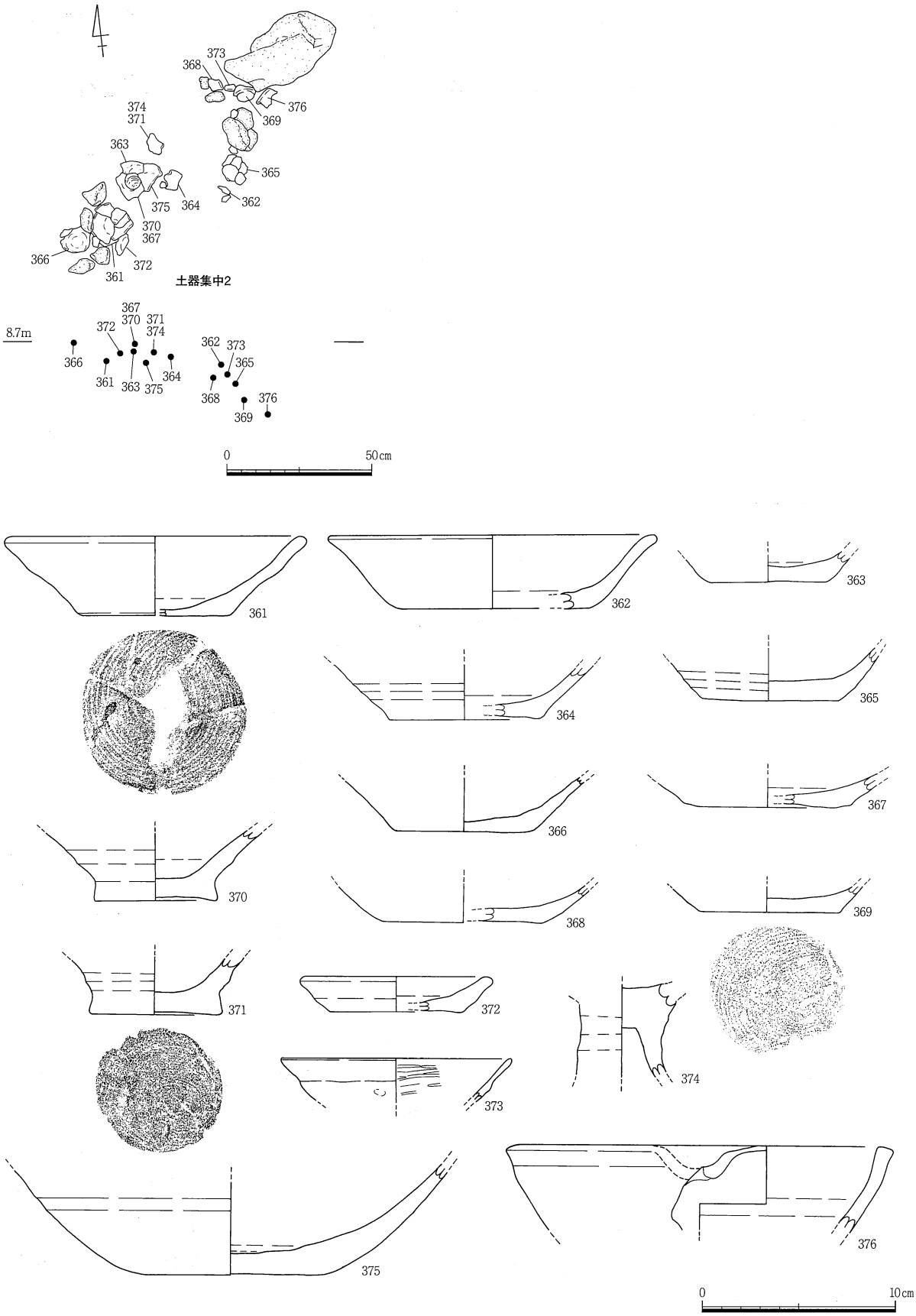


Fig.36　SR201－土器集中2出土状況図・出土遺物実測図

SR501（Fig.37）

Ⅴ区の東端部で検出された流路跡で、検出長は東西幅1.8m、南北長5mを確認している。北方向では調査Ⅱ区の東部で同様の堆積状況を示す流路跡SR201が検出されており、SR501は同一流路の西岸部にあたると思われる。検出面からの深さは36㎝で、床面の標高はおよそ8.2mとなる。埋土はにぶい黄褐色シルト、砂と礫を含む暗褐色シルト、褐色砂質シルト、暗褐色砂礫等を基調とし、シルト、砂質シルト、砂礫が互層堆積する。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、白磁皿、須恵器鉢・甕、陶器甕、瓦質土器羽釜、土師質土器羽釜である。出土点数は口縁部数にして、土師質土器杯5点、土師質土器小皿8点、白磁皿1点。底部は土師質土器杯21点、小皿13点である。このうち15世紀代に比定される播磨型鍋と備前焼甕は最上層よりの出土である。

図示したものは土師質土器小杯（377）、陶器擂鉢（378）、瓦質土器鍋（380）、須恵器鉢（379）で、このうち378～380は上層からの出土である。杯377は外方に張り出す高台をもつ。378は備前焼擂鉢（間壁編年ⅢB～ⅣA期、乗岡編年中世3期）で14世紀後半に比定される。酸化焼成で内外面は赤色に発色する。380は瓦質土器鍋で、14世紀。外面にユビオサエとナデを施す。379は須恵器鉢で13世紀末から14世紀に比定される。内底に放射状の櫛目を施し、外面はユビオサエとナデ、内面ナデ。外面には粘土帯接合痕が明瞭に残る。焼成はやや軟質で、灰色を呈する。

これらの遺物内容より、SR501の最終的な埋没年代は14世紀後半から15世紀とみられる。

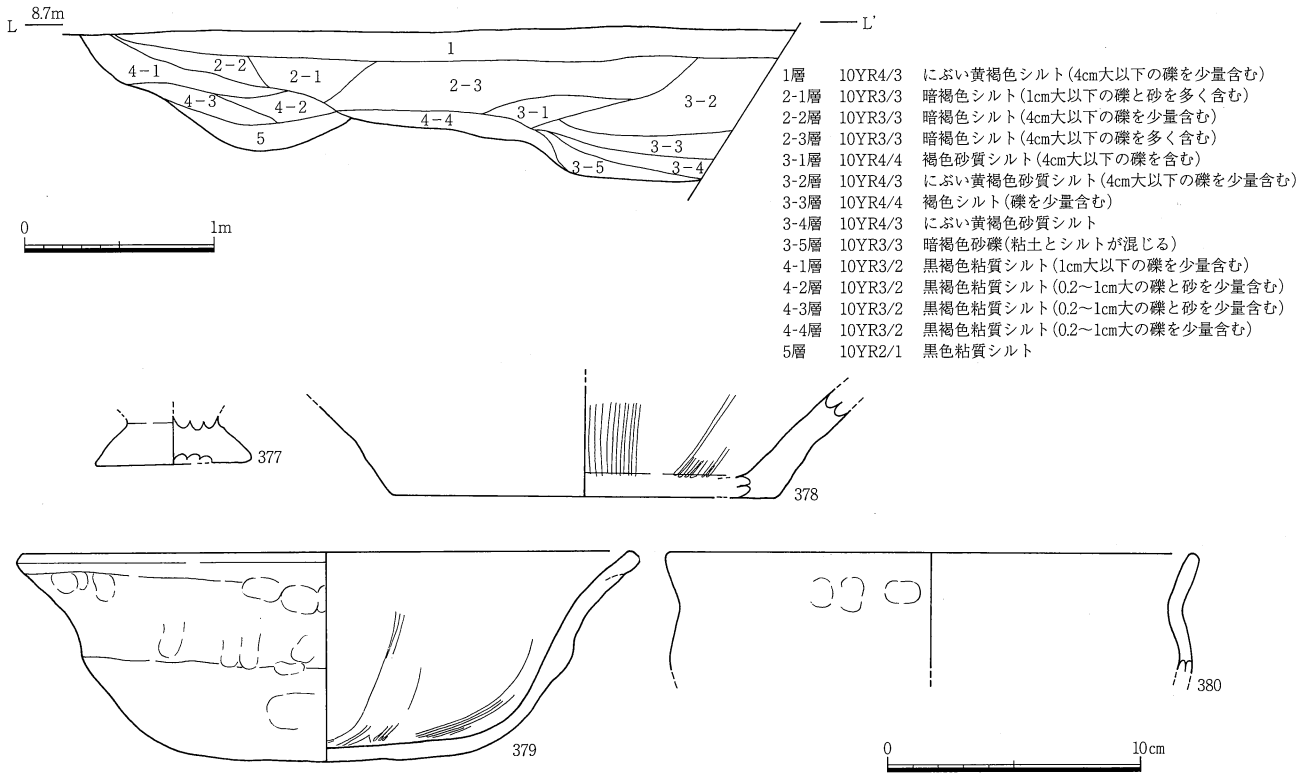


Fig.37　SR501セクション図・出土遺物実測図

④ ピット

中世の遺物を伴うピットはⅠ区で53基、Ⅱ区で61基、Ⅲ区で13基、Ⅳ区で72基、Ⅴ区で35基を確認している。調査Ⅰ区の東部からⅡ区西部及びⅣ区では数棟の掘立柱建物跡が確認されているが、ピット密度が非常に高く特定が困難なものもあったため、今回SBとして報告したもの以外にも柱穴の可能性をもつものがある。なお、Ⅱ区東端部で検出したP260とⅢ区検出のP301～P313基は上面を中世以降の洪水堆積層であるSR201によって切られ、SR201床面にて検出を行ったものである。そのため各区でのピット検出面はⅡ区で標高8.70m、P260で8.45m、Ⅲ区で8.20mとなっている。以下では特徴的な検出状況と出土遺物の得られたものについて詳細を述べる。

P110（Fig.38・39）

Ⅰ区の中央部に位置する。検出規模は径26cm深さ10cmを測り、埋土は黒褐色シルトである。埋土中からは土師質土器杯1点と椀1点、及び土師質土器細片が出土している。図示したものは土師質土器杯（381）、椀（382）である。

P123（Fig.38・39）

Ⅰ区の東部に位置し、SB5－P1を切っている。検出規模は50×36cm深さ28cmを測り、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土師質土器杯の底部2点、瓦器椀の底部1点、土師質土器細片40数点が出土している。図示したものは土師質土器杯（384・385）、小皿（389）である。

P125（Fig.38・39）

Ⅰ区の東部に位置する。検出規模は径20cm深さ14cmを測り、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土師質土器杯の底部2点、小皿の口縁部と底部1点、土師質土器細片が出土している。

図示したものは土師質土器杯（386）である。

P143（Fig.38・39）

Ⅰ区の東部に位置し、SB5－P2を切っている。検出規模は38×32cm深さ34cmを測り、埋土は黒褐色粘質シルトである。埋土中より土師質土器杯の底部1点と土師質土器細片が出土している。図示したものは土師質土器杯（387）である。

P216（Fig.38・39）

Ⅱ区の中央部に位置し、P217を切る。検出規模は50×32cm深さ40cmを測り、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土師質土器小皿の口縁部と底部1点、須恵器鉢（392）1点、土錘（394）1点、細片20数点が出土している。

P239（Fig.38・39）

Ⅱ区の北部に位置する。検出規模は径36cm深さ35cm、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土師質土器小皿の底部2点、細片10数点、瓦質土器鍋の体部1点が出土している。瓦質土器羽釜（393）は貼付による鍔を有するもので14～15世紀に比定される。口縁部内面に不定方向のナデ、外面鍔部の上下にはユビオサエとナデを施す。

P248（Fig.38・39）

Ⅱ区の北端部に位置する。検出規模は径36cm深さ22cm、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より完形の土師質土器小皿（388）、小皿の口縁部2点、細片30数点が出土している。

P257（Fig.38・39）

Ⅱ区の北端部に位置する。検出規模は径36cm深さ34cm、埋土は暗褐色シルトである。埋土中より銅銭（391）、小皿の口縁部3点底部1点、細片10数点が出土している。391は北宋銭で、政和通寶（初鋳年代1111年）である。

P260（Fig.38・39）

Ⅱ区の北端部に位置するピットで、中世以降の流路SR201によって上面を削平されている。検出面の標高は8.45m。検出規模は径36cm深さ22cm、埋土は暗褐色シルトである。埋土下層より完形の土師質土器小皿（390）が出土している。

P310（Fig.38・39）

Ⅲ区に位置し、中世以降の流路SR201によって上面を削平されている。検出面の標高は8.27m。検出規模は径20cm深さ16cm、埋土は暗褐色シルトである。埋土中より完形の土師質土器杯（383）、杯の底部2点、小皿の口縁部4点が出土している。

P401（Fig.40・41）

Ⅳ区に位置する。検出規模は径18cm深さ14cm、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部2点と小皿（402）等が出土している。

P402（Fig.40・41）

Ⅳ区に位置する。検出規模は径22cm深さ8cm、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部1点と底部2点、小皿の口縁部2点と底部1点、須恵器鉢の体部片等が出土している。図示したものは土師質土器杯（395・396）、小皿（403）である。

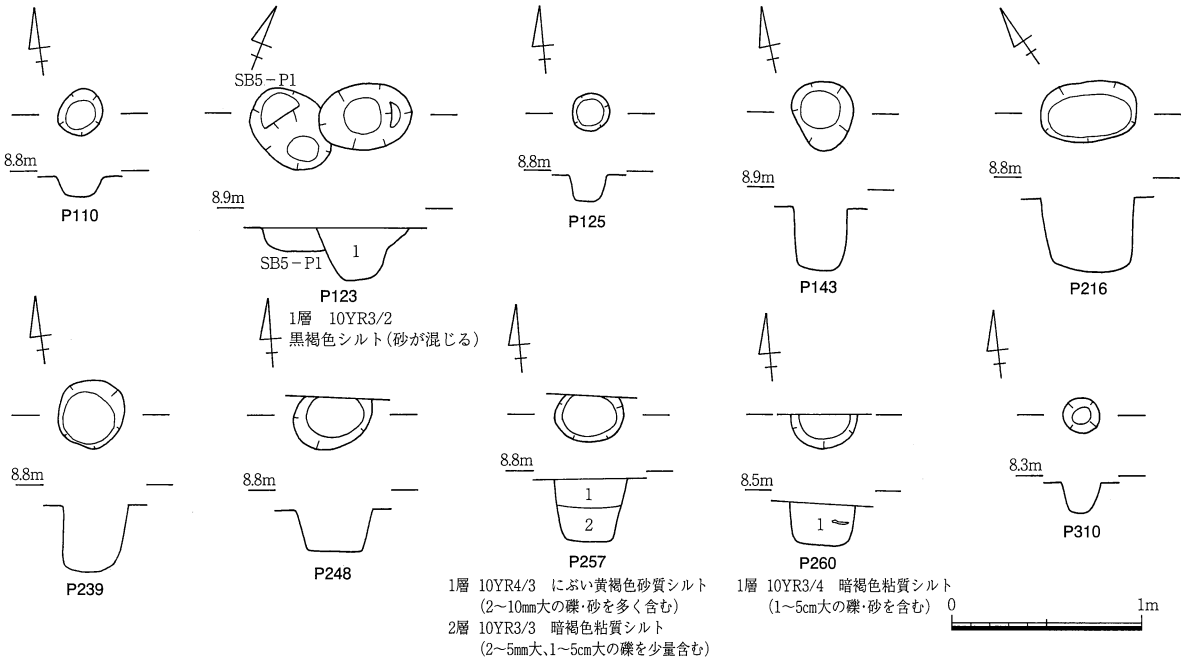


Fig.38　P110・123・125・143・216・239・248・257・260・310

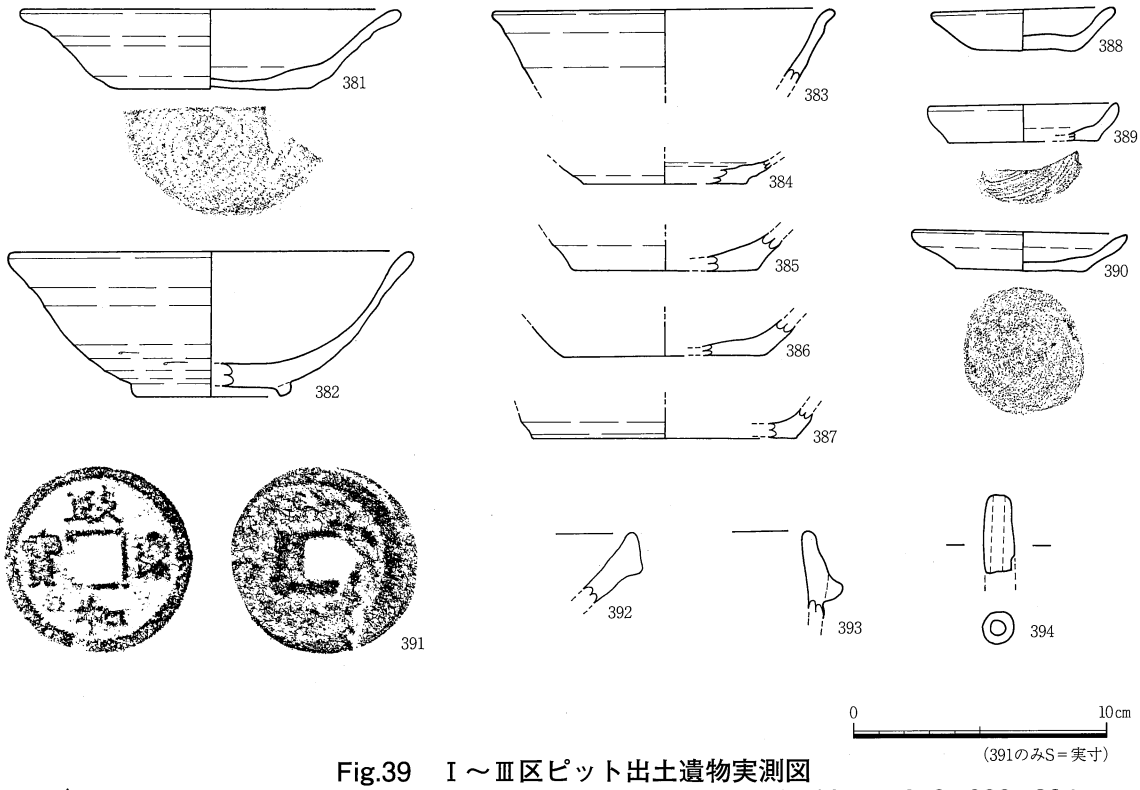


Fig.39　Ⅰ～Ⅲ区ピット出土遺物実測図
(P110：381・382・P123：384・385・389、P215：386、P143：387、P216：392・394、P239：393、P248：388、P257：391、P260：390、P310：383)

P411 (Fig.40・41)

Ⅳ区に位置し、SB13－P2とP459に切られる。検出規模は径44×36cm深さ30cm、埋土は1層が暗褐色シルト、2層が黒褐色粘質シルトである。埋土中より土師質土器杯 (400) 等が出土している。

P417 (Fig.40・41)

Ⅳ区に位置する。検出規模は径34×30cm深さ12cm、埋土は黒褐色シルトである。遺物は埋土中より土師質土器杯の口縁部5点と底部1点、小皿の口縁部5点と底部1点、瓦器椀等が出土している。図示したものは土師質土器小皿 (404)、瓦器椀 (409) である。409は口縁部外面にヨコナデ、体部外面はユビオサエとナデ内面にはナデとミガキが施される。

P427 (Fig.40・41)

Ⅳ区に位置する。検出規模は径26cm深さ16cm、埋土は黒褐色砂質シルトである。埋土中より土錘 (411)、瓦器椀の体部細片等が出土している。

P437 (Fig.40・41)

Ⅳ区に位置し、周辺ピットとの位置関係からSB柱穴になる可能性も考えられられる。検出規模は径36cm深さ20cm、埋土は黒褐色砂質シルトと黒褐色粘質シルトである。埋土中より土錘 (412)、製塩土器 (415) が出土している。

P441 (Fig.40・41)

Ⅳ区に位置し、周辺ピットとの位置関係からSB柱穴になる可能性も考えられられる。切り合い関係では中世のSB14－P5を切る。検出規模は径32cm深さ36cm、埋土は暗褐色砂質シルトと黒褐

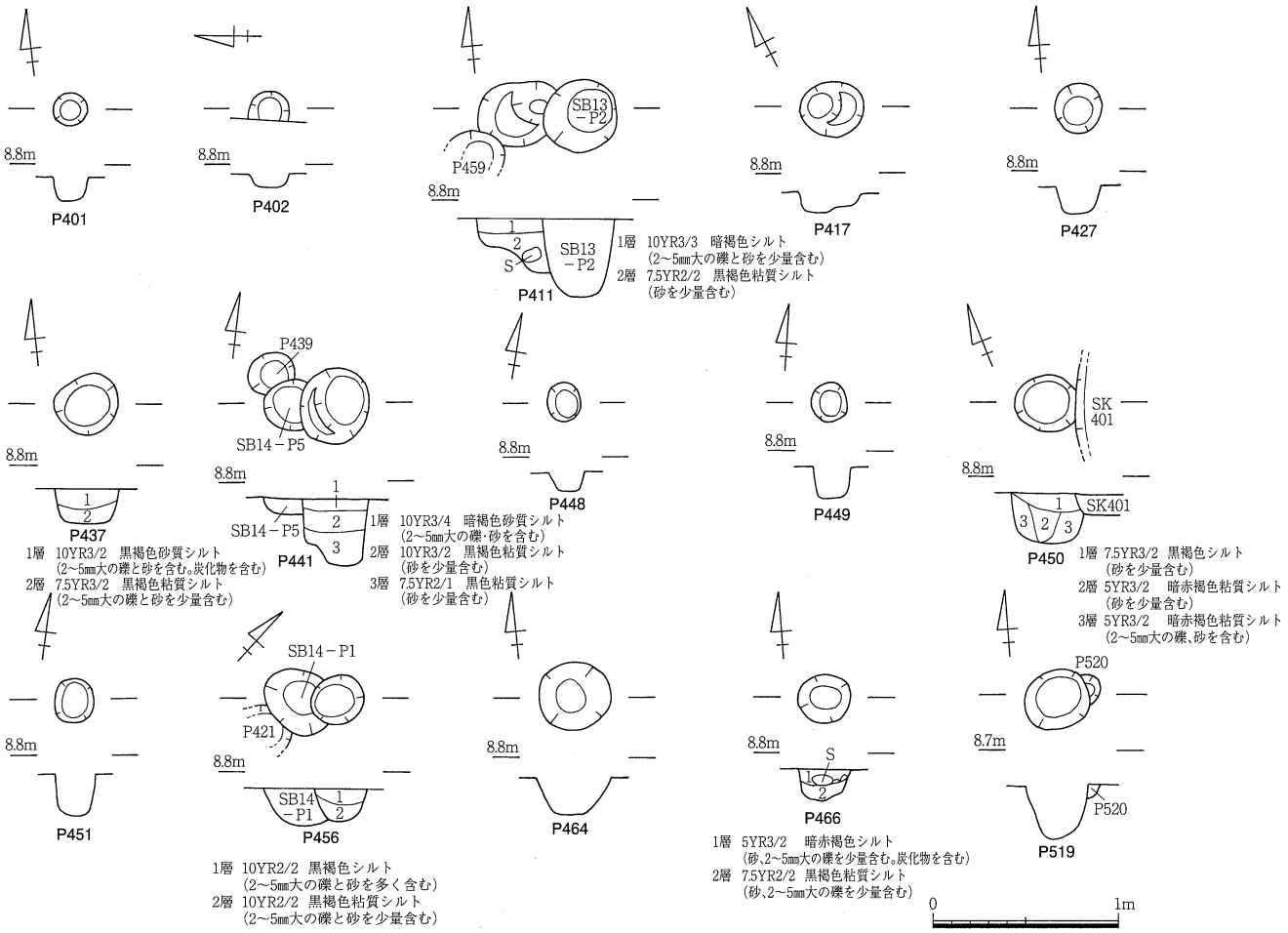


Fig.40　P401・402・411・417・427・437・441・448～451・456・464・466・519

色粘質シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部2点と底部6点、小皿の口縁部19点と底部7点、瓦器椀の体部細片1点、瓦質土器鍋（410）、土錘（413）が出土している。

P448（Fig.40・41）

Ⅳ区の南部に位置する。検出規模は径22cm深さ12cm、埋土は黒褐色シルトである。埋土中より土錘（414）が出土している。

P449（Fig.40・41）

Ⅳ区の北部に位置する。検出規模は径22cm深さ16cm、埋土は黒褐色シルトであり埋土中に炭化物を含む。埋土中より土師質土器杯の底部2点、小皿の口縁部10点が出土している。図示したものは土師質土器小皿（405）である。

P450（Fig.40・41）

Ⅳ区の南部に位置し、中世のSK401に切られている。柱痕を検出していることからSB柱穴であった可能性をもつが、南部側がSD401の削平を受けるため建物跡の特定は困難である。検出規模は径30×38cm深さ28cm、柱痕径は16cm前後である。埋土は1層が黒褐色シルト、2層・3層が暗赤褐色粘質シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部1点と底部3点、小皿の口縁部7点と

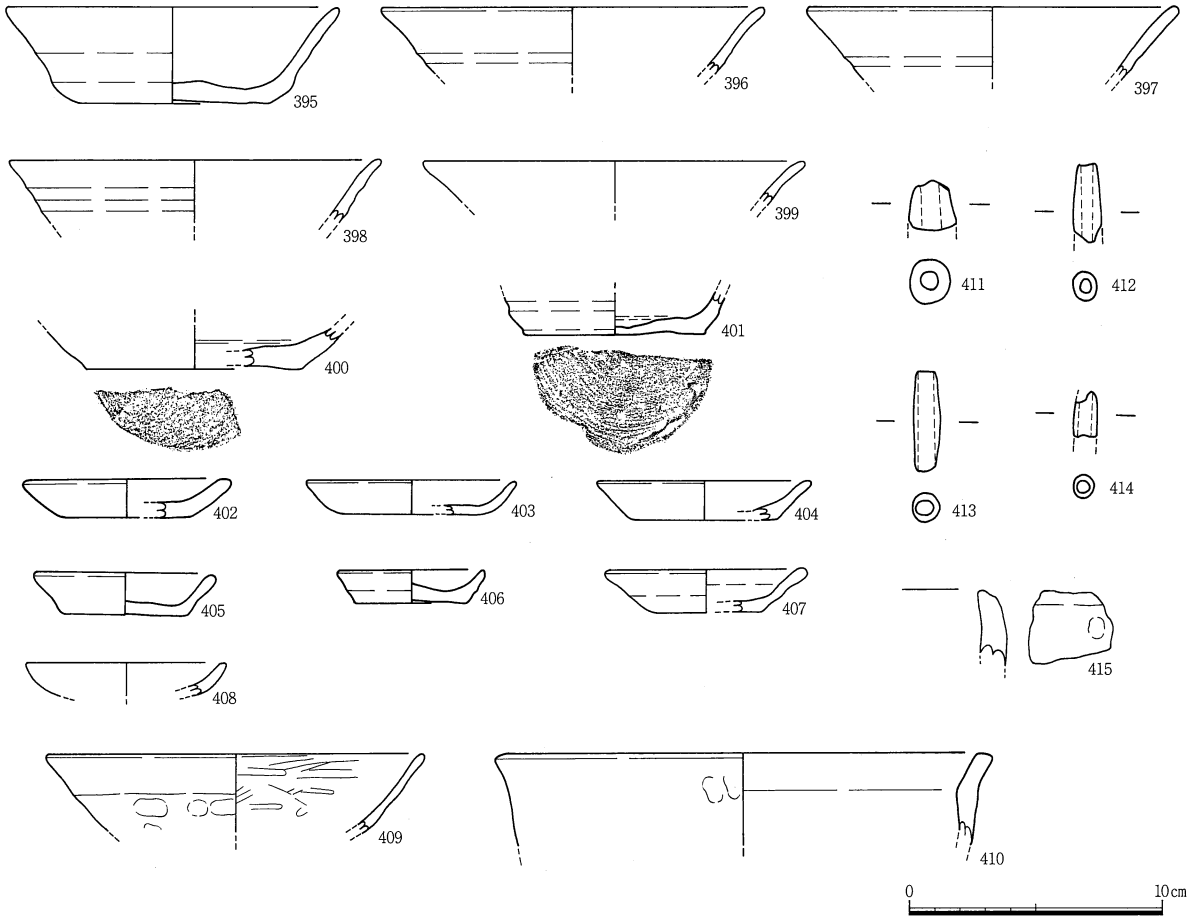


Fig.41　Ⅳ・Ⅴ区ピット出土遺物実測図
(P401：402、P402：395・396・403、P411：400、P417：404・409、P427：411、P437：412・415、P441：410・413、P448：414、P449：405、P450：406、P451：401、P456：397、P462：398、P464：399、P466：407、P519：408)

底部2点、瓦質土器鍋の体部片1点等が出土している。図示したものは土師質土器小皿（406）である。

P451（Fig.40・41）

Ⅳ区の南部に位置する。検出規模は径23cm深さ22cm、埋土は黒褐色粘質シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部1点と底部2点、小皿の口縁部8点、瓦器椀の体部細片1点等が出土している。図示したものは土師質土器杯（401）である。

P456（Fig.40・41）

Ⅳ区に位置し、SB14－P1を切る。検出規模は径30cm深さ18cm、埋土は1層が黒褐色シルト、2層が黒褐色粘質シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部1点と底部2点、小皿の口縁部4点等が出土している。図示したものは土師質土器杯（397）である。

P459（Fig.42）

Ⅳ区の北部に位置するピットで、中世のP411・P467を切り、P462に切られる。検出規模は径33cm深さ20cm、埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、瓦器椀、瓦である。出土点数は口縁部数にして土師質土器杯9

点、小皿24点、瓦器碗1点、底部点数は杯7点、底部4点で、このうちに完形の小皿2点が含まれる。この他、体部片では瓦1点、瓦器椀2点等が出土している。出土状況をみると、特に床面から下層にかけての遺物量が多く、床面からは杯（418・420・422）、小皿（424）が破片の状態で出土し、その上面に完形の小皿2点（425・427）が伏せて重ねられている。またその上位では杯（419・421）が出土している。

図示したものは土師質土器杯（416～421）、小皿（422～428）、瓦（429）である。杯416～419は体部外面に多段の強いロクロ目を残す。429は丸瓦で、外面イタナデ、内面布目。焼成は堅致であり、外面は灰白色、内面は灰黄褐色に発色する。内面には自然釉が掛かる。

P462（Fig.41・42）

Ⅳ区の北部に位置し、中世のP459・P467を切る。検出規模は径36cm深さ23cm、埋土は暗褐色シルトである。埋土中より土師質土器杯の口縁部1点と底部2点、小皿の口縁部3点、瓦器椀が出土している。図示したものは土師質土器杯（398）である。

P464（Fig.40・41）

Ⅳ区の中央部に位置する。検出規模は径40cm深さ20cm、埋土は暗褐色シルトである。埋土中よ

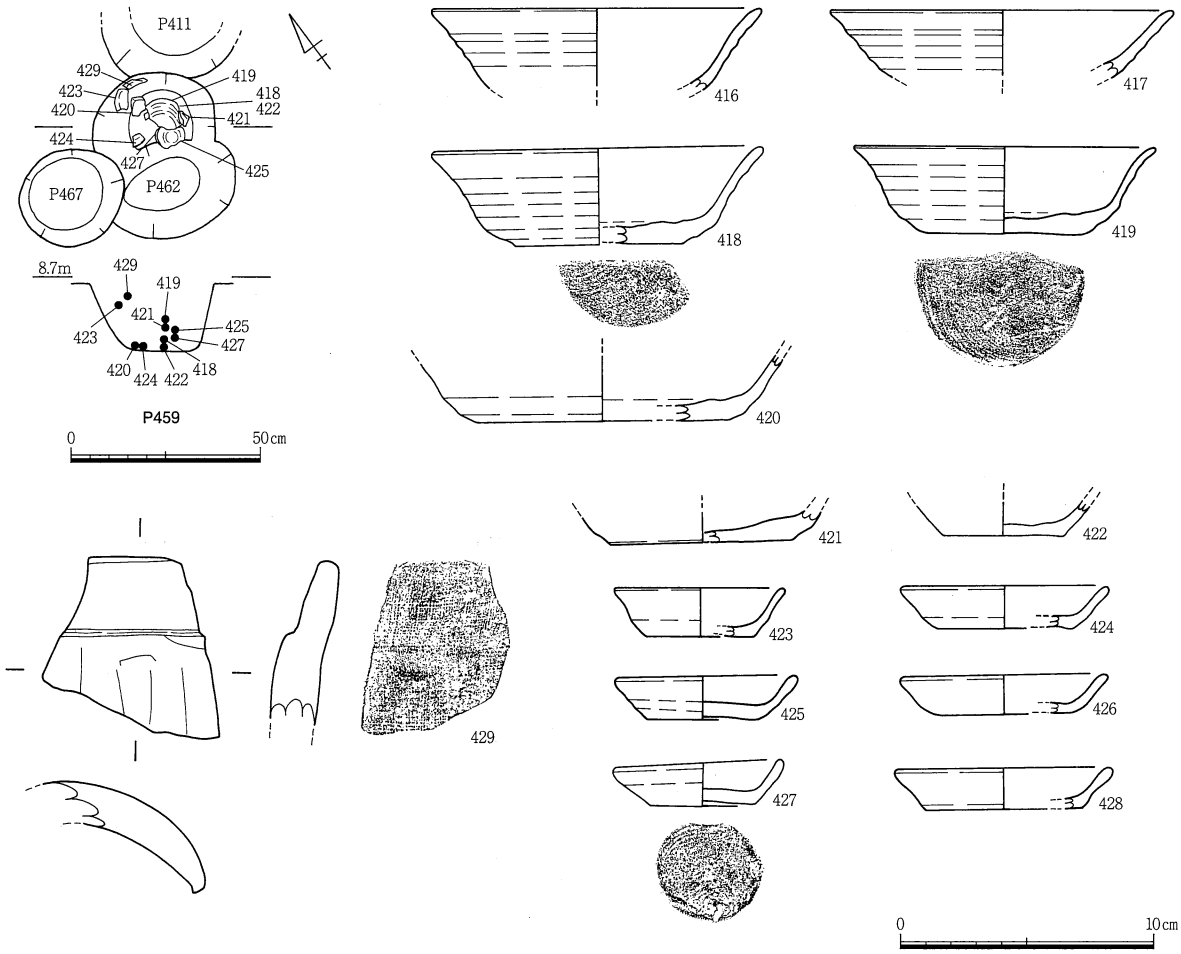


Fig.42　P459出土状況図・出土遺物実測図

り土師質土器杯の口縁部3点と底部3点、小皿の口縁部4点底部1点、瓦器椀の体部片が出土している。図示したものは土師質土器杯（399）である。

P466（Fig.40・41）

Ⅳ区の中央部に位置する。検出規模は径17cm深さ18cm、埋土は1層が暗赤褐色シルト、2層が黒褐色粘質シルトで、1層には5cm前後の円礫と炭化物が少量含まれる。埋土中より土師質土器杯の口縁部2点と底部1点、小皿の口縁部6点が出土している。図示したものは土師質土器小皿（407）である。

P519（Fig.40・41）

Ⅴ区の東部に位置し、P520を切る。検出規模は径34cm深さ28cm、埋土は黒褐色粘質シルトである。埋土中より土師質土器小皿の口縁部3点と底部3点が出土している。図示したものは土師質土器小皿（408）である。

⑤ 包含層出土の遺物（Fig.43・44）

ここでは包含層2層・3層より出土した中世の出土遺物を図示している。図示したものは土師質土器杯（430～442）、杯又は椀（443）、小杯（445）、小皿（446～466）、器種不明（444）、瓦器椀（473～475）、瓦器皿（476）、青磁碗（467・468・470）、青磁皿（469）、白磁皿（471・472）、須恵器鉢（477）、陶器擂鉢（478）、陶器甕（479・480）である。このうち459・460・463～465がⅠ区、439～444・458・462・466がⅡ区、446がⅢ区、430～438・445・447～457・461がⅣ区からの出土である。これらの遺物は中世後期から近世初頭の遺物包含層にあたる2層と中世の遺物包含層である3層内より出土したものであるが、現地での包含層掘削に際して層位別の遺物取り上げは出来ていない。なお、2層は調査Ⅰ区・Ⅲ区では削平を受け残存しない。

430～442は土師質土器杯である。430は体部が直高するもので、体部外面に強いロクロ目が残る。また、437では外底回転糸切りの後中央に細い板状原体による圧痕を認める。443は杯又は椀の底部である。444は底径9cmとやや大型で円盤状の底部をもつ。底部中央には径1cmの焼成前穿孔を穿つ。445は小杯で内底に強い渦状のロクロ目が残る。

446～466は小皿である。447は体部が直高気味に短く伸びるもの、446・448～460・462～466は体部が外方へ開くものである。447・454は、内底回転ナデの後中央に直線方向の強いナデを施す。464は外底回転糸切りの後中央に板状原体による直線方向の圧痕が残る。461は京都系土師器皿で、ユビオサエとナデにより底部を丸く成形する。口縁部内面には回転ナデが観察される。

473～475は瓦器椀である。いずれも13世紀代に比定されるものであるが、ミガキや炭素吸着の状態には個体差がみられる。474・475は内底に平行状の暗文を残す。内外面とも炭素吸着は良好で、器面色調は暗灰色を呈する。473は口縁部外面にヨコナデ、体部外面はユビオサエとナデ、内面にはナデと渦状の暗文が観察される。内外面の炭素は殆ど剥離し器面は灰色を呈する。476は瓦器皿で、外面にナデ、内面にイタナデを施す。

467・468・470は青磁碗である。468は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗（森田分類碗Ⅰ－5b類）で13世紀後半～14世紀前半に比定される。467は龍泉窯系青磁碗（小野分類碗B－2類）で14世紀末～15

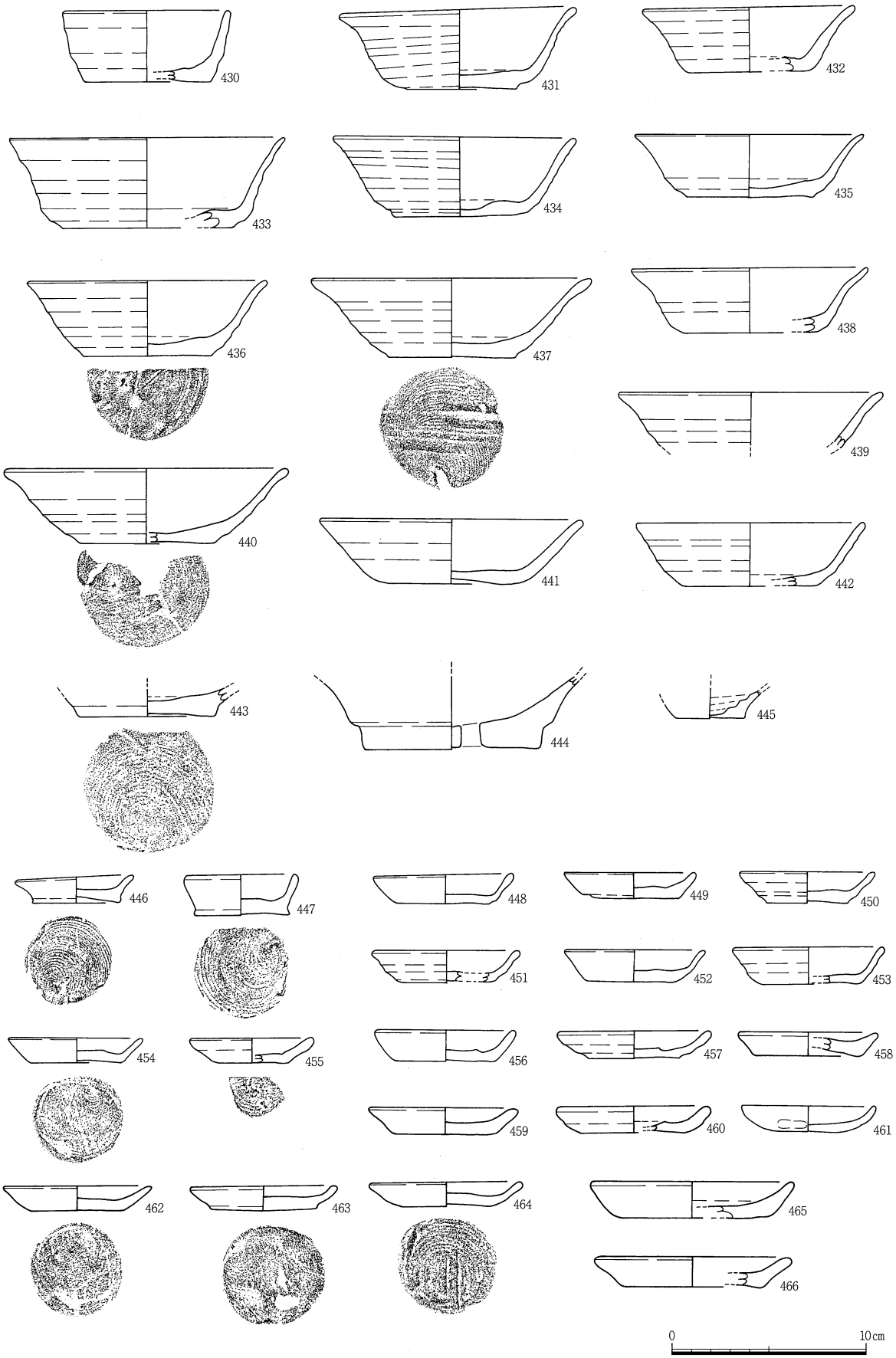


Fig.43　包含層出土遺物（1）
（Ⅰ区：459・460・463～465、Ⅱ区：439～444・458・462・466、Ⅲ区：446、Ⅳ区：430～438・445・447～457・461）

世紀。外面にはヘラ彫りによる蓮弁文を描き、釉はオリーブ灰色に発色する。470は龍泉窯系青磁碗（小野分類碗C類）である。内底には圏線とスタンプによる草花文を配する。釉は暗オリーブ灰色で、高台内側まで施釉され高台内のみ無釉となる。469は龍泉窯系青磁皿（森田分類皿Ⅰ類）で12世紀後半～13世紀前半に比定される。472は中国産の白磁皿（森田分類皿Ⅸ類）で14世紀。わずかに淡緑色をおびる半透明の釉を施釉し、外底は無釉となる。471は白磁皿（小野分類皿B群）で15世紀。高台施釉で高台はアーチ状の抉りをもつ。内底には目痕が残る。

477は須恵器鉢である。内外面は回転ナデ、口縁端部は回転ナデにより面取る。色調は灰白色で、胎土中に石英・長石と灰色系鉱物の粗砂を含む。

478は備前焼の擂鉢（間壁編年ⅣB期、乗岡編年中世4期）で、15世紀前半に比定される。還元

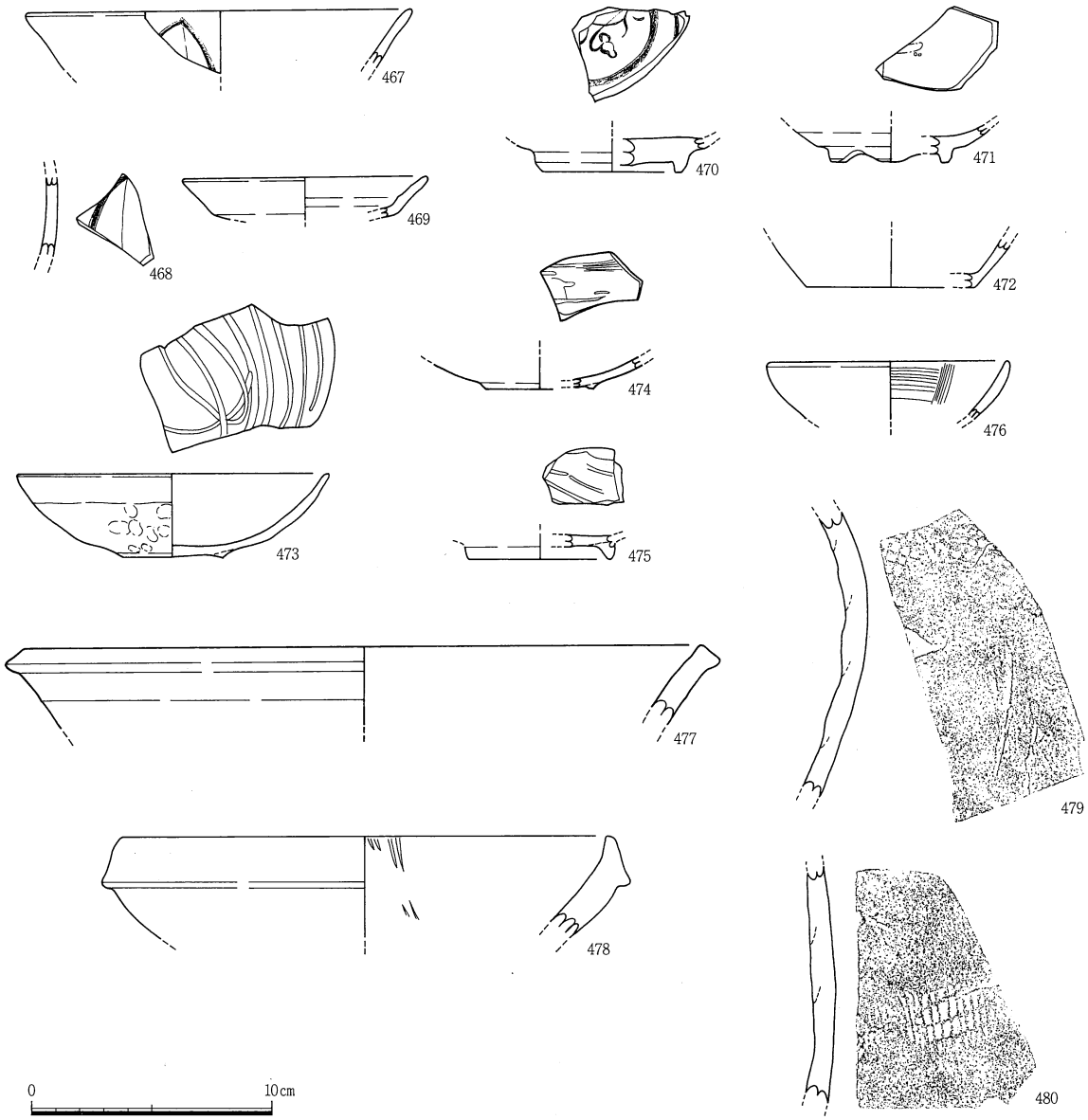


Fig.44 包含層出土遺物（2）
（Ⅰ区：474・477・480、Ⅱ区：468・469・478、Ⅳ区：467・470～473・475・476・479）

焼成で胎土は灰色を呈する。479・480は常滑焼甕の体部片で、外面にナデと格子状のタタキ目、内面にヨコナデを施す。内面には粘土帯接合痕が顕著に残り、接合部上面にユビオサエが観察される。480は外面に自然釉が掛かり、外面は灰オリーブ色、内面は灰褐色を呈する。479は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色を呈する。

(2) 中世末から近世の遺構と遺物

中世末から近世の遺構は、土坑4基、ピット23基を確認した。また、Ⅱ区東部ではSD201の上面で浅い落ち込みSX1を検出した。

① 土坑・性格不明遺構

SK101 (Fig.45・46)

Ⅰ区の西部に位置する土坑である。平面形は不整円形を呈し、断面形態床面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出規模は長軸170cm、短軸142cm、深さ50cmを測る。埋土は上層が暗褐色砂と暗褐色砂質シルト、下層が黒褐色粘質シルトと暗褐色粘質シルトである。

出土遺物は、陶器碗1点、丹波焼甕1点、近世陶磁器細片2点、及び古代から中世遺物の混入とみられる土師質土器杯又は小皿の口縁部7点と底部9点、青磁鎬蓮弁文碗の体部片1点、須恵器細片1点である。図示したものは、陶器甕 (490) である。490は丹波焼甕の体部で、外面には強いロクロ目、内面回転ナデ。色調は外面が暗赤灰色、内面は灰色に発色する。

SK203 (Fig.45・46)

Ⅱ区の西端に位置する土坑で、近世のSK204を切り、SB8－P2を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸110cm、短軸78cm、深さ24cmを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし礫と砂を多く含む。

埋土中より肥前内野山窯産の銅緑釉小皿、近世陶磁器細片8点、及び中世の混入とみられる土師器杯底部が出土している。図示したものは、青磁碗 (496) である。

SK204 (Fig.45・46)

Ⅱ区の西端に位置する土坑で、SB7－P6を切り、SK203とP265に切られる。平面形は長楕円形を呈し、長軸188cm、短軸68cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトで埋土中に礫を含む。

埋土中より近世陶器片3点と、中世の混入とみられる土師器片及び瓦器椀体部片が出土している。図示したものは肥前産の白磁小杯 (494) である。

SK205 (Fig.45)

Ⅱ区の西端に位置する土坑で、SK206を切る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸106cm、短軸96cm、深さ36cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルト、黒褐色シルト、黒褐色粘質シルトであり、埋土中に礫、砂を少量含む。

出土遺物は土師質土器底部3点のみであるが、周辺の近世土坑との位置関係や埋土の共通性からみて近世に帰属する可能性が高い。

SX1 (Fig.46)

SX1はSR201上面で確認された浅い落ち込み状の遺構で、埋土中からは16世紀末から17世紀初頭の貿易陶磁器、17～19世紀の近世陶磁器、混入とみられる古代から中世の遺物が出土している。

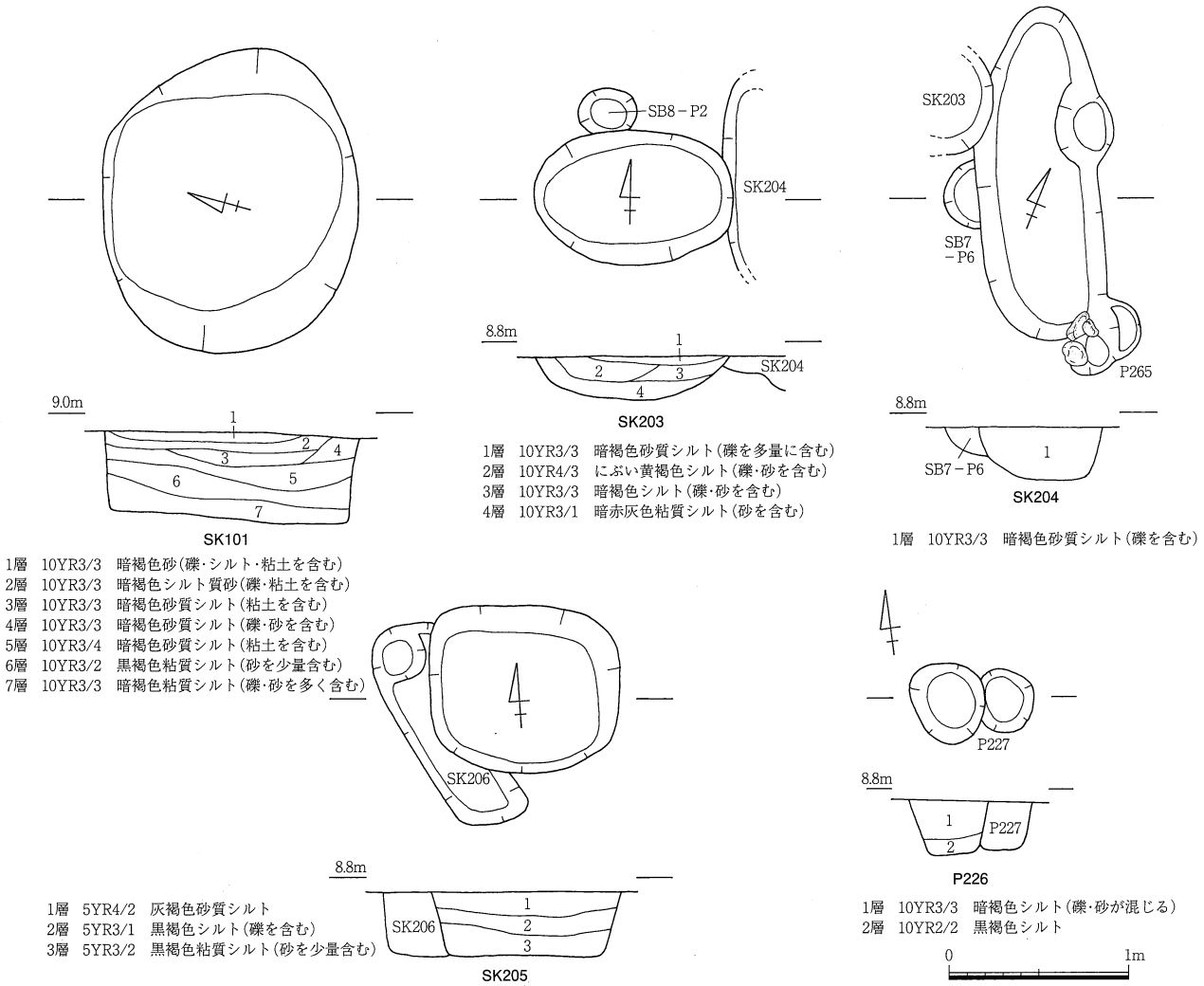


Fig.45　SK101・203・204・205・P226

図示したものは、青花碗（492・493）、白磁皿（495）、陶器碗（483）・皿（481・482・484～486・488）・鉢（487）・擂鉢（489）、鉄釘（491）である。483は肥前産の灰釉陶器碗である。釉は焼成不良で淡黄色を呈し、外面下半は無釉である。481・482・486は肥前産の灰釉溝縁皿で、ともに灰白色の白濁する釉を施釉する。486は内底に砂目を伴う。いずれも17世紀初頭に比定される。484は灰釉を施釉し見込みの釉が剥ぎ取られる。485は灰白色の胎土に、灰白色を帯びる半透明の釉が施釉される。488は肥前産の刷毛目二彩手の皿で17世紀。内面に白化粧土刷毛目を施し緑釉を流し掛けする。内底には砂目を伴う。487は肥前産の陶器鉢で、体部外面に白化粧土刷毛目を施し、口縁端部は無釉となる。489は備前焼擂鉢で、内面に摺目、外面にはユビオサエとヨコナデを施す。胎土はにぶい赤褐色に発色する。491は鉄釘である。

492は漳州窯系の青花碗で、16世紀末から17世紀初頭に比定される。内底は圏線と文字文、外面下位には縞状の文様が描かれる。胎土は灰白色で、外面に白化粧土を施した後透明釉を施釉する。呉須は暗青灰色に発色し、透明釉はオリーブ灰色を帯びる。高台施釉で、畳付にはモミガラ痕

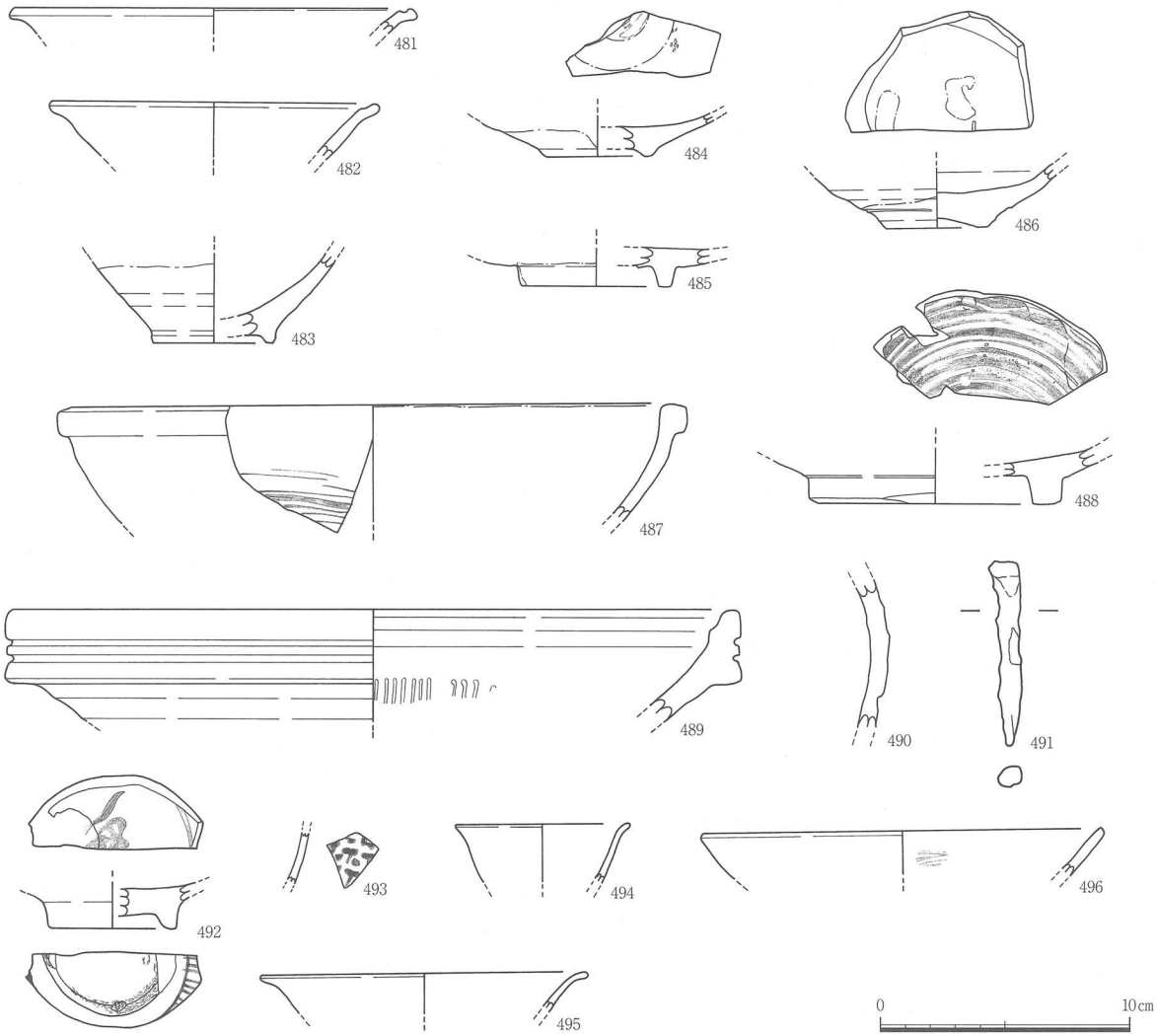


Fig.46　SK101・203・204・SX1・包含層出土遺物実測図
（SK101：490、SK203：496、SK204：494、SX1：481～489・491～493・495）

が残る。493は景徳鎮窯系の青花碗で、外面に略化した唐草文を描く。胎土は白色で、呉須は青色に発色する。495は中国産の白磁端反皿である。

② ピット

P226（Fig.45）

Ⅱ区に位置し、近世の土坑SK204・SK203の東に隣接する。平面規模は50×40㎝、深さ30㎝、埋土は暗褐色シルトと黒褐色シルトである。埋土中より唐津系灰釉陶器皿の口縁部が出土している。

Tab.1　SBピット計測表

	遺構番号	現地遺構番号	径（cm）	深さ（cm）
SB1	P1	—	26	14
	P2	P113	42 × 26	18
	P3	P118	40 × 36	24
	P4	P146	28	14
	P5	—	26	14
	P6	未検出	—	—
SB2	P1	未検出	—	—
	P2	P126	46 × 38	22
	P3	P214	30	46
	P4	—	20	20
	P5	P141	34 × 26	18
	P6	—	24	15
SB3	P1	P108	38 × 35	20
	P2	P111	38 × 35	20
	P3	P114	38 × 36	22
	P4	P115	36 × 36	43
	P5	P119	52 × 52	16
	P6	未検出	—	—
	P7	未検出	—	—
	P8	未検出	—	—
SB4	P1	P131	48 × 40	46
	P2	P137	60 × 44	45
	P3	P201	54 × 46	48
	P4	P202	28 × 28	48
	P5	未検出	—	—
	P6	未検出	—	—
	P7	P129	38 × 38	18
	P8	P120	38 × 38	18
SB5	P1	P122	50 × 36	40
	P2	P144	36 × 30	22
	P3	P259	46 × 40	26
	P4	P219	28 × 28	40
	P5	P458	38 × 32	22
	P6	未検出	—	—
	P7	未検出	—	—
	P8	未検出	—	—
SB6	P1	未検出	—	—
	P2	未検出	—	—
	P3	P126	46 × 38	22
	P4	P214	30	46
	P5	P208	24	28
	P6	P141	34 × 26	18
	P7	—	28 × 28	12
	P8	—	36	58
SB7	P1	P204	30	40
	P2	P237	30 × 26	40
	P3	P240	44 × 40	28
	P4	P251	36	34
	P5	未検出	—	—
	P6	—	38	18
	P7	P229	32	40
	P8	P213	30	38
SB8	P1	未検出	—	—
	P2	P 246	28	34
	P3	P249	24	42
	P4	P241	34	32
	P5	P223	32	48
	P6	P230	30	24

	遺構番号	現地遺構番号	径（cm）	深さ（cm）
SB9	P1	P206	30	28
	P2	P221	44 × 32	60
	P3	P224	38	46
	P4	P256	34 × 30	40
	P5	P407	32 × 30	36
	P6	P410	48 × 42	26
	P7	未検出	—	—
	P8	—	24	12
SB10	P1	P222	52 × 40	46
	P2	未検出	—	—
	P3	未検出	—	—
	P4	P242	28 × 24	40
	P5	未検出	—	—
	P6	P406	26	18
	P7	P409	25	14
	P8	P465	28	14
SB11	P1	P405	32	24
	P2	P423	40	44
	P3	P416	34 × 30	18
SB12	P1	P454	50 × 36	32
	P2	P424	残38 × 20	18
	P3	P422	34	12
SB13	P1	P413	32	20
	P2	P412	40	46
	P3	—	34	20
	P4	未検出	—	—
SB14	P1	P420	38	31
	P2	P429	44 × 48	22
	P3	P444	33	19
	P4	P435	34	23
	P5	P440	30	20
SB15	P1	P523	25	22
	P2	P521	26	17
	P3	—	30	20
	P4	未検出	—	—
	P5	未検出	—	—
	P6	P503	32 × 24	12
SB16	P1	P511	48 × 40	37
	P2	P524	28	43
	P3	P526	38 × 32	51
	P4	P528	18	30
	P5	未検出	—	—
	P6	未検出	—	—
	P7	P530	26	37
	P8	未検出	—	—
SB17	P1	P142	24	22
	P2	P145	26	32
	P3	P209	30	19
	P4	P247	25	20
	P5	P408	34 × 24	22

Tab.2　遺物観察表 (1)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
1	TP1-SX 1	土器	製塩土器	—	—	—	1～3㎜大の須恵器砕片	橙5YR6／6		ユビオサエ・ナデ／布目。	
2	TP4-2層	土師質土器	杯	—	—	6.6	石・長・灰／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		摩耗し調整不明。底部円盤状。	
3	TP4-2層	土師質土器	小皿	8.0	1.6	4.6	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目。	
4	TP4-6層	土師質土器	小皿	8.4	1.4	5.4	石・長・雲・チ・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
5	TP4-2層	土師質土器	椀	—	—	6.6	石・長・雲・チ／細	浅黄橙 10YR8／4	軟	摩耗し調整不明。貼付高台。	
6	TP4-2層	土師質土器	杯	—	—	7.4	石・長・灰黒／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		摩耗し調整不明。底部円盤状。	
7	TP4-2層	土師質土器	高杯	—	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	灰白10YR8／2		脚部、接合部で剥離。外面ロクロ目。	
8	TP4-2層	瓦器	椀	15.0	—	—	石・長／細	外) 灰N5／断) 2.5Y7／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素吸着良好。	
9	TP4-6層	土師質土器	鉢	—	—	11.0	石・長・雲・チ・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
10	TP4-2層	白磁	皿	12.0	2.9	6.8	—	外) 灰白N8／断) 白色	—	高台施釉。畳付の釉をカキ取り。	中国産白磁皿E類
11	TP7	青磁	碗	13.0	—	—	—	外) オリーブ灰 5GY6／1 断) 灰7／	—	オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	龍泉窯系
12	TP4-2層	陶器	擂鉢	25.6	—	—	石・長／粗・角礫	外) 灰褐 7.5YR4／2 断) 褐灰 10YR6／1	—	口縁端部回転ナデ、体部ヨコナデ／回転ナデ・摺目。外面中位に粘土帯接合痕。	備前 間壁ⅣB期 乗岡中世5期 15C後半
13	SB1-P3	土師質土器	杯	14.0	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明	
14	SB8-P5	土師質土器	杯	15.2	4.0	6.6	石・長・雲・チ・赤／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。外面多段のロクロ目。	
15	SB5-P5	土師質土器	小皿	9.0	1.2	7.0	石・長・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
16	SB5-P4	土師質土器	小皿	7.6	1.5	5.2	石・長・雲・チ・赤風／細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、内底渦状の強いロクロ目、内底周縁溝状。	
17	SB6-P6	土師質土器	小皿	—	—	5.4	石・長・赤風／粗・細	橙5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
18	SB4-P8	土師質土器	小皿	6.0	—	—	石・長・雲・赤風／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	
19	SB7-P4	土師質土器	小皿	—	1.7	—	石・長・赤風／粗・細	橙 5YR6／8		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
20	SB5-P1	瓦器	椀	13.0	—	—	石・長・チ／粗	外) にぶい褐 7.5YR6／3 断) にぶい褐 7.5YR6／3		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ	
21	SB6-P5	瓦器	椀	13.4	—	—	石・長・チ・灰黒／粗	外) にぶい褐 7.5YR6／3 断) にぶい褐 7.5YR6／3		口縁部回転ナデ・体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。器面の炭素吸着は剥離。	
22	SB4-P2	須恵器	鉢	24.2	—	—	石・長・灰黒／粗	青灰5B6／1		回転ナデ／口縁部回転ナデ、体部ナデ。	東播系
23	SB5-P1	土師質土器	甕	—	—	—	石・長・赤褐／粗	灰N6／	硬	縦方向を基調とするイタナデ／縦方向のイタナデ。	
24	SB6-P3	陶器	甕	—	—	—	石・長・灰／粗—多	外) オリーブ褐 断) 灰黄褐 10YR6／2	—	ナデ／ナデ。接合部外面に並行状のタタキ目、内面ユビオサエ。外面にオリーブ褐色の自然釉。器表に長石の吹き出しあり。	
25	SB4-P2	青磁	碗	—	—	6.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6／2 断) 灰白5Y7/1		内面片切彫による花文。高台施釉、高台内無釉。釉はオリーブ灰色に発色。	龍泉窯系 碗Ⅰ類
26	SB9-P1	土師質土器	杯	16.6	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段の強いロクロ目。	
27	SB9-P1	土師質土器	杯	14.5	4.6	8.0	石・長／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。外面多段のロクロ目。	
28	SB9-P1	土師質土器	杯	13.0	—	—	石・長・雲・チ・赤褐／粗	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。	
29	SB9-P1	土師質土器	杯	—	—	7.8	石・長・雲・チ・赤透／粗	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	

Tab.3　遺物観察表 (2)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
30	SB9-P1	土師質土器	杯	—	—	1.9	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
31	SB9-P1	土師質土器	小皿	9.0	—	—	石・長・雲・チ・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR6／4		回転ナデ／回転ナデ。	
32	SB9-P1	土師質土器	小皿	9.5	1.8	6.6	石・長・雲・チ／粗・細	橙2.5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁部溝状。	
33	SB9-P1	土師質土器	小皿	7.6	1.6	5.5	石・長・雲・チ・赤透／粗	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
34	SB9-P4	土師質土器	小皿	7.4	1.5	5.2	石・長・雲・赤風・灰／粗	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	
35	SB9-P6	土師質土器	皿	11.0	1.9	8.0	石・長・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
36	SB9-P1	土師質土器	小皿	8.0	1.4	7.4	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁部溝状。	
37	SB9-P1	土師質土器	小皿	7.5	1.7	5.6	石・長・雲・チ・赤／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
38	SB9-P1	土師質土器	小皿	8.4	1.4	6.8	石・長・灰／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁部溝状。	
39	SB9-P4	土師質土器	小皿	6.4	1.3	4.0	石・長・チ／粗	にぶい橙 7.5YR6／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、内底周縁溝状。	
40	SB9-P1	土師質土器	小皿	7.2	1.1	6.2	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
41	SB10-P1	土師質土器	杯	13.7	3.5	7.0	石・長・赤風・灰／粗・礫	浅黄橙 7.5YR8／6	軟	摩耗し調整不明。	
42	SB14-P1	土師質土器	杯	14.0	—	—	石・長／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。	
43	SB14-P1	土師質土器	杯	11.7	3.8	6.6	石・長・チ・赤／粗	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目、外底回転糸切り痕。	
44	SB10-P1	土師質土器	杯	—	—	6.4	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
45	SB16-P4	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・雲・チ／粗・細	灰黄褐 10YR5／2		回転ナデ／回転ナデ。外面緩やかなロクロ目。	
46	SB14-P1	土師質土器	杯	—	—	6.8	石・長・雲・赤／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、内底渦状の強いロクロ目。	
47	SB14-P1	土師質土器	杯	—	—	10.6	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 10YR8／3	軟	磨耗し調整不明。	
48	SB12-P1	土師質土器	小皿	6.0	1.0	4.2	石・長・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／4	軟	磨耗し調整不明。	
49	SB14-P1	土師質土器	小皿	7.0	1.7	5.2	石・長・チ・赤風／粗	橙7.5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
50	SB14-P1	土師質土器	小皿	—	—	4.2	石・長・赤風・灰黒／粗・細	橙5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
51	SB14-P1	土師質土器	小皿	9.0	1.2	6.0	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
52	SB14-P1	土師質土器	小皿	7.0	1.7	4.4	石・長・雲・チ・赤／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、内底渦状の強いロクロ目。	
53	SB14-P1	土師質土器	小皿	6.9	1.8	4.2	石・長・チ／粗・細	淡橙5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、内底ユビオサエ・直線方向のナデ。	
54	SB17-P4	土師質土器	小皿	8.0	1.6	6.0	石・長・チ／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。内底周縁溝状。	
55	SB17-P4	土師質土器	小皿	7.8	1.2	5.4	石・長・雲・赤風／細	にぶい黄橙 10YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。	
56	SB10-P1	土師質土器	杯	—	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。	
57	SB14-P1	須恵器	円盤状須恵器片	径 3.2	厚さ 0.6	—	石・長・雲・チ／粗・細	灰N8／	軟	須恵器片を円盤状に整形する。片面ナデ、片面に回転糸切り痕。周縁に擦痕。	
58	SB10-P1	須恵器	鉢	22.0	—	—	石・長・雲・赤・灰／粗	灰白2.5Y8／2		回転ナデ／回転ナデ。	
59	SB13-P2	須恵器	鉢	—	—	—	石・長／粗	灰N6／	硬	回転ナデ／回転ナデ。	東播系
60	SB17-P2	青磁	碗	13.4	—	—	—	外) オリーブ灰 5GY6／1 断) 灰N6／	—	釉はオリーブ灰色で粗い貫入が入る。	龍泉窯系 14C～15C 前半
61	SK104	土師質土器	杯	12.4	3.9	7.0	石・長・雲・赤風／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	

Tab.4　遺物観察表 (3)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
62	SK104	土師質土器	杯	13.9	4.0	7.5	石・長・赤風・灰／礫・粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。内底周縁部溝状。	
63	SK104	土師質土器	杯	14.6	3.2	7.0	石・長・チ・赤／細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底細かい渦状のロクロ目。	
64	SK104	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・長・雲・チ／粗・細	灰白色 2.5Y8／2			
65	SK105	土師質土器	杯	11.0	—	—	石・長・雲・チ／粗	橙7.5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
66	SK106	土師質土器	杯	16.6	—	—	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。ロクロ目顕著。	
67	SK103	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・長・雲・赤色透明・白／粗	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
68	SK102	土師質土器	杯又は椀	—	—	8.0	石・長・雲・赤風／粗	灰黄褐 10YR4／2		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
69	SK201	土師質土器	杯又は皿	—	—	5.0	石・長・雲・灰／粗・細	橙7.5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
70	SK105	土師質土器	杯	—	—	—	石・長・雲・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
71	SK206	土師質土器	小皿	8.2	1.2	6.2	石・長・雲・赤風／細	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
72	SK104	土師質土器	小皿	7.8	0.9	6.4	石・長・赤風／粗・細	橙5YR6／8	軟	摩耗し調整不明。	
73	SK104	土師質土器	小皿	7.6	1.5	—	石・長・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。	
74	SK102	土師質土器	小皿	7.6	1.4	5.5	石・長・雲・チ／粗・細	淡赤橙 2.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
75	SK104	土師質土器	小皿	7.6	0.9	5.4	石・長・雲・チ／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
76	SK104	土師質土器	小皿	7.5	1.2	6.2	石・長・雲・赤色透明／粗・細	橙２.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
77	SK104	瓦器	椀	—	—	4.0	石・長・灰黒／粗	外) 灰5Y4/1 断) 黄灰 2.5Y6／1		ユビオサエ・ナデ／ナデ・ヘラミガキ。	
78	SK104	白磁	皿	9.0	—	—	—	灰白色 5Y7／1	—	口縁部稜花形。灰白色を帯びる透明の釉。	12Cか
79	SK206	青磁	碗	—	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y6／2 断) 灰5Y6/1	—	内面片切彫による草花文。オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	龍泉窯系 12C後半～13C前葉
80	SK202	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・チ／粗	灰白N７／		鍔部ユビオサエ・ナデ／ナデ	13C後半～14C
81	SD201-上層	土師質土器	杯	10.8	3.4	6.6	石・長・雲／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。外底回転糸切り痕。	
82	SD201-中層	土師質土器	杯	12.6	3.6	6.4	石・長・雲／細	橙2.5YR6／6	軟	摩耗し調整不明。薄手の体部。	
83	SD201-中層	土師質土器	杯	15.0	3.5	8.6	石・長・雲・チ・灰／粗	浅黄橙 10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。	
84	SD201-中層	土師質土器	杯	12.4	3.7	8.4	石・長・雲・チ／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
85	SD201-中層	土師質土器	杯	12.0	3.1	7.0	石・長・雲・灰／粗	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
86	SD201-中層	土師質土器	杯	14.4	3.5	8.0	石・長・雲／粗	浅黄橙 10YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
87	SD201-中層	土師質土器	杯	11.8	3.3	6.0	石・長・雲・橙透／粗	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。	
88	SD201-中層	土師質土器	杯	12.6	3.4	7.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
89	SD201-上層	土師質土器	杯	14.0	3.5	10.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 10YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
90	SD201-中層	土師質土器	杯	12.2	4.1	6.6	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
91	SD201-中層	土師質土器	杯	12.4	—	—	石・長・チ／粗・細	橙5R7／8	軟	回転ナデ／回転ナデ。	
92	SD201-東部攪乱	土師質土器	杯	12.6	2.7	9.6	石・長・雲・チ／粗	橙7.5YR7／6	軟	摩耗し調整不明。内面強いロクロ目。	
93	SD201-上層	土師質土器	杯	12.2	—	—	石・長・雲・チ／粗	淡橙5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
94	SD201-上層	土師質土器	杯	14.4	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	

Tab.5　遺物観察表 (4)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
95	SD201-上層	土師質土器	杯	14.4	3.1	9.0	石・長・灰／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
96	SD201-上層	土師質土器	杯	15.8	—	—	石・長・雲・赤風／粗	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。	
97	SD201	土師質土器	杯	15.8	—	—	石・長・雲・チ・赤風／粗	橙2.5YR6／6	軟	磨耗し調整不明。	
98	SD201	土師質土器	杯	—	—	6.6	石・長・雲・チ・赤風／粗	橙7.5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
99	SD201-上層	土師質土器	杯	—	—	7.6	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。内底中央ユビオサエ。底部は不整形。	
100	SD201-上層	土師質土器	杯	—	—	7.8	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／3	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
101	SD201	土師質土器	杯	—	—	7.6	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
102	SD201	土師質土器	杯又は椀	—	—	7.4	石・長・雲・チ／粗・細	橙7.5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
103	SD201-中層	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底細かい渦状のロクロ目。	
104	SD201	土師質土器	杯	—	—	7.2	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
105	SD201-中層	土師質土器	杯	—	—	7.4	石・長・雲・チ／粗・細	灰白10YR8／2		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底細かい渦状のロクロ目。	
106	SD201	土師質土器	杯又は椀	—	—	5.6	石・長・雲・チ・灰黒／粗	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状、中央ユビオサエ・ユビナデ。	
107	SD201-上層	土師質土器	杯又は椀	—	—	5.6	石・長・雲・チ／粗	にぶい橙 7.5YR6／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状。底部円盤状。	
108	SD201-中層	土師質土器	椀	—	—	6.8	石・長・雲・チ／粗・細	灰白 7.5YR8／2		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部は円盤状で外方へ張り出す。	
109	SD201	土師質土器	杯又は椀	—	—	4.4	石・長・雲・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
110	SD201	土師質土器	杯	—	—	5.4	石・長・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。底部円盤状。	
111	SD201-下層	土師質土器	小杯	—	—	3.4	石・長・チ／粗	浅黄橙 7.5YR8／3	軟	摩耗し調整不明。柱状高台。	
112	SD201-中層	土師質土器	杯	—	—	—	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 10YR8／3		底部円盤状。	
113	SD201	土師質土器	杯	18.0	—	—	石・長・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。	
114	SD201	土師質土器	杯	20.6	—	—	石・長・チ・赤風・灰黒／粗	橙2.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	
115	SD201-上層	土師質土器	小皿	6.3	1.7	4.0	石・長・雲・チ・赤風・灰黒／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状。	
116	SD201	土師質土器	小皿	7.8	1.7	5.2	石・長・黒・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
117	SD201-上層	土師質土器	小皿	7.2	1.6	4.7	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
118	SD201	土師質土器	小皿	7.6	1.4	5.4	石・長・チ・赤／粗	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	磨耗し調整不明。	
119	SD201	土師質土器	小皿	5.7	1.1	3.4	石・長・雲・チ／細	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
120	SD201-中層	土師質土器	小皿	7.6	1.3	5.0	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
121	SD201-上層	土師質土器	小皿	8.2	1.2	5.8	石・長・雲・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
122	SD201	土師質土器	小皿	7.6	1.6	5.4	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
123	SD201-上層	土師質土器	小皿	7.0	1.4	5.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
124	SD201-中層	土師質土器	小皿	8.0	1.1	5.8	石・長・雲・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
125	SD201-下層	土師質土器	小皿	8.4	1.2	6.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	

Tab.6　遺物観察表 (5)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
126	SD201-上層	土師質土器	小皿	9.0	1.7	7.0	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
127	SD201	土師質土器	小皿	9.0	1.4	7.4	石・長・雲・チ・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	磨耗し調整不明。	
128	SD201-中層	土師質土器	小皿	8.2	1.3	6.4	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
129	SD201	土師質土器	小皿	8.6	1.3	6.0	石・長・雲・チ・赤／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	磨耗し調整不明。	
130	SD201	土師質土器	小皿	8.6	1.4	6.0	石・長・雲・赤風／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
131	SD201-中層	土師質土器	小皿	9.2	1.4	6.6	石・長・雲・赤風／粗	橙5YR7／6	軟	摩耗し調整不明。	
132	SD201-下層	土師質土器	小皿	7.6	1.5	5.4	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央にユビオサエ。	
133	SD201-中層	土師質土器	小皿	8.3	1.2	5.9	石・長・雲・チ・灰黒／粗	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
134	SD201-中層	土師質土器	小皿	9.4	1.5	6.6	石・長・赤風・灰／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
135	SD201	土師質土器	小皿	8.6	1.6	6.1	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
136	SD201	土師質土器	鉢	—	—	14.4	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
137	SD201	土師質土器	鉢	—	—	13.0	石・長・雲・チ・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
138	SD201	瓦器	椀	14.4	—	—	石・長・灰／粗・細	外) 灰黄褐 10YR5／2 断) 灰白 2.5Y7／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。	
139	SD201	瓦器	椀	14.8	—	—	石・長・雲／粗・細	外) 灰5Y4／1 断) 灰5Y6／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ。炭素吸着良好。	
140	SD201-中層	瓦器	椀	14.4	—	—	石・長・雲・チ・橙透／粗・細	外) 黄灰 2.5Y5／1 断) 灰黄 2.5Y7／2		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ。炭素は剥離。	
141	SD201-下層	瓦器	椀	—	—	—	石・長・雲／粗・細	外) 灰N4／断) 灰白 2.5Y7／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素吸着良好。	
142	SD201	瓦器	椀	15.7	—	—	石・長・雲・灰／粗・細	外) 灰 5Y5／1 断) 灰白 2.5Y7／1		ユビオサエ・ナデ／ナデ。炭素は剥離。	
143	SD201-上層	瓦器	椀	11.6	—	—	石・長・雲・赤風／粗・細	外) 黄灰 2.5Y5／1 断) 灰白 2.5Y7／1		ユビオサエ・ナデ／ナデ。炭素は剥離。	
144	SD201-下層	瓦器	椀	—	—	5.0	石・長・灰／粗・細	外) 灰 5Y4／1 断) 黄灰 2.5Y6／1		ユビオサエ・ナデ／ナデ・ヘラミガキ。高台貼付し両側をナデ。炭素吸着良好。	
145	SD201-中層	瓦器	椀	—	—	4.0	石・長・チ／粗・細	外) にぶい黄橙10YR7／3 断) にぶい黄橙10YR7／3		外底ユビオサエ／内底ナデ。高台貼付し両側をユビオサエ・ナデ。器面の炭素吸着を認めない。	
146	SD201-上層	瓦器	椀	—	—	4.4	石・長・雲／粗・細	外) 灰白 2.5Y7／1 断) 灰白 2.5Y7／1		外底ユビオサエ／内底ナデ。高台貼付し両側をナデ。炭素は剥離。	
147	SD201-上層	瓦器	椀	—	—	—	石・長・赤／粗・細	外) 灰5Y4／1 断) 灰白2.5Y7／1		口縁部に2段のヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ。炭素吸着良好。	
148	SD201-下層	瓦器	皿	10.2	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	外) 灰白 2.5Y7／1 断) 灰白 2.5Y7／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。	
149	SD201-下層	瓦器	皿	9.8	1.6	5.0	石・長／粗・細	外) 黒N2／断) 黄灰 2.5Y6／1		口縁部ヨコ方向の強いユビナデ、外底ユビオサエ・ナデ／ナデ。炭素吸着良好。	
150	SD201	白磁	碗	15.2	—	—	—	外) 灰白N8／断) 灰白N8／	—	灰白色の釉。	
151	SD201-中層	白磁	碗	—	—	6.4	—	外) 灰白N8／断) 灰白N8／	—	灰白色の釉。底部と外面下位無釉。	白磁碗Ⅴ類 12C

Tab.7　遺物観察表 (6)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
152	SD201-東部攪乱	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 7.5YR6／2 断) 灰白 10Y7／1	—	灰オリーブ色の釉。外面縦方向の櫛描文、内面上位に沈線、下位に櫛描文。	同安窯系 12C後半～13C前半
153	SD201	青磁	碗	—	—	6.8	—	外) 明オリーブ灰2.5GY7／1 断) 灰白N8／	—	内底周縁に段。灰オリーブ色の釉。底部と外面下半無釉。	龍泉窯系
154	SD201	青白磁	皿	—	—	—	—	外) 明青灰 5B7／1 断) 灰白N8／	—	内面に櫛描き文様。明青灰色を帯びる透明の釉。	中国産11C
155	SD201-上層	陶器	碗	—	—	—	黒色粒	外) 黒N1.5／ 断) 黄灰2.5Y6／1	—	天目形。黒色でガラス質の釉。露胎部に鉄錆。	建窯系 13C後半～14C
156	SD201	陶器	碗	—	—	—	石・長／粗	外) 黒褐 10YR2／2 断) 浅黄橙 10YR8／3	—	天目形。黒褐色の釉。	瀬戸
157	SD201	陶器	碗	11.8	—	—	石・長・黒／細	外) にぶい褐 7.5YR5／3 断) 灰白 10YR8／2	—	天目形。にぶい褐色の釉。外面下位無釉。露胎部に鉄錆。	瀬戸
158	SD201-東部攪乱	陶器	碗	—	—	—	石・長・黒／細	外) 黒 7.5YR2／1 断) 灰白 10YR8／2	—	天目形。黒褐色の釉。外面下位無釉。	瀬戸
159	SD201-上層	陶器	不明	15.2	—	—	石・長・黒／細	外) 灰黄 2.5Y6／2 断) 灰白 2.5Y7／1	—	回転ナデ／回転ナデ。端部は強いナデにより凹状。	
160	SD201-上層	須恵器	鉢	24.0	—	—	石・長・雲／粗・細	灰白2.5Y8／2		回転ナデ／回転ナデ。	
161	SD201-上層	須恵器	鉢	—	—	12.2	石・長・雲／粗	灰白N7／	硬	ヨコナデ／ナデ。高台貼付し両側を回転ナデ。	
162	SD201-東部攪乱	陶器	擂鉢	—	—	14.4	石・長・黒／粗	外) 灰褐 7.5YR4／2	—	体部ユビオサエ・ヨコナデ／回転ナデ・摺目。外底凹凸面。	備前14C以降
163	SD201-中層	須恵器	擂鉢	—	—	13.8	石・長・黒／粗	外) 黄灰 2.5Y4／1 断) 黄灰 2.5Y6／1		底部脇ヨコ方向のイタナデ／ナデ・摺目。外底周縁部ナデ。	備前 間壁Ⅲ期 乗岡中世2期 13C末～14C前半
164	SD201	陶器	擂鉢	—	—	5.7	石・長・黒／粗	外) 褐灰 7.5YR4／1 内) 灰N6／	—	体部ユビオサエ・ヨコナデ、底部脇斜方向のナデ／回転ナデ・摺目。外底凹凸面。	備前 間壁Ⅲ期 乗岡中世2期 13C末～14C前半
165	SD201-上層	陶器	甕	38.4	—	—	石・長・黒／粗	外) 灰オリーブ 7.5Y4／2 内) 灰褐 7.5YR4／2 断) 褐灰 10YR6／1	—	外面に灰オリーブ色の自然釉がかかる。	常滑焼 赤羽・中野編年3～4型式 12C第4四半期～13C第1四半期
166	SD201-上層	陶器	甕	—	—	15.8	石・長・黒／粗	外) 灰褐 5YR4／2 断) 褐灰 10YR6／1	—	底部脇ユビオサエ・タテハケ／横方向のイタナデ。内底に淡緑色の自然釉。	常滑焼 165と同一固体か。
167	SD201-上層	陶器	甕	—	—	—	石・長・黒／粗	外) 灰褐 7.5YR4／2 内) 灰オリーブ 7.5Y6／2 断) 褐灰 10YR6／1	—	回転ナデ／回転ナデ。口縁端部内側に強い回転ナデ。内面に自然釉がかかる。	常滑焼 赤羽・中野編年3～4型式 12C第4四半期～13C第1四半期
168	SD201-中層	陶器	甕	—	—	—	石・長・灰黒／粗	外) 灰褐 5YR4／2 断) 黄灰 2.5Y6／1	—	ナデ／ナデ。内面に灰オリーブ色の自然釉が掛かる。	常滑焼 赤羽・中野編年3型式12C第4四半期
169	SD201	陶器	甕	—	—	—	石・長・灰黒／粗	外) 灰褐 5YR4／2 断) 黄灰 2.5Y6／1	—	体部格子状のタタキ目／横方向のイタナデ。体部内面に接合痕明瞭。	常滑焼
170	SD201-東部攪乱	土師質土器	甕	28.0	—	—	石・長・雲・チ／粗	にぶい橙 5YR6／4		口縁部ユビオサエ・ナデ・ヨコハケ／ナデ。端部は強いナデにより凹状。	
171	SD201	瓦質土器	鍋	—	—	—	石・長・チ／粗	灰N5／		摩耗し調整不明。鍔は貼付。	外面に煤。
172	SD201-東部攪乱	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・チ／粗	外) オリーブ黒 5Y3／1 断) 黄灰 2.5Y6／1		脚部。外面ナデ。	外面に煤。13C後半～14C

Tab.8　遺物観察表 (7)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
173	SD201-上層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・雲／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		脚部。外面ナデ。	
174	SD201-中層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・雲・チ／粗	にぶい黄橙 10YR7／4		脚部。外面ユビオサエ・ナデ。	
175	SD201	土師質土器	土錘	全長 4.8	全幅 2.2	孔径 0.7	石・長・灰	暗赤褐 2.5YR3／3	軟	外面ナデ。	
176	SD201	土師質土器	土錘	全長 〔3.3〕	全幅 1.0	孔径 0.4	石・長・チ・灰	にぶい橙 2.5YR6／4		外面ナデ。	
177	SD201	土師質土器	土錘	全長 〔2.4〕	全幅 1.1	孔径 0.6	石・長・雲・チ	にぶい橙 7.5YR7／3		外面ナデ。	
182	SD401-下層	土師質土器	杯	12.4	3.8	6.2	石・長・チ・赤／粗・細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
183	SD401-下層	土師質土器	杯	11.2	3.4	6.1	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底周縁に段、中央渦状ロクロ目後ユビオサエ。	
184	SD401-下層	土師質土器	杯	11.8	4.6	6.0	石・長・雲／粗・細	にぶい赤橙 10R6／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
185	SD401-中層	土師質土器	杯	12.0	4.1	6.0	石・長・チ・赤褐・灰／細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
186	SD401-下層	土師質土器	杯	11.7	4.1	5.6	石・長・チ・灰／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
187	SD401-下層	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・赤／細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。	
188	SD401-上層	土師質土器	杯	13.4	4.1	6.0	石・長・雲／細	橙7.5YR7／6	軟	摩耗し調整不明。	
189	SD401-上層	土師質土器	杯	12.0	3.3	7.0	石・長・チ／粗	にぶい黄橙 10YR6／4	軟	磨耗し調整不明。	
190	SD401-下層	土師質土器	杯	12.6	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
191	SD401-下層	土師質土器	杯	10.2	—	—	石・長・チ／細	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
192	SD401-中層	土師質土器	杯	11.0	—	—	石・長・雲・赤／細	浅黄橙 7.5YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。	
193	SD401-上層	土師質土器	杯	14.0	—	—	石・長・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	磨耗し調整不明。	
194	SD401-下層	土師質土器	杯	11.6	—	—	石・長・雲・赤風／細	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。	
195	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	8.2	石・長・チ・赤風／細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
196	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	6.9	石・長・チ／細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状。	
197	SD401-中層	土師質土器	杯	—	—	7.7	石・長・チ・赤／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
198	SD401-中層	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・雲・赤／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
199	SD401-下層	土師質土器	杯	—	—	7.6	石・長・灰・赤風／粗	橙 2.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
200	SD401	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・長・チ・赤風／粗・細	橙 5YR7／8		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。	
201	SD401-中層	土師質土器	杯	—	—	7.1	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
202	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段の強いロクロ目。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
203	SD401-中層	土師質土器	杯	—	—	9.0	石・長・雲・赤褐／粗	橙 2.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
204	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	6.0	石・長・雲・チ／粗	灰黄褐 10YR6／2		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目後ユビオサエ。	
205	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	6.5	石・赤風／細	浅黄2.5Y7／3		磨耗し調整不明。内底周縁と外底脇に強いユビオサエ。	
206	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	4.1	石・長・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	

Tab.9　遺物観察表 (8)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
207	SD401-下層	土師質土器	杯	—	—	6.0	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段、中央ユビオサエ。	
208	SD401-中層	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。外底回転糸切り痕。	
209	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	6.1	石・長・雲・橙／粗・細	淡橙 5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
210	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。底部円盤状。	
211	SD401-下層	土師質土器	杯	—	—	6.2	石・長・灰黒／粗	淡橙 5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
212	SD401-下層	土師質土器	杯	—	—	7.6	石・長・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
213	SD401-上層	土師質土器	小杯	—	—	3.4	石・長・雲／細	にぶい橙 7.5YR7／4		摩耗し調整不明。底部円盤状。	
214	SD401-下層	土師質土器	椀	—	—	5.8	石・長・チ・灰黒／粗	橙 5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
215	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.2	1.6	3.8	石・長・赤風／細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
216	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.6	1.6	4.4	石・長・雲・橙／粗	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	磨耗し調整不明。内底周縁溝状。	
217	SD401-上層	土師質土器	小皿	7.2	1.7	4.6	石・長・雲・赤風／粗・細	橙 5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
218	SD401-下層	土師質土器	小皿	7.4	1.7	5.6	石・長・雲／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
219	SD401-下層	土師質土器	小皿	9.4	1.7	5.4	石・長・雲・チ／粗	淡赤橙 2.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
220	SD401-上層	土師質土器	小皿	5.8	1.5	4.4	石・長／細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
221	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.4	1.4	4.0	石・長・橙／細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
222	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.6	1.5	4.8	石・長・雲・赤／粗	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
223	SD401-上層	土師質土器	小皿	7.0	1.8	5.4	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	淡橙 5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
224	SD401-中層	土師質土器	小皿	7.5	1.6	5.4	石・長・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
225	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.8	1.2	4.2	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底強い渦状のロクロ目。	
226	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.6	1.5	5.2	石・長・赤風／細	橙 5YR7／8		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状。	
227	SD401-下層	土師質土器	小皿	6.6	1.8	4.4	石・長・雲・橙／粗・細	淡橙 5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
228	SD401-上層	土師質土器	小皿	6.8	1.9	4.2	石・長・灰・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状ロクロ目後中央にユビオサエ。	
229	SD401-上層	土師質土器	小皿	7.2	1.7	4.4	石・長・灰黒／細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央にユビオサエ。	
230	SD401-下層	土師質土器	小皿	6.6	1.8	4.6	石・長・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段、中央ユビオサエ。	
231	SD401-中層	土師質土器	小皿	—	—	4.8	石・長・雲・チ／粗・細	橙 2.5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段、中央ユビオサエ。	
232	SD401-下層	瓦器	椀	14.2	—	—	石・長・灰／粗	外) 灰白N7／断) 灰 5Y4／1		口縁部不定方向のナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ヨコナデ。厚手の器壁をもつ。	
233	SD401-下層	瓦器	椀	—	—	3.0	石・長／粗	外) 灰N5／断) 灰白 2.5Y7／1		内面ミガキ。高台は貼付し両側面をヨコナデ。炭素吸着良好。	
234	SD401	瓦器	椀	—	—	2.6	石・長・赤風／粗・細	外) 灰白 2.5Y7／1 断) 灰白 2.5Y7／1		貼付高台。器面の炭素は剥離。	
235	SD401-上層	青磁	碗	—	—	6.0	—	外) オリーブ黄 5Y6／3 断) 灰白 7.5Y8／1	—	内底草花文。オリーブ色の釉。高台施釉。	龍泉窯系碗Ⅰ-4a類 12C後半～13C前葉。

Tab.10　遺物観察表 (9)

図版番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			胎土 (含有鉱物／粒度)	色調	焼成	技法 (外面／内面)・特徴	備考
				口径	器高	底径					
236	SD401-上層	青磁	碗	16.0	—	—	—	釉) 灰白 10Y7／2 断) 灰白 5Y 7／1	—	外面縦方向の櫛描文、内面上位に沈線、下位に櫛描文。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	同安窯系 碗Ⅰ-1b類 12C後半～13C前半
237	SD401-下層	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y5／3 断) 灰白 7.5Y7／1	—	灰オリーブ色の釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	龍泉窯系 碗Ⅰ類か。
238	SD401-下層	青磁	碗	13.8	—	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6／3 断) 黄灰 2.5Y6／1	—	外面鎬蓮弁文。釉は焼成不良気味でオリーブ褐色に発色する。	龍泉窯系 碗I-5b類 13C後半～14C前半
239	SD401	青磁	碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6／2 断) 灰白 7.5Y7／1	—	外面縦方向の櫛描文、内面櫛描文。底部付近無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	同安窯系 碗Ⅰ-1b類 12C後半～13C前半
240	SD401-中層	青磁	碗	—	—	—	—	外) 明緑灰 5GY8／1 断) 灰白 N8／	—	鎬蓮弁文。淡青色を帯びる半透明の釉。	龍泉窯系 碗Ⅲ-2類 13C後半～14C前半
241	SD401-上層	青磁	皿	9.6	—	—	—	外) 灰 10Y6／1 断) 灰 7.5Y6／	—	緑灰色を帯びる半透明の釉。	龍泉窯系 皿Ⅰ類 12C後半～13C前半
242	SD401-上層	白磁	碗	15.0	—	—	—	釉) 灰白 10Y8／1 断) 灰白 N8／	—	灰白色の釉。	白磁碗Ⅳ類 12C
243	SD401-中層	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰白 10Y8／1 断) 灰白 N8／	—	釉は僅かに黄色を帯びる。	白磁碗Ⅳ類 12C
244	SD401-上層	白磁	碗	15.0	—	—	—	外) 灰 7.5Y6／1 断) 灰白 7.5Y 7／1	—	オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	白磁碗Ⅳ類 12C
245	SD401-上層	白磁	碗	—	—	—	—	外) 灰白 N8／ 断) 白色	—	灰白色を帯びる半透明の釉。	白磁碗Ⅴ類 12C
246	SD401-中層	白磁	皿	—	—	—	—	外) 灰白 2.5GY8／1 断) 灰白 N8／	—	灰白色の釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。底部無釉。	白磁碗Ⅷ類 12C～13C 初頭
247	SD401-上層	白磁	碗	—	—	5.2	—	灰白 10Y8／1	—	灰白色の釉。高台無釉。	白磁碗Ⅳ類 12C
248	SD401-中層	須恵器	鉢	25.0	—	—	石・長・灰／粗	褐 7.5YR4／1	硬	回転ナデ／回転ナデ。	東播系 13C
249	SD401-上層	須恵器	鉢	25.4	—	—	石・長／粗	灰 N6／	硬	ヨコナデ／ヨコナデ。	東播系
250	SD401-中層	須恵器	鉢	28.0	—	—	石・長・黒／粗	灰白 N7／		回転ナデ／回転ナデ。	
251	SD401-上層	須恵器	甕	—	—	—	石・長／粗・細	外) 褐灰 10YR5／1 内) 褐灰 7.5YR4／1 断) 灰白 2.5Y7／1	硬	タタキ／ヨコ方向のイタナデ。外面平行状のタタキ後、丸に菊花状のタタキ。	
253	SD401-上層	土師質土器	土錘	全長 〔3.1〕	全幅 1.2	孔径 0.4	石・長・灰／粗	赤褐 10R4／4		外面ナデ。	
254	SD401-下層	瓦質土器	羽釜	24.0	—	最大径 29.0	石・長・灰／粗	黄灰 2.5Y4／1		口縁部回転ナデ、体部ユビオサエ・ナデ／口縁部回転ナデ、体部ヨコナデ。外面口縁部直下に脚の剥離痕あり。	体部外面に煤。13C後半
255	SD401-上層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・チ・灰／粗	灰 5Y5／1		ユビオサエ・ナデ／回転ナデ。	13C後半～14C
256	SD401-上層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・灰／粗—多	灰 5Y6／1		脚部。外面ユビオサエ・ナデ。	13C後半～14C
257	SD401-上層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・雲・灰／粗	褐灰 10YR5／1		口縁部回転ナデ／口縁部回転ナデ、体部斜方向のナデ。鍔は接合部で剥離。	外面に煤。
258	SD401-下層	土師質土器	鍋	—	—	—	灰／粗	橙 5YR6／6		ナデ／ナデ。鍔は貼付し接合部をヨコナデ。	
259	SD401-下層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・灰／粗	灰 N4／		鍔部ヨコナデ／ナデ。	

Tab.11　遺物観察表（10）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
260	SD401-中層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・灰／粗	灰N5／		鍔部ヨコナデ／ナデ。	13C後半～14C
261	SD401-中層	須恵器	杯	12.0	—	—	石・長・黒／粗・細	灰7.5Y6／1		回転ナデ／回転ナデ。	古代
262	SD401-中層	須恵器	杯	10.6	—	—	石・長・黒／粗・細	灰白N7／	硬	回転ナデ／回転ナデ。	古代
263	SD401-上層	須恵器	壷	—	—	10.8	石・長・雲・黒／粗	青灰5PB5／1	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底周縁部回転方向のナデ、中央不定方向のナデ。	古代
264	SD401-中層	須恵器	蓋	—	—	—	石・長・黒／粗	灰7.5Y6／1	硬	周縁部口縁部ナデ、天井部回転ケズリ／周縁部回転ナデ。	古代
265	SD401-上層	須恵器	壷	9.4	—	—	石・長／粗	灰N4／	硬	体部ヨコナデ／回転ナデ。	
266	SD401-上層	須恵器	壷	—	—	—	石・長／粗	灰白2.5Y8／1	やや軟	口縁部回転ナデ、体部格子状タタキ目／口縁部回転ナデ、体部青海波状タタキ目。	古代
267	SD401-上層	土師質土器	杯	—	—	10.2	石・長・雲・赤風／粗・細	浅黄橙10YR8／3		摩耗し調整不明。高台貼付。	古代
268	SD401-中層	土師器	皿	17.2	1.5	13.0	石・長・チ／粗・細	浅黄橙10YR8／3		磨耗し調整不明。口縁部内面に溝状の段。	古代
269	SD401-上層	土師質土器	甕	22.0	—	—	石・長・雲・赤・赤色透明／粗	にぶい橙7.5YR6／4		口縁部ユビオサエ後回転ナデ／口縁部ヨコハケ・端部回転ナデ。	古代
270	SD401-上層	土師質土器	甕	—	—	—	石・長・雲・赤・赤色透明／粗	明赤褐5YR5／6		口縁部ユビオサエ後回転ナデ、頸部回転ナデ、体部斜方向のハケ／ナデ。	古代
271	SR201-上層	土師質土器	杯	11.6	3.3	7.2	石・長・雲／粗・細	淡橙5YR8／4	硬	回転ナデ／回転ナデ。外面強い多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
272	SR201-上層	土師質土器	杯	—	—	7.4	石・長・チ・赤風／粗・細	にぶい橙7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外面強い多段のロクロ目。外底回転糸切り後、中央に直線方向の圧痕。内底周縁に段。	
273	SR201-上層	土師質土器	杯	14.6	4.0	7.5	石・長・雲／粗	浅黄橙7.5YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
274	SR201-上層	土師質土器	小皿	6.6	1.6	5.6	石・長／細	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
275	SR201-上層	土師質土器	小皿	7.0	1.9	5.9	石・長・灰／粗・細	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
276	SR201-上層	土師質土器	小皿	7.4	1.8	5.8	石・長・雲・赤風／細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
277	SR201-上層	土師質土器	小皿	8.2	1.4	5.4	石・長／細	橙5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状、中央に直線方向のナデ。	
278	SR201-上層	土師質土器	小杯	7.6	2.7	4.2	石・長・雲・チ／粗	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	
279	SR201-上層	土師質土器	小皿	7.9	1.7	5.0	石・長・雲／粗・細	橙7.5YR7／6	軟	摩耗し調整不明。	
280	SR201-上層	須恵器	鉢	—	—	—	石・長・雲・灰／粗	灰白N7／		回転ナデ／回転ナデ。内面強いロクロ目。	
281	SR201-上層	須恵器	鉢	21.0	—	—	石・長・黒／粗・細	灰5Y6／1	硬	回転ナデ／回転ナデ。	東播系13C
282	SR201-上層	土師質土器	土錘	全長〔2.9〕	全幅1.1	孔径0.6	石・長／粗・細	にぶい赤褐5YR5／4		外面ナデ。	
283	SR201-上層	土師質土器	土錘	全長〔3.3〕	全幅2.3	孔径0.7	石・長・灰／粗・細	橙2.5YR6／6		外面ナデ。	
284	SR201-上層	土師質土器	羽釜	21.2	—	—	石・長・雲・灰・橙／粗	橙5YR6／6		口縁部回転ナデ、体部斜方向のタタキ目／口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ。鍔部上下を回転ナデ。	播磨型15C
285	SR201-上層	瓦質土器	鍋	—	—	—	石・長・チ／粗	灰白N7／	軟	ユビオサエ・ヨコナデ／ヨコナデ。	外面に煤。
286	SR201-上層	瓦質土器	鍋	—	—	—	石・長・雲・灰／粗	灰白N7／		ユビオサエ・ヨコナデ／口縁部回転ナデ、体部ヨコナデ。	外面に煤。
287	SR201-上層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・灰／礫・粗	灰5Y5／1	軟	脚部は剥離。口縁部ヨコナデ／ナデ。鍔部上下をヨコナデ。	13C後半～14C
288	SR201-上層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	灰／礫・粗	外）灰N4／断）灰白5Y7／1	軟	摩耗し調整不明。鍔部を欠損。脚部は剥離し接合痕が残る。	13C後半
289	SR201-上層	土師質土器	羽釜	—	—	—	石・長・雲・灰・橙／粗	にぶい赤褐5YR5／4		口縁部回転ナデ／口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ。鍔部上下を回転ナデ。口縁端部凹状。	播磨型15C
290	SR201-上層	陶器	甕	32.0	—	—	石・長・黒／粗、長／礫	外）オリーブ褐2.5Y4／3断）灰白10YR8／1	—	ナデ／ナデ。口縁部から肩部に緑色を帯びる自然釉。器面に長石の吹き出しあり。	常滑焼赤羽・中野編年3型式12C第4四半期

Tab.12　遺物観察表（11）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
291	SR201-上層	陶器	甕	50.0	—	—	石・長・黒・灰／粗	外）暗オリーブ5Y4／3 断）にぶい赤褐2.5YR4／3	—	ナデ／ナデ。暗オリーブ色の自然釉がかかる。	常滑焼 赤羽・中野編年3～4型式 12C第4四半期～13C第1四半期
292	SR201-上層	白磁	水注	15.4	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8／1 断）灰白N8／	—	回転ナデ／回転ナデ。内外面強いロクロ目。明緑灰色を帯びる半透明の釉。	中国産 12～13C
293	SR201-上層	青磁	皿	12.0	—	—	—	外）明オリーブ灰2.5GY7／1 断）灰白5Y7/1	—	明オリーブ灰色の釉。外面下位無釉。	龍泉窯系
294	SR201-下層	土師質土器	杯	15.0	3.7	7.6	石・長・灰／粗・細	淡橙5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
295	SR201-下層	土師質土器	杯	15.2	3.8	8.2	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
296	SR201-下層	土師質土器	杯	13.4	4.6	6.7	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙7.5YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底ナデ。	
297	SR201-下層	土師質土器	杯	14.8	4.2	7.6	石・長・雲・赤風／粗	にぶい橙7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底細かい渦状のロクロ目。	
298	SR201-中層	土師質土器	杯	—	—	6.0	石・長・チ／粗・細	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
299	SR201-下層	土師質土器	杯又は椀	—	—	6.2	石・長・雲／細	浅黄橙7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。内底強い渦状のロクロ目。	
300	SR201-中層	土師質土器	杯	—	—	8.2	石・長・雲・赤風／粗・細	灰白10YR8／2	軟	摩耗し調整不明。	
301	SR201-下層	土師質土器	椀	13.0	—	—	石・長／粗・細	にぶい橙5YR7／4	軟	回転ナデ／回転ナデ。	
302	SR201-下層	土師質土器	椀	—	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。貼付高台。	
303	SR201-中層	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙7.5YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
304	SR201-下層	土師質土器	小杯	—	—	5.0	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙7.5YR8／3		摩耗し調整不明。底部は円盤状で外方へ張り出す。	
305	SR201-中層	土師質土器	小杯	—	—	4.4	石・長・雲／細	灰白10YR8／2	軟	摩耗し調整不明。底部は円盤状で外方へ張り出す。	
306	SR201-中層	土師質土器	小皿	5.4	1.4	4.8	石・長・雲・赤風／細	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段、中央に直線方向のナデ。	
307	SR201-下層	土師質土器	小皿	8.0	1.7	5.6	石・長・雲・チ／粗	淡赤橙2.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
308	SR201-中層	土師質土器	小皿	8.0	1.7	4.8	石・長／細	浅黄橙7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
309	SR201-中層	土師質土器	小皿	8.6	1.7	5.6	石・長・灰黒／粗	橙2.5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
310	SR201-下層	土師質土器	小皿	8.4	1.4	5.6	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
311	SR201-下層	土師質土器	小皿	6.4	1.2	5.6	石・長・雲・赤風／粗・細	浅黄橙7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
312	SR201-中層	土師質土器	小皿	8.8	1.5	5.8	石・長・灰／粗・細	橙7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底回転ナデ後直線方向のナデ。	
313	SR201-中層	土師質土器	小皿	7.8	1.8	5.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り後、中央に直線方向の圧痕。	
314	SR201-下層	土師質土器	小皿	8.0	1.3	5.2	石・長・赤風／粗	にぶい橙5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向のナデ。	
315	SR201-下層	土師質土器	小皿	8.0	1.4	5.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
316	SR201-下層	土師質土器	小皿	8.0	1.6	5.6	石・長・チ／粗	にぶい橙7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り後、中央に直線方向の圧痕。	
317	SR201-下層	土師質土器	小皿	9.4	1.8	6.0	石・長・チ・赤透／粗・細	にぶい橙7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
318	SR201-下層	土師質土器	小皿	7.4	1.5	5.3	石・長・雲・チ／粗・細	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
319	SR201-下層	土師質土器	鉢	27.4	—	—	石・長・雲・チ／粗	橙5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	外面に煤。
320	SR201-中層	土師質土器	鉢	26.4	—	—	石・長・チ・赤風／粗	淡橙5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。	

Tab.13　遺物観察表（12）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
321	SR201-下層	土師質土器	鉢	—	—	11.2	石・長・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／3		ヨコナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
322	SR201-下層	土師質土器	鉢	—	—	12.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目後直線方向の強いナデ。	
323	SR201-下層	土師質土器	鉢	—	—	—	石・長・赤風・灰黒／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。	外面全体に強い煤。
324	SR201-下層	土師質土器	鉢	—	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR6／4	軟	摩耗し調整不明。外面強いロクロ目。	
325	SR201-中層	瓦器	椀	16.0	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	外）にぶい黄橙 10YR7／2 断）にぶい黄橙 10YR7／2		口縁部回転ナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。内底に平行状の暗文。	
326	SR201-下層	瓦器	椀	15.8	—	—	石・長・チ・赤風／粗	外）にぶい黄橙 10YR7／2 断）にぶい黄橙 10YR7／2		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。	
327	SR201-中層	瓦器	椀	16.0	—	—	石・長・灰／粗・細	外）黄灰 2.5Y5／1 断）黄灰 2.5Y6／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。	
328	SR201-下層	瓦器	椀	—	—	—	石・長・チ・赤風／粗	外）灰黄褐 10YR6／2 断）灰黄褐 10YR6／2		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。	
329	SR201-下層	瓦器	椀	15.5	4.5	4.0	石・長／粗	外）暗灰 N3／ 断）灰白 5Y7／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素吸着良好。	
330	SR201-中層	瓦器	椀	—	—	6.0	石・長・チ・赤風／粗	外）にぶい黄橙 10YR7／2 断）にぶい黄橙 10YR7／2		外底ユビオサエ・ナデ／内底ナデ。高台貼付し両側をヨコナデ。炭素は剥離。	
331	SR201-中層	瓦器	椀	—	—	5.6	石・長・チ・赤風／粗・細	外）灰黄 2.5Y7／2 断）灰黄 2.5Y7／2		外底ユビオサエ・ナデ／内底ナデ・ミガキ。高台貼付し両側をユビオサエ・ヨコナデ。炭素は剥離。内底に平行状の暗文。	
332	SR201-下層	瓦器	椀	—	—	4.6	石・長・灰／	外）灰 5Y5／1 断）灰黄 2.5Y7／2		ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。高台貼付し両側をユビオサエ・ヨコナデ。内面炭素吸着良好、外面は剥離。内底に平行状の暗文。	
333	SR201-下層	白磁	碗	—	—	—	石・長・黒／粗	外）灰白 5Y8／1 断）灰白 2.5Y8／2	—	釉は被熱し変質。	2次被熱。
334	SR201-中層	須恵器	甕	60.0	—	—	石・長・黒・灰／粗	外）暗灰 N3／ 断）灰 N4／		口縁部ヨコナデ、頸部ユビオサエ・ヨコナデ、肩部タタキ・ナデ／ヨコナデ。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面に接合痕明瞭。口縁部から肩部に自然釉。	
335	SR201-中層	瓦質土器	羽釜	22.4	—	—	石・長・チ・灰／礫・粗	灰 5Y5／1		脚部は剥離。口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ヨコハケ。鍔部上下をヨコナデ。	外面に煤。13C後半～14C
336	SR201-下層	瓦質土器	羽釜	22.4	—	—	石・長・灰／礫・粗	灰 5Y5／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ヨコナデ。鍔部下側をユビオサエ・ヨコナデ。	口縁部外面に煤。14C
337	SR201-下層	須恵器	蓋	12.0	—	—	石・長・黒／細	灰 5Y6／1	硬	周縁部回転ナデ、天井部回転ケズリ／回転ナデ。	古代
338	SR201-下層	須恵器	杯	—	—	6.0	石・長／粗・細	灰 N5／	硬	外底周縁ヘラ切り後回転方向のナデ、中央不定方向のナデ／内底周縁回転ナデ、中央不定方向のナデ。	古代
339	SR201-中層	土師質土器	土錘	全長〔2.7〕	全幅 1.2	孔径 0.6	石・長／粗・細	赤褐 10R5／3		外面ナデ。	
342	SR201-集石下	土師質土器	杯	17.6	—	—	石・長・チ／粗	にぶい黄橙 10YR6／3		回転ナデ／回転ナデ。	
343	SR201-集石下	土師質土器	小皿	7.6	1.6	5.0	石・長・雲・赤風／粗	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
344	SR201-集石下	土師質土器	小皿	7.2	1.3	4.4	石・長・チ・赤風／粗	橙 2.5YR6／6	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
345	SR201-集石下	土師質土器	小杯	—	—	4.4	石・長・雲・赤風／細	浅黄橙 10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	

Tab.14　遺物観察表（13）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
346	SR201-集石下	須恵器	鉢	—	—	—	石・長・雲／粗	灰白 5Y7／1		回転ナデ／ヨコナデ。	
347	SR201-集石下	土師質土器	椀	—	—	7.2	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。貼付高台。	
348	SR201-集石下	白磁	碗	—	—	6.8	—	外）灰白 10Y8／1 断）灰白N8／	—	灰白色の釉。外面下半無釉。	白磁碗Ⅳ類 12C
349	SR201-集石下	瓦器	椀	—	—	—	石・長／粗・細	外）灰N4／断）灰白 2.5Y7／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素吸着良好。	
350	SR201-集石下	瓦器	椀	—	—	5.4	石・長・チ／粗・細	外）灰黄 2.5Y7／2 内）灰5Y4／1 断）灰黄 2.5Y7／2		外底ユビオサエ・ナデ／内底ナデ・ミガキ。高台貼付し両側をヨコナデ。内面炭素吸着良好、外面は剥離。内底に平行状の暗文。	
352	SR201-土器集中1	土師質土器	杯	14.2	3.9	7.5	石・長・チ／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕後、中央に直線方向の圧痕。	内面に煤。
353	SR201-土器集中1	土師質土器	杯	13.4	4.3	7.0	石・長・雲・チ／粗・細	橙5YR7／6	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
354	SR201-土器集中1	土師質土器	杯	15.0	—	—	石・長・雲・灰／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。	
355	SR201-土器集中1	土師質土器	杯	14.2	3.8	6.6	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底細かい渦状のナデ。	
356	SR201-土器集中1	土師質土器	杯	14.4	4.2	7.4	石・長・雲・チ／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底乱れの強いナデ。	
357	SR201-土器集中1	土師質土器	杯	18.4	—	—	石・長・雲／粗	黒褐 7.5YR3／2		回転ナデ／回転ナデ。	外面全体に強い煤。
358	SR201-土器集中1	土師質土器	小皿	8.0	1.5	4.4	石・長・雲・チ／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底斜方向のナデ。	
359	SR201-土器集中1	土師質土器	小皿	8.8	2.7	5.6	石・長・チ・赤風／粗・細	淡橙5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
360	SR201-土器集中1	土師質土器	小皿	9.0	1.4	6.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
361	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	14.8	4.1	8.0	石・長・チ／粗	褐灰 7.5YR4／1		ヨコナデ／回転方向のナデ。外底糸切り痕。	
362	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	16.6	—	—	石・長・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。内底周縁に段。	
363	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	6.0	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
364	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	7.6	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
365	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	7.2	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底直線方向のナデ。	
366	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	7.2	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。内底渦状のロクロ目。	
367	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	8.4	石・長・雲・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。	
368	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
369	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	7.2	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目後直線方向のナデ。	
370	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	6.2	石・長・雲・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／3	軟	摩耗し調整不明。底部円盤状。	

Tab.15　遺物観察表（14）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
371	SR201-土器集中2	土師質土器	杯	—	—	6.8	石・長・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
372	SR201-土器集中2	土師質土器	小皿	9.4	1.9	7.0	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
373	SR201-土器集中2	瓦器	椀	16.0	—	—	石・長・チ／粗・細	外）灰黄 2.5Y7／2 断）灰黄 2.5Y7／2		口縁部回転ナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。炭素は剥離。	
374	SR201-土器集中2	土師質土器	高杯	—	—	—	石・長・雲・チ・赤／粗	にぶい橙 7.5YR7／3		脚部。外面強いロクロ目。	
375	SR201-土器集中2	土師質土器	鉢	—	—	9.6	石・長・雲・チ／粗	淡橙 5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。内底渦状のロクロ目。	
376	SR201-土器集中2	須恵器	鉢	18.4	—	—	石・長・黒／細	黄灰 2.5Y7／2		回転ナデ／回転ナデ。片口はユビオサエ。口縁端部は回転ナデにより面取る。	
377	SR501	土師質土器	小杯	—	—	6.2	石・長・雲・チ／粗・細	灰白 10YR8／2		摩耗し調整不明。底部は円盤状で外方へ張り出す。	
378	SR501	陶器	擂鉢	—	—	15.0	石・長・黒／粗・細、長／礫	赤 10R5／6	—	ヨコナデ／ナデ・摺目。	備前 間壁ⅢB～ⅣA期14C後半
379	SR501	瓦質土器	鉢	24.0	8.3	10.0	石・長・灰・赤風／粗・細	灰白 N7／		ユビオサエ・ナデ／ナデ。内面放射状の櫛目。	13C末～14C
380	SR501	瓦質土器	鍋	20.6	—	—	白・灰／粗	灰白 7.5Y7／1		ユビオサエ・ナデ／ナデ。	外面に煤。在地系14C
381	P110	土師質土器	杯	14.8	3.2	8.0	石・長・チ・赤風／粗	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
382	P110	土師質土器	椀	15.3	5.7	6.2	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		体部ナデ、底部回転ケズリ／ナデ。高台貼付。	
383	P310	土師質土器	杯	13.2	—	—	石・長・チ・赤風／粗	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。	
384	P123	土師質土器	杯	—	—	6.4	石・長・チ・赤風／細	浅黄橙 10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。	
385	P123	土師質土器	杯	—	—	8.2	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
386	P125	土師質土器	杯	—	—	8.0	石・長・雲・赤褐透明／粗	浅黄橙 10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。	
387	P143	土師質土器	杯	—	—	10.4	石・赤風／細	橙 7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
388	P248	土師質土器	小皿	6.9	1.8	4.0	石・長・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、内底周縁溝状。	
389	P123	土師質土器	小皿	7.4	1.5	6.0	石・長・雲／細	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
390	P260	土師質土器	小皿	8.4	1.6	5.1	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
392	P216・P217	須恵器	鉢	—	—	—	石・長・チ／粗・細	灰白 5Y7／1		口縁部ヨコナデ／回転ナデ。	
393	P239	瓦質土器	羽釜	—	—	—	石・長・チ・灰黒／粗-多	灰白 5Y8／1		ユビオサエ・ナデ／ナデ。鍔は貼付。	外面に煤。14C～15C
394	P216・P217	土師質土器	土錘	全長〔3.1〕	全幅 1.2	孔径 0.6	石・長・雲・灰／粗	にぶい橙 7.5YR6／4		外面ナデ。	
395	P402	土師質土器	杯	13.0	3.8	7.6	石・赤風／細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央にユビオサエ。	
396	P402	土師質土器	杯	15.0	—	—	石・長・雲・チ／細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
397	P456	土師質土器	杯	14.4	—	—	石・長・チ・赤風／粗・礫	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。	
398	P462	土師質土器	杯	14.6	—	—	石・チ・灰黒／細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
399	P464	土師質土器	杯	15.0	—	—	雲・赤風・灰／粗・細	橙 5YR6／6	軟	磨耗し調整不明。	
400	P411	土師質土器	杯	—	—	8.4	石・長・雲・チ・赤風／粗	にぶい黄橙 10YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
401	P451	土師質土器	杯	—	—	7.2	石・長・チ／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目、外底回転糸切り痕、内底渦状の強いロクロ目。	
402	P401	土師質土器	小皿	7.6	1.5	5.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	

Tab.16　遺物観察表（15）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
403	P402	土師質土器	小皿	8.2	1.3	5.8	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
404	P417	土師質土器	小皿	8.2	1.6	6.0	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。外面に自然釉。	
405	P449	土師質土器	小皿	7.0	1.7	4.8	石・長・チ／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
406	P450	土師質土器	小皿	5.7	1.3	4.4	石・長・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
407	P466	土師質土器	小皿	7.6	1.7	4.4	石・雲・チ・赤風／粗・細	橙 2.5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
408	P519	土師質土器	小皿	8.0	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。	
409	P417	瓦器	椀	14.8	—	—	石・長・雲／粗・細	外）灰5Y4／1 断）黄灰 2.5Y6／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。	
410	P441	瓦質土器	鍋	18.4	—	—	石・長・チ・灰／粗	灰 5Y5／1		口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ナデ／口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	外面に煤。
411	P427	土師質土器	土錘	全長〔1.9〕	全幅 1.9	孔径 0.7	石・長／粗	にぶい橙 7.5YR7／4		外面ナデ。	
412	P437	土師質土器	土錘	全長〔3.2〕	全幅 1.2	孔径 0.4	石・長・灰／粗	明赤褐 5YR5／6		外面ナデ。	
413	P441	土師質土器	土錘	全長 4.0	全幅 1.1	孔径 0.6	石・長／粗	明赤褐 2.5YR5／6		外面ナデ。	
414	P448	土師質土器	土錘	全長〔1.9〕	全幅 0.9	孔径 0.4	石・長・赤風／粗	にぶい褐 7.5YR6／3		外面ナデ。	
415	P437	土器	製塩土器	—	—	—	1～3㎜大の須恵器砕片	灰白 10YR8／2		ユビオサエ・ナデ／チヂレ目。	
416	P459	土師質土器	杯	12.8	—	—	石・長・橙透／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／3		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
417	P459	土師質土器	杯	13.4	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。	
418	P459	土師質土器	杯	13.0	3.8	6.6	石・長・雲・チ・赤／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目、外底回転糸切り痕。	
419	P459	土師質土器	杯	11.8	3.6	6.4	石・長・雲・チ／粗	橙 5YR6／6		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目、外底回転糸切り痕、内底渦状の強いロクロ目。	
420	P459	土師質土器	杯	—	—	10.0	石・長／細	浅黄橙 10YR8／4	軟	磨耗し調整不明。内外面強いロクロ目。	
421	P459	土師質土器	杯	—	—	7.0	石・長・チ／細	浅黄橙 10YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
422	P459	土師質土器	小皿	—	—	4.8	石・長・チ／細	橙 5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
423	P459	土師質土器	小皿	6.6	1.9	4.2	石・長・橙透／粗	浅黄橙 10YR8／4	軟	磨耗し調整不明。	
424	P459	土師質土器	小皿	8.0	1.7	—	石・雲・チ・赤褐／粗・細	橙 5YR7／6	軟	磨耗し調整不明。	
425	P459	土師質土器	小皿	7.0	1.8	4.2	石・長・チ／粗	浅黄橙 10YR8／3	軟	磨耗し調整不明。外面強いロクロ目。	
426	P459	土師質土器	小皿	8.0	1.6	5.4	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7／3	軟	磨耗し調整不明。	
427	P459	土師質土器	小皿	6.5	1.9	4.2	石・雲・チ／粗・細	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
428	P459	土師質土器	小皿	8.4	1.6	6.1	石・チ・赤／粗	にぶい黄橙 10YR6／3	軟	磨耗し調整不明。	
430	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	8.4	3.7	6.4	石・長・雲・チ／細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
431	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	11.9	4.2	5.6	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外面多段の強いロクロ目。外底回転糸切り痕。内底渦状の強いロクロ目。	
432	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	10.6	3.4	6.2	石・長・赤風・灰／粗・細	にぶい橙 2.5YR6／4		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。外底回転糸切り痕。内底渦状の強いロクロ目。	
433	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	14.0	4.6	8.8	石・長・雲・チ・白／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。外底摩耗し調整不明。	
434	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	12.3	4.2	6.6	石・長・チ／粗	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。	
435	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	11.6	3.3	6.6	石・長・雲・灰／粗・細	にぶい赤橙 10R6／4	軟	摩耗し調整不明。	
436	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	12.0	3.9	6.6	石・長・灰／粗・細	橙 7.5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目。	

Tab.17　遺物観察表（16）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
437	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	14.0	4.1	6.6	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、中央に直線方向の圧痕。内底中央直線方向のナデ。	
438	Ⅳ区包含層	土師質土器	杯	12.0	3.3	7.0	石・長・雲・チ／粗・細	浅黄橙 10YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
439	Ⅱ区包含層	土師質土器	杯	13.0	—	—	石・長・灰／粗・細	橙 5YR7／8	軟	摩耗し調整不明。	
440	Ⅱ区包含層	土師質土器	杯	14.2	3.9	7.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
441	Ⅱ区包含層	土師質土器	杯	13.2	3.4	7.0	石・長・雲・チ／粗	橙 7.5YR7／6	軟	摩耗し調整不明。内底周縁に段。	
442	Ⅱ区包含層	土師質土器	杯	11.6	3.3	6.8	石・長・雲・赤風／粗・細	橙 5YR7／6	軟	摩耗し調整不明。	
443	Ⅱ区包含層	土師質土器	杯又は椀	—	—	7.0	石・長・チ／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
444	Ⅱ区包含層	土師質土器	不明	—	—	9.0	石・長・雲・チ／粗	浅黄橙 10YR8／3	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。底部に径1cmの焼成前穿孔。	
445	Ⅳ区包含層	土師質土器	小杯	—	—	3.6	石・長・赤風／粗・細	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状の強いロクロ目。	
446	Ⅲ区包含層	土師質土器	小皿	5.8	1.5	4.4	石・長・雲・チ／細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。内底ユビオサエ。	
447	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	5.6	2.2	5.0	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 5YR6／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁強い回転ナデにより凹む、中央は直線方向のナデ。	
448	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	7.0	1.6	4.6	石・長・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。	
449	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	6.5	1.4	5.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
450	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	6.8	1.6	4.2	石・長・雲・チ／細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
451	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	7.2	1.6	4.8	石・長・雲・チ／細	にぶい黄橙 10YR7／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
452	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	7.0	1.7	4.5	石・長・赤透／粗・細	橙 5YR7／6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央ユビオサエ。	
453	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	7.6	1.9	5.0	石・長・雲・赤風／粗・細	浅黄橙 10YR8／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
454	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	6.8	1.3	4.8	石・長・チ／細	にぶい橙 5YR6／3		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央ユビオサエ、直線方向のナデ。	
455	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	6.0	1.3	4.0	石・長・チ・赤風／粗・細	にぶい赤褐 2.5YR5／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
456	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	7.0	1.5	5.0	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁に段。	
457	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	7.6	1.4	4.6	石・長・雲・チ／細	にぶい橙 7.5YR7／4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
458	Ⅱ区包含層	土師質土器	小皿	7.0	1.2	5.4	石・長・雲・灰／粗	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。	
459	Ⅰ区包含層	土師質土器	小皿	7.3	1.4	5.4	石・長・雲・チ・赤風／粗	浅黄橙 7.5YR8／3	軟	摩耗し調整不明。	
460	Ⅰ区包含層	土師質土器	小皿	7.4	1.4	5.4	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR6／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
461	Ⅳ区包含層	土師質土器	小皿	6.8	1.4	4.0	石・長・灰／細	浅黄橙 7.5YR8／4		ユビオサエ・ナデ／口縁部回転ナデ、内底摩耗し調整不明。	京都系
462	Ⅱ区包含層	土師質土器	小皿	7.4	1.4	4.8	石・長・雲／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4	軟	摩耗し調整不明。外底回転糸切り痕。	
463	Ⅰ区包含層	土師質土器	小皿	7.4	1.4	5.4	石・長・雲・チ／粗・細	淡赤橙 2.5YR7／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り痕。	
464	Ⅰ区包含層	土師質土器	小皿	7.8	1.3	5.0	石・長／粗・細	浅黄橙 7.5YR8／4		回転ナデ／ナデ。外底回転糸切り後、中央に直線方向の圧痕。	
465	Ⅰ区包含層	土師質土器	小皿	10.2	1.9	8.0	石・長／粗・細	にぶい橙 5YR7／4	軟	摩耗し調整不明。	
466	Ⅱ区包含層	土師質土器	小皿	9.6	1.5	7.0	石・長・チ／粗	灰白 2.5Y8／1	軟	摩耗し調整不明。	
467	Ⅳ区包含層	青磁	碗	16.0	—	—	—	外）オリーブ灰 5GY5／1 断）灰白N7／	—	片彫りによる蓮弁文。	龍泉窯系 青磁碗B-2類 14C末～15C

Tab.18　遺物観察表（17）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
468	Ⅱ区 包含層	青磁	碗	—	—	—	黒色粒	外）灰オリーブ 7.5Y5／2 断）灰N6／	—	鎬蓮弁文。灰オリーブ色の半透明の釉。	龍泉窯系 青磁碗Ⅰ-5b類13C後半～14C前半
469	Ⅱ区 包含層	青磁	皿	10.0	—	—	黒色粒	外）明オリーブ灰 2.5GY7／1 断）灰白 N7／	—	明オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	龍泉窯系 青磁皿Ⅰ類 12C後半～13C前半
470	Ⅳ区 包含層	青磁	碗	—	—	5.6	黒色粒	外）暗オリーブ灰 2.5GY4／1 断）灰N6／	—	内底に圏線とスタンプによる草花文。暗オリーブ灰色の釉。高台内側まで施釉。	龍泉窯系 青磁碗C類
471	Ⅳ区 包含層	白磁	皿	—	—	4.8	—	外）灰白 5Y8／1 断）灰白N8／	—	内底に目痕。高台にアーチ状の抉りあり。灰白色を帯びる透明の釉。高台施釉。	白磁皿B群 15C前半
472	Ⅳ区 包含層	白磁	皿	—	—	7.0	黒色粒	外）灰白 2.5GY8／1 断）灰白N7／	—	平底。僅かに淡緑色を帯びる透明の釉。外底無釉。	白磁皿Ⅸ類 14C
473	Ⅳ区 包含層	瓦器	椀	12.8	3.5	4.2	石・長／粗	外）灰 5Y5／1 断）灰 5Y5／1		口縁部回転ナデ、体部～底部ユビオサエ・ナデ／ナデ・ミガキ。高台は貼付し両側をユビオサエ・ナデ。炭素は剥離。	
474	Ⅰ区 包含層	瓦器	椀	—	—	4.4	石・長・灰／粗・細	外）暗灰N3 ／ 断）灰白 2.5Y8／1		ナデ／ナデ・ヘラミガキ。高台貼付し両側をヨコナデ。炭素吸着良好。	
475	Ⅳ区 包含層	瓦器	椀	—	—	3.0	石・長・雲／粗・細	外）暗灰N3 ／ 断）灰 5Y5／1		外底ユビオサエ／内底ナデ・ミガキ。高台は貼付し両側をヨコナデ。	
476	Ⅳ区 包含層	瓦器	皿	10.0	—	—	石・長／粗・細	外）灰5Y5 ／1　断） 灰5Y5／1		ナデ／イタナデ。内面は炭素吸着良好、外面は剥離気味。	13C後半～14C前半
477	Ⅰ区 包含層	須恵器	鉢	28.0	—	—	石・長・灰／粗・細	灰白 5Y8／1		回転ナデ／回転ナデ。	
478	Ⅱ区 包含層	須恵器	擂鉢	20.2	—	—	石・長・赤・灰黒／粗・細	外）灰 5Y5／1 断）灰 5Y5／1		ヨコナデ／ヨコナデ・摺目。外面粘土帯接合部にユビオサエ。口縁はヨコナデし上方に拡張。	備前 間壁Ⅳ B期 乗岡中世4期 15C前半
479	Ⅳ区 包含層	陶器	甕	—	—	—	石・長・黒／粗・細	外）褐 7.5YR4／3 内）にぶい黄褐 10YR5／3 断）褐灰 10YR6／1	—	ナデ／ヨコナデ。内面に粘土帯接合痕明瞭。外面に格子状のタタキ目。	常滑焼
480	Ⅰ区 包含層	焼締陶器	甕	—	—	—	石・長・黒／粗	外）灰オリーブ 5Y6／2 内）灰褐 7.5YR4／2 断）褐灰 10YR5／1	—	ナデ／ユビオサエ・ヨコナデ。体部内面に粘土帯接合痕明瞭。外面に格子状のタタキ目。外面灰オリーブ色の自然釉。	常滑焼
481	SX1	陶器	皿	15.8	—	—	—	外）灰白N8 ／断）灰白 2.5GY8／1	—	灰釉溝縁皿。白濁する灰白色の釉。	肥前産 17C初頭
482	SX1	陶器	皿	15.0	—	—	—	外）灰白 2.5GY8／1 断）灰白N7／	—	灰釉溝縁皿。灰白色の釉。	肥前産 17C初頭
483	SX1	陶器	碗	—	—	4.8	石・長・黒／細	外）淡黄 2.5Y8／3 断）灰黄褐 10YR5／2	—	釉は焼成不良で白濁。外面下半無釉。	
484	SX1	陶器	皿	—	—	4.2	—	外）にぶい褐 7.5YR5／3 断）にぶい赤褐5YR4／4	—	灰釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半無釉。	
485	SX1	陶器	皿	—	—	6.0	—	外）灰白 2.5Y8／1 断）灰白 2.5Y8／2	—	灰白色を帯びる半透明の釉、粗い貫入が入る。底部無釉。	近世
486	SX1	陶器	皿	—	—	4.0	石・黒／細	外）灰黄 2.5Y7／2 断）灰黄 2.5Y7／2	—	砂目。灰黄色を帯びる半透明の釉。外面下半無釉。	肥前産 17C初頭
487	SX1	陶器	鉢	24.0	—	—	石・長／粗・細	外）灰白 5YR8／1 断）にぶい赤橙 10R6／4	—	外面口縁部下に強い回転ナデ。外面白化粧土刷毛目。内外面に灰白色を帯びる半透明の釉。口縁端部無釉。	肥前産

Tab.19　遺物観察表（18）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
488	SX1	陶器	皿	—	—	10.0	—	外）にぶい黄褐 10YR5／3 断）灰白N7／	—	刷毛目ニ彩手。砂目。	肥前産 17C
489	SX1	陶器	擂鉢	29.0	—	—	石・長・赤・黒／粗	外）黄灰 2.5Y5／1 断）褐灰 10YR4／1	—	回転ナデ／回転ナデ・摺目。	備前17C
490	SK101	陶器	甕	—	—	—	石・長・雲／粗	暗赤灰 5R4／1	—	回転ナデ／回転ナデ。外面に強いロクロ目。	丹波産
491	SX1	鉄製品	釘	全長 7.5	全幅 1.5	全厚 0.8	—		—	平坦な頭部をもつ。	
492	SX1	青花	碗	—	—	5.2	—	外）明緑灰 5G7／1 断）灰白 2.5Y8／	—	白化粧土後透明釉施釉。高台内施釉。高台脇にモミガラ痕。	漳州窯系 16C末～17C初頭
493	SX1	青花	椀	—	—	—	—	断）白色	—	外面略化した唐草文。	景徳鎮窯系
494	SK204	白磁	小杯	7.0	—	—	—	灰白Ｎ８／	—	白色の釉。	
495	SX1	白磁	皿	13.0	—	—	—	外）灰白N8／ 断）灰白N8／	—	端反形。灰白色の釉。	白磁皿Ｅ類
496	SK203	陶器か	碗	8.0	—	—	石／粗・細	外）暗オリーブ 7.5Y4／3 断）黒褐 10YR3／1	—	暗オリーブ色の釉。	

Tab.20　遺物観察表（瓦）

図版番号	出土地点	種類	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
			全長	全幅	全厚					
178	SD201	丸瓦	〔3.8〕	〔4.7〕	〔1.5〕	石・長・黒／粗・細	灰N7/	硬	外面イタナデ、内面布目。外面に自然釉。段部先端。	
179	SD201	丸瓦	〔7.0〕	〔6.0〕	1.5	石・長／粗・細	灰10Y5/1	硬	有段。イタナデ／布目。	
180	SD201	平瓦	〔10.0〕	〔3.9〕	2.0	石・長／粗・細	灰N6/	硬	ナデ／布目。外面に格子状のタタキ目。	
181	SD201	平瓦	〔18.0〕	〔13.5〕	2.2	石・長・灰／粗・細	灰N6/	硬	外面ナデ、内面布目。	
252	SD401-上層	平瓦	〔3.6〕	〔6.0〕	1.6	石・長・黒／粗・細	灰N6/	硬	イタナデ／布目。	
340	SR201-中層	平瓦	〔5.5〕	〔6.5〕	1.3	石・灰／粗	灰N6/	硬	ナデ／布目。	
341	SR201-中層	平瓦	〔4.0〕	〔3.5〕	1.3	石・長／粗・細	灰10Y6/1	硬	ナデ／布目。	
351	SR201-集石下	丸瓦	〔6.5〕	〔10.0〕	1.1	石・長・黒／粗・細	黄灰2.5Y6/1	硬	外面ナデ、内面布目。	
429	P459	丸瓦	〔7.0〕	〔7.5〕	1.5	石・長・黒／粗・細	外）灰黄褐 10YR6/2 断）灰白10YR7/1	硬	内面布目。内面部分的に自然釉。有段。	
544	表採	丸瓦	〔4.5〕	〔6.0〕	1.6	石・長・雲・チ・灰黒／細	にぶい橙 7.5YR7/3	軟	著しく軟質。未成品か。	

Tab.21　遺物観察表（古銭）

図版番号	出土地点	銭種	外径（mm）	穿径（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考・初鋳年代
391	P257	政和通寶	25.0	6.0	1.0	2.44	小平銭・政和元年（1111）

遺物観察表凡例

1) 法量：〔　〕は残存長。

2) 含有鉱物：「石」＝石英、「長」＝長石、「雲」＝雲母、「チ」＝チャート、「砂」＝砂岩、とした。その他鉱物名が不明なものについては、「赤風」＝赤色風化粒、「赤」＝赤色系鉱物、「赤褐」＝赤褐色系鉱物、「灰」＝灰色系鉱物、「灰黒」＝灰黒系鉱物、「白」＝白色系鉱物、「黒」＝黒色系鉱物、「橙透」＝透明感をもつ橙色の鉱物、としその特徴を記した。

3) 粒度：20倍率ルーペを用いて含有鉱物の観察を行なった。鉱物の粒度区分は土壌学区分によっており、およそ2㎜以上を礫、200μ～2㎜を粗砂、200μ以下の砂粒を細砂とした。「細」「粗・細」「粗」の表記分けについては、水簸が良好で粗砂を殆ど含まず細砂のみ含むものを「細」、細砂が多く粗砂が少量含まれるものを「粗・細」、粗砂が多く粗砂と細砂が同程度近く含まれるものを「粗」とし、相対的に区分した。また、特にその量が多いものについては「多」と追記した。

4) 色調：農林水産省農林水産技術会議事事務局監修「新版　標準土色帳」による。

5) 焼成：焼成については、土器・瓦についてのみ相対的に区分し表記している。「硬」は焼成が良好で器表の磨耗が殆どみられないもの、「軟」は焼成が不良で触れると胎土が粉状に剥離する程度のもの、また、その中間的なものについては無表記とした。

第Ⅳ章　土佐神社西遺跡・土佐神社確認調査

1. 土佐神社西遺跡

(1) 平成13年度試掘調査 (Fig.47・48)

本試掘調査は平成13年6月、民間の宅地開発の計画が立てられたことを受けて、事前の試掘確認調査が実施されたものである。調査面積は約40㎡である。調査地点は土佐神社参道の西方約150mの地点にあたり、平成15年度発掘調査地点からは北西方向25mに近接している。現地表の標高は海抜11m前後で土佐神社参道より1m程高まっている。

調査にあたっては、対象地内に4箇所のトレンチTP1～4を任意に設定し、表土下0.7～1.4mの深度まで確認を行った。各トレンチとも、現耕作土直下で検出される2層（礫を含む暗褐色砂質シルト層）と3層（礫を含む黒褐色砂質シルト層）が中世の遺物包含層となっている。遺構はTP1～3では確認できなかったが、TP4で溝跡とみられる遺構の一部を確認した。

出土遺物は土師質土器杯・小皿、青磁碗、青磁壺、青白磁皿、瓦質土器羽釜、土師質土器羽釜、及び土師質土器細片で、この他、弥生土器が少量含まれている。

図示したものは、TP1－2層出土の杯（500・501）、小杯（504）、青磁碗（506・507）、青磁壺（509）、青白磁皿（508）、瓦質土器羽釜（510）、TP1－3層出土の杯（503・505）、杯又は椀（502）、小皿（498）、TP2－2層出土の小皿（497）、TP2－3層出土の土師質土器羽釜（511）、TP3－2層出土の杯（499）、TP4－3層出土の弥生土器甕の底部（512）である。

2. 土佐神社

(1) 平成13年度立会調査 (Fig.49)

平成13年6月、土佐神社境内において輪抜け祓所の移設工事が計画され、建物の基礎工事の際に表土下30～40cmまで掘削が行われることとなったため、高知市教育委員会による立会調査が行われた。調査地点は土佐神社境内の東部にあたる。調査面積は11㎡である。

調査において遺構の確認はできなかったものの、表土直下の第2層内より中世の土師質土器片が出土している。出土遺物は土師質土器杯・小皿である。

図示したものは包含層2層出土の土師質土器杯（513～517）、杯又は椀（518）、小皿（519～521）である。土師質土器の形態と器種組成は平成15年度調査土佐神社西遺跡出土資料の内容とほぼ共通しているが、全体に焼成の堅致なものが多い。

(2) 境内表採資料 (Fig.50)

ここでは土佐神社境内にて採取された表採遺物を図示した。528・535～540は平成13年度立会調査の際に本殿下の地点で表採されたものである。また、523～527・530・532～534・544は過去に神社境内より採取された遺物が神社に保管されていたもの、529・531・541～543は境内南西部の社務所移築の際に出土したものである。遺物注記は523～527・530・532～534・544を「TS－90」、528・535～540を「TS－01」、529・531・541～543を「TS－04」とし、いずれも高知市教育委員会が保管している。

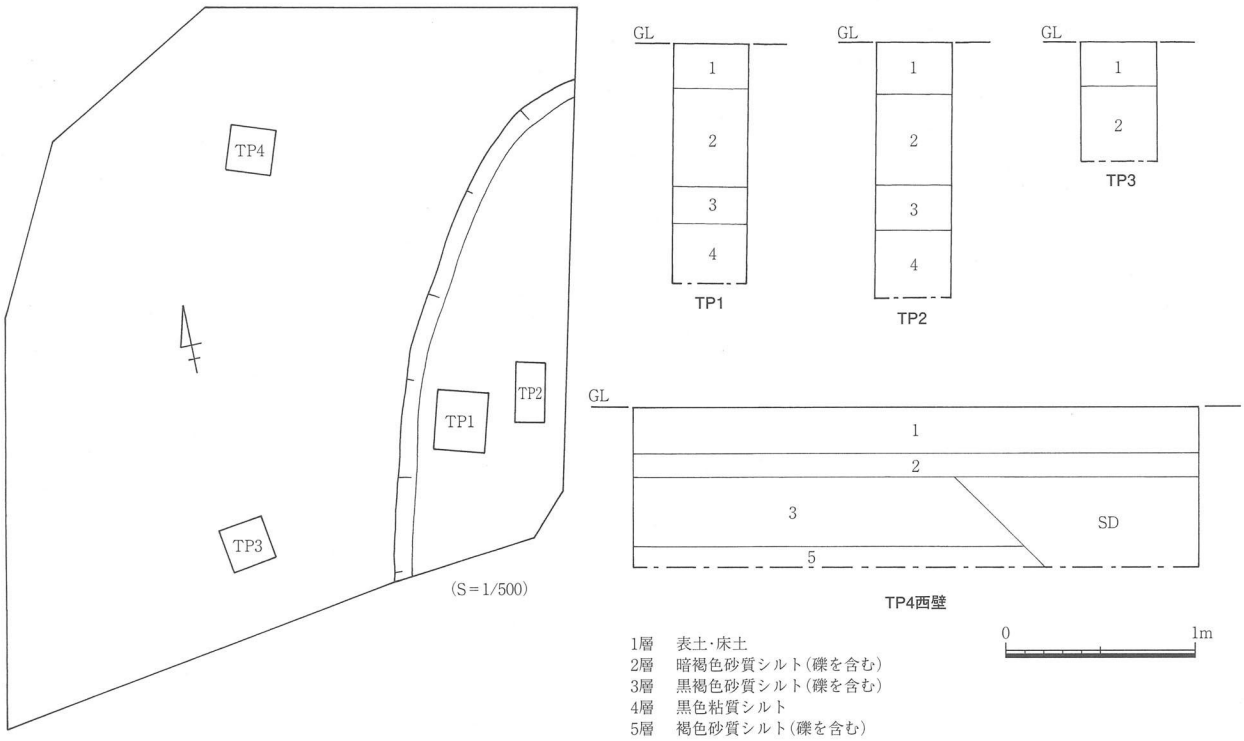


Fig.47　土佐神社西遺跡平成13年度試掘調査　トレンチ位置図・土層概略図

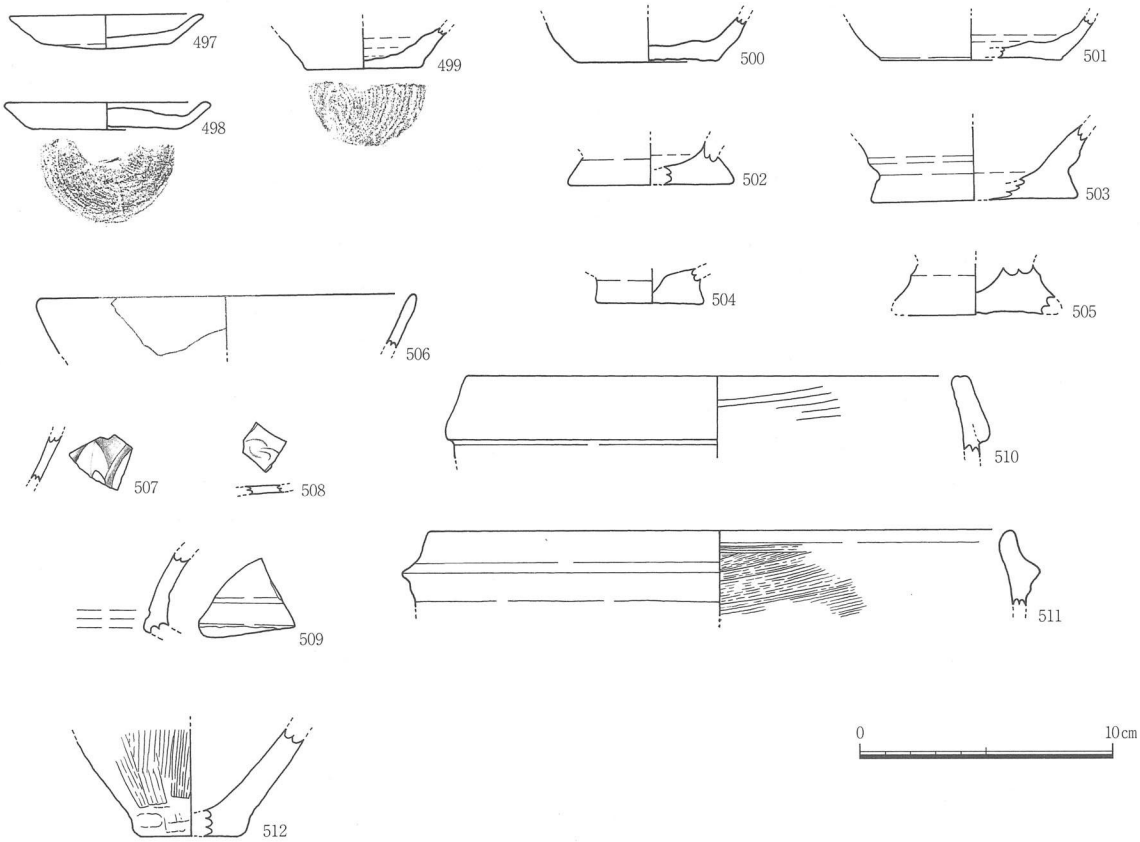


Fig.48　土佐神社西遺跡平成13年度試掘調査　出土遺物実測図

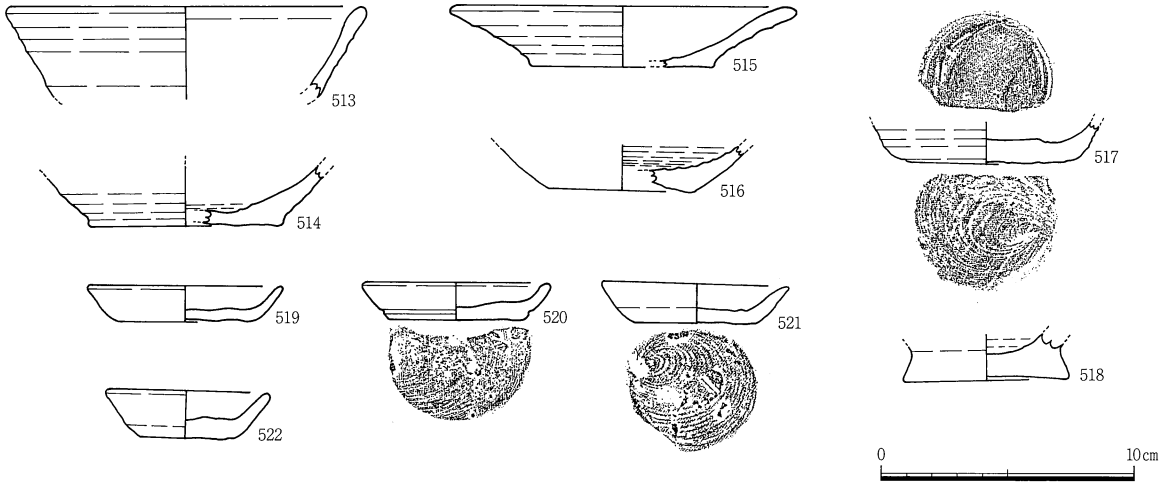


Fig.49　土佐神社平成13年度立会調査　出土遺物実測図

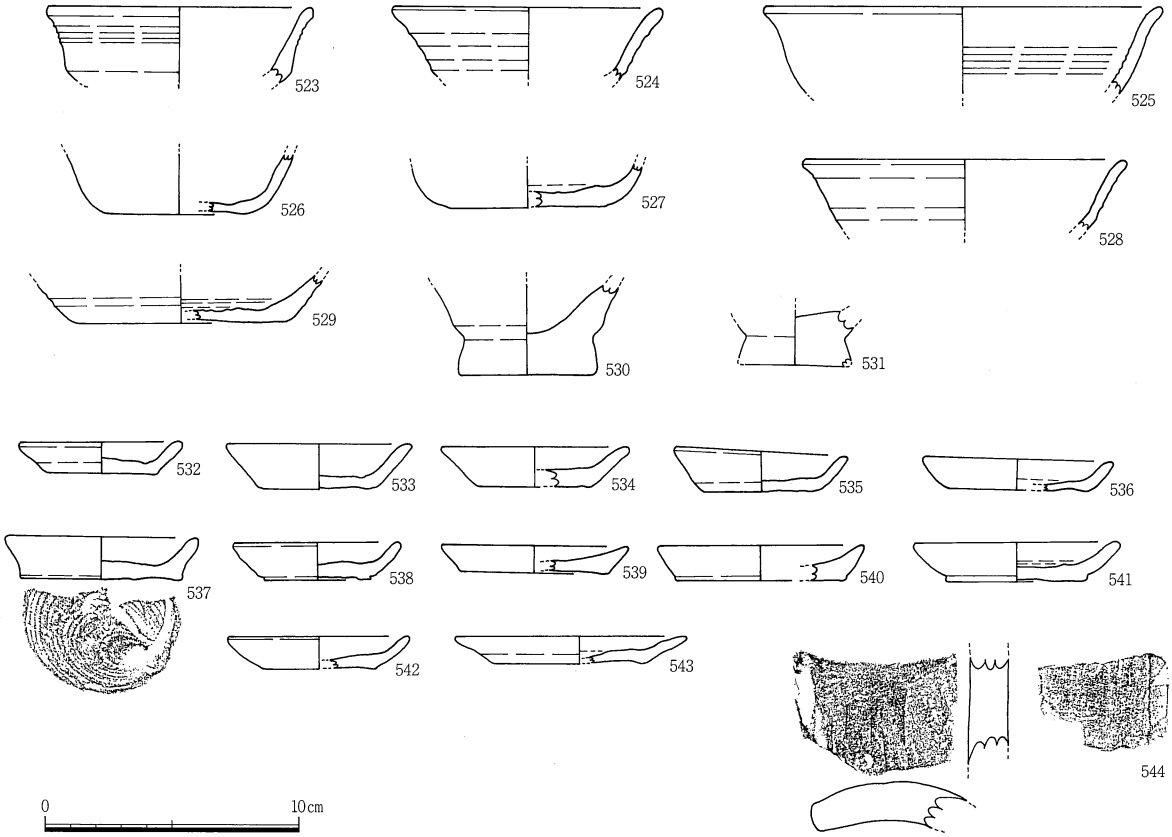


Fig.50　土佐神社表採資料　遺物実測図

Tab.22　遺物観察表（H13年度土佐神社西遺跡試掘調査）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
497	TP2-2層	土師質土器	小皿	7.6	1.3	5.0	石・長・雲・チ／粗・細	橙 2.5YR6/6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
498	TP1-3層	土師質土器	小皿	7.9	1.1	5.8	石・長・灰黒／粗・細	橙 2.5YR6/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
499	TP3-2層	土師質土器	杯	—	—	4.7	石・長・雲・赤風／粗・細	橙5YR7/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
500	TP1-2層	土師質土器	杯	—	—	5.6	石・長・雲・チ・灰白／粗・角礫	にぶい橙 5YR7/4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
501	TP1-2層	土師質土器	杯	—	—	7.2	石・長・雲・チ／粗・細	橙5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底に強いロクロ目。	
502	TP1-3層	土師質土器	杯又は椀	—	—	6.6	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7/2	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
503	TP1-3層	土師質土器	杯	—	—	8.1	石・長・雲／粗・細	灰白 2.5Y7/1	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部円盤状。	
504	TP1-2層	土師質土器	小杯	—	—	4.3	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7/4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。底部は不整円形で円盤状。	
505	TP1-3層	土師質土器	杯	—	—	—	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	橙 7.5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。底部円盤状で外方へ張り出す。	
506	TP1-2層	青磁	碗	15.0	—	—	—	外）オリーブ灰 5GY6/1 断）灰N6/	—	外面ヘラ彫りによる略化した蓮弁文。オリーブ灰色の釉。	龍泉窯系
507	TP1-2層	青磁	碗	—	—	—	—	外）オリーブ灰 5GY6/1 断）灰白 N7/1	—	外面鎬蓮弁文。淡いオリーブ灰色の釉。	龍泉窯系 碗Ⅲ類 13C後半～14C前半
508	TP1-2層	青白磁	皿	—	—	—	—	外）灰白 5GY8/1 断）灰白N8/	—	片彫りによる文様。明緑灰色を帯びる透明の釉。薄手の体部。	11Cか
509	TP1-2層	青磁	壷	—	—	—	—	外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 5Y7/1	—	頸部外面に段を設け、帯状の突帯を作り出す。内面施釉。灰オリーブ色の釉薬。	
510	TP1-2層	瓦質土器	鍋	20.0	—	—	石・長・雲・チ／粗-多	灰白5Y7/1	軟	口縁部ヨコナデ／横位～斜方向のイタナデ。口縁端部は強い回転ナデにより凹状。	
511	TP2-3層	土師質土器	鍋	23.0	—	—	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7/4		口縁部回転ナデ／斜方向のハケ。	外面に煤。
512	TP4-3層	弥生土器	—	—	—	4.0	石・長・雲・チ・灰白．灰黒／粗・礫	にぶい赤褐 2.5YR4/4	硬	タテハケ／ナデ。	

Tab.23　遺物観察表（H13年度土佐神社立会調査）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
513	2層	土師質土器	杯	14.0	—	—	石・長・雲・赤風／細	浅黄橙 10YR8/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。	
514	2層	土師質土器	杯	—	—	7.8	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	浅黄橙 7.5YR8/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦細かい状のロクロ目。	
515	2層	土師質土器	杯	13.2	2.4	7.2	石・長・雲／細	橙 2.5YR6/8	硬	回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。外底回転糸切り痕。	
516	2層	土師質土器	杯	—	—	5.6	石・長・雲・赤褐／粗・細	橙5YR6/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦細かい状のロクロ目。	
517	2層	土師質土器	杯	—	—	6.1	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	橙 7.5YR6/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、中央に板状圧痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
518	2層	土師質土器	杯又は椀	—	—	6.5	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい黄橙 10YR7/3	硬	回転ナデ／回転ナデ。高台円盤状。	
519	2層	土師質土器	小皿	7.6	1.4	5.1	石・長・雲・赤風／粗・細	橙 7.5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
520	2層	土師質土器	小皿	7.5	1.5	5.4	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR6/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
521	2層	土師質土器	小皿	7.5	1.6	4.7	石・長・灰黒・灰／粗・細	橙 2.5YR6/8	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状。	
522	2層	土師質土器	小皿	6.6	1.9	3.7	石・長・雲／粗・細	にぶい橙 7.5YR6/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状、内底中央に直線方向の強いナデ。	

Tab.24　遺物観察表（土佐神社表採資料）

図版番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）			胎土（含有鉱物／粒度）	色調	焼成	技法（外面／内面）・特徴	備考
				口径	器高	底径					
523	表採	土師質土器	杯	10.5	—	—	石・長・雲／粗	橙5YR7/6	軟	回転ナデ／回転ナデ。外面細かい多段のロクロ目。	
524	表採	土師質土器	杯	10.7	—	—	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	橙 7.5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。外面強いロクロ目。	
525	表採	土師質土器	椀	15.7	—	—	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 10YR7/3		回転ナデ／回転ナデ。	
526	表採	土師質土器	杯	—	—	5.5	石・長・雲・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
527	表採	土師質土器	杯	—	—	5.9	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 10YR7/3	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目。	
528	本殿下表採	土師質土器	杯又は椀	12.8	—	—	石・長・雲・チ／細	浅黄橙 10YR8/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。	
529	表採	土師質土器	杯	—	—	8.3	石・長・雲・灰黒／粗・細	橙5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。外面多段のロクロ目。外底回転糸切り痕。内底細かい渦状のロクロ目。	
530	表採	土師質土器	杯	—	—	5.5	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 5YR7/3	軟	磨耗し調整不明。底部円盤状。	
531	表採	土師質土器	小杯	—	—	4.6	石・長・雲・チ・灰黒／粗多・細	橙5YR7/4	軟	磨耗し調整不明。底部円盤状。	
532	表採	土師質土器	小皿	6.4	1.3	4.4	石・長・雲／粗・細	にぶい橙 7.5YR6/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
533	表採	土師質土器	小皿	7.3	1.8	4.4	石・長・雲／粗・細	にぶい橙 7.5YR7/4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底周縁溝状。	
534	表採	土師質土器	小皿	7.4	1.6	4.5	石・長・雲・チ・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7/4		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
535	本殿下表採	土師質土器	小皿	6.8	1.6	4.4	石・長／粗・細	橙5YR6/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕、中央に板状圧痕。内底周縁溝状、内底中央に直線方向の強いナデ。	
536	本殿下表採	土師質土器	小皿	7.5	1.2	5.4	石・長・雲／細	橙5YR6/8	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
537	本殿下表採	土師質土器	小皿	7.6	1.7	6.3	石・長・雲・赤褐／粗・細	にぶい黄橙 10YR6/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
538	本殿下表採	土師質土器	小皿	6.6	1.5	4.2	石・長・雲／粗・細	にぶい橙 5YR6/3	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底中央に直線方向の強いナデ。	
539	本殿下表採	土師質土器	小皿	7.4	1.1	5.8	石・長・雲・赤風／粗・細	橙 7.5YR7/6	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
540	本殿下表採	土師質土器	小皿	7.9	1.4	6.6	石・長・雲・灰黒／粗・細	にぶい赤褐 5YR5/4	硬	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
541	表採	土師質土器	小皿	8.0	1.5	5.6	石・長・雲・赤風／粗・細	にぶい橙 7.5YR7/6		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底渦状のロクロ目、周縁部溝状。	
542	表採	土師質土器	小皿	7.1	1.3	4.4	石・長・雲・チ・赤風／細	にぶい橙 5YR7/4	軟	回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。	
543	表採	土師質土器	小皿	8.4	5.0	1.1	石・長・雲・チ／粗・細	にぶい橙 7.5YR7/3		回転ナデ／回転ナデ。外底回転糸切り痕。内底直線方向の強いナデ。	
544	表採	土師質土器	丸瓦	全長〔4.5〕	全幅〔6.0〕	全厚 1.6	石・長・雲・チ・灰黒／細	にぶい橙 7.5YR7/3	軟	イタナデ／布目。	著しく軟質。未成品か。

第Ⅴ章　考察

第1節　土佐神社西遺跡、検出遺構の性格と変遷

1. はじめに

土佐神社西遺跡は、延喜式内社の一つで土佐一宮とされた土佐神社の西方に位置し、神社参道からは約130mの距離に近接している。また現在、遺跡北西の山際には成福寺が立地しているが、『南路志』(註1)には古くより土佐神社の西方に寺院が存在したと記されている。そのため、こうした立地環境にある本遺跡では、寺社に関連する屋敷あるいは関連集落が展開した可能性が考えられてきた。

今回の調査では、12世紀末から14世紀前半を主体とする遺構群が検出され、当該期の土器・陶磁器類が多数得られている。遺物組成の詳細については後節にて触れることとし、本節ではまず今次調査での検出遺構の概要をまとめ、遺構の性格やその時間的変遷をみていくこととする。

また、本県では『長宗我部地検帳』等の良好な文献資料が現存しており、現況の小字名との照合によって中世の集落景観を復原することが可能である。そこで本節では、これらの資料を手掛かりに中世における遺跡周辺の景観復原を行い、土佐神社西遺跡の立地環境と遺跡性格を推定していきたい。

2. 検出遺構と変遷

中世の遺構は掘立柱建物跡17棟、土坑12基、溝1条、ピット多数を検出した。これらの遺構は多くが調査区の北東側に集中し、掘立柱建物群と溝に共通した軸方向が認められることから、中世屋敷地の一角を構成するものであった可能性が考えられる。そこで、以下では検出遺構の規模や軸方向を検討し、そこから建物群の分類と帰属時期、屋敷地の空間構成と時期的変遷をみていくこととする。

(1) 掘立柱建物跡

中世の建物跡は1×3間と1×2間の東西棟建物を検出した。これらは建物の規模や軸方向に一定の規格性が認められるため、まず共通の規格をもつものに分類し、これに建物間の重複や近接があり同時併存したと考えにくいものなどの位置関係を加味して、同時期に併存した可能性が高い一群を抽出した。また併せて遺構の切り合い関係や出土遺物等から、建物群の時期と前後関係を推定した。なお、各建物跡の規模の詳細はTab.25に示している。

分類

A群［SB10・SB13］・A'群［SB16］

A群は1×3間、N－89～90°－Wの東西棟建物であり、真北あるいは真北より東に1°振った軸をもつ。規模は梁間1.90m、桁行4.24m、中間寸法は1.36～1.56mである。SB10の柱穴より12世紀第4四半期から13世紀第1四半期頃の常滑焼甕、SB13の柱穴より13世紀の東播系須恵器鉢と龍泉窯系青磁碗が出土し、建物の廃絶時期は13世紀におくことができる。

この他A群に近い規模をもつものに調査区南端で検出されたSB16があるが、これについては、同時期に併存した明確な根拠が見出されないため、A'群とした。他SBとの前後関係は不明であるが、SB16－P1が溝SD401に切られている。出土遺物から13世紀代に比定される。

B群［SB9］

B群は1×3間、N－88°－Wの東西棟建物であり、真北より東に2°振った軸をもつ。規模は梁間2.10m、桁行4.66m、中間寸法は1.60～1.70mである。柱穴より13世紀代に比定される瓦器椀が出土し、建物の廃絶時期は13世紀におくことができる。

C群［SB6・SB7・SB12］

1×3間、N－85～87°－Wの東西棟建物によって構成されるものであり、真北より東に3～5°振った軸をもつ。規模は梁間1.84～2.10m、桁行5.26～5.50m、中間寸法は1.60～1.90mである。SB6・SB7・SB12が該当し、SB6の北東に近接してSB7、その南側にSB12が位置する。これらの廃絶時期についてはSB6の柱穴から13世紀代に比定される瓦器椀が出土することから13世紀代におくことができる。また、SB12のP1がSB11のP1に切られており、後述するD群建物に先行する一群と考えられる。

D群［SB3・SB4・SB5・SB11］

1×3間、N－88～90°－Wの東西棟建物によって構成されるものであり、真北あるいは真北より東に2°振った軸をもつ。規模は梁間2.46～2.70m、桁行5.04～5.68m、中間寸法は1.60～2.06mで、建物全体の規模はA～C・D群に比較して幾分大きめである。各建物の配列をみると、SB3・4が南面を揃えて並列し、SB4の南にSB5、その南東にSB11が配置されるなど、4棟の配列に強い規則性が認められる。これらの廃絶時期についてはSB3とSB5の柱穴から13世紀代の瓦器椀、SB4の柱穴から13世紀代の東播系須恵器鉢と龍泉窯系青磁碗が出土しており、13世紀代におくことができる。また、SB11のP1がSB12のP1を切ることから、C群建物に後続する一群と考えられる。

E群［SB1・SB2・SB8・SB15］

1×2間、N－84～85°－Wの東西棟建物によって構成されるもので、真北より東に5～6°振った軸をもつ。建物の規模は梁間1.60m～1.90m、桁行3.08m～3.88m、中間寸法は1.50m～1.94mとばらつきがある。柱穴規模、建物全体の規模ともA～D群に比較して小さめである。配置をみるとSB1・SB2が南面を揃えて並列し、その東にSB8が位置する。ただしSB15は南方に離れて位置しており、溝SD401より外側になるため異なる屋敷地の建物であった可能性もある。SB1・SB2・SB8・SB15は時期を特定できる出土遺物をみないが、軸方向を同じくするE'群のSB17が14世紀から15世紀前半代に時期比定できることから、E群についても14世紀以降に帰属する可能性が高い。

E'群［SB14・SB17］

N－84°－Wで真北より東に6°振った軸方向をもつ1×3間他の東西棟建物によって構成されるものである。SB14はSB2に非常に近接するため、E群との同時併存は考え難いが、軸方向の共通性からここに位置付けた。建物の規模はSB17が梁間1.60m、桁行3.00m、中間寸法は1.80m～1.14mとばらつきがある。SB14は桁行の規模は不明であるが梁間が2.34mでやや大型の建物になるとみられる。SB17より14世紀から15世紀前半代に比定される青磁碗が出土しており、これらの軸方向をもつ一群が14世紀から15世紀前半に帰属する可能性が高い。

Tab.25　掘立柱建物跡計測表

分類	遺構番号	軸方向（真北）	真北とのずれ	規模					出土遺物	備考
				梁×桁（間）	梁間（m）	桁行（m）	桁行の柱間寸法（m）	面積（㎡）		
A群	SB10	N－90°－W	0度	1×3	1.90	4.24	1.36～1.56	8.06	常滑焼甕（12C末～13C）	SB9に切られる。
A群	SB13	N－89°－W	東に1°	不明	1.90	不明	1.50	不明	東播系須恵器鉢・龍泉窯系青磁碗（13C）	
A'群	SB16	N－87°－W	東に3°	1×3	1.90	4.30	1.30～1.40	8.17	瓦器椀（13C）	SD401に切られる
B群	SB9	N－88°－W	東に2°	1×3	2.10	4.66	1.60～1.70	9.78	瓦器椀（13C）	SB10を切る。
C群	SB6	N－85°－W	東に5°	1×3	2.10	5.26	1.60～1.90	11.04	瓦器椀（13C）	SB2に切られる。中世のSK103に切られる。
C群	SB7	N－87°－W	東に3°	1×3	1.84	5.50	1.80～1.90	10.12	土師質土器	中世のSK202に切られる
C群	SB12	N－87°－W	東に3°	不明	2.00	不明	1.80	不明	土師質土器・須恵器甕	SB11に切られる
D群	SB3	N－88°－W	東に2°	1×3	2.70	5.04	1.60～1.70	13.61	瓦器椀（13C）	
D群	SB4	N－88°－W	東に2°	1×3	2.64	5.68	1.80	15.00	東播系須恵器鉢・龍泉窯系青磁碗（13C）	中世のSK104を切る。
D群	SB5	N－90°－W	0度	1×3	2.46	5.62	1.80～1.90	13.83	瓦器椀（13C）	P123（13C）に切られる
D群	SB11	N－90°－W	0度	不明	1.90	不明	2.06	不明	土師質土器	SB12を切る
E群	SB1	N－84°－W	東に6°	1×2	1.76	3.88	1.94	6.83	土師質土器	
E群	SB2	N－85°－W	東に5°	1×2	1.90	3.56	1.66～1.86	6.76	土師質土器	SB6を切る。SK105・SK201（13C）を切る。
E群	SB8	N－84°－W	東に6°	1×2	1.66	3.08	1.50～1.60	5.11	土師質土器	
E群	SB15	N－84°－W	東に6°	1×2	1.74	3.34	1.56～1.76	5.81		
E'群	SB14	N－84°－W	東に6°	不明	2.34	不明	1.0～1.80	不明	土師質土器・模倣銭	
E'群	SB17	N－84°－W	東に6°	1×3	1.60	3.00	0.8・1.10～1.14	4.80	青磁碗（14C～15C前）	

建物群の帰属時期と変遷

これら建物群の帰属時期は、出土遺物および切り合い関係からみて、A群～D群までが12世紀末から13世紀代に、E・E'群については14世紀から15世紀前半に下る可能性が高い。

またA群～E群の各々は重複あるいは非常に近い位置関係をもち、何れも同時期に併存したとは考え難い。建物群の前後関係をみると、B群のSB9がA群のSB10を切り、D群のSB11がC群のSB12を切り、E群のSB2がC群のSB6を切っている。また、B'群のSB16がSD401に切られていることから、比較的建物規模の小さいA'群とA群及びB群が古相にあたるとみられる。こうしたことからみて、A群・A'群→B群→C群→D群→E群・E'群、という建物変遷が推定されよう。建物規模は出現期のA群・A'群・B群が面積8.06～9.08㎡と幾分小規模であるのに対し、次段階のC群では面積10.12～11.04㎡、D群では面積13.61～15.00㎡と次第に大型化していく傾向がみられる。また、最終段階のE群・E'群に至ると再び建物規模が小型化し、規格にもばらつきが現れている。

こうした変遷の後、E群・E'群廃絶以降の建物跡は確認できていない。

(2) 溝

調査区南部ではN－90°－Wの軸方向をもち、検出長6m、幅1.66～2.00m、深さ58～60㎝のSD401を検出している。西側が調査区外に出るため東西の規模が不明で、溝状の遺物廃棄土坑であった可能性も考えられるが、他の中世土坑が何れも建物群が密集する調査区北東部側に集まり、自由な軸方向を示して掘削されている点を考えると、SD401はそれと異なる機能をもつ遺構であったと思われる。軸方向が建物群にほぼ揃っていること、試掘調査の結果でもSD401を境に南側で

は遺構密度が激減すること等からみても、これが屋敷地の区画溝として機能した可能性が高い。ただし、堆積状況をみると最下層への砂層堆積は認められず、常時水が溜まる状態であったとは考え難い。

出土した貿易陶磁器や国内搬入品から溝の機能時期を推定すると、その大半が13世紀代におさまり、これに13世紀後半から14世紀前半代の遺物が少量含まれている。こうしたことから溝SD401は13世紀を主な機能時期とし、13世紀後半から14世紀前半の間には廃絶に至ったとみられる。

併せて、溝の存続期間と建物群との併行関係をみると、溝のN－90°－Wの軸方向は、建物群の中ではA～D群により近いが、A'群のSB16の様にSD401に柱穴の一部が切られ溝に先行する建物が一部あることから、建物と溝の初現が同時期であったとは必ずしも言い切れない。しかし、SD401は流路SD501の手前に3.5m程度の空間をもって途絶えており、ここに出入り口の空間があったと想定すると、規則性の強い配列を示すA～D群建物の分布が出入り口に近い南東部に集まり同一地点で繰り返し建て換えが続けられており、溝は13世紀代のかなりの期間にわたり存続しこの屋敷地空間を規定していたと考えられる。一方、建物E群についてはSD401とずれた軸方向に変化しており、建物分布が溝の北側にまで広がってきていることから、この段階に至ると区画溝としてのSD401の機能はかなり弱まってきているか或はすでに廃絶している可能性も考えなければならない。

(3) 屋敷地の時間的変遷

以上のことより、本調査区での遺構変遷には大きく次の3段階が考えられる。Ⅰ期：溝SD401によって区画された屋敷地が展開し、真北に近い軸方向をもつ規格性の高い建物群A～D群（又はB～D群）が配置される時期。Ⅱ期：溝SD401による敷地区画が衰退或は消失し、真北より6°前後東に振った軸方向をもつ小規模な建物E群・E'群（又はE'群）が展開する時期。Ⅲ期：中世居住域の消失期。

これに各遺構の年代観を照合させると、Ⅰ期の始まりはA群・A'群建物が展開し始める12世紀末から13世紀初め頃におくことができよう。区画溝SD401の出現時期はA群・A'群出現との間に多少のずれをもつ可能性があるが、溝下層出土遺物の内容や建物群との位置関係よりみて13世紀代には確実に機能しているとみられる。また、古代末以来の屋敷地の軸方向と空間構成が失われるⅡ期は、SD401埋め戻しに伴う廃棄遺物の内容からみて14世紀前半頃であり、これを大きく下ることはないと思われる。またⅢ期は建物E'群の廃絶時期及び包含層遺物の内容からみて14世紀中頃から15世紀前半以降と推定される。

また各期遺構の軸方法に着目すると、Ⅰ期の屋敷地区画溝と建物群A～D群にみられる真北に近い軸方向は近接する土佐神社の参道と参道から南へ直線的に伸びる地割りの軸N－0°－Eにほぼ一致しており、この屋敷地が土佐神社と関係をもちつつ展開したことを暗示している。こうした地割りの軸が遺跡周辺のどの範囲まで広がるのかについては周辺域での発掘調査事例がなく確かでないが、今後の調査による解明を待つこととしたい。

続くⅡ期に至ると、建物群は規模が縮小しそれまでの真北に近い軸方向を失っている。これにより、それまで当屋敷地に及んでいた土佐神社との関係性は、この段階にはかなり弱まっていると

みられる。そして、これを最終段階として、14世紀中頃から15世紀前半以後、当区間での居住域は消失し耕作地へと転じている。ただし、包含層中にはこれ以降の遺物も少量含まれており、新たな居住域は近隣に移動したと考えられよう。

これらのことからみて、土佐神社西遺跡では、古代末以来の屋敷地が14世紀以降衰退し解体に至るとともに、その後新たな屋敷群の再編成へ向かったとみられる。

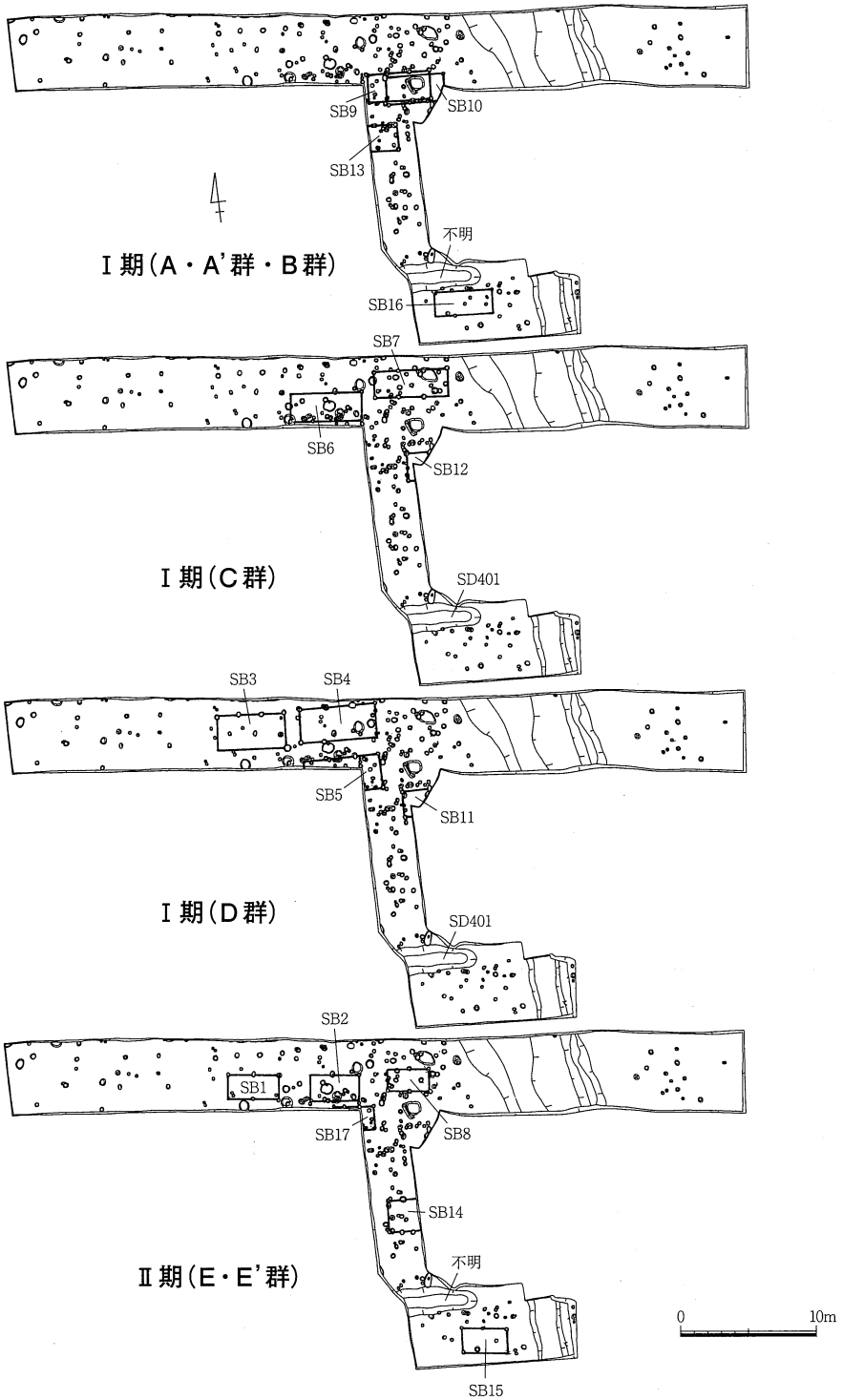


Fig.51　土佐神社西遺跡遺構変遷図

3.『長宗我部地検帳』にみる「岡ノ堂」と土佐神社西遺跡

ここまで見てきた様に、本調査区では、溝によって区画された屋敷地が12世紀末から14世紀前半頃までの長期間にわたり存続していた。しかしながら、この屋敷地が北と西側方向にどの程度の広がりをもつのか、遺跡の中心的施設の規模はどういったものであったのかについては、調査面積上の限界から明らかにすることができていない。また、土佐一宮である土佐神社を擁する当地域では神社、寺院、及びその経済基盤を支える一宮庄の関連施設が各所に存在する複雑な景観を呈していたと思われるが、今次検出の屋敷地が近隣する神社寺院の何れに関連するものかについては特定し難い。そこで以下では一宮地区の小字名（ホノギ）と『長宗我部地検帳』の記載をもとに、中世における土佐神社周辺地域の景観と土地所有の在り方を検証し、土佐神社西遺跡の性格と立地環境を推定する手掛かりとしたい。

中世一宮村と土佐神社周辺域の景観

土佐神社西遺跡が所在した中世の一宮村は、天正16年『長宗我部地検帳』の『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』に記載されている。ここには一宮村、薊野村の一部、久礼野村が「一宮庄」として収められており、これらの村々が中世一宮庄の荘域であったことが分かる。そして地検帳に見える地名と屋敷、神社、寺院、田・畠の記載を、現況の小字（Fig.52）に照合させてみると、土佐神社周辺域に屋敷地、寺院、神社の記載が集中し、この一帯が中世一宮庄の拠点的位置にあったことが推察される。また神社、寺院を中心としてこの地域が発展したことは、現存する小字に神社に由来する小字と寺院にまつわると思われる小字名が多く存在していることからも推察されよう。

さらに、土佐神社から南の方向には「大道屋敷」、その北西側には「馬向ズ」の小字名が残り、土佐神社の南方に街道が存在したことが推察される。ここより南進し次に東に向かうと、約2kmで国分川北岸、古代土佐郡衙の推定地とされる[註2]「井領」「三倉」「郷ノ坪」の小字名が現存する地点に至り、再び国分川を遡ると国衙に至る。この様に土佐神社西遺跡と周辺地域は、古代以来の交通路を備え、物資流通上からも恵まれた立地にあったと思われる。

そこで次に、土佐神社西遺跡とその周辺域に焦点をあて、さらに中世後期の土佐神社西遺跡周辺域の景観を推定していくこととする。（Fig.53）まず、土佐神社の立地する地点には「大宮」の小字が残り、その周囲に「神田」「口賀領川」「主生田」「北塔ノ本」「南塔ノ本」「寺屋敷」「町田」「三反田」「松崎」「カリマタ」「オワリガキ」「イセキ」「フロノ本」「市場」「円蔵坊」「イチヤシキ」「オナカヤシキ」「岡ノ堂」「常福寺」「西谷」「タイノ上」「谷田」「池田」「西岸ノ下」「馬向ズ」「ミゾ畠」「大道屋敷」「カムトギ」「大塚」「細田」「網掛松」「トガノ」等の小字名が分布する。このうち「口賀領川」「主生田」「北塔ノ本」「南塔ノ本」「三反田」「松崎」「カリマタ」「オワリガキ」「イセキ」「フロノ本」「市場」「円蔵坊」「オナカヤシキ」「岡ノ堂」「常福寺」「西谷」「タイノ上」「谷田」「池田」「西岸ノ下」「馬向ズ」「ミゾ畠」「カムトギ」「大塚」「細田」「トガノ」は『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』内に記載があり、小字の由来を中世後期以前に遡らせることができよう。そしてこれらの小字のうち、「北塔ノ本」「南塔ノ本」は神社、「常福寺」「岡ノ堂」は寺院に関連する地名であろうと考えられ、当地域を南北に走る志奈弥川を挟んで、東岸に神社由来の小字、西岸に寺院由来の小字が多く展開している。また神社参道の西側には「市場」の小字が残り、参道両側の地帯が商業の地として振興し

たことが推察できる。

「岡ノ堂」の所有者像

次に、『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』に記載された土地所有の内容についてみてみたい。『長宗我部地検帳』では、字と一筆の地積、屋敷・田・畠等の等級（上・中・下・下々）が記され、その下段に土地の名請人とその住所、土地の領有や耕作の状況が示されているが（「直領」は国首に属する土地・屋敷、「分」「領」は国首一門の番地又は寺社の所領、「給」は国侍や一領具足、職人などに支給された番地、「口」は一般士民の保有地を示す。）、この記載内容を土佐神社西遺跡周辺域の小字に対照させると、土佐神社西遺跡が所在する志奈弥川西岸と東岸には国侍への給地や「執行」「東執当」の所領に混じり、寺社関連の所領が多く示されていることに気付く。（Tab.26に地検帳の内容を記載順に表示。）

すなわち神社関連では、「神主」所領とされる上ヤシキが「中ノ本」、下ヤシキが「レンタイホウ」「中ノ本」、上・中・下の田・畠が「イケタ」「キシノ下」「大ツカ」「ミソ畠」「エンソウホウヤシキ」「イセキ」「レンタイホウ」「ナカヲ」「ヘニサラ」「一町タ」等の地積に所在している。このうち、神主の上屋敷下屋敷が所在する「中ノ本」「レンタイホウ」は対応する小字が不明であるが、地検帳の記載順からみて上屋敷は現況の小字「寺屋敷」下屋敷は現況「イチヤシキ」近辺にあたるかと思われる。また、寺院関係の役職名を指すとみられる「一和尚」の所領では、上ヤシキが「岡ノ堂」、中ヤシキが「イケタ」「岡ノ堂」「ヲ中ヤシキ」、上・中・下の田・畠が「イケタ」「カキノ本」「キシノ下」「イテヤ」「岡ノ前」「エンソウホウヤシキ」「イセキ」等に所在している。

さて、土佐神社西遺跡が所在する「岡ノ堂」は土居に「一和尚分」の中屋敷、その北の土居に「一和尚分」の上屋敷があり、北に「吉松」中屋敷と「西執当居」中屋敷、東に「久武内蔵助給」「窪添与十郎」の中畠があると記されている。（史料1）この内容から推察すると、「岡ノ堂」南東部にあたる今次調査地点は中世末には武家層に支給された畠地にあたり、今次調査での検出結果ともほぼ合致している。しかし、「岡ノ堂」北部側には「一和尚分」とする寺院関係者の屋敷地が存在しており、さらに「岡ノ堂」及びその周辺の地積には「一和尚分」とする寺院関連の領地が多く残っている。したがって、「岡ノ堂」はその字名が示すように、寺院関連の所領として発展したと考える方が最も自然であり、中世中頃まで当遺跡では寺院関連の屋敷地が展開していた可能性が高いといえよう。

なお、ここに表れる「一和尚」なる人物の名称については、現況の「岡ノ堂」北側の土地にも「イチヤシキ」の小字名が残り、土佐一宮とされる土佐神社の「一」にまつわる呼称かと思われる。今回の調査では土佐神社西遺跡に関係の深い「一和尚」と土佐神社との関連性についての文献資料からの裏付けは得られなかったが、先に触れた様に、今回の遺構検出結果においては屋敷地の空間構成に土佐神社参道の軸の強い影響力が見出せる。こうしたことからも、本遺跡と土佐神社との密接な関係が窺えるのではないだろうか。

〔註〕

1)『南路志』は文化12年（1815）、武藤致和・平道による編纂史料。

2) 岡本健児「土佐郡衙推定地と字（ホノギ）名」『一宮・布師田』高知市教育委員会1991年。

岡本健児氏は、『土佐風土記』逸文に「土佐國風土記日、土佐郡々家西去四里、有土佐高加茂大社、・・・・・・」との記載があることから土佐神社の東方四里（約2km）の地点に土佐郡衙が存在するとし、「井領」「三倉」「郷ノ坪」のホノギが所在する現在の布師田字新屋敷付近に土佐郡衙が存在したと推定されている。

〔参考文献〕

『長宗我部地検帳 土佐郡上』高知県立図書館

岡本健児「土佐郡衙推定地と字（ホノギ）名」『一宮・布師田』高知市教育委員会1991年

岡ノ前　本一反卅代ト有　同村　久武内蔵助給
一ゝ壱反十四代四分　中　一和尚分
岡ノ堂　本四十代ト有　同村　ゐ土居
一ゝ卅二代二分　中ヤシキ　同　し　給
同しノ北　同村
一ゝ四十代　出八代　中ヤシキ　吉　松
同しノ北　同村
一ゝ廿代　出一代　中ヤシキ　西　執当居
同しノ東　本廿代ト有　同村
一ゝ十九代　中畠　久武内蔵助給
同しノ東　同村
一ゝ四代　中畠　窪添与十郎給
同しノ北土ゐ　同村
一ゝ十六代四分　上ヤシキ　一和尚分
ヲ中ヤシキ　同村　源兵衛扣
一ゝ四十代　出十七代　中ヤシキ　同　し　分
同しノ北　同村
一ゝ四十代　出五代　中キシキ　橋爪侍従居
同しノ西　同村　玄蓮祐持　与二郎ゐ
一ゝ四十代　出九代　下畠ヤシキ　光　権　寺
同しノ北寺中　同村　玄蓮祐持
一ゝ十代　中ヤシキ　寺中　光　権　寺
同しノ西路　同村　同し持
一ゝ壱反十代　出十二代　下畠　同　し
同し北谷入　同村　同し持
一ゝ四十代　中　薬師修正田　同　し

史料1.　『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』

Fig.52　一宮・布師田小字図（筒井佐智氏作成）

Fig.53　土佐神社西遺跡周辺小字図

Tab.26　土佐神社西遺跡周辺の小字と『土佐国土佐郡一宮庄地検帳』の記載

現況小字名	地検帳記載字名		分	給	居	なし
トガノ	トカノ	下ヤシキ		国真権進		
		上	執行、神主、土東、光権寺	山崎新文左衛門、前田源四郎、永吉又兵衛、国真権進		
		中・下	執行	宮泉久兵衛、国真権進、谷忠兵衛		
タイノ上	タイ	上	正祝、一和尚			
—	岡本	下ヤシキタ	執行			
		サンハクヤシキ	執行			
		中	執行			
西谷	西谷	下ヤシキ	神主、一和尚			
		中、	神主			
		下畠	神主			
谷田	谷タ	中ヤシキ	一和尚			
		下ヤシキ	一和尚			
		中	執行、新田	国真権進、谷忠兵衛		
		下	執行、新田			
		サンハク	一和尚	谷忠兵衛		
常福寺か	成福寺ヤシキ	上ヤシキ	一和尚			
		中ヤシキ	善明寺、一和尚			
		上	一和尚			
		—	神主			
池田	イケタ	中ヤシキ	一和尚			
		上	神主、一和尚、本鍋島			
—	カキノ本	上	本谷、本鍋島	永吉又兵衛、鍋島八郎大夫、岡崎□衛門		
		サンハク	一和尚			
岸ノ下	キシノ下	上	一和尚、神主、執行、本谷	永吉又兵衛、中村兵庫助、宮泉久兵衛、谷忠兵衛		
		—		福留清兵衛		
—	イテヤ	中	一和尚、執行、西執当	中島八郎左衛門		
細田	ホソタ	中	本鍋島	山崎平左衛門、谷忠兵衛、前田源十郎、国沢源衛門		
大塚	大ツカ	中	神主	久武内蔵助、谷忠兵衛、		
		下	神主	谷忠兵衛、宮泉久兵衛、久武内蔵助、橋爪関衛門		
		中畠		永吉又兵衛、国真左馬允		
ミゾ畠	ミソ畠	下	神主	久武内蔵助、前田平衛門、前田源十郎		
—	トイン	下		谷忠兵衛		
馬向ズ	馬ムケス	中		谷忠兵衛、永吉又兵衛、島田藤五郎		
—	ウタノ木	中ヤシキ	西執当、三郎大夫	国真権進		

現況小字名	地検帳記載字名		分	給	居	なし
—	ウタノ木	中ヤシキ		国真権進		
		下ヤシキ	西執当、三郎大夫	永吉又兵衛、橋爪侍従、沢村一大夫、前田源十郎、福留清兵衛、国真権進		
—	岡ノ前	中	一和尚			
岡ノ堂	岡ノ堂	上ヤシキ	一和尚			
		中ヤシキ	一和尚		西執当	吉松
		中畠		久武内蔵助、窪添与十郎		
オナカヤシキ	ヲ中ヤシキ	中ヤシキ	一和尚		橋爪侍従	光権寺
		下畠ヤシキ				光権寺
		下畠				光権寺
円蔵坊	エンソウホウヤシキ	中ヤシキ	円蔵坊			
		中	円蔵坊			
		下	神主、一和尚	橋爪侍従、谷忠兵衛、国真権進		
		下々	一和尚			
イセキ	イセキ	下	執行、国真、一和尚	谷忠兵衛		
		下々	神主			
—	レンタイホウ	下ヤシキ	神主	谷忠兵衛、宮村源七郎、伶人		
		下		谷忠兵衛		
		下畠	神主			
フロノ本	フロノ本	下ヤシキ	吉本	鐘坊、窪添与十郎、中島八郎左衛門、永吉又兵衛、山本右京兵衛、橋爪杢衛門		
市場	イチハ	下ヤシキ		久武内蔵佐、国真左馬丞、橋爪杢左衛門、大坪作衛門、岡崎金法師、安岡縫殿介		
—	ニヨウトウ	下ヤシキ		神主七郎兵衛		
カムトギ	カフトキ	中ヤシキ		久武内蔵佐、谷忠兵衛		
		下ヤシキ		大坪作衛門		
—	中ノ本	上ヤシキ	神主			
		下ヤシキ	神主			
		サンハク	神主			
—	シハ	上ヤシキ	執行			
		下ヤシキ	執行			
主生田か	宮ノ後修正田	下	執行			
南塔ノ本・北塔ノ本か	トウノ本クホヤシキ	下ヤシキ	執行	宮窪田介		
—	頂光寺ヤシキ	中ヤシキ	執行			
		下ヤシキ	執行			
—	心隠寺ヤシキ	下ヤシキ	執行			
—	門タ	中	東執当			
三反田	三反タ	上		久武内蔵助		
		中	吉本、執行、善明寺			
—	ミコヤシキ	中	執行	総侶		
池田	池タ	中	執行			
—	テン神	下	執行			
—	シュシャクテン	下　東ノ天神神田	執行			
口賀領川	カレウ川	中	東執当	源大夫、伶人		
		中　神田	執行			
		下・サンハク	執行			
—	シハタ	中	執行、国沢源衛門	島田織部、国真権進、惣侶、橋爪侍従		
		下	執行			
		中　灯明田	土東			
松崎	松サキ	中		東執当、永野源助、山崎与四郎		
		下	執行			
カリマタ	カリマタ	中	本鍋島、新田	谷忠兵衛、吉村左馬助、永野源助		
—	ナカヲ	中		国真権進、小大夫		
		下	新田、円蔵坊、神主、執行、国真権進、小大夫	山崎市衛門、久武算左衛門、小大夫、山本右京兵衛		
		下々	新田、執行			
紅皿	ヘニサラ	下	神主、執行、新田	山本右京兵衛、前田縫殿助		
		中		前田縫殿助、中村兵庫助、永野源助、岡崎十衛門		
—	スミタ	上		惣侶		
—	一町タ	上	神主			
オワリガキ	ヲワリカキ	上		山本右京兵衛		
		上　神田		永野源助		
—	二玉堂	下ヤシキ		久武内蔵助、谷忠兵衛		
		下	執行	橋爪杢左衛門、大坪与兵衛、前田源十郎、谷忠兵衛		
		下畠		衛門大夫		
大道屋敷	大道ヤシキ	上ヤシキ		谷忠兵衛		
		中ヤシキ		山崎与四郎、谷忠兵衛、山崎市衛門		
		下ヤシキ		神主、岡崎十衛門、大坪七郎大郎、福留清兵衛、大坪源四郎、島崎源兵衛、島田藤五郎、山崎市衛門		
		下畠	執行			

第2節　土佐神社西遺跡出土遺物の様相

1. はじめに

今回の調査では、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、貿易陶磁器、瓦、銅銭等の中世の遺物が多数得られている。各遺物の出土地点と出土点数(註1)はTab.27に示す通りであるが、それによれば多くが12世紀末から14世紀にかけての遺構と自然流路より出土したものであり、これに15世紀代の流路内廃棄資料、包含層資料が少量見られる。こうした状況からみて、本調査区が居住域として展開した時期は12世紀末から14世紀にかけてであり、その最盛期を中世前期に求めることができる。

本稿ではまず、中世前期における本遺跡出土の土師質土器、瓦器、須恵器、中世陶器の内容を紹介する。また、貿易陶磁器その他特徴的遺物の在り方を検討することにより、当遺跡での遺物組成上の特質をとらえ、土佐神社西遺跡の性格を推定する手掛かりとしたい。

2. 土師質土器・瓦器

中世の土器はSB柱穴、ピット、土坑、溝SD201・SD401、流路SR201、包含層より出土しており、この中では特に溝、流路内への廃棄遺物が種類、数量ともに突出している。時期別には建物群の最盛期となる12世紀末から13世紀代の遺物が最も多く、その後建物群が小型化し散在する14世紀から15世紀までの遺物がSB1・2・8・14・15・17、SR201上層、包含層より少量出土している。

そこでここではまず、12世紀末から14世紀前半代の遺構内より出土した土師質土器、瓦器の内容について検討する。(註2)なお、15世紀代の遺物は、殆どがSR201上層への混入遺物や包含層資料等であり、年代観の確かな資料を抽出できなかったためここでの検討対象から外さざるを得なかったが、注目される遺物については本文中に付け加えることとした。

(1) 土師質土器

土師質土器では、杯、椀、小皿、鉢が出土している。中世前期の土師質土器供膳具の分類と編年については、松田直則（松田1989）、吉成承三（吉成1997）、池澤俊幸（池澤2004）諸氏によって研究が進められているため、それに準じて分類を行った。しかし本次調査では特徴的な形態をもつものも一部認められたため、ここでは便宜的に今次調査での分類名をあて報告する。諸氏編年との対応関係は本文中に追記している。

① 杯

杯には大きく次のタイプが見られた。

A類：大きい底部から体部が外上方へ短く伸びるもの。

（26・41・61・62・63・83・85・86・88・89・92・95・183・184・189・190・362・395）

B類：小さい底部から体部が外上方へ長く伸びるもの。

（82・87・90・96・185・187・188・273・294・295・297・352・353・355・356・361）

C類：体部が直高あるいは内湾気味に立ち上がった後、再び外上方へ伸びるもの。

（27・81・84・182・186・202・205・207・208・271・272・298・451・401・418・419）

D類：円盤状の高台を有するもの（110・112・206・210・303・370・371）

Tab.27　遺構別出土遺物点数

出土地点	土師質土器					瓦器		須恵器		瓦質土器	土師質土器	国産陶器			貿易陶磁器			土錘	中世以外の遺物・その他の遺物
	杯	椀	小皿	小杯	鉢	椀	皿	鉢	壷・甕	鍋・羽釜	羽釜	常滑焼甕	備前焼擂鉢・甕	瀬戸天目碗	白磁碗・皿	青磁碗・皿	その他		
SB1	2		2																
SB2																			
SB3	1		1			1													
SB4	2		7					1								1			
SB5	8		6			2			1										
SB6	3		5			1			1										
SB7	2		7																
SB8	1		2																
SB9	19		27			1													
SB10	3		3					1				1							
SB11																			
SB12	1		1						2										
SB13								1								1			
SB14	8		6																円盤状須恵器片1
SB15	1																		
SB16	7		5																
SB17	1		5													1			
SK102	6	1																	
SK103	12											1							
SK104	8		5						1						1				
SK105	2																		
SK106																			
SK107																			
SK108																			
SK109																			
SK201	6		2																
SK202	5									1									
SK206	24		2													1			
SK401	4																		
SD201	654	7	191	1		18	2	4	3	4		5	擂鉢3	3	3	1	天目碗1 青白磁皿1	3	瓦4 古代2
SD401	511	1	161	1	1	3		6	15	6	1	3			8	7		1	瓦1 古代20
SR201	460	4	135	5	3	14		6	9	7	1	7	擂鉢1 甕6		7	6	白磁水注1	2	瓦3 古代17 近世15 青花2
SR501	21		13					1	2	2	1		擂鉢1 甕3		1				
P	66		81		1	5		1	2	3					1	3			古銭1 近世1
包含層	124	2	68		1			1	1			10	擂鉢1	1	2				古代4 青花3
推定個体数計	1962	15	735	7	7	45	2	22	37	23	3	27	15	4	23	21	3	6	2957
推定個体数種類別計	2726 (92%)					47 (1.6%)		59 (2.0%)		23 (0.8%)	3 (0.1%)	46 (1.6%)			47 (1.6%)			6 (0.2%)	99.9%
口縁部点数計	1290		1217	0	7	45	2	20	1	14	1	6	1	4	12	14	1	—	
総破片数	—	—	—	—	—	91	2	22	37	23	3	27	15	4	23	21	3	6	

今回確認できたもののうち、A類が器高の低いタイプの杯（吉成－杯A－Ⅰ、池澤－杯A・E）に相当する。B類は古代末以降みられる器高の高い杯（吉成－杯A－Ⅱ、池澤－杯D）の系譜をひくものとみられるが、今次出土資料はいずれも器高が比較的低いもので構成されている。A・B類が底部から体部が直線的に外上方に伸びた後、口縁部に至って外反あるいは直線的におさめられるのに対し、C類では底部脇が膨らみをもち体部が内湾気味に立ち上がった後、再び口縁部に向かい直線的に伸びるという形態をもつ。D類には直立する円盤状の底部をもつもの（110・206・210・303・370・371）と、底部が外方に強く張り出すもの（112）がある。製作技法では、A～D類ともにロクロ成形であり、底部には回転糸切り痕を残す。また、B類・D類には外面に多段の強いロクロ目を施すものが目立つ。

この他遺構外出土資料ではあるが、Ⅳ区包含層より体部が直高するタイプの杯（430）が出土している。これと同類の形態をもつものには、15世紀末から16世紀に比定される田村遺跡出土のLoc.34－131、Loc.31B－38等があり、本資料についても中世後期以降に下る可能性がある。

② 小杯

小杯は体部が残存する個体が無いため、全体のプロポーションは不明であるが、底部形態の違いにより次の2タイプに分かれた。

A類：平坦な底部をもつもの（278）

B類：円盤状あるいは外方に強く張り出す高台をもつもの、（111・213・304・305・345・377）

③ 椀

椀は全体の形状を観察できる個体が少ないが、底部形態から大きく次の2タイプに分かれる。

A類：平坦な底部を有するもの。（214・300）

B類：円盤状の高台を有するもの。（209）

C類：輪高台のもの。（5・302・347・382）

④ 小皿

小皿は口径7～8cmのものが主体を占める。例外的に口径6cm以下の小型のもの（18・119・220・306・406）を認めるが少量である。

A類：平坦な底部から、体部が外上方へ伸びるもの。

（15・16・19・32～39・48～55・73・74・115～118・122・123・124～135・215～231・276・277・279・307～318・343・344・358～360・372・388～390・402～405・407）

B類：平坦な底部から、体部が直高気味に短く伸びるもの。（274・275・306・406）

C類：体部が著しく短いもの。（18・40・71・72・75・76・119・120・121）

D類：手捏ね成形のもの。（501）

このうちA類が池澤－小皿A、C類が池澤－小皿Bに対応する。またD類は京都系である。これらの製作技法については、A～C類がロクロ成形、D類は手捏ね成形である。A類においては、内底に細かい渦状のロクロ目が残るもの（63・103・105）、内底回転ナデの後直線方向の強いナデを施し中央を潰すもの（53・106・132・228・229・230・231・277・306・312・313・314・316）等のバリエーションがある。なお、D類とした手捏ね成形の京都系小皿はⅣ区包含層出土の501のみである。501については遺構外出土資料のため年代観を特定出来ないが、13～15世紀代のものとみられる。

⑤ **鉢**（136・137・319～324・375）

鉢は口径26.4～27.4cm、底径9.6～14.4cmの、大振りのものが確認された。底部は何れも平坦で糸切り離しによる。口縁端部はいずれも丸くおさめるものである。本資料は調理具として使用された可能性もあるが、使用痕跡からの用途特定は困難であり、形態的特徴を述べるに留めておきたい。

(2) 瓦器

瓦器椀・皿は和泉型のものが出土している。今次資料については小破片で出土するものも多いが、体部形態や貼付高台の形状からみて、殆どが森島編年Ⅲ－3期からⅣ－1期（13世紀前半～中葉）の範疇におさまるものとみられる。出土資料と各属性の対応関係はTab.28に示す通りであるが、椀の中には器壁が厚手のもの（20・232）、炭素吸着が弱く器面の炭素が殆ど剥離しているもの（20・21・138・145・146・234・325・326・328・330・331・373・473）、酸化焼成気味のもの（20・21・138・140・143・145・325～328・330・331・350・373）、内面へのミガキや暗文が省略されるもの（20・139・140・143・145・146・232・330）があり、和泉産の製品とはやや違和感を覚えるタイプのものが含まれている。また今次資料には、胎土中にチャート・赤色風化礫など在地系土器に多くみられる鉱物粒を含む個体（20・21・140・143・145・146・234・325・326・328・330・331・350・373）も多くあった。このタイプの瓦器碗・皿は、土佐市の光永・岡ノ下遺跡での出土が報告される他、近年県下の中世遺跡での出土報告例が増えてきており、その生産地解明が今後の課題となっている。こうした粗製タイプの瓦器椀は本遺跡でも高い比率で普及している。

Tab.28　瓦器椀の属性対応表

図版番号	外面のミガキ	内面のミガキ	内底の暗文	炭素吸着	焼成	外面の色調	含有鉱物	その他の特徴
	○あり ×無し	○あり ×無し	○あり ×無し	○良好 △剥離気味 ×剥離	○還元焔 ×酸化気味		A-石・長・雲 B-石・長・雲・灰 C-石・長・雲・チ D-石・長・雲・赤風	
20	×	×	×	×	×	にぶい褐7.5YR6/3	C	器壁が厚い
21	×	○	—	×	×	にぶい褐7.5YR6/3	C	
77	×	○	○	○	○	灰5Y4/1	B	
138	×	○	○平行	×	×	灰黄褐10YR5/2	B	
139	×	×	×	○	○	灰5Y4/1	A	
140	×	×	×	△	×	黄灰2.5Y5/1	C	
141	×	○	—	○	○	灰N4/	A	
142	×	○	—	△	○	灰5Y5/1	B	
143	×	×	—	△	×	黄灰2.5Y5/1	D	
144	×	○	○	○	○	灰5Y4/1	B	
145	×	×	×	×	×	にぶい黄橙10YR7/3	C	
146	×	×	×	×	○	灰白2.5Y7/1	C	
147	×	×	—	○	○	灰5Y4/1	A	口縁部外面のナデ２段
232	×	×	×	△	○	灰5Y6/1	B	器壁が厚い
233	×	—	○	○	○	灰5Y4/1	A	
234	×	—	×	×	○	灰白2.5Y7/1	D	
325	×	○	○平行	×	×	にぶい黄橙10YR7/2	C	
326	×	○	—	×	×	にぶい黄橙10YR7/2	C	
327	×	○	—	△	×	黄灰2.5Y5/1	B	
328	×	○	—	×	×	灰黄褐10YR6/2	C D	
329	×	○	○平行	○	○	暗灰N3/	A	
330	×	—	×	×	×	にぶい黄橙10YR7/2	C D	
331	×	—	○平行	×	×	灰黄2.5Y7/2	C D	
332	×	—	○平行	△	○	灰5Y5/1	B	
349	×	○	—	○	○	灰N4/	A	口縁部外面のナデ２段
350	×	—	○平行	△	×	灰黄2.5Y7/2	C	
373	×	○	—	×	×	灰黄2.5Y7/2	C	
409	×	○	—	△	○	灰5Y4/1	A	
473	×	○	○渦	×	○	灰5Y5/1	A	
474	×	—	○平行	○	○	暗灰N3/	A	
475	×	—	○平行	○	○	暗灰N3/	A	

3. 中世陶器・須恵器

ここでは中世前期から近世初頭までの遺構内出土資料、包含層出土資料までを対象とし検討を行った。このうち中世陶器と須恵器では、常滑焼、備前焼、古瀬戸、東播系須恵器等が確認されている。

①常滑焼

まず、常滑焼は甕（165～169・290・291・479・480）が出土しており、その他の器種は認められない。口縁部が残存する165・167・291は頸部が内傾して立ち上がった後口縁部が外反する形態をとり、口縁端部は上方に跳ね上げられる。一方、168・290では口縁端部の摘み上げは進んでいないが、端部内面に溝状の凹みが僅かに巡るものである。これらについては168・290が赤羽・中野編年の3型式（12世紀第4四半期）、165・167・291が3～4型式（12世紀第4四半期から13世紀第1四半期）にあてはまるものであり、他の胴部・底部片についてもほぼ同時期のものにおさまる可能性が高い。

該当型式のものは国衙跡からの出土が報告されているが、県下では現在のところ3型式以前に遡るタイプのものは確認できていない。これ以降の型式のものでは、岡豊城跡、芳原城跡、岩井口遺跡、上美都岐遺跡、具同中山遺跡群から6型式（13世紀後半）、二ノ部遺跡、天神遺跡、野田遺跡から9型式（14世紀末から15世紀前半）、姫野々土居跡から5・6・7・9型式が出土しており、その他時期不明の甕底部～体部片が田村遺跡群、林口遺跡、二ノ部城跡、千本杉遺跡等で確認されている。常滑焼の流通が県下の中世遺跡で一般化するのは主に15世紀以降であり、13世紀代に遡るものは、官衙関連、屋敷、城館、津などの性格をもつ遺跡に限定されている。

②備前焼、古瀬戸

その他の国産陶器では備前焼、古瀬戸が認められるが出土点数は全体に少なく、器種も備前焼は擂鉢（162～164・378・478）、古瀬戸は天目碗（156～158）のみである。

備前焼擂鉢は間壁編年Ⅲ期（163・164）、ⅢB～ⅣA期（378）、ⅣB期（478）のものが出土しており、このうち163が還元焔焼成となる。Ⅲ期の備前焼製品は、県下では岩井口遺跡、船戸遺跡などで出土が報告されているが、やはり国人層の屋敷跡、物資流通の要衝的性格を帯びる集落跡などに限定されている。

③東播系須恵器

東播系須恵器では捏鉢（22・59・248・249・425）等が出土しており、何れも13世紀代に比定されるものである。

④生産地不明の遺物

この他生産地不明のものに、SD401出土の須恵器甕（251）がある。[註3] 251は外面に平行状のタタキを施しその上に円形のタタキを施すものである。円形のタタキは内側に菊花状の陽刻が施されており、装飾的意図が感じ取られる。内面にはヨコナデが施される。内外面は酸化焼成気味であり、褐灰色に発色している。

4. 遺物組成にみる土佐神社西遺跡の特質

今次調査で検出された建物群は規模が何れも小さく、県下の有力国人層の屋敷跡や寺社関連遺跡で多くみられる様な大型の建物跡は確認できていない。にもかかわらず、豊富な種類の貿易陶磁器や初期型式の常滑焼等の出土のあり方は、土佐神社西遺跡が他の官衙関連遺跡や寺社関連遺跡、屋敷跡と同等クラスの製品入手ルートを持ち得た遺跡であったことを示している。また前節にて触れたように、土佐神社西遺跡は土佐の一宮である土佐神社と寺院の双方に近接し、布目瓦を少量出土することからも寺社との関連性が窺われる。

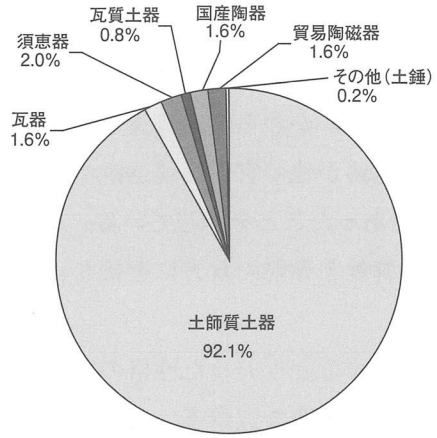
しかし、こうした背景をもちながら、本遺跡が寺院に関連するどういった性格の場所であったのかについては、検出遺構からの情報や文献資料のみでは依然不明な点が多い。そのため以下では、遺跡の性格を推定していく一つの手掛かりとして出土遺物組成に着目し、本遺跡での遺物所有上の特質をみていくこととしたい。さらに本遺跡での貿易陶磁器の所有のあり方と、県下の特徴的な中世遺跡での貿易陶磁組成とを比較検討することにより、土佐神社西遺跡が県下の中世遺跡の中でどういった位置付けができるのかについても考察を行いたい。

土佐神社西遺跡の遺物組成

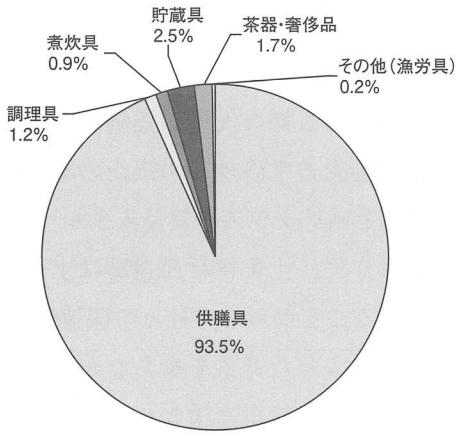
ここではまず本遺跡の遺物組成を検討し、種類毎の出土比率や用途別組成の内容をみていく。対象資料は包含層出土分も含めて16世紀末までとし、中世全般における当遺跡での遺物組成の全体的特徴をみていくこととする。

まず、出土遺物全体のうち土師質土器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、貿易陶磁器の占める比率を示したものがグラフ1である。これによれば、やはり土師質土器が92.1%と大多数を占め、国産陶器は1.6%、貿易陶磁器は1.6%と、全体の僅かにすぎない。しかし、国産陶器、貿易陶磁器の種類は豊富であり、初期の備前焼擂鉢や常滑焼甕など、この時期一般集落部には流通してこない生産地の製品が一通り揃っている。

次に、用途別の出土比率をグラフ2に示した。これによれば供膳具（杯・皿・椀）が最も多く93.5%、調理具（鉢・擂鉢）が1.2%、煮炊具（鍋・羽釜）が0.9%、貯蔵具（壷・甕）が2.5%であり、煮炊具・調理具が一定量含まれることは本遺跡が生活の場として機能していたことを示している。ただし、貯蔵具の内には口径50～60cmの大型の常滑焼甕（291）や須恵器甕（334）などが含まれ、一般集落部にみられる貯蔵形態とは内容に違いがある。また、碗・皿のうちには古瀬戸天目碗（156～158）、中国産天目碗（155）、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類（240）、青白磁皿（154）等の茶器や奢侈品が少量含まれ、その他にも白磁水注（292）の様に宴器、礼器的性格を窺わせる器種が含まれている。



グラフ1. 土佐神社西遺跡出土遺物 種類別組成



グラフ2. 土佐神社西遺跡出土遺物 用途別組成

貿易陶磁組成の検討と土佐神社西遺跡の性格

次に、出土した貿易陶磁器の内容について見ていく。以下には、前節で行った土佐神社西遺跡遺構変遷の時期区分（Ⅰ～Ⅲ期）に対応させて、各時期別の貿易陶磁器の出土点数とその内訳を示した。また、併せて各時期の国産搬入品の内容も示している。(註4)

0期（11世紀）

青白磁皿 ……1点

0期～Ⅰ－1期（12世紀～13世紀前半）

白磁碗Ⅳ類・碗Ⅴ類・碗ⅤⅢ類、白磁水注

同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類・Ⅰ－4類、龍泉窯系青磁皿Ⅰ類 ……30点

国産搬入品：常滑焼甕3～4型式、東播系須恵器、畿内系瓦器椀

Ⅰ－2期～Ⅰ－3期（13世紀後半～14世紀前半）

龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5b類・Ⅲ類、白磁皿Ⅸ類 ……6点

国産搬入品：東播系須恵器、畿内系瓦器椀

Ⅰ－3期～Ⅱ期－1（14世紀）

褐釉天目碗 ……1点

国産搬入品：備前擂鉢Ⅲ～ⅣA期

Ⅱ－2期～Ⅲ期（15世紀）

白磁皿B群・C群 ……2点

国産搬入品：備前擂鉢ⅣB期

Ⅲ期（15世紀後半～16世紀）

景徳鎮窯系青花碗C群、華南系青花碗 ……2点

時期不明 ……5点

これによると、土佐神社西遺跡での貿易陶磁器出土のピークは12世紀から13世紀代にかけてであり、14世紀以降は出土量が減少していることが分かる。また調査面積100㎡当たりの出土比率は9.6点であり、中世の一般的集落よりも屋敷地クラスの遺跡に近い出土比率を示している。(註5)

さらに、集落部でも一般的に出土する白磁Ⅳ類碗やⅨ類皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁碗の他に、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類碗、青白磁皿、白磁水注、中国産天目碗など集落部で散見されにくいものが含まれ、多彩な内容をもつ。こういった貿易陶磁器の所有の在り方は、Tab.29に示した県下の中世遺跡での貿易陶磁器組成ともほぼ共通しており、中世前期における屋敷跡、寺社関連遺跡クラスの遺跡での一般的な陶磁器所有の在り方を示していると思われる。

また、ここで特に注目されるものが白磁水注である。白磁の壷・水注・梅瓶については県下でも出土事例が限定されており、現在のところ、白磁四耳壷が神田ムク入道遺跡、白磁梅瓶が姫野々城跡と平成17年度に調査が行われた坂本遺跡で出土が報告されている程度である。白磁以外では、青白磁梅瓶が拝原遺跡、青磁壷がアゾノ遺跡と具同中山遺跡群1997年調査地点、土佐神社西遺跡平成13年度試掘調査地点（509）での出土が報告されている。この様に壷・瓶・水注の流通は寺社関連遺跡、屋敷跡、城館、荘園や寺社勢力の支配を背後にもつ物資集積の要衝の遺跡などに限定されており、土佐神社西遺跡にもそうした性格を求めることは可能であろう。

遺跡の性格と貿易陶磁器

最後に、遺跡性格別に県下の中世遺跡を取り上げて貿易陶磁器所有の在り方を見ていき、土佐神社西遺跡の位置付けを考えてみたい。対比資料として、Tab.29には県下の特徴的な中世遺跡での貿易陶磁器組成を示している。

A）津

具同中山遺跡群は高知県西部、四万十川支流の中筋川北岸沖積地に立地する。1989・90年度調査地点では、古代末から13世紀にかけて集落が盛行し、この時期、多数の掘立柱建物跡が確認されている。続く1997年度調査でも古代末から中世の掘立柱建物群が確認され、最盛期を迎える13世紀後半から14世紀初頭には、4間×6間、面積128㎡の規模をもつ大型の総柱建物が出現し、「荘倉」的機能をもつ施設が存在したと考えられている。また、中筋川南岸に立地するアゾノ遺跡、船戸遺跡でも、この13世紀前後に最盛期を迎え、15世紀に衰退に向かっている。

これらの遺跡では白磁、青磁を中心に貿易陶磁器が多く出土しており、四万十川の河川交通を利用した交易製品の集散地（津）としての機能が推定されている。中世具同村は真言宗金剛福寺の末寺にあたる香山寺の寺領にあたり、香山寺近隣に立地するこれらの遺跡が、香山寺を勢力下におさめる一条氏の交易拠点として発展したとみられている。(註6)

B）寺社関連遺跡

千本杉遺跡は高岡郡日高村小村に所在し、土佐二宮とされる小村神社の参道脇に立地している。ここでは、多数の掘立柱建物跡と区画溝とみられる溝跡の一部が検出され、寺社施設に関連する遺跡であった可能性が指摘されている。ここでは白磁、青磁、中国産褐釉など13世紀から15世紀代の貿易陶磁器が出土しており、出土量のピークは13世紀代となる。調査面積当たりの貿易陶磁器出土比率は100㎡当り約40点と、県下の中世遺跡の中でも突出して多い。この他、国産陶器では瀬戸美濃系瓶子の出土も報告されている。

C）屋敷跡

高岡郡佐川町斗賀野地区に位置する岩井口遺跡では、13世紀中頃に成立し15世紀の早い時期に

は廃絶したとみられる環濠屋敷跡が確認されている。屋敷地内からは総柱建物2棟を含む17棟の掘立柱建物跡が確認され、屋敷跡周囲は2条の大溝によって囲まれている。本地点は『長宗我部地検帳』記載の岩井口「土ゐ」にあたると考えられ、『佐伯文書』中に表れる「度賀野庄」の度賀野氏など在地領主層の館であった可能性が指摘されている。(註7) ここでは白磁、青磁、青花等の貿易陶磁器、Ⅲ～ⅣB形式の備前焼、6型式の常滑焼等が出土している。

D) 城跡・城館跡

城跡・城館跡には姫野々城跡、姫野々土居跡、芳原城跡、岡豊城跡等がある。

このうち、姫野々城跡・姫野々土居跡は、高知県中西部の高岡郡一帯を支配した津野氏の山城と居館である。出土遺物は山城・居館ともに14世紀代から見られ始め、15世紀から16世紀中葉までが出土量のピークとなる。姫野々土居跡の調査では遺物全体に占める貿易陶磁器の比率は2.8%とかなり高く、内容的にも白磁、青磁、青花の他に、建窯系天目碗、高麗青磁象嵌、朝鮮王朝青磁碗、タイ産褐釉四耳壷など多様なものが含まれる。

さて、ここまで性格別に県下の中世遺跡を取り上げその遺物所有のあり方を見てきたが、それによれば、貿易陶磁器を多く出土する県下の中世遺跡は大きく二つのタイプに分かれることに気付く。

まず、姫野々城跡、姫野々土居跡、芳原城跡、岡豊城跡など、15世紀から16世紀前半頃にかけて貿易陶磁器出土のピークをみる一群で、中世後期以降勢力を強めた有力国人層の城跡や城館跡がこれにあたる。これらは貿易陶磁器の種類、出土量ともに多く、白磁、青磁、青花が含まれる。また先に挙げた姫野々土居跡では、建窯系天目碗、高麗青磁象嵌、朝鮮王朝青磁碗、タイ産褐釉四耳壷などの茶器や奢侈品の所有が認められている。稀小的価値をもつこれらの貿易陶磁器を所有することは一種のステイタスであり、当時の武家層の価値観が陶磁器所有に反映されたものであろう。

一方、12世紀末から13世紀にかけて貿易陶磁器出土のピークがあり、14世紀から出土量が減少に向かい、15世紀には遺跡自体が終焉するという一群の遺跡がある。これには、上美都岐遺跡などの官衙関連遺跡、岩井口遺跡など中世荘園を司る在地領主（国人）層の館、千本杉遺跡などの寺社関連遺跡、及び、具同中山遺跡群など中世寺院との関連が窺われる物資集積の要衝の遺跡があたる。「津」の機能をもつ具同中山遺跡群は物資流通上の製品の通過地点であるため、そこから出る陶磁器の内容には運搬時の廃棄品なども混じり、他の屋敷地における生活空間の中での陶磁器所有形態とは性質を異にするとみられるが、しかし遺跡の盛行と衰退にむかうパターンについてはほぼ時期を同じくしており、共通性をみることができる。また岩井口遺跡では在地領主度賀野氏が掌握する度賀野庄、具同中山遺跡群では香山寺の寺領となる幡多庄など、古代末から中世に国衙領の郷から転じた中世荘園がその経済基盤にあり、これを掌握する寺社勢力や在地領主層によって貿易陶磁器がもたらされるという製品入手の経緯があった。これらの遺跡が14世紀頃を境に衰退し15世紀には終焉を迎えていく状況は、南北朝期を境に中世荘園制が徐々に崩壊に向かっていく歴史事象を極めて端的に表しているといえよう。

さて、こうした視点から土佐神社西遺跡の位置付けをみると、所有遺物の内容、陶磁器の出土量からみる屋敷地の最盛期、衰退と廃絶時期等に後者の遺跡群との共通性が認められる。前節で

も触れてきたように、土佐神社西遺跡の所在した一宮村は天正16年『長宗我部地検帳』に久礼野村、薊野村とともに「一宮庄」として記され、今次調査地点の所在する小字「岡ノ堂」も一宮庄の荘域に含まれている。荘園の成立時期は不明であるが、『土佐国編年記事略』(註8)巻二治承年中（1177～1181）には「頃年頼朝土佐国高賀茂郷ヲ首トシテ十三郷ノ地ヲ以テ神護寺ノ庄田トス 僧文学（覚）ノ請ニ依テナリ」との記述があり、一宮庄は12世紀末頃には真言宗派の寺院である京都高雄山の神護寺(註9)の荘園になったとされる。

こうしたことから、土佐神社西遺跡では中世以降、京都有力寺院の寄進地となった一宮庄の経済基盤をもとに、寺社勢力によって貿易陶磁器がもたらされていた可能性がある。さらに前節でも触れた様に、土佐神社周辺地域は、浦戸から国分川を遡り土佐国衙に至る河川交通路の途上に位置し、水運に恵まれた立地にあった。この国分川水運を利用した物資流通網を背景に、最盛期には、多くの貿易陶磁器や国産搬入品が当地域に運び込まれたと推察される。

[註]

1) 推定個体数の算出にあたっては、瓦器椀・皿では口縁部点数を用い、土師質土器杯・椀・小皿については器種の判別が付き難い口縁部片が多くあったため底部点数を用いた。その他の須恵器・貿易陶磁器・国産陶器・瓦は釉調、胎土、調整痕等の観察から別個体と判断できたものの点数から算出した。中世遺物全体に占める組成比（%）はこの推定個体数を用いて割り出している。なお参考のために、土師質土器の口縁部点数と各遺物の総破片数を下段に併せて表記している。

2) 土師質土器、瓦器、瓦質土器の検討資料としては、中世ピット、SB3～7・9～13・16、SD201、SD401、SR201－上層の一部・中層・下層・集石・土器集中1・2からの出土資料を用いている。ただしSB1・2・8・14・15・17については遺物量が少なく年代観に不明な点があるためここでは除外している。またSR201上層資料は一部に中世後期以降の廃棄遺物が混在している可能性が高かったため、西岸テラス部上にて集石とともに一括廃棄された状態の遺物のみを対象とした。なお、各遺構出土資料の年代観については、供伴する和泉型瓦器椀、東播系須恵器、常滑焼、備前焼等の国産搬入品、貿易陶磁器を用い年代観の抽出を行った。

3) 当資料については生産地を明らかにすることができていないが、東播磨の三木窯・神出窯などにも類例の円形タタキを施す製品があるということであり、生産年代は12世紀～13世紀初頭頃と考えられる。（萩野繁春氏のご教示による。）

4) 貿易陶磁器の分類については小野分類（青磁碗A～E類、白磁碗皿BC群、青花B～E群）、森田分類（青磁碗皿Ⅰ～Ⅲ類、白磁碗皿Ⅰ～Ⅸ類）、常滑焼では赤羽・中野編年、備前焼では間壁編年を用いた。

5) 土佐神社西遺跡及び他遺跡での貿易陶磁器出土比率の詳細（接合後破片点数／調査面積）は次の様になる。

土佐神社西遺跡……47点/490㎡、100㎡当たり9.6点
姫野々土居跡……437点/4100㎡、100㎡当たり10.7点
千本杉遺跡……181点/443㎡、100㎡当たり40.9点
風指遺跡……62点/1500㎡、100㎡当たり4.1点
アゾノ遺跡……85点/3850㎡、100㎡当たり2.2点

6) 松田直則「中筋川流域の中世集落出現の背景」『船戸遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年

7) 廣田佳久「岩井口遺跡について中世」『岩井口遺跡　二ノ部遺跡・城跡』佐川町教育委員会1995年

8)『土佐国編年記事略』は弘化4年（1847）、中山厳水による歴史書。

9) 神護寺は空海縁りの真言宗派の寺院であり、天長3年（826年）には空海の弟子僧であった真体（真体は和気清麻呂の子達男の息かと推定されている。）が久満庄と田村庄を神護寺に伝法料田として寄進する（『性霊集』）など、土佐国荘園との繋がりが深い。

［参考文献］

松田直則「土佐における古代末から中世土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会1989

吉成承三「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅻ』日本中世土器研究会1997

池澤俊幸「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究ⅩⅧ』日本中世土器研究会2004

『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会1995

『日本出土の貿易陶磁』国立歴史博物館1993

『貿易陶磁器研究集会全国大会資料集　城館出土の貿易陶磁器』日本貿易陶磁器研究会2000

森田尚宏・廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書第8集－松ノ下・金屋地区の調査－』高知県教育委員会1988

出原恵三・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　風指遺跡・アゾノ遺跡』高知県教育委員会1989

岡本健児・森田尚宏・松田直則『岡豊城跡　第1～5次発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター1990

前田光雄・松田直則他『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　具同中山遺跡群』高知県文化財団埋蔵文化財センター1992

出原恵三『拝原遺跡』香我美町教育委員会1993

松田直則『芳原城跡Ⅱ　第2～4次発掘調査報告書』春野町教育委員会1993

廣田佳久『岩井口遺跡　二ノ部遺跡・城跡』佐川町教育委員会1995

吉成承三『姫野々城跡Ⅰ』葉山村教育委員会1995

吉成承三『姫野々城跡Ⅱ』葉山村教育委員会1996

出原恵三・松田直則・曽我貴行・坂本憲昭・竹村三菜・武吉眞裕『船戸遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター1996

松田直則・伊藤強・山崎正明他『具同中山遺跡群Ⅰ』高知県文化財団埋蔵文化財センター1997

廣田佳久『上美都岐遺跡』佐川町教育委員会1997

大崎文彦・松田知彦・吉成承三『姫野々土居跡』葉山村教育委員会2000

松田直則・池澤俊幸・浜田恵子・筒井三菜『具同中山遺跡群Ⅳ』高知県文化財団埋蔵文化財センター2001

今田充・久家隆芳『千本杉遺跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター2004

田上浩・梶原瑞司『神田ムク入道遺跡』高知市教育委員会2005

Tab.29　中世遺跡と貿易陶磁器・国産陶器出土表

種類器種	分類		年代	土佐国衙跡	土佐神社西遺跡	千本杉遺跡	上美都岐遺跡	岩井口遺跡	神田ムク入道遺跡	深渕北遺跡	具同中山遺跡群Ⅳ	アゾノ遺跡	船戸遺跡	姫野々土居跡
				官衙	寺社関連	寺社関連	官衙関連	屋敷	屋敷	津	津	津	津	城館
青磁碗	同安窯系		12C後半～13C前半		○	○	○		○	○	○			
	龍泉窯系	A-1類／Ⅰ類	13C									○		
		A-2類／Ⅰ2類	12C後半～13C前葉		○	○	○		○		○	○		
		A-3類／Ⅰ3類	12C後半～13C前葉						○					
		A-4類／Ⅰ4類	12C後半～13C前葉		○	○	○				○	○		
		A-6類／Ⅰ6類	—											
		B-0類／Ⅲ類	14C前半		○	○	○					○		
		B-1類／Ⅰ5b類	13C後半～14C前半	○	○	○	○	○	○			○	○	○
		B-2類／Ⅰ5a類	14C末～15C			○		○			○	○		○
		B-3類	15C前半											○
		B-4類	15C前半	○			○					○	○	○
		C-1類	14C											○
		C-2類	15C前半			○							○	○
		C-3類	15C末～16C											
		D類	14C前半～16C				○	○				○	○	○
		E類	15C後半～16C前半	○				○				○	○	○
	菊花碗		16C中葉											
	不明					○								
青磁皿	同安窯系		12C後～13C前半						○		○	○	○	
	龍泉窯系	Ⅰ類	12C後半～13C前半		○							○		
		Ⅲ類	14C											
		Ⅲ類	13C～14C											
		無文皿										○		
		腰折丸皿	13C～14C											
		端反皿	15C									○		
		稜花皿	15C中葉～後葉					○			○			○
	不明													
青磁その他											壷	壷	盤	花生・香炉・高麗青磁
白磁碗		Ⅰ類	12C							○				
		Ⅱ類	12C						○			○		
		Ⅳ類	12C		○	○		○	○	○	○	○	○	
		Ⅴ類	12C		○	○			○		○	○		○
		Ⅵ類	12C～13C初頭											
		Ⅶ類	12C～13C初頭											
		Ⅷ類	12C～13C初頭		○									
		Ⅸ類	13C後半～14C前半						○					
		C群	15C後半～16C前半					○					○	
		不明						○						
白磁皿		Ⅲ類	12C											
		Ⅳ類	12C							○				
		Ⅴ類	12C											
		Ⅵ類	12C											
		Ⅷ類	12C中葉～後葉											
		Ⅸ類	13C後半～14C前半		○	○	○					○	○	○
		印花	13C											
		B群	15C前半		○	○						○	○	○
		C群	15C～16C前半		○									○
		不明			○		○							
白磁その他					水注				四耳壷			面取盃・合子	面取盃	
青白磁					Ⅲ				Ⅲ	合子				合子
青花				Ⅲ B-1・B-2群	碗C群・華南系碗		碗B・C・E群	碗B群				Ⅲ B-1群	碗B群、Ⅲ B-1群	碗BCDE群、Ⅲ B-1・B-2・C・E群、華南系Ⅲ
褐釉					天目碗	不明								天目碗・壷
常滑焼	甕			3型式	3・3～4型式		6型式	6型式	○		6型式			5・6・7・8～9型式
備前焼	擂鉢			ⅣA	Ⅲ～ⅣA・ⅣB	Ⅲ・ⅣB	○	Ⅲ・Ⅲ～ⅣB				ⅣA～ⅣB	Ⅲ・ⅣB～Ⅴ	ⅣA～Ⅴ期
	甕			ⅢB	○		ⅢB	ⅢB～ⅣB			ⅢB	ⅢB～ⅣB		ⅢB～ⅣB・Ⅴ期
	壷					○	○	○						○
瀬戸				天目碗	天目碗	瓶子・瓶						天目碗	天目碗	瓶子

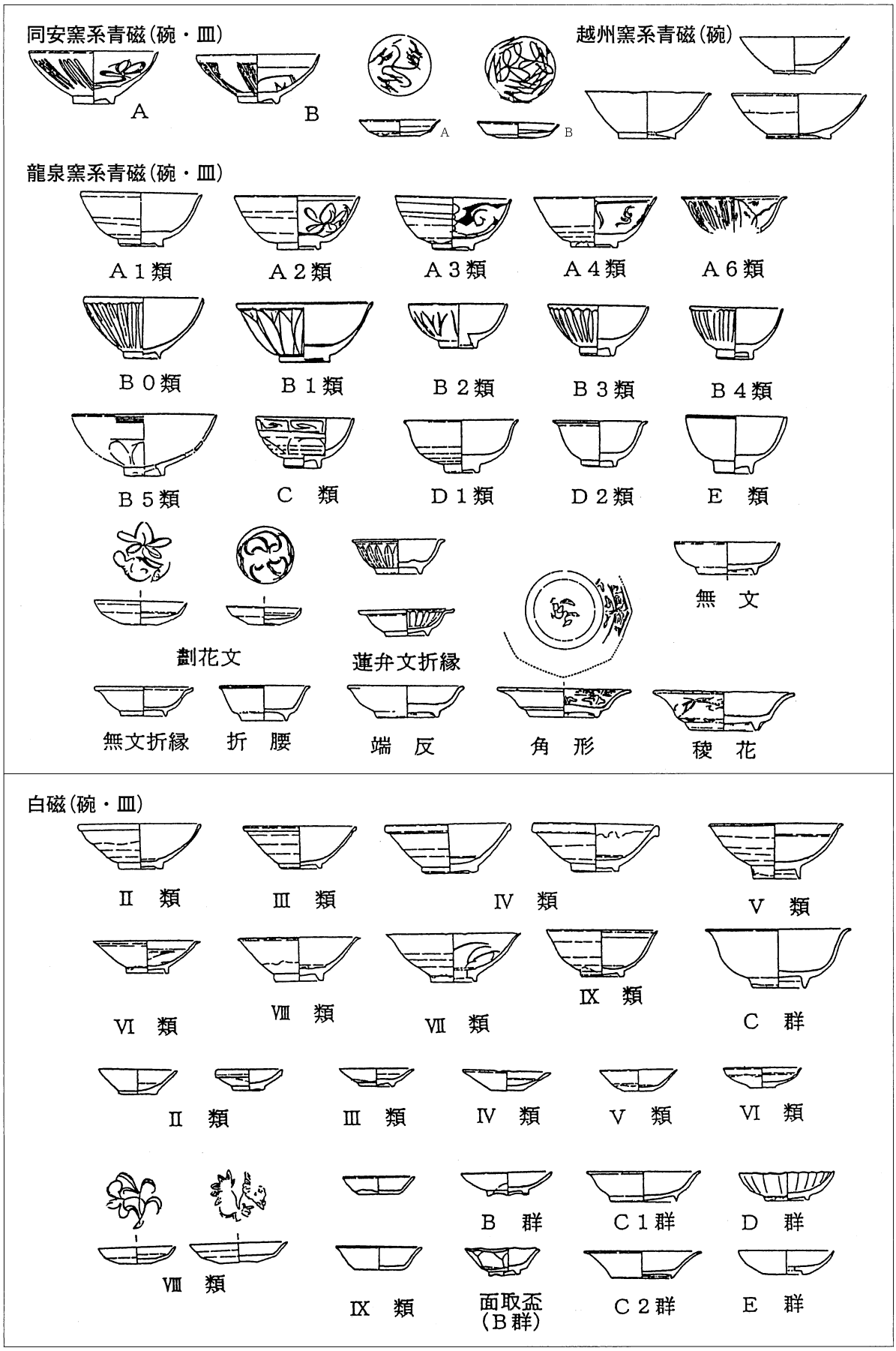


Fig.54　青磁・白磁（碗・皿）分類図

（国立歴史博物館編『日本出土の貿易陶磁』1993年より一部転載）

写　真　図　版

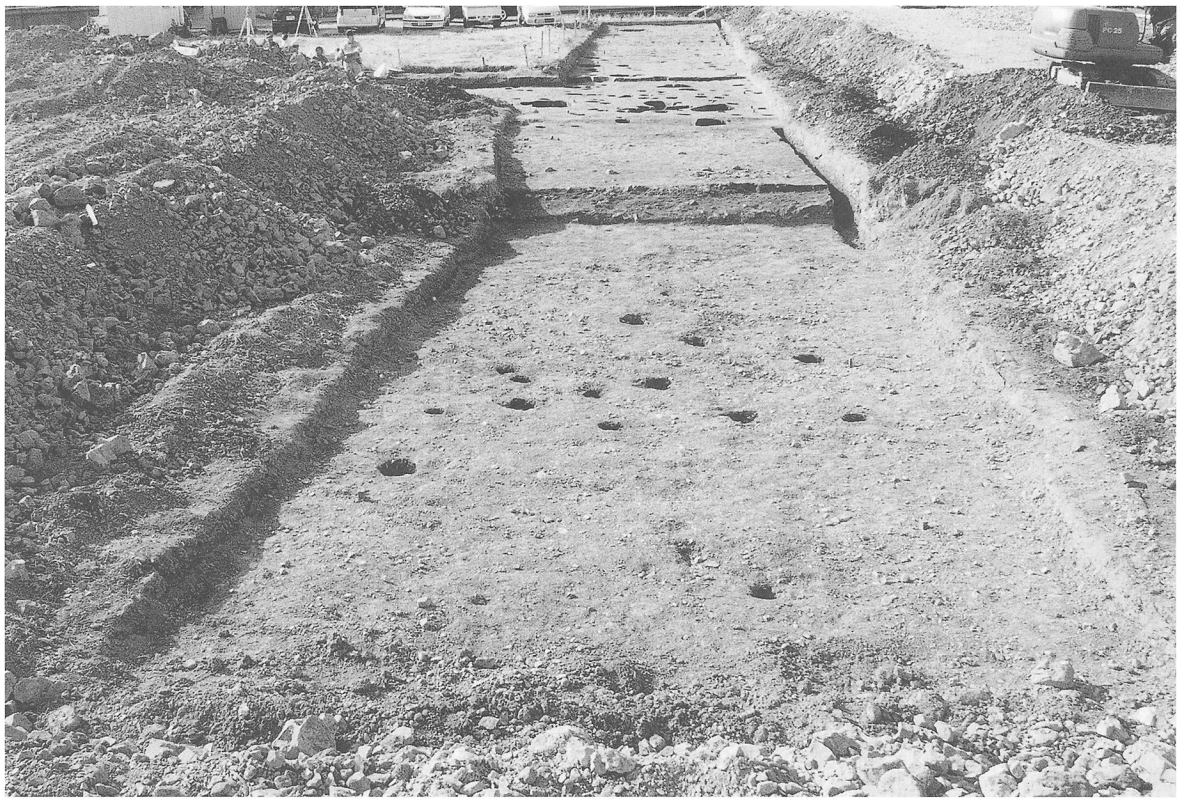
土佐神社境内（南より）

調査前全景（西より）

調査区全景（西より）

Ⅰ区完掘状況（東より）

Ⅱ区完掘状況（西より）

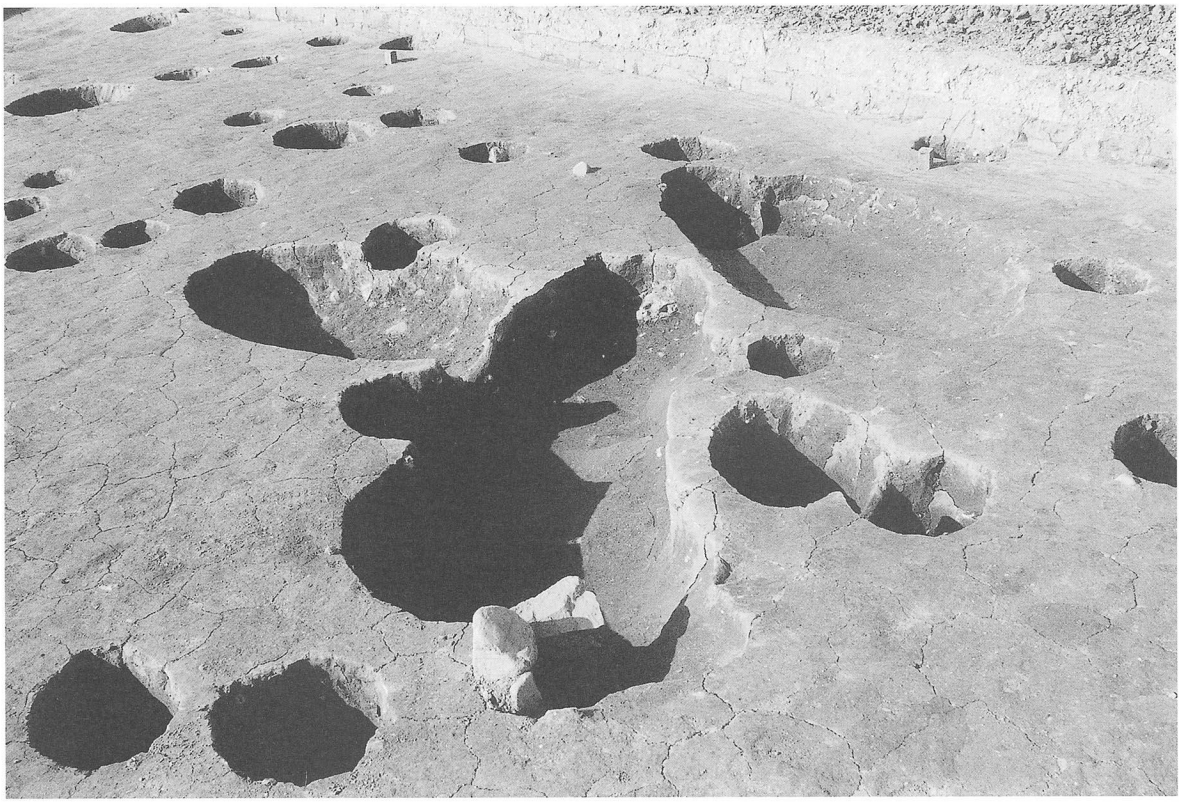


Ⅲ区完掘状況（東より）

Ⅳ区完掘状況（北より）

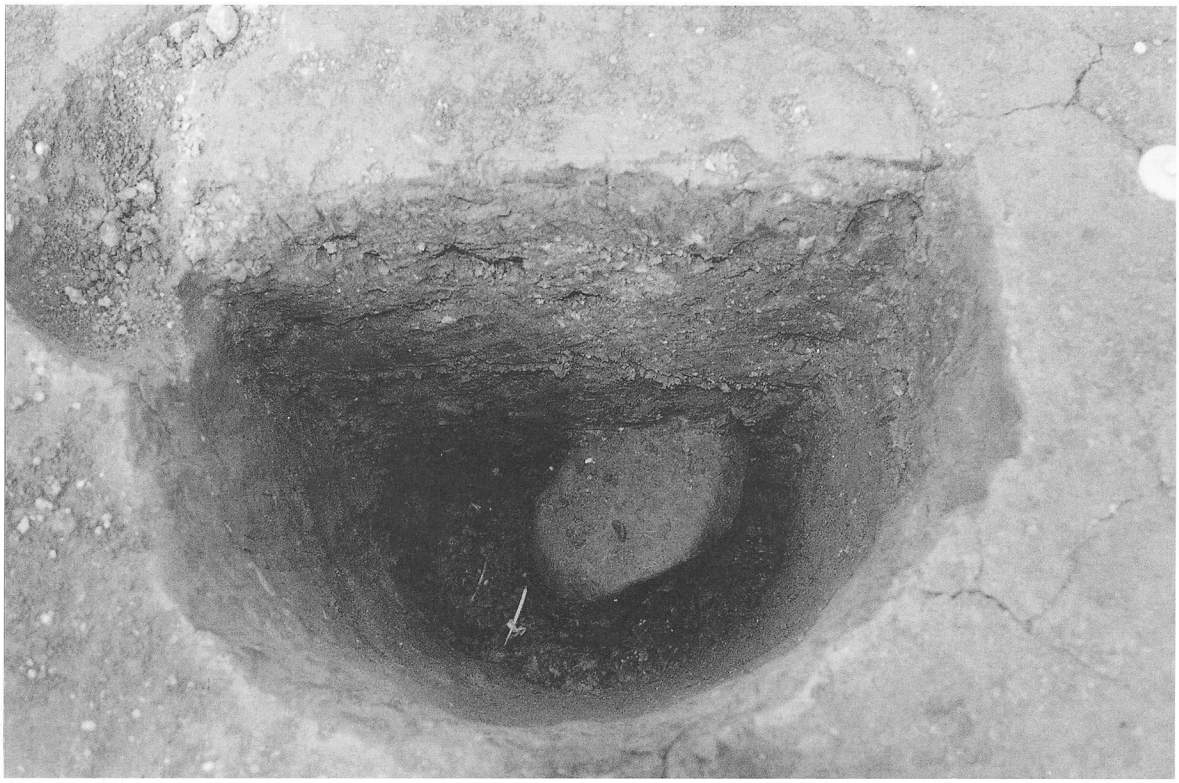
Ⅴ区完掘状況（北より）

Ⅳ区西壁（東より）

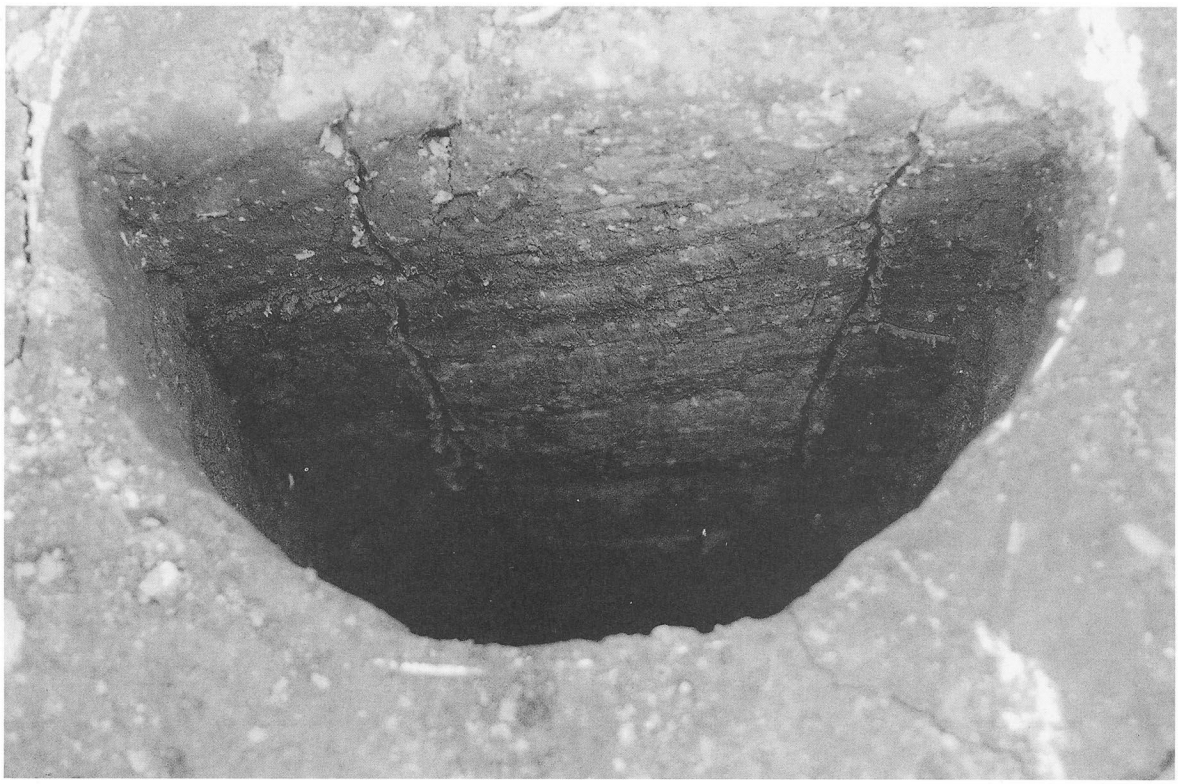


SK203・204・202完掘状況（南東より）

PL. 6



SB9－P3半截



P220半截